

東京大学大学院総合文化研究科 課程博士学位論文

樋口一葉という〈狂愚〉——近代日本からの逸脱——

多羅尾 歩

目次 凡例

序章	樋口一葉と近・現代日本……………	4
	一. 紙幣における肖像化 二. これまでの樋口一葉研究史 三. ただよう果てに——筆名「一葉」考 四. 本論文の目的と構成	
第一章	「片々の金光」——『うもれ木』における制度と逸脱……………	20
	一. はじめに 二. 反オリエンタリズムとしての歴史画 三. 名物の写し絵 四. 分裂と揺らぎ 五. 「徳義」という錬金術 六. 制度と逸脱	
第二章	『暗夜』と日清戦争下の女性表象……………	37
	一. はじめに 二. 〈看護する女〉の誕生 三. 「女菩薩」と「女夜叉」 四. 「女夜叉」と「花紅葉ゆかしの女」 五. 閨秀〈花壇〉における『暗夜』の異色性	
第三章	同時代言説の顛倒——『にぎりえ』註釈の空白箇所をめぐって……………	58
	一. はじめに 二. 研究史の死角 三. テクストの共時性——『にぎりえ』と「小石川の実弟殺し」 四. 「蒲団や」の註釈 五. 註釈と読解 六. 『にぎりえ』の独自性	
第四章	御伽話への訣別——『わかれ道』と〈働く貧困層〉……………	78
	一. 日本資本主義確立期のテキスト『わかれ道』 二. 「貧困なる労働者」の出現 三. 「運」の時代 四. 運命鑑定家と『わかれ道』 五. 「面白くない」／「詰まらない」 六. 同時代小説『一沈一浮』『刷毛彩色』『雨』 七. 希望の風景の喪失 八. 「詰まらないづくめ」の女たち 九. 希望の範型への訣別 十. 御伽話を手放したのちに	
第五章	転落という主題——『われから』と人名録との間テキスト……………	128
	一. 転落の人物たち 二. 「紅葉館」という記号 三. 呼称の変移 四. 町の物思い／紳士たちの欲望 五. 紳士たちと一葉	
第六章	樋口一葉文学における〈狂愚〉——その表現史および同時代言説との通脈と断絶……………	154
	一. 明治近代の陰画 二. 〈狂愚〉と転落 三. 〈狂愚〉の表現史——吉田松陰——李卓吾——樋口一葉 四. 同時代言説における「狂」と「侠」——田岡嶺雲——星野天知——北村透谷——戸川秋骨 五. 同時代言説との通脈と断絶——『十三夜』の虚無	
終章	近代日本からの逸脱——予言するテキスト『たけくらべ』と永井荷風『里の今昔』……………	188
	一. はじめに 二. 挽歌『里の今昔』 三. 軍靴と吉原 四. 『たけくらべ』の「哀調」 五. 近代日本の破局の原風景 六. 結語——ユートピアへの希求と断念のはざままで	

主要参考文献……………

凡例

- 一、引用に際し、旧字体は、適宜新字体に改めた。旧かなづかいは、そのまま引用した。ルビは、適宜省略した。
- 二、樋口一葉のテキスト引用は、すべて筑摩書房版『樋口一葉全集』によるが、初出誌、小学館版・前田愛校注『樋口一葉集』、岩波書店版・関礼子、菅聡子校注『樋口一葉集 新日本古典文学大系 明治編 二四』も参照した。脚注および主要参考文献に、どのテキストを使用したか記載してある。また本稿において、文学テキストや言説を引用する際は、そのつど出典や頁数などの書誌情報を脚注に示したが、一葉のテキストの引用は厩大であり、脚注数が増大する事を避けるために、一葉のテキストの引用に限って、頁数の記載は略した。
- 三、脚注において、原典ないし研究書を直接引用した場合、および、それを要約した場合の出典は、著者名、書名、出版社名、出版年、頁数と記したが、研究書全体ないし章全体など広範囲にわたる内容を概括、参照した場合は、著者名、書名、出版社名、出版年、参照と記した。
- 四、原典あるいは研究書の直接引用が連続した場合でも、原則的には、引用文「」に脚注を付し、出典情報を記したが、短い引用が連続する場合は、最後の鉤括弧「」に付した脚注に出典情報を記載した。
- 五、本稿のおなじ頁中に、文学テキストや言説、あるいは研究書の引用文が複数存在するばあいは、判りやすいように、著者名ないし著者名とテキストのタイトルをそのつど（ ）内に記した。それ以外の場合は、研究書を引用する場合、原則的には著者名やタイトルを出典情報と共に脚注に記した。
- 六、本稿において文学テキストや言説を引用する際、当該テキストを初めて掲げた時点でのみ、テキスト初出年を（ ）中に記した。
- 七、「」記号で括られた内容は、すべて執筆者による補足である。必要な場合はそのつど、「引用者註」と示した。「…」は、中略ないし省略を示す。へ」 “ ”記号で括られた内容は、本文引用とは異なる、論文記述内容の強調や注意喚起などを示す。
- 八、本来であれば、女性作家に刻印されたジェンダーを明示する語である閨秀小説、閨秀作家は、すべてへ」記号を付すべきだが、適宜省略した。
- 九、傍線をほどこした箇所が原文か引用者によるものかは、そのつど明記してある。直接引用文における傍点は、すべて原文による。
- 十、本文、脚注、主要参考文献において、年号は西暦と和暦を併記した。但し、一九四五〔昭和二五〕年以降は、西暦のみ記した。

序章 樋口一葉と近・現代日本

一. 紙幣における肖像化

二〇〇四〔平成一六〕年一月、樋口一葉（二八七二〔明治五〕—一八九六〔明治二九〕年）の肖像を凶柄化した、日本銀行券の改刷五千円札が登場した。実物にもっとも近いといわれる二三歳ごろの肖像写真¹を掲げたその高額紙幣は、二〇一二〔平成二二〕年現在も日本国中を流通する。

後半生を貧に苛まれ、その筆名「一葉」も、「お銭がない^{あし}」みずからを達磨大師が乗っていたという「芦の一葉」になぞらえたものであったことを思えば²、没後二一〇年ほどをへた今、その「一葉」の肖像を掲げた日本国紙幣が市場に氾濫、流通するさまは、皮肉な光景である。

ちなみに、日本銀行券「製造元」である国立印刷局は、新五千円札の意匠として樋口一葉の肖像を採用した経緯をめぐって、つぎのような質疑応答文を掲げている。

国立印刷局公式ホームページ所載「お札に関するよくある質問（回答）」³

Q 女性の肖像は樋口一葉（ひぐちいちよう）が初めてですか？

A 日本銀行券の肖像として女性が採用されたのは樋口一葉が初めてですが、女性の肖像としては明治期の政府紙幣において神功皇后（じんくうこうこう）が採用されています。また、肖像ではありませんが、二千円札の裏面に紫式部（むらさきしきぶ）の顔が描かれています。

Q お札の肖像はどのように選ばれるのですか？

A お札の肖像の選び方には特に決まりはありませんが、通貨行政を担当している財務省、発行元の日本銀行、製造元の国立印刷局の三者で協議し、最終的には日本銀行法によって財務大臣が決めることになっています。

Q 今までにお札の肖像になったのは何人ですか？

A 日本のお札に初めて肖像が登場したのは明治一四年（一八八一）年に発行された「改造紙幣老万円券」です。これ以降、平成一六（二〇〇四）年一月に発行された現在のお札を含めて、次のとおり、合計一七人の人物が登場しています。神功皇后、板垣退助、菅原道真、和氣清麻呂、武内宿禰、藤原鎌足、聖徳太子、日本武尊、二宮尊徳、岩倉具視、高橋是清、伊藤博文、福澤諭吉、新渡戸稲造、夏目漱石、野口英世、樋口一葉。

この公式というべき文章において、紙幣の肖像を選ぶ際の規準は、いつさい明かされていない。だが、ハルオシラネ氏が、「国家をはじめ大きい社会制度・教育制度があるかぎり、支配的なキヤノンが存在せざるを得ない。例えば日本の紙幣には漱石と紫式部（こんどは樋口一葉）が載っている⁴」と指摘しているとおり、およそ一国の紙幣に作家の肖像が採用される際には、その文学がゆるぎない正典性を獲得していることが自明の要件であろう。したがって、今回の樋口一葉の肖像採用もまた、現在、その文学が日本文学史における正典的な地位を獲得していることを、もっとも端的に物語る出来事にちがいがなかった。

いうまでもなく、ほんらい文学には「キヤノン」も非「キヤノン」も存在しない。にもかかわらず、

一國の通貨の貌として顕彰されるほどの正典性が形成される理由をめぐって、兵藤裕己氏は、一葉に先行して紙幣の図柄に採用された夏目漱石と紫式部を例に、つぎのように発言した。「集積される論文が、フーコーのいう言説の実定性のような機能をもってしまう「…」。奇しくも漱石は千円札、『源氏物語』は二千円札の図柄になりました。⁵⁾」

古典と近代という文学研究における二極において、それぞれ突出した論攷教を擁する『源氏物語』研究と漱石研究は、その研究の歴大な蓄積ゆえに研究それじたいが制度化され、権威化する。文学はそのときから正典性を帯びはじめ、一國文化の精華として、その作者の肖像を紙幣に掲げられもするのである。むろん、研究が制度化されるほどの大量の論攷が提出され続けるのは、そもそも、その文学がきわだって豊饒な、汲めども尽きせぬ深い内容を湛えていることの証にほかならないわけだが。

だがそれならば、奥深い独自の言語世界を有し、それゆえに多くの批評者を惹きつけ、論攷が量産され、研究も制度化されている日本文学は、ほかにも枚挙にいとまがないはずだ。そのなかで、近代の領域において提出される論文の数だけに限っていえば、かならずしも漱石に次ぐわけではないと推測される樋口一葉が紙幣の貌として選ばれた理由は何か。

前掲、国立印刷局の質疑応答文は明記を避けているが、冒頭にその答えの一端がはからずも表出していると思われる。「女性の肖像は樋口一葉（ひぐちいちよう）が初めてですか」／「日本銀行券の肖像として女性が採用されたのは樋口一葉が初めてです」。

樋口一葉をめぐって、その〈性別〉がまさきの特記されているのであり、日本銀行券に一葉の肖像画が採用された理由の一つ——否おそらく最大の理由も、おのずから、そのジェンダーにあると推察されよう。実際、「新札発行と一葉ブーム」⁶⁾について考察した松下浩幸氏によれば、「今回、一葉が紙幣の肖像画に選ばれたのは「男女共同参画社会の推進を意識しての判断」⁷⁾であったという。樋口一葉の重要〈女性〉作家としての評価と、時あたかも「男女共同参画社会」の実現が唱和されはじめた二〇〇〇年代における改刷紙幣の肖像採用は、無関係ではありえないのである。

ちなみに、それ自体がまさにカノン形成の大書にほかならない、日本近代文学史のカノンの一つ——日本近代文学館編『日本近代文学大事典』(机上版)に所収された小田切進編『日本近代文学略年表』⁸⁾において、代表作がほぼ全て記載されている重要〈女性〉作家は、明治、大正、昭和を通じて、一葉ただひとりである⁹⁾。記載されたその代表作数一〇も、女性作家全体のなかで最多である。また、同年表における女性作家作品の嚆矢は『婦女の鑑』(木村曙、一八八九〔明治二二〕年)であるが、翻訳物の『小公女』(バーネット、若松賤子訳、一八九〇〔明治二三〕年)を措けば、一葉の『闇桜』(一八九一〔明治二四〕年)をはじめとする諸作品名が、以降の年表を飾っている。木村曙の他の著作『操くらべ』(一八八九〔明治二二〕年)や『わか松』(一八九〇〔明治二三〕年)がいつさい掲載されていないことを思えば、同年表における〈女性〉作家の事実上の嚆矢は、樋口一葉と見ることも可能であろう。

そのように、近代全体を通して重要な〈女性〉作家として言祝がれていること。それが、紙幣の肖像として採用される一因を形成していると考えられることは誤りでないはずである。

だがここで重要な点は、ハルオ・シラネ、鈴木登美編『創造された古典——カノン形成・国民国家・日本文学』¹⁰⁾等によって解明されているように、こうした作家の顕彰化と作品の正典化は歴史的文脈において生成される「創造」であり、とりわけ一葉とその作品の称揚には「それぞれの時代のジェンダーの諸相とその問題が、鏡のように映し出されている」¹¹⁾という点だ。近年、前出、松下氏や笹尾佳代氏らによって、伝記、教科書から映画、演劇に及ぶ多様なメディアによって流布された一葉とい

う「神話」ないし「記号」が、戦前から戦後までの各時代の「歴史的・社会的コンテクスト¹¹」といかに深く関連しながら創出され、或いは変容していったかが詳らかにされてきたが、松下氏はそのなかで、今回の紙幣における肖像化は「伝記の対象としてメディアに選択されてきたことと強い連動性¹²」があると指摘した上で、伝記対象として「一葉が呼び出される際のキーワード」は戦前から「平成の新札発行時」に至るまで「女性」の「文化」的貢献¹³」であると述べている。

こうして見ると、国立印刷局による前掲文に端的に示されているように、今もって樋口一葉をめぐる言説には〈女性〉という性別記号がつきまとう。それは一八九二（明治二五）年、日本初の商業文芸誌にして当代一流誌でもあった『都の花』に『うもれ木』が掲載され、樋口一葉のテクストに対して初めて評が寄せられたときから、一葉に憑いて離れることなかった宿命であった。「ジェンダーをめぐる問題は、一葉評価の言説が常に抱えてきた問題である¹⁴」と指摘したのは前出、笹尾氏だが、まさしく一葉とその作品に対する批評は、約一二〇年もの長きにわたって、全てそのジェンダーをめぐる旋回してきたといつて過言ではない。

本論文を展開するにあたって、次節では、その約一二〇年にわたる樋口一葉の研究史を俯瞰しておこう。

二二 これまでの樋口一葉研究史

日本近代文学史上初の一葉作品評となる、その「明治廿五年文界」『女学生』一八九二（明治二五）年二月三日のなかで、星野天知は『うもれ木』について、「筆は着想の凡ならざると共に鋭く、人をして其婦人の作なるを疑はしむるものあり¹⁵」と述べたが、小平麻衣子氏が指摘するように、こうした「女流」らしくもない¹⁶というレトリックによる称賛は「明治二〇年代から三〇年代初頭にかけて¹⁶」反復される。小平氏が例示している言説も含め、改めて以下に掲げてみたい。

「斯くの如きヒューマニチイに富める作家は今の男性作家中にも多くを求むるを得ざるなり（…）世人が女流の作なるが為に軽忽に視るなからん事を庶幾して擱筆す¹⁷」（魯庵生「一葉女史」に「り江」）、
「曖昧茶屋の女が事なりげによく書かれたれどわれは其よくの上に女性に似ずといふ語を置くことを忘るゝ能はず¹⁸」（正太夫「金剛杵」）、
「作者一葉樋口氏は處女にめづらしき閨歴と観察とを有する人と覺ゆ¹⁹」（鼎休庵「鶉翻搔」）、
「女史の名は今や文界に喧伝して鬚髯作家をして顔色無からしめんとす²⁰」（無署名「一葉」）、
『たけくらべ』『濁り江』等をもって、文名隆々、有髯男子小説流をして後に瞠若らしたためたる一葉女史樋口夏子には²¹」（無署名「時報」樋口一葉女史逝く）、
「天下の文士環視して瞠若たり。有髯男児將に愧殺せられんとす²²」（笹川臨風「一葉女史を吊ぶ」）

樋口一葉をめぐる批評史は、以上のように、「鬚髯作家」「有髯男子小説流」をしのぐ「女流」「巾幗者流²³」（無署名「樋口一葉女史を悼む」）という枠組から出発するのである。

重要なのは、そのように評される根拠だが、右の魯庵生「内田魯庵」は、『にこりえ』に頭在している、社会最下層の人々に対する共感的視点を挙げている。かかる視点は、当代の女性作家はおろか、男性作家にすら、ほとんど求め得ることはできない、と魯庵は述べる。「女性の身としては最も醜陋猥褻なる外皮に包まるゝ売淫婦なれば厭悪するこそ当然なるに、却て多涙なる同情を濯ぎしは縦令ひ全篇が多くの欠点を有つも猶ほ十分なる讚賞を払ふの価値あるべしと信ず。斯くの如きヒューマニチイに富める作家は今の男性作家中にも多くを求むるを得ざる²⁴」

同様の一葉評価は多い。笹川臨風の前掲「一葉女史を吊ふ」も、「女史に同情の涙あり。筆々是れが為に動き。女史に奇骨の稜々たるあり、紛々たる群作家の追及し得べきものならんや²⁵」と賞賛し、大町桂月「一葉全集を読む」も一葉の諸作をめぐって、「特に人の注目を惹くは「…」すべて逆境を写せること也。たとへば、薄命、不幸、墮落、かなはぬ恋、怨恨、悲痛の人物事物を材料とせり²⁶」と指摘する。前掲した無署名「樋口一葉女史を悼む」も、「女史が、其心華を咲しめし著作を見れば、総て社会逆境の人に向つて同情を表するが為めのものにして読者一点の靈心、知らずく何物かに感動するある所以は、唯之れを以てのみ²⁷」と断言しているのである。

「最も醜陋猥褻なる外皮に包まるゝ売淫婦」を、偏見や予断を排して対象化する社会性と、そうした「社会逆境の人」にそそぐ無量の「同情の涙」(以上、前掲、魯庵生「一葉女史」に「江」)。社会批判性と「ヒューマニチイ」を小説世界において見事に発現させた点において、きわめて稀な「女流」である。同時代の批評家は、揃ってそう述べている。

異口同音にそう讃嘆される背景には、平田由美『女性表現の明治史 樋口一葉以前』にも論じられている、つぎの理由が存在した。当時「女流小説」は、「男女間の愛情²⁸」ばかりをテーマとする視野の狭さを克服すべく、建前上は「芸娼妓や囚人、病人や困窮者といった弱者の救済と、彼らを生み出す社会の改良という使命が課せられていた²⁹」はずだった。だが、その一方で「女流小説」は、「男たちのそれのごとき「不潔文字」を記すことを禁じられて³⁰」いたため、実際には「優趣雅潔³¹」であるべき「女流」文体に合致した「上流社会の事ばかり³²」を写す以外になかったのである。

書くことをめぐる、そうした二重規範をよそに、樋口一葉は「社会逆境の人に向つて同情を表する」(前掲、笹川臨風「一葉女史を吊ふ」)「奇骨」(前掲、無署名「樋口一葉女史を悼む」)を發揮して「芸娼妓」や「困窮者」の姿を写した点において、稀有な「女流」であった。しかも一葉は、そのように「醜陋猥褻なる」者たちの世界を描きながらも、流麗な擬古文を巧みにあやつることによって、「不潔文字」に墮することなく「優趣雅潔」の作風を高く保ちえるという、いわば離れ業をなし得た、ただひとりの「女流」であったことになる。

同時代文壇において、そのような特異な位相を示していた一葉に贈られた「称号」が、その後の一葉評価を決定づけることになる。「詩人」である。「称号」の贈り主、森鷗外による余りに人口に膾炙した記念碑的批評を、ここに改めて掲げておこう。

第二のひいき 大音寺前とはそもくいかなる処ぞ。いふまでもなく売色を業とするものゝ余を享くるを辱とせざる人の群り住める俗の俗なる境なり。されば縦令よび声ばかりにもせよ、自然派横行すと聞ゆる今の文壇の作家の一人として、この作者がその物語の世界をこゝに択みたるも別段不思議なることなからむ。唯ぞ不思議なるは、この境に出没する人物のゾラ、イブセ³³等の写し慣れ、所謂自然派の極力模倣する、人の形したる畜類ならで、吾人と共に笑ひ共に哭すべきまことの人間なることなり。われは作者が捕へ来りたる原材とその現じ出したる詩趣とを較べ見て、此人の筆の下には、灰を撒きて花を開かする手段あると知り得たり。われは縦令世の人に一葉崇拜の嘲を受けんまでも、此人にまことの詩人といふ称号をおくることを惜まざるなり³³。(傍線原文)

「捕へ来りたる原材とその現じ出したる詩趣」との、あざやかな対照の妙を現出させえた樋口一葉

こそ、「まことの詩人」である。『文藝倶楽部』に『たけくらべ』が一括掲載された一八九六〔明治二九〕年四月、圧倒的な影響力を持つ文壇の雄、鷗外からそう激賞されることによって、「女流」樋口一葉と「詩人」は等号で結ばれる。そのわずか七ヵ月後に二四歳の若さで一葉が急逝することによって、この樋口一葉＝「詩人」という定義は神話化することになるのである。以後の批評をみてみたい。

「女史が優に群小説家中一頭地を出したるは否むべからざる事実にしてめさまし草の雲中語の評家の如きは、「此人には真に詩人の称を与ふるを惜まず」といひしと覚ゆ（…）俗臭紛々嘔吐を催さん計りなる今日の文壇外に特立して精麗閑雅一種の幽韻をほめかす文學界諸氏の内定めて其人あるべしと信ず³⁴」（土井晩翠「一葉女史」）、「薄倖なる、悲惨なる同情ある、詩眼ある当代の才媛一葉女史の半身肖像は、正にこの再版一葉全集たることを³⁵」（無署名「一葉全集 再版」）

ここで留意しておきたいのは、一葉の急逝を境として、右の無署名「一葉全集 再版」のように、「薄倖なる、悲惨なる同情ある、詩眼ある当代の才媛一葉女史」と、その小説世界とを直接重ね合わせて眺める視点が生まれていることである。先に掲げた無署名「樋口一葉女史を悼む」や大町桂月の言説も、一葉の小説に描かれた「逆境」の人物たちを、一葉じしんの「幾許の辛酸³⁶」にみちた半生の反映、すなわち「自家の佛³⁷」と見る点で一致している。幸田露伴による一葉評も、「其名の世間へ高まつてからは勿論、其前から殆ど独力で家を支えて居た（…）悲しむべき閱歴³⁸」がその小説世界に投影されていると見る点において、それら言説と相似する。

ここから樋口一葉の文学は「薄倖」な「詩眼ある」「才媛」女流作家の「浮世の波の辛きも苦きも嘗め尽くし³⁹」た半生が具現化されたもの、という基本的枠組における読解が開始されるのである⁴⁰。

このように、初批評から急逝後一年以内までの一葉をめぐる評を順にたどつてゆくと、「醜陋猥褻なる」「社会逆境の人」を真率な「同情」をもって写した稀有な「女流」、あるいは、かかる「醜陋」な底辺社会の人々の真の姿を詩情溢れる文体で表現しえた「詩人」、そのどちらにせよ、生前はテキスト本位の一葉評が提出されていた。だが、その死を機に、夭折というそれ自身が悲劇的な事件の効果もあって、テキストを作者じしんの「薄倖な」半生の直接的反映として理解する、作家論の方向へと急転換したことがわかる。こうした作家論研究は、一九八〇年代初期までの代表的な一葉研究者たち、湯地孝氏や福田清人氏、和田芳恵氏、塩田良平氏、村松定孝氏、岡保生氏らの論攷⁴¹においても、基本的には引き継がれることになるのである。

小川昌子氏によれば、一葉研究においてそのような「作家論」的「読み」⁴²が堅牢に構築されるにあたって、いくつかの重要な契機があった。「近代作家の最初の個人全集」⁴³としての『一葉全集』が急逝の翌年に緊急出版されたことによって、「作家」に収斂していく「読み」を誘発するシステム⁴⁴が生まれたことが、第一の契機。第二に、七回忌と十三回忌を機に、故人と最も近い関係にあった馬場孤蝶や半井桃水らによって、回想の体裁をとった一葉の個人情報開示が大々的になされたこと。第三に、そのとき桃水が匂わした「女史」との「関係性の「謎」」⁴⁵に対する「興味の高まり」⁴⁶と、「作家像構築という（文学）的には真面目な意図」⁴⁷（傍点原文）とがあいまって、初公開「日記」を掲載した『一葉全集』（一九二二〔明治四五〕年）が発刊され、それが決定的な契機となつて「読み」の方法的な膠着化と序列化——すなわち「日記」を参照する「読み」が良いとか（…）研究の正統であるといったような価値づけ⁴⁸が生じたこと。

「に「りえ」の世界を書き得た「処女」作家の、知りたくとも知らうとすることさえ許されない

ような「閲歴」を空白にしたまま^{4,9}「一葉が没したところから、以上のような「さまざまな「一葉」語り^{5,0}」が生まれ、二つの『全集』の刊行を留意した、と同論文は指摘する。そのような視点に立った同論文では、『たけくらべ』評のなかで鷗外の与えた「詩人」という「称号」は、「に「ごりえ」に通じるような「淫猥」な世界と「閨秀」「一葉」との結合を忌避^{5,1}」するための鷗外の配慮であったと推測されているのである。

つまり、「鬚髯作家」も遠くおよばない稀有な「女流」、あるいは不世出の「詩人」と讃えられるほどの、並はずれた筆力をもって底辺社会を描きえた樋口一葉という妙齢の女性作家に対しては、当初から真摯な関心と好奇が入り混じったまなざしが向けられていた。生前は潜在化されていたそのよくなまなざしが、名声の高まりのさなかにおける急逝という、それ自体が悲劇的で衝撃的な出来事の生起によってあらわとなり、以後、樋口一葉をめぐるさまざまな言説が試みられ、その状況に応えるかたちで、あるいは異議を申し立てるかたちで、ふたつの『全集』が刊行されることになる。

こうした経緯のために、つまり、「当代の秀逸^{5,2}」女流であることと、貧困と不遇のなかでの早逝という、ふたつの特異な条件によって、小川氏のいう「一葉」語り」があまりに増殖したために、樋口一葉の文学は、他の近代作家とくらべて、作家論に著しく傾斜した研究がなされてきたのである。

もっぱら男性研究者によって担われてきた、そうした作家論研究——「薄倖の才媛」「悲劇の天才女流作家」^{5,3}——という枠組での読み——に対して、具体的に言えば「女性研究者（読者）」が読み手である自らの性的差異に伴うバイアスを意識したうえで、書き手である一葉の性的差異に伴うバイアスを測定して読む、という多層的な読みの手続きを経由せずに、男性研究者（読者）たちが、実に百年近くにわたって蓄積してきた読みの制度の枠内で一葉のテキストを「読んでしまった」^{5,4}「事態に対して、八〇年代以降からは、藪禎子氏や関礼子氏、渡辺澄子氏、西川祐子氏、菅聡子氏、「新フェミニズム批評の会」をはじめとした、ジェンダー論やフェミニズムの知見を手にした女性研究者たちから、「語る女性」あるいは「女性の言葉の代表者」^{5,5}」として「樋口一葉を読みなおす^{5,6}」試みが続々と行なわれている状況にある。

もともと「女性研究者の業績が量的にも質的にも蓄積されてき^{5,7}」た現在、「ジェンダー論やフェミニズムの問題系の中で一葉を議論すること自体、そろそろ限界にきているのではないか^{5,8}」という意見が挙げられていることも事実ではあるが、家長制度下における抑圧的女性規範の犠牲者、ないし、それに対する抵抗者として一葉を読みなおす方法論の有効性も、未だ失われていないはずであり、そうした方法論を含め、ジェンダー論を援用した優れた論攷は現在も産出され続けている。

以上のべてきた研究史のふたつの流れとは別に、八〇年代には、国民文学論に対する反動としておこった印象批評の全盛（六―七〇年代）にピリオドを打つ、前田愛氏によるテキスト研究が登場する。文化記号論をはじめ、多岐にわたる文学理論を駆使しながら、実証的かつ繊細に樋口一葉のテキストを眼差す研究手法からは、画期的な『たけくらべ』論をはじめ、今日なお有益な、多くの重要な研究成果が生まれた。氏が切り拓いた一葉テキスト分析の新たな地平を完全に超越する研究方法は、いまだ存在しないといっても過言ではないかもしれない。

なお、この前田氏の「子どもたちの時間——『たけくらべ』試論」を批判的に発展させた「口惜しさと恥しさ——『たけくらべ』における制度と言説」を提出した小森陽一氏からは、メディア論、文理論、フェミニズム論を融合させた一葉テキスト分析のひとつの到達点ともいえるべき『この子』論などが試みられている。

八〇年代末―九〇年代からは、従来の男性研究者による「読みの制度」を批判的に乗り越えようとする男性研究者が相次いで登場し、『論集樋口一葉』シリーズ等でも新たな研究成果が発表され続けている。なかでも高田知波氏からは、テキストの細部描写から、教育制度や法制度など近代国民国家制度にたいする一葉の対抗的視座を読みとる、精読と文化的な読解を統合させた、先鋭的な批評が提示された。

こうしてみると、樋口一葉とその文学をめぐる研究史は、様々な文学研究方法、理論の実践史として素描されるだろう。何といても、ジェンダー論、フェミニズム批評にとって、日本近代文学史における最重要女性作家であると同時に女性作家の事実上の嚆矢でもある、樋口一葉とその文学ほど、格好の分析対象はあるまい。また見てきたように、作家論、伝記研究にとつても、樋口一葉は好個の研究対象であり、そのため作家論は長きにわたって研究の正統でありつづけた。

そのほか、印象批評的作品研究、文化記号論的作品研究、ナラトロジー研究や文体論研究、テキスト生成研究、草稿研究、千陰流書体研究、テキストに散在する空白箇所をめぐる注釈研究、近年では同時代情報を多くふくむ点から、カルチュラルスタディーズ的アプローチも盛んである。西川祐子氏による私小説の体裁をかりた異色の一葉論⁵⁹や、瀬戸内晴美、松本清張、近藤富枝ら各氏による評伝推理小説⁶⁰さえ著されている。

多種多様な一葉研究だが、やはり樋口一葉とその文学をめぐる研究は、日記や伝記に依拠し「薄倖」の「天才女流作家」と規定した作家研究にしても、家父長制の下で抑圧された女たちの嘆きと憤りの声を代弁する「語る女性」の「代表者」と捉え直したフェミニズム批評的研究にしても、一葉のテキストを女性⇨周縁者表現として読み直した文化記号論的研究にしても、つまるところは樋口一葉の〈女性〉という〈性別〉を起点とした研究であつたといえよう。

三. ただよう果てに——筆名「一葉」考

樋口一葉じしんは、みずからの女性という性別、少なくとも小説家としての自身の性別を、どのよう意識していたのであろうか。

高田知波氏は、かつて和田芳恵氏が指摘した事柄——一葉は自筆原稿に「ほとんど一葉、もしくは、一葉稿とだけ書いてある。それ以外の形ができたのは、多く編輯側の加筆とみてよささうだ⁶¹」——を再検証した結果、「女」の徴をあらわにした「一葉女史」や「一葉女」という表記は、作家の本意でなかった⁶²と述べている。メディアが閨秀作家の雅号の下にジェンダー記号としての「女史」「女」を強制的に付していた同時代、活字化された一葉のテキストの大部分も、「一葉女史」「一葉女」と記されているが、例外的に掲載回数をかさねた雑誌『武蔵野』『文學界』『うらわか草』に限っては、つまり「一葉本人の意思が尊重され⁶³」やすくなったメディアにおいては「一葉」とのみ印字されていること、そもそも本人が「一葉」という性別の不明瞭な雅号を選んでいることを、高田氏はその傍証として挙げている。

一葉は、みずからの作品が、女性という性別を刻印されたかたちでメディアに流通することを拒んでいた、あるいは女性という性別を明示されることなしには読者に受容されないことを遺憾に思っていた。一葉は、自作の世界に、作者であるみずからのジェンダーが介入することを忌避していたのである。このことは、一葉のテキスト研究において看過できない点ではないか。

ちなみに高田氏は、「現実生活では母と妹を抱えた戸主として奮闘し続けた一葉が「…」言説空間の支配者という「幸運」を手に入れた時、つねに姓のない「一葉(稿)」という署名から起筆しているという事実の背後に、「一葉」と「樋口」とを切り離そうとする、あるいは「一葉」というテリトリには「家」を踏み込ませまいとする強い意識のはたらき⁶⁴」が認められるとも指摘した。「一葉」という筆名には、「無性空間」のみならず「無姓空間」への「志向が貫流していたのではないか⁶⁵」、「樋口」も「女」も「女史」も付かない「一葉」こそが、彼女の意思に即した唯一の雅号だったのではないか⁶⁶。」というのである。きわめて重要な指摘である。

次節で述べる本論文の目的と方法を、ここで先取りするかたちで触れておけば、本論文は、この一葉じしんの「意思」、自作の世界にみずからの「性」と「姓」が容喙することを拒んだ一葉の「意思」に沿った考察を試みたいと考えている。

書くことを通して、「性」と「姓」から解き放たれようとする強い意志の発現した記号が「一葉」であり、言いかえれば、筆名「一葉」には、「性」規範と「家」制度という、近代日本を貫く正統性観念を懷疑し、相対化しようとする作家の固い意志が込められていた。その意志はおそらく、以下に述べるような、筆名「一葉」に託されたもうひとつの意志と、根底において結び合っているはずだ。

野口碩氏の考証によれば、当初、筆名「一葉」は「漂う舟」を意味していたという⁶⁷。なるほど、初期習作期における一葉は、収入の途のない女所帯を維持する「覚束な」さを嘆き(「十八といふとし父におくれけるよりなきさの小舟波にたゞよひ初て覚束なきよをうみ渡る⁶⁸。」「心ゆかぬこと」(「わたくしにこゝろさすことはたさはり勝にてこゝもかしこも心ゆかぬことのみ重なれば小舟波にたゞよふ様にて浮たる世をすぐ⁶⁹。))ばかりの不如意さを悲しむ「寄る辺ない自分(心は彼の岸をと願ひて中流に棹さす舟の、寄る辺なくして波にたゞよふ苦しき⁷⁰)」、「浮たる世」に「たゞよふ」「小舟」と譬えていた。だが、のちに一葉はその筆名に、本章冒頭でもふれたような、「達磨大師」および大師が乗っていたという「芦の葉」のイメージを新たに付与するようになる⁷¹。

「達磨大師」とその換喩としての「芦の葉」のイメージは、借金につぐ借金の暮らしが破綻し、最後の活路を求めて転居した吉原遊廓裏の細民街での暮らしも行き詰まりを見せたときに、はじめて一葉の胸中に浮上する。「芦の一葉にのりて舟遊山をしたる達磨大師さへ御座候ものをや 行みづのうきよは何か木の葉舟ながるゝまゝにまかせてをみん⁷²」。

一片の寄る辺ない「芦」の「木の葉舟」として流されゆくみずからの境位を受容したうえで、「お錢がない」がない無一物の自身を、(足)の見えない座禅姿の構図で描かれる「達磨大師」と、大師が梁の武帝に招かれて揚子江を渡った際に乗っていたと伝承される「芦」の「木の葉舟」に軽妙に譬えてみせたときから、「一葉」のなかで新しい文学への志が決意されたと本論文は推測している。

生きることの「覚束な」さや「寄る辺ない」さ、貧困と不遇にたいする悲嘆の徴としての「一葉」から、洒脱な諧謔、軽みの境地としての「一葉」へ。筆名に込めた意味の転換は、「一葉」が近代日本の正統性観念から逸脱した周縁者としての自身を受け入れ、かつ相対化する視点を手に入れたことを告げている。その視点は、先に述べた「性」規範や「家」制度をはじめとする、近代日本の正統性観念それ自体を捉え返し、相対化しようとする意志へと、おのずと接続されてゆくだろう。

このときから「一葉」が語りはじめる物語——のちに「奇蹟の期間⁷³」と称賛されることになる、一八九四〔明治二七〕年から一八九六〔二九〕年までの、わずか二年近くのあいだに生み出された傑作の数々は、近代日本の正統性観念から、すなわち近代日本そのものから、絶えざる(逸脱)をめざ

す物語の数々にほかならないのである。

四．本論文の目的と構成

本論文は、明治二〇年代にほぼ確立をみた「天皇制的「正統性」⁷⁴」（丸山眞男氏）、すなわち「天皇、忠義、村、家族、国家⁷⁵」という「天皇制に直接的にかかわる正統性観念⁷⁶」（安丸良夫氏）と、文明開化の中心イデオロギーとしての立身出世主義とが不可分に結びついた〈近代日本の正統性〉からの、一葉のテクストの逸脱志向を明らかにすることを目的としている。

そのような近代日本の正統性からの逸脱志向を内在させた一葉の諸テクストの、同時代メディア言説や文学に比べた特異性を析出することを通して、それらテクストの歴史超越性を指摘しつつ、文学とは何かという問題に対する一視座を提示することを、本論文はその最終的な目的に掲げるものである。

むろん従来から「一葉とその時代⁷⁷」に関する考察は、一葉研究における「オーソドックスな問題⁷⁸」系のひとつとして存在しており、すぐれた論攷も数多く提出されてきた。だが、本論文はそのような、時代の反映として一葉のテクストを読解する研究とは逆に、同時代をふくめた近代日本に対する背馳性を、一葉のテクストから読みとるものである。一葉のテクストに内包されている、近代日本への批判的視座を明らかにすることを企図しているのであり、その分析の過程においては、近代日本それ自体の姿、少なくともその一面が浮き彫りにもなるだろう。本論文は、一葉のテクストが、どのように近代日本を見渡すパースペクティヴを備えている点を重視し、〈樋口一葉にとって近代日本とは何か〉、すなわち〈樋口一葉と近代日本〉という問題を対象化するのである。

樋口一葉は、奇しくも、近代日本の出発点と評される日清戦争前後期に、二十数編の特異な短編と日記、和歌を生み出したのち、その短い生涯を閉じた。「奇蹟の期間⁷⁹。」とも命名される、その凝縮した創作期間にあたる日清戦争前後期とは、政治史からみれば、大日本帝國憲法や教育勅語の発布によつて、天皇を政治的主体に据えた天皇制中央集権国家体制が一応の完成を遂げた時期にあたり、経済史からみれば、資本の本源の蓄積過程から日本資本主義の確立期へと移行を果たした時期にあたる。とりわけ近代初の対外戦争となる日清戦争の勃発とその勝利は、それまで政治的客分に甘んじていた広汎な人々を、はじめて国民Ⅱ帝國臣民として自覚させる契機になったと同時に、数多くの企業を勃興させ、日本経済をまがりなりにも本格的資本主義体制へと押し上げる画期ともなったのである。

思想史からすると、明治初年から案出されてきた一連の国民教化装置——五箇条の御誓文、三条教憲、学制、軍人勅諭、市制町村制、大日本帝國憲法などが、国体の精華と忠孝の道を鼓吹する教育勅語の発布によつて、ほぼ完成された時期にあたる。これによつて、忠君愛国思想と立身出世主義が共軌的に結ばれた正統性観念——国民国家に対する立身出世を通じた忠誠——が、人々のうちに深く浸透してゆくことになる。社会史からみれば、その「坂の上」への上昇モラルを強く内面化した者たちのなかから、近代日本を主導する選良紳士が誕生する一方で、農業国から工業立国への転換や松方デフレによつて働く貧困層も大量に出現する、格差社会が出来た時期にあたる。

国民国家、資本主義、忠君愛国思想、立身出世主義、格差社会——近代日本のかたちが形成されたこの日清戦争前後期に、同時代文学も、その制度やモラルを反復、強化するテクストを生成するなか

で、一葉はその近代日本の正統性から〈逸脱〉し転落してゆく〈狂愚〉者たちの物語を語ってやまなかつたのである。

なるほど先学においては、一葉が批判的にまなざす対象は「国家」ではなく、「長い歴史の中で日本人が抱え込んできた」「心的抑圧装置。」¹⁰としての「世の中。」¹¹であると正しく指摘されている。だが同時に、その「世の中」もまた、統治権を総攬する天皇にたいする人々の忠誠が「官僚化を通じて権限と恭順の倫理と化し、他面で社会化を通じて「世間」への順応と同一化。」¹²（傍点原文）するようになった日清戦争前後期、その存在感を急速に肥大させ、他者にたいする排他的抑圧性がかつてないほど発揮していたのであり、その史実を反映して、一葉の言語態としての「世の中」も「国家」に包摂されたものとして、「国家」とほとんど同義で使われる。

たとえば、一葉はしばしば「金の世の中」「金が敵の世の中」と記すが、これは、自由放任主義経済が「国家」的に容認されていた明治二〇年代前—中期の社会状況をあらわす表現であると同時に、殖産興業政策の一環である貯蓄銀行条例の公布（一八九〇〔明治二三〕年）を機に、「国家」を挙げて蓄財が奨励されてゆくなかで、金銭と金銭的成功に対する肯定意識、ないしは執着や畏敬の意識が人々のあいだに内面化されたことをあらわす表現でもある。

そのような時代にあつて、一葉は一貫して、金銭的成功を卑俗な功利主義としてしか語っていない。一葉は、金銭的成功を立身出世として賛美する近代「国家」日本という「世」を、次のように皮肉を込めて表現するのである。「利口の君、才子の君、万々歳の明治の世」『暗夜』。

このようなかたちで、時代情報が豊富に内包されている一葉のテキストは、テキストからいったん眼を離して同時代状況を俯瞰し、ふたたびテキストに眼をもどす読書行為を要請せずにはいない。読者は、テキストの内部と外部、物語空間と日清戦争前後期の時空間とのあいだを、つねに往還することを迫られるうちに、一葉のテキストがその時空間をつらぬく文脈といかに異なる様相を呈しているか、すなわち、それが近代日本の正統性からいかに甚だしく逸脱しているかが判然とするのである。テキストは、同時代の諸批評がいずれも驚きをもって受け止めていたように、近代国民国家の枠組が堅牢に形作られた時期に、その埒外に排除された者たちに、あるいはみずから逸脱した者たちへのみ視線を注ぎ、その埒外から近代日本を捉え返しているからである。一葉の残したテキストの数々は、近代日本の正統性観念からの絶えざる逸脱の軌跡として見る事が可能なはずだ。

本論文の第一章では、実質的な文壇デビュー作『うもれ木』においてすでに、その正統性観念からの逸脱の様相が顕現しているさまを確認したい。「大日本帝國の名誉」を示威する傑作美術品の制作に専心していた主人公が、その熱烈な愛国心と功名心に付け込んだ似非紳士の奸計に、最愛の妹ともども陥れられる出来事を通して、近代日本の正統性観念それ自体に対する懐疑をいだくに至り、みずから「万国博覧会」―出品物を毀損させ「日本帝國の一臣民」であることから離脱してしまう、この異色の美術小説。これを皮切りに、近代日本からの逸脱と転落の物語が展開されてゆくのである。

第二章では、日清戦争のさなかに執筆、初出された『暗夜』を、戦時下に確立された、篤志看護婦に象徴される模範的女性国民像からの逸脱をえがいたテキストとして読みなおしたい。あわせて同テキストが、戦時に生成された、美子皇后に体现される正統的女性表象の虚構性を暴露しているさまも指摘したい。卑俗な功利主義者を言祝ぐ「利口の君、才子の君、万々歳の明治の世」に叛心を募らせ、代議士暗殺を企てるという異形の女主人公像は、閨秀文壇のなかで他に類を見ないものである。

第三章では、近代史上初の対外戦争を経、国民意識が人々のうちに根を下ろした日清戦後にあつて、

女性国民どころか国家の恥辱と蔑まれる娼婦と、彼女に蕩尽することで立身出世、致富成功をつうじた国家貢献を放擲したといえる男の不条理な惨死をえがいた『にぎりえ』を、国民国家の埒外の物語、近代日本の正統性モラルからの逸脱の物語の極北として捉えなおしたい。そのうえで、テキストが、近代日本の最下層を生きる娼婦に、正統的女性規範の主柱の一つである経済道徳を体现させることによって、女性をめぐる優劣の二項対立言説の脱構築をはかっている点も指摘したい。

第四章では、日本資本主義の確立のもと、苛酷な賃労働に疲弊したあげく、性規範も、規律／訓練的な労働規範をも逸脱して、「腐れ縮緬着物で世を過ぐ」妾に転身する女と、矮小な身体と孤児という出自ゆえに出世の夢から疎外された少年との、束の間の交情と別れをえがいた『わかれ道』を、立身出世という近代日本の〈国民の物語〉の虚妄性を炙り出したテキストとして読みなおしたい。

第五章では、最晩年作『われから』をとりあげる。少国民を産み育てる勤儉貞淑な良妻賢母像に背反して〈女〉をあるがままに生きる富裕なヒロインを待ちうける破滅を語る、その物語言説と語り口からは、同時代の教条的な正統的女性規範を逸脱するヒロインの非政治性にたいする共感的な響きを聴きとることになるだろう。

第六章では、正統から逸脱的にしか生き得ない者たちの非合理的なパトス「狂」「愚」を、幕末維新期から明治二〇年代までの表現史のなかに辿りながら、それが吉田松陰、田岡嶺雲、星野天知、北村透谷、戸川秋骨らの言説における「狂愚」と脈絡しつつも、決定的に断絶しているさまを指摘することを以て、一葉の文学的主题の独自性を確認したい。

終章では、近代日本の上昇モラルとは正反対のベクトルを指している代表作『たけくらべ』が、一九四五〔昭和二〇〕年における近代日本の破局を期せずして予兆していることを、永井荷風の『たけくらべ』論『里の今昔』を参照しながら論じたのちに、作家樋口一葉じしんの〈狂愚〉について分析し、論文の結語に代えることとする。

以下に、本論文の方法について簡単に述べておきたい。

本論文は、樋口一葉のテキストに内包されている「天皇制的」「正統性」「天皇制に直接的にかかわる正統性観念」と立身出世主義が共軛的に結ばれた近代日本の正統性からの逸脱志向を指摘する点において、近代国民国家批判という文化研究的な枠組に依拠すると言えるかもしれない。一葉のテキストが、前述したように、近代日本をかたちづくる制度やモラル、イデオロギーに対する顕在的、潜在的批判表現を含んでいるために、又それに関連して、閨秀作家に課せられた創作コードを侵犯した一葉のテキストが初出当時どのような文脈において受容されたかといった、テキスト生成と受容に關する問題を明らかにするためにも、文化研究的なアプローチが要請されるからである。

だが、強調しておきたいのは、文化研究の理論は、あくまで一葉のテキストの〈言葉〉と〈表現〉分析のために援用されるという事柄であり、決してその逆ではないということである。文学としての一葉テキストの〈言葉〉と〈表現〉のひとつひとつを分析すること以外に本論文の目的はない。

ジェンダー論、フェミニズム論に關しても同様である。前述したように、すでに一葉研究においては、その枠組で議論することが飽和状態に等しい一方で、「まだまだジェンダー論やフェミニズムの視点から言える事も少なからず残されている」^{8,3}「ことも事実であり、じっさい現在も同理論に依拠したすぐれた論攷が提出され続けている。自作とその評価にみずからのジェンダーが容喙することを嫌った一葉ではあるが、本論文も、テキストに散在する、同時代の女性間格差にたいする批判的表現を分析しようとする場合、「マルクス主義」の視点（資本制批判）^{8,4}、「ラディカルフェミニズム

ム」の視点(家父長制批判)⁸⁵、あるいはそのふたつを折衷した「二元システム論⁸⁶」などを援用しなければならないであろう。

だが言うまでもなく、それら理論もあくまでもテキストの〈言葉〉と〈表現〉の分析に貢献するものでなければならぬ。ポストコロニアル批評やサルタン研究、脱構築理論、オリエンタリズム研究などの知見が援用される場合であっても、それは同様である。

これ以降、本論文は、例えばジョナサン・カラーの述べた警句——「理論は、ひたすら読むことを、前提に挑戦することを、あなたが前提としていたことに疑問を持つことを要求する⁸⁷」——に賛同する立場から、諸理論をテキストに向き合うための、あくまで一契機として援用しつつ、〈言葉〉のつらなり、〈表現〉の集積としての樋口一葉の文学テキストを、「ひたすら読む」ことに捧げられる。

¹ 前田愛、編集・評伝『新潮日本文学アルバム3 樋口一葉』(新潮社、一九八五年)二頁。

² 後藤積・山田有策、作成「年譜」、岩見照代、北田幸恵、関礼子、高田知波、山田有策編『樋口一葉事典』(おうふう、一九九六年、以後、『樋口一葉事典』とのみ記す)五〇〇頁、野口碩「資料一般から抽出される一葉の思考の世界―特に「流れ」をめぐる」、樋口一葉研究会編『論集樋口一葉IV』(おうふう、二〇〇六年)二〇五頁。

³ 国立印刷局公式ホームページ「お札に関するよくある質問(回答)」
<http://www.npb.go.jp/ja/intro/faq/ans.htm#001> (二〇一二年九月一日、閲覧)

ちなみに、財務省公式ホームページ <http://www.mof.go.jp/currency/bill/issued/ks140802a.htm> には、「日本銀行券の改刷について(参考)」として、つぎのように記されている(二〇一二年九月一日、閲覧)。「一〇五千円 樋口一葉(ひぐちいちよう)【一八七二(明治五)年〜一八九六(明治一九)年】明治の小説家、歌人『たけくらべ』『大つこもり』『にこりえ』歌数四〇〇首を越える。」

⁴ 高橋修、三田村雅子、ハルオシラネ、松浦寿輝、兵藤裕己『座談会』新しい文学研究のために『文学』岩波書店、二〇〇二年夏、におけるハルオシラネ氏の発言(一六九頁)。

⁵ 同座談会、兵藤裕己氏の発言(一五六頁)。

⁶ 松下浩幸「戦後民主主義と樋口一葉―児童向け伝記物語の問題点をめぐって―」、前掲『論集樋口一葉IV』所収、二一九頁。

⁷ 同右。

⁸ 小田切進編「日本近代文学略年表」は、一八六八(明治元)年「白縫譚(高島藍泉)」から記述が始まる。女性作家として同年表に初登場するのは、一八八九(明治二二)年「婦女の鑑(木村曙)」。次いで、明治一八九〇(二三)年「小公女(バーネット、若松賤子訳)」。樋口一葉は一八九二(明治二五)年『うもれ木』、一八九三(明治二六)年『暁月夜』『雪の日』、一八九四(明治二七)年『やみ夜』『大つこもり』(同年に北田薄氷『三人やもめ』が登場)、一八九五(明治二八)年『たけくらべ』『にこりえ』『十三夜』、一八九六(明治二九)年『わかれ道』、一八九七(明治三〇)年『一葉全集』と合計一〇作品が記載されている。以降、一九〇一(明治三四)年『薄氷遺稿』、一九〇三(明治三六)年『忘れかたみ』(若松賤子遺稿)を除いて、一九一六(大正五)年『貧しき人々の群』(中条百合子)が登場するまで、女性作家は登場しない。その後は、一九四五(昭和二〇)年にいたるまで、中条(宮本)百合子(五回)、野上弥生子(二回)、平林たい子(三回)、佐多稲子(四回)、林芙美子(二回)、宇野千代(二回)岡本かの子(五回)が登場するが、戦後まで執筆活動をつづけた彼女たち女性作家にくらべて執筆期間がわずか数年に凝縮されている樋口一葉の作品が一〇点記載されていることは、特筆に価する。この年表においては、日本近代文学史における女性作家の嚆矢は事実上、樋口一葉と措定されていると考えて差し支えないであろう(日本近代文学館 小田切進編『日本近代文学大事典 机上版』講談社、一九八四年、一七四二―一八〇一頁)。

⁹ ハルオ・シラネ、鈴木登美編『創造された古典―カノン形成・国民国家・日本文学』新曜社、一

九九九年

¹⁰ 笹尾佳代『結ばれる一葉 メディアと作家イメージ』（双文社出版、二〇一二年）一三頁。

¹¹ 同右。

¹² 松下、前掲論文、二一九頁。

¹³ 以上、引用はすべて、同論文、二二〇頁。

¹⁴ 笹尾、前掲書、一一頁。

¹⁵ 明治新聞雑誌文庫、国立国会図書館に収蔵されていないため、『樋口一葉事典』二四頁から引用。

¹⁶ 以上、小平麻衣子『女が女を演じる 文学・欲望・消費』（新曜社、二〇〇八年）第五章「一葉」という抑圧装置―ポルノグラフィックな文壇アイドルとの攻防」一三七―八頁。

なお同章は、一葉日記が出版された明治四〇年代以降、「全くスキャンダラスではない」「一葉日記という振舞いは、プライヴァシーを持たない女性像を（自然）なものと認定する危険」（一五五―六頁）を惹起させ、その「プライヴァシーの読み取りを拒否する（一葉）の振舞いが、内面を持たない、より抑圧的な女性像を召還してしまふ」（二五八頁）結果を招くまでを分析した論考であり、示唆を受けた。

¹⁷ 同引用の前後文は以下の通り。「作者の意は婦徳の何物たるを充分弁知する婦人が残酷且つ放恣なる運命に弄ばれ自ら進んで淫猥なる醜窟に墮落し中心の狂悶焦慮を外面の笑（一字判読不明）放蕩に紛らし敢果なき生涯を仮装道徳家に嘲けらるゝ間に不幸なる最期を終るの惨劇を描かんとせしなるべし。何ぞ其立案の大胆不敵なるや、恐らくは狭小なる自己の範囲内のみ材料を選ぶを知る今の小説家が夢寝にも浮ばざりしものなるべし、偶々二三子が思起す事ありしにもせよ遂に筆を着るを難んぜしものなるべし」「『にこり江』の作者は此売淫婦に対して無量の同情を運ぶを惜しまざりし一事にて既にくゝ少からぬ感歎を受くるに足るべし。女性の身としては最も醜陋猥褻なる外皮に包まるゝ売淫婦なれば厭悪すること当然なるに、却て多涙なる同情を濯ぎしは縦令ひ全篇が多くの欠点を有つも猶ほ十分なる讚賞を払ふの価値あるべしと信ず。斯くの如きヒューマニチイに富める作家は今の男性作家中にも多くを求むるを得ざるなり。〔…〕男性作家の累々頭を並べて碌々たるにも係らず、女流作家頗る秀才に富めり。世人が女流の策なるが為に軽忽に視るなからん事を庶幾して擱筆す。』（魯庵生「一葉女史」『にこり江』『国民之友』第二六六号、一八九五〔明治二八〕年一〇月、六六一頁）

¹⁸ 『にこり江』は銘酒屋ときゝしもまことは麦とろなどいふ看板掛けたると同じ流儀の曖昧茶屋の女が事なりげによく書かれたれどわれは其よくの上に女性に似ずといふ語を置くことを忘るゝ能はず。』（正太夫「金剛杵」『めさまし草 まきの一』一八九六〔明治二九〕年一月、四頁）

¹⁹ 婦休庵「鷓鴣搔」、同雑誌『めさまし草 まきの一』、一五頁。

²⁰ 「四閨秀いづれはあれど、吾れは最も一葉を推す。〔…〕吾人はその『たけ競べ』に於て、初めて女史の筆のよく円熟し、想も亦奇峭にして、凡庸作家の亜流にあらざるべきを見たり。而して『たけくらべ』の稿猶未だ完を告げざるに、女史の名は今や文界に喧伝して鬚髯作家をして顔色無からしめんとす。』（無署名「一葉」『青年文』第三卷一号、一八九六〔明治二九〕年二月、四―五頁）

なお、以上と似たようなレトリックとして、「有髯家林に一叢の彩花を咲かしつゝありしもの」（小此木秀野「閨秀小説を読む」『女學雜誌』第四一八号、一八九六〔明治二九〕年一月、一〇頁）がある。

²¹ 無署名「時報」◎樋口一葉女史逝く『女學雜誌』第四三二号、一八九六〔明治二九〕年二月一日

²² ○日、五六〇頁。

「既に『濁江』には八斗の詩才を注ぎ。混々たる詩想は尽きずして、更に『たけくらべ』となり、妙一世を絶す。〔…〕天下の文士環視して瞠若たり。有髯男児將に愧殺せられんとす。〔…〕既に群小を離れ、優に大家と馳騁す。女史に同情の涙あり。筆々はれが為に動き。女史に奇骨の稜々たるあり、紛々たる群作家の追及し得べきものならんや。〔…〕女史が一生は短し。恰も流星の如し。然も芳名は泯びず、永く明治文学の史上に列せられて、『たけくらべ』の声誉遠く後世に及ばん。」（笹川臨風「一葉女史を吊ふ」『青年文』第四卷第五号、一八九六〔明治二九〕年二月、一八

八一—八九頁)

²³ 無署名「雑報」樋口一葉女史を悼む『文藝俱樂部』第二卷第十五編、一八九六〔明治二九〕年
²⁴ 一月、二三八頁。

²⁴ 注一七(魯庵生「一葉女史」に「江」)『国民之友』に同じ。

²⁵ 注二二(笹川臨風「一葉女史を吊ふ」『青年文』)に同じ。

²⁶ 大町桂月「一葉全集を読む」『帝国文学』第三卷第二号、一八九七〔明治三〇〕年二月、一一六
頁。

²⁷ 注二三(無署名「雑報」樋口一葉女史を悼む)『文藝俱樂部』に同じ。

²⁸ 平田由美『女性表現の明治史 樋口一葉以前』(岩波書店、一九九九年) 一八三頁。

²⁹ 同右。

³⁰ 同右。

³¹ 同書、一八四頁。

³² 同書、一八五頁。

³³ 脱天子・登仙坊・鐘礼舎「三人冗語 たけくらべ」『めきまし草 まきの四』一八九六〔明治二
九〕年四月、四八頁。

³⁴ 土井晚翠「一葉女史」『帝国文学』第二卷第十二号、一八九六〔明治二九〕年二月、一一八
頁。

³⁵ 無署名「雑録 一葉全集 再版」『智徳會雜誌』第四十一号、一八九七〔明治三〇〕年八月、三
三頁。

³⁶ 注二三(無署名「雑報」樋口一葉女史を悼む)『文藝俱樂部』に同じ。前後文は以下の通り。

「一たび浮世の『濁り江』に、其才筆を染め、人生無限の恨を寄せてより、爾来明治才媛の名日々
に高く、『十三夜』に、不遇の恋を写し、『たけくらべ』に、少女の果敢なき恋を描き、其想は、高
く人意の表に出で、其文は、優に明治詩界の重きを為し、巾幗者流の文豪として許されたる一葉女
史樋口夏子の君は〔…〕其年十七にして父を喪ひ、爾後は、老母と幼妹とを、わが身一人にして保
育し、具に人生幾許の辛酸を嘗め、なかく読書問學の暇とてはなく、小学すらも卒業せず、

〔…〕曰く、『妾は不幸にして処女時代を有たず、常に家計のことに齷齪して、妾の半生は殆ど涙の
み、唯慈悲深き母をして、聊かも心を安んぜしむるものなく反つて痛恨を増しむるを悲む』と。斯
く北堂に孝心深かりし人として、其病に悩めるうちも、絶えず面に微笑を帯て、苦悶の状を示さず

〔…〕女史が、其心華を咲しめし著作を見れば、総て社会逆境の人に向つて同情を表するが為めの
ものにして読者一点の靈心、知らずく何物かに感動するある所以は、唯之れを以てのみ。」(二三
八頁)

³⁷ 注二六(大町桂月「一葉全集を読む」『帝国文学』)に同じ。前後文は以下の通り。「明治廿五年
より明治廿九年まで、僅々四年の間に、十八九篇の小説、志かも精練の文字あり。女性の精勤既に
人に絶したるを見るべし」〔…〕「一葉全集の中にて、特に人の注目を惹くは、すべて女子を主人公と
せること也」〔…〕「すべて逆境を写せること也。たとへば、薄命、不幸、墮落、かなはぬ恋、怨恨、
悲痛の人物事物を材料とせり。またその人物の生活は、熱情ありて、意志強く、やさしきが中に、
一種凜として磨すべからざる気概あること、各篇を通じて、ほゞ一致せる所なるべし。その小説の
人物の中には、多少自家の佛も現はれ居るなるべし。」(一一六頁)

³⁸ 「女史は其名の世間へ高まつてからは勿論、其前から殆ど独力で家を支えて居た、婦人の手一つ
で家を支えんとするは随分の重荷故女史も少なからず苦しんだに違いない」〔…〕「其悲しむべき閱歴
其物が大に女史の才を養ふに補ひがあつたのである」〔…〕「負けぬ気の、物に耐へる力ある、冷淡な
らざる——然しながら人を腹の中で批評し得ぬ程馬鹿でない人である事は知られた」(幸田露伴「家
庭 故樋口一葉女史」『成功』第五卷二号、一九〇四〔明治三七〕年七月、三三頁)

³⁹ 戸川安宅(残花)「樋口なつ子ぬしをいたむ」『女學雜誌』第四三二号、一八九六〔明治二九〕
年一月一〇日。前後文は以下の通り。「廿三四とか聞くに世帯くづしの女房のごとく、浮世の波の
辛きも苦きも嘗め尽くしに似たり、さりとて起居挙動のおとなしきは深閨の処女のごとし、しみ
かくと語れば万事を横断する意気あるともうかゞはれ凜然たる心のふしありき」〔…〕「みだりに名あ
る人の家にゆくもいかゞと終に訪はれしこともなし」〔…〕「母を養ひ妹を育て、まだうら若き身をみ

て世渡りの辛苦をなめ」(三四—三五頁)

⁴⁰ 生前の一葉に最も近かった人物の一人、馬場孤蝶も次のように述べている。「若くして死んだ此の人が随分苦しい世の中を渡つて来たが、矢張り其の名は将来何時迄も消えないで、『…』一葉全集を御読みになることに、何等かの御興味を御持ち下さるならば、私の本懐之に過ぎぬのであります。」(樋口一葉に就いて『雄弁』第四卷第六号、一九一三〔大正二〕年六月、一六一—一六二頁)

⁴¹ 代表的論攷として、湯地孝『樋口一葉論』(至文堂、大正一五年)、和田芳恵『一葉の日記』(筑摩書房、一九五六年)、塩田良平『樋口一葉』(吉川弘文館、一九六〇年)、村松定孝『評伝樋口一葉』《作品と作家研究》(実業之日本社、一九五九年)、岡保生『薄倖の才媛 樋口一葉』(新典社、一九八二年)など。

⁴² 小川昌子「変貌する「一葉」——明治三十〜四十年代における「一葉」語りの諸相——」『日本近代文学』二〇〇二年一〇月、一九頁。

⁴³ 同論文、一八頁。同論文、二七頁、注釈によれば、この指摘は、「宗像和重『一葉全集』という書物」(『文学』第10巻・第1号、平成11年・冬)による。

⁴⁴ 同論文、一九頁。

⁴⁵ 同論文、二四頁。

⁴⁶ 同右。

⁴⁷ 同論文、二五頁。

⁴⁸ 同右。

⁴⁹ 同論文、一七頁。

⁵⁰ 同右。

⁵¹ 同右。

⁵² 『みづの上』一八九六〔明治二九〕年二月一〇日。塩田良平・和田芳恵・樋口悦編纂『樋口一葉全集 第三卷(上)』筑摩書房、一九七六年、所収。以後、『樋口一葉全集』巻号のみ記す。

⁵³ 敷禎子、佐伯順子、菅聡子「座談会 樋口一葉——これまでの」『国文学解釈と鑑賞』二〇〇三年五月号における菅聡子氏の発言(一二頁)。以降、「座談会 樋口一葉」と記す。

⁵⁴ 関礼子「闘う「父の娘」——一葉テキストの生成」、江種満子・漆田和代編『女が読む日本近代文学』(新曜社、一九九二年)所収、三四頁。

⁵⁵ 前掲「座談会 樋口一葉」における菅聡子氏の発言(一二頁)。

⁵⁶ 「新フェミニズム批評の会」編『樋口一葉を読みなおす』(学林書林、一九九四年)タイトル。

⁵⁷ 前掲「座談会 樋口一葉」における佐伯順子氏の発言(一四頁)。

⁵⁸ 同右。ただし佐伯氏は同時に、「そうは申しながらも、まだまだジェンダー論やフェミニズムの視点から言える事も少なからず残されているのではないか」(二四頁)とも指摘する。

⁵⁹ 西川祐子『私語り樋口一葉』(リブポート、一九九二年)。

⁶⁰ 瀬戸内晴美「うらむらさき(一葉をうけて)」『使者』七、一九八〇年一〇月、所収。松本清張「正大夫の舌——斎藤緑雨伝ノート——」『別冊 文藝春秋』一九七二年九月号、所収。近藤富枝

⁶¹ 「たけくらべ殺人事件」『宵待草殺人事件』(講談社、一九八七年)所収。

⁶² 高田知波「近代文学と「文化資源」——一葉研究を例として——」『国語と国文学』《文化資源》としての国文学』東京大学国語国文学会、二〇〇〇年十一月特集号、一二三頁。

⁶³ 同論文、一二四頁。

⁶⁴ 同論文、一二三頁。

⁶⁵ 同論文、一二五—一二六頁。

⁶⁶ 同論文、一二六頁。

⁶⁷ 同論文、一二四頁。

⁶⁸ 野口碩「キイ・ワード事典 漂う舟(彷徨)」『樋口一葉事典』三八六—三八七頁。

⁶⁹ 『につ記』一八九三〔明治二六〕年七月一二日。同書、三八六頁から引用。

未完成作品「棚なし小舟(甲種)」一八九一〔明治二四〕年一〇月試作。同右から引用。

⁷⁰ 『花』もり』、『文學界』第一四—一六号、一八九四〔明治二七〕年二月二八日—四月三〇日、初出、同右から引用。

⁷¹ 野口碩「キイ・ワード事典 舟」同書（『樋口一葉事典』、三九二—三九三頁）。

⁷² 伊東夏子宛書簡46、一八九四〔明治二七〕年四月末。同書、三九二頁から引用。

⁷³ 前田、前掲書（『新潮日本文学アルバム3 樋口一葉』）八九頁。

⁷⁴ 丸山眞男『忠誠と反逆 転形期日本の精神史的位相』（筑摩書房、一九九二年）六〇頁。

⁷⁵ 安丸良夫『近代天皇像の形成』（岩波書店、一九九二年）二七一頁。同書によれば、同規定は

「C・グラック『近代日本の神話』の結論的部分を私の論点にひきつけて〔…〕要約したもの」（二七二頁）。

⁷⁶ 同右。

⁷⁷ 前掲「座談会 樋口一葉」における菅聡子氏の発言（一五頁）。たとえば、平岡敏夫「一葉とその時代—風俗と世相—『国文学解釈と鑑賞 特集 夭折のロマン 樋口一葉』一九七四年一月号、四六—五二頁、坂本政親「一葉と同時代」『国文学解釈と鑑賞 特集樋口一葉の世界』一九八六年三月、一四—一四七頁などが挙げられよう。

⁷⁸ 前掲「座談会 樋口一葉」における菅聡子氏の発言（一五頁）。

⁷⁹ 前田、前掲書（『新潮日本文学アルバム3 樋口一葉』）、八九頁。

⁸⁰ 藪禎子「一葉文学——「世」を視座として」『国文学解釈と鑑賞』二〇〇三年五月号、所収。ここで氏は「心的抑圧装置としての「世の中」が、国家よりもずっと根深く日本人の生活の中に浸透し、その思考と行動の型を規制している事実には、一葉は手探りでぶつかって行った」（三六頁）と正しく指摘している。

⁸¹ 前掲「座談会 樋口一葉」における藪禎子氏の発言（三一頁）。

⁸² 丸山、前掲書、一〇五頁。

⁸³ 前掲「座談会 樋口一葉」における佐伯順子氏の発言（一四頁）。

⁸⁴ 竹村和子『思考のフロンティア フェミニズム』（岩波書店、二〇〇〇年）八〇頁。

⁸⁵ 同右。

⁸⁶ 同右。

⁸⁷ ジョナサン・カラー 荒木映子、富山太佳夫訳『文学理論』（岩波書店、二〇〇三年）一七九頁。

第一章 「片々の金光」——『うもれ木』における制度と逸脱

一．はじめに

不透明な文体による制度からの逸脱の物語。概括すれば、それが樋口一葉のテキストの特質と言えるだろう。初期習作『うもれ木』(初出『都の花』一八九二〔明治二五〕年)にも、既にそれは顕著である。テクスト冒頭から登場する「薩摩金欄手」を装飾する歴史画は、国粹主義の台頭期において陶磁器が、単なる輸出(工芸品)から日本美術の精華を表象する(芸術品)へと再定義されたことを物語る。つまり歴史画の意匠の選択は、国威発揚の一端を担う意志の発現であり、熾烈な功名心の発露にほかならない。そのように立身出世主義を疑いなく内面化しているかのような主人公籙三だが、語り手は彼の「名譽を願ふ心」を「心鏡くもり」と批判し、物語終局では籙三じしんも、みずからの「名譽を願ふ心」すなわち立身出世欲を否定し、(日本美術)という国家制度の担い手であることから逸脱してしまう。

忠君愛国思想と立身出世主義が不可分に結ばれた明治二〇年代において、異色のプロットをそなえたテクストとして『うもれ木』を再読したい。

二．反オリエンタリズムとしての歴史画

樋口一葉の実質的な文壇登場作『うもれ木』が、露伴の芸道小説、とりわけ『風流伝』(一八八九〔明治二〇年〕)に多くを倣ったテクストであることは、すでに多くの論攷において指摘されている²。その模倣の跡が顕著なのはテクストの導入部分であるが、両作のそこに共通して書きつけられた内容とは、「爰日本美術國に生れながら」(『風流伝』)、「美術奨励の今日うまれ合はせながら」(『うもれ木』)とあるように、西欧近代国家に比肩するための文化戦略として制度化された「美術」の振興ぶりであった。だが、「美術」の隆盛という趨勢そのものに変化はないものの、『風流伝』の珠運と『うもれ木』の籙三が身をおく「美術」環境は同一ではない。北沢憲昭『眼の神殿』に詳しく述べられているように³、国家アイデンティティを対外的に顕示するという近代日本の喫緊の要請から設けられたのが、この(制度としての日本美術)であるが、その制度内容は年代ごとに変遷しているからである。

一九世紀後半の西欧を席捲したジャポニズムを好機に、明治一〇年代には、その精巧な装飾技術が西欧で高く評価された漆器や陶磁器などの工芸品⁴が、外貨獲得のための重要輸出品として数多く海を渡ったことは、よく知られている事実であろう。当初、それら工芸品は新興国日本にとって富国の使命を帯びた産業品に等しかったわけだが、佐藤道信氏によれば、一八八七〔明治二〇〕年頃からは、悲願であった条約改正実現のために、それら工芸品のうち一部は(美術工芸品)と名称を替え、一等国の文化にふさわしい芸術品としての役割を担うこととなる⁵。

まさしく『うもれ木』の物語内時間に、日本美術をめぐる対外政策は転換点を迎えていたのであり、それまでの万博では産業館に陳列されていた工芸品が、籙三が出品をもくろむ「コロンプス博覧会」(一八九三〔明治二六〕年)で初めて美術館に展示されたという事実は、「日本美術」を「美術」として提示する⁶という、この新外交政策がみごと成功を収めたことを物語っている。

とはいえ、殖産興業の一環としての工芸品の輸出が急激に減少したわけではなく、日本は起立工商会社をはじめとした直輸出会社を通じて、当時エステティックムーブメントに沸いていたアメリカおよび欧州の需要に応じつつあった。たとえば『うもれ木』初出同年に発足した大日本窯業協会は、主人公の籟三が「十を以て一に更ふる粗画濫筆」「絵のぐ雑巾の汚れ同様」と嘆いたような粗悪品の流出による輸出の低迷を打開し、陶磁器がふたたび富国に貢献する輸出品目となるよう、その品質の向上をはかるために組織化された団体であった¹⁰。

すなわち『うもれ木』の物語内時間は、〈経済戦略としての輸出奨励〉と、脱亜入欧、国威発揚が託された〈政治戦略としての美術品の提示〉という¹¹。陶磁器をめぐる新旧のイデオロギーが拮抗しつつも共存する時期にあたっていたわけである。

だとすれば、依然として活況を呈している輸出市場を背景に、もっぱら大量生産にいそしむ「此處東京の地にばかり二百に余る〔薩摩焼の〕画工」たちはみな、旧来型の経済戦略に拠るばかりなのに對し、ただ一人そのありさまを「無明の夢まだ覚めもせず」と非難し「天晴道の奥を極めて、萬里海外の青眼玉に、日本固有の技藝の妙、見せつけくれんの腸もつものなく」と慷慨する籟三だけが、新規の政治戦略に与しようとしてしていることになる。こうした籟三の先駆性をなにより饒舌に語っているのが、テキスト冒頭に始まり、要所所でも詳細な説明が施される、彼自身の描く陶画なのである。先行研究において論じられることのなかった、その精緻な意匠について分析を試みたい。

「濃淡よそほひなす彩色の妙」と、金箔を多用した豪華な作風で知られるはずの薩摩錦手が、いまや大量生産によって安手の素焼（今戸焼）同然になるなかで、籟三の筆が壮麗かつ繊細に形象するのが、「大和人物漢人物」「神代様うづたかく」「武者の鎧のおどし」「殿上人の装束の模様」「東大寺模様」「金銀閣寺」「湊川稲村が崎」などの歴史画の意匠である。フェノロサ、岡倉天心、外山正一らによって説かれたように¹²、明治二〇年代からの国粹主義の台頭によって、日本美術においてこの歴史画こそが「国民意識の統合と国体思想の表象として¹³」重要視されてゆくのであり、それは国史の絵解きとしての機能を担いはじめていたのである¹⁴。

「湊川稲村が崎」とは天皇の忠臣楠正成、新田義貞のそれぞれの合戦にちなむ故事¹⁵。小堀鞆音も好んで描いたという「武者の鎧のおどし」は、「忠君を軸に武士道精神をすりかえた尊王愛国の主題¹⁶」のひとつである。一連の「神代様うづたかく」「大和人物漢人物」「東大寺模様」「殿上人の装束の模様」も、神話に語られる建国創業¹⁷、律令国家成立と天平文化の繁栄¹⁸、典雅な中世宮廷世界をそれぞれ具象化したものであろう。「金銀閣寺」は、室町幕府時代の所産であるという政治性は希釈され、瀟洒な日本仏教建築の精髓を体现する図像として選ばれたにちがいない。同じように「五百羅漢十六善神」もまた、仏教文化の開花を日本史の一部であるとして造形されたモチーフである¹⁹。

ちなみにテキストには、それら歴史画の意匠が他からの注文によることを示す記述は見当たらない。むしろ、「注文は龍田川とか、〔…〕先師の言付より外は他人の意見いれたこと無き籟三、身貧に迫つて意を曲ぐるなど嫌やな事なり」とある。

同僚画工からすれば、その奇矯ともいえる「頑物」ぶりゆえに「嗤笑ひ」の対象でしかなく、みずからも「埋もるゝ身のはて」と嘆息するように、時流からもっとも遠く隔たっているようにみなされる籟三は、しかしその創作において、明治二〇年代から三〇年代にかけて美術史家²⁰らが強力に推奨した歴史画——その本流としての仏教画、武士画、神話画という三つの画題²¹を、驚くべき周知さで押さえているのである。

しかも「神代様うづたかく」とある神話画は、西洋対日本という対抗的歴史観の浮上を反映し、明治二〇年代後半から主として三〇年代に流行を迎えたのだから²¹、その画壇潮流に対する反応はきわめて迅速であったとさえ言えよう。むしろそれらの画題は、天皇親政を過去から未来へ連続とつづく正史として描きあげ、それを梃子に内には国民意識の統合を、外には国体の顕揚を、もつとも印象的なかたちでアピールするために要請されたテーマにほかならなかった。

語り手が、その第一声から語りあげる陶画のひとつひとつは、他の画工が欧米の抱くオリエンタリズムの欲望にひたすら忠実な工芸職人であるのとは対照的に、ひとり籙三だけが大日本帝國の抱く欲望——天皇親政を可視化させる「代替²²」^{representatio}としての歴史画の要求——に沿った美術家を志していたことを、映し出しているのである。

従来、籙三は、「今は我が国固有の技芸の妙を發揮する時代ではなく全て金銭の威力で動いていくのが世の常と歎きつつ、時代に逆らい赤貧の生活を甘受する²³」人物として、すなわち題名の出典「なとり川瀬々のうもれ木あらはれはいかにせんとか逢ミ初けん」〔古今和歌集〕卷一三二題しらず²⁴にふさわしい、時勢から取り残された者として理解されてきた。だがむしろ彼は、日本美術をめぐる趨勢を他を圧する速さでさきがけていたのであり、「業世と合わず、我れと埋もるゝ」境涯は、むしろ、そのきわだった先取性ゆえと考えるべきなのである。

こうした籙三の創作における群を抜いた先覚性は、いったい何を抛りどころとして獲得されたものなのだろうか。「吉原洲崎のちりからたつぼう」の翌朝に「口三味線の筆拍子に、なぐり書き」するのを腕の証しとする当時の画工世界にあつて、ひときわ突出したその先駆性は、何によつてもたらされたものなのか。

三、名利の写し絵

籙三は、何をよすがとして歴史画の中心画題をかくまで完璧に押さえたのか。それは、彼自身の独白「我が心満足するほどの物つくり出して、我れ入江籙三変物の名を、陶器歴史に残さんずもの」に明らかのように、強烈な創作意欲と不可分に絡み合った、名利への野心にほかならない。

右の発話に限らず、テクストにおいて籙三の心中がもつとも直截的に語られる箇所(第一回、第三回、第五回、終章)では、陶器画工として「磨きし多年の筆」を存分に揮つて至高の逸品をつくりあげ、斯界に名をとどめることが悲願であり、それは「千萬の黄金つんで来るとも換へぬ心」からの切望である。と、激切な調子で幾度も繰り返されている。西鶴に学んだとも、露伴を模倣したともいわれる、その雅俗折衷文「恨みは是れぞ是れ骨までの恨みぞと、取りしむる右の腕手首ぶるく」と顛へて、煮えよ腸、熱涙のみ込みつゝ悲憤の聲は現はさねど²⁵——接続詞を極度に排し、体言止と対句法を多用した、一気に畳みかけるような切迫した文体が、こうした籙三の野心の激しさをいっそう際立たせる²⁵。

しかしながら、語り手が「兎角は金の世の中」「何れ金が敵の世の中」と呪詛するように、この頃から自由放任主義経済が日本を覆いはじめ、各種の職人集団も急速に解体してゆき²⁶、「競争又競争、絶えて同業者の間に徳義存在せざらんとす²⁷」といった「富資の増殖に汲々たる時代²⁸」が到来する。

「徳義の廢頽人情の腐敗、是れを憂ひ彼れを歎けど、道に立つ人大方は、濁流汚溝に身を投じて、

爾かも汚れを知らぬ輩、味方少なく仇は多し」とは、こうした時勢を見抜き、いわば率先してその「濁流汚溝」に身を投じた辰雄が放つてみせる皮肉な一節なのだが、そうした時流に抗い、かたくなに「日本固有の技藝の妙」を探求する籙三には、「廉価粗物」以外の注文は寄せられない。「月に恨み風に憤り、天下を悪魔の巢窟と見て」などの、やや大仰ともいえる読本風あるいは壮士演説調の語りは、その野心の昂ぶりに反して、それが叶う可能性がないことを自覚する籙三の、やり場のない憤懣の激しさを表現する。

そのように「愚直」「直行」ゆえに「貧より外に伴侶なき身」をかこつ籙三だが、その実力は「生中陶画の粹と呼ばれし、先師の画工場に一と称へられて、我れは売らねど自からは人も知る名」という際立ったものであり、まして時代は「あはれ薩摩といへば鯉節さへ幅のきく世」である。明治画壇における美術家の序列は、近世期における身分階級に加えて、藩閥の力学によっても規定されたといわれるが²⁹、旧来、薩摩焼陶工は士族として処遇されていたという出自に加えて³⁰、薩閥勢力を後ろ楯に有することになる籙三は³¹、じつは美術界における権力中枢に近接しうる可能性を手中にしていると言える³²。

にもかかわらず、光明の失せた「底しらずの境界」を忍従せざるをえない籙三とは、近代日本がその「濁流汚溝」としての様相をあらわにした明治二〇年代中葉の格差社会において、劣位性と優位性を極端なカタチで併せもつ両義的な存在なのであり、そうであればこそ、その功名心は苛烈さをいや増すのである。「我れ入江籙三変物の名を、陶器歴史に残さんずもの」とは、そうした「強者弱者を凌轢³³」し「軽薄浮佻を才子と呼ぶ明治の代」に彼が突きつけた、怨嗟のこもった挑発の言葉にほかならない。

当時「名を、陶器歴史に残」す機会を得るとは、「萬国の陶器画工」の手になる傑作が一堂に集められる博覧会——テキストに即していえば「コロンブス博覧会」へ出品することにはかならなかった。「友誼的競進の趣意に基き世界の諸民族連結して各国における美術工芸工業農事の粹を此地に於て相比較せん事を期す³⁴」とうたわれた同博覧会とは、植民地主義に包摂された各国が、友好の装いを借りながら、自国の優越性を賭けて、かつてないスケール³⁵で繰り広げられた政治的戦闘の場であり、臨時博覧会事務局ひいては明治政府もまた、大日本帝國の威光が表現されたきわめつけの美術品を提出すべく選考にあたっていた。作品水準の向上をはかるために、制作者相互間に競争原理を導入する褒賞制度も設けられ³⁶、受賞者には巷間の工芸職人としてでなく、当代一流の「高等美術家³⁷」として国家的榮譽が授けられるための手筈も整えられていたのである。ちなみに、一葉自身も印象深く日記に書きとめているように³⁸、実際のコロンブス博覧会では、日本から小松宮が赴き、受賞者である高村光雲や橋本雅邦らを言祝いでいる。

威風堂々とした「台附龍耳の花瓶一对」の陶面を覆い尽くす、「湊川稲村が崎」「東大寺」「金銀閣寺」などの豪壮な歴史画。それは、「生中陶画の粹と呼ばれ」た「先師の画工場」随一の腕を誇り、名利への一途な野心をかかえ、博覧会への出展計画をあたため続けてきた籙三が、博覧会事務局の求める作品傾向——「本邦固有ノ神趣ヲ失ハサルモノ³⁹」を、戦略性をもって学習した結果であることは明白である。おそらく籙三は、菊池容斎の『前賢故実』（二八六八〔明治元〕年）全一〇巻⁴⁰をつぶさに習得した上で、同時代の著名な歴史画「和氣清磨奏神教図」「武者試鵠図」等の成果を撰取し⁴¹、「季鍊月緞の筆、経営慘憺の意匠」を独自に編み出したのであろう。その擬古性みなぎる勇壮な歴史画の数々こそ、「入れられぬ世」「世の中あき盲目ども」に報いようとする籙三の、烈しい功名心の写

し絵にほかならない。

四・分裂と揺らぎ

先行研究では、上述してきたような「一見私利私欲と混同されがちな彼の「名誉」欲というもの⁴²」は「当時の〈国家〉の要請に合致したものであ⁴³」り、籙三は「〈国家〉の「名誉」に結びついた自己の「名誉」を「追求⁴⁴」することによって「〈国利国益〉に結びつく仕事をこそ標榜した⁴⁵」(橋本めぐみ氏)と指摘されている。なるほど竹内洋氏が述べたように、明治日本においては、名誉欲であれ富裕への憧憬であれ、個人が抱く立身出世へのあくなき欲望は「国の富強になるとして積極的な意味があたえられた⁴⁶」のであり、同指摘に異議をはさむ余地はない。

その指摘を敷衍していえば、進行する自由競争社会のなかで「社会的価値序列の低い下位ないし周縁におかれた(と意識した)者のなかからは、自らの劣位に国家的価値を付与し、自らを国家と直結させる回路が拓かれ⁴⁷」ていったのであり、まさしく籙三の言行も、牧原憲夫氏が明らかにした、こうした近代日本における国民化のメカニズム——「劣位ゆえの国民化⁴⁸」を正確になぞっているといえるよう。

だが、その先の問題としてここで掲げたいのは、果たしてテキストは籙三を、社会ないし時代の正確な鏡像として造形することだけで物語を完結させているのか、という問いである。つまり籙三は、自身の功名心が「大日本帝國の名誉」に直結することに十分自覚的であったとしても、語り手は、そして実は籙三じしんも、その功名心自体を全的に肯定していたのであろうか。以下の語りを注意深く再読してみたい。

歳十三の暁より、絵筆とり初めて十六年、一心斯の道に入江籙三、富貴を浮雲の空しと見れど、
猶風前の塵一つ、名誉を願ふ心拂ひがたく、三寸の胸中欲火つねに燃えて、高く掛るべき心鏡く
もりといふは是れのみなり

籙三の内的独白だけでほぼ構成されているテキスト「第一回」、主として「清正公」前での辰雄の所為が叙事された「第二回」に接続された「第三回」冒頭のこの箇所は、語り手の存在があらわになり、籙三に対する語り手の意識がテキスト全体を通してもっとも明確に露出している、重要部分である。

ここで語り手は、陶器画工としての籙三の来し方をめぐって、「一心斯の道に入江籙三」——彼が斯「道」に「入」って以来、その「道」にひたすら没頭没「入」してきたことを、その名前「入」江と掛けることによって、印象的に説明している。次いで語り手は、そのように画工として懸命に精進を重ねる彼が「富貴を浮雲の空しと見れど」——「雲」と「空」と「見」という縁語を用い、(ふうき)と(ふうん⁴⁹)、という頭韻も踏み、さらに「雲」「うん」に〈運〉を掛けて、金銭的成功を、「浮雲」のように「空し」く移ろいやすいものとして、あるいは一時の〈運〉と見なして、むしろ否定さえしていることを強調する。

だが、と、語り手はこれまでの同調的な口ぶりを変える。「猶風前の塵一つ、名誉を願ふ心拂ひがたく」——「富貴」を『平家物語』の語りさながら「風前の塵」のように無常と考える籙三にも、猶

どうしても「拂ひがた」い「塵」が一つ残されている。「名誉を願ふ心」であり、その「三寸の胸に
つねに燃え」て消えることのない「欲火」は、高潔、無私を理想として「高く掛くるべき心鏡」の「く
もり」である――。

ここで語り手は、「名誉を願ふ心」を「心鏡くもり」という言葉で形容しているが、この言葉には
「名誉」もまた「くもり」、すなわち「富貴」と同様、「浮雲」のように「空しくく無常であるという
意が込められているとも考えられよう。名利とはそのように「空」ろなものであるにもかかわらず、
籟三の心のうちには、その名利への「欲火」が業火のように激しく――「風前」と「欲火」が縁語的
に組み合わされることによって、その激しさが強調されているよう――燃えさかっているさまを、語り
手は批判的に語っているのである。

見たように、この短い語りのなかには、掛詞や縁語といった伝統的な修辭法が多用されている。馬
琴の読本や西鶴の浮世草子にみられる「七五調⁵⁰」や体言止めが踏襲されているさまも、容易に確
認することができる。つまり、語り手は、近世期末までに長い時間をかけて培われてきた和文の伝統
的な表現技法や文体にのっとりて籟三をめぐる語りを展開しているわけだが、こうした修辭の使用
や、音読を想定した「肉声⁵¹」的な語り方は、それをあやつる語り手という存在とその意識のありよ
うを、明瞭に浮び上がらせることはいままでもない。『たけくらべ』に「こりえ」の語り手が「作中人
物に癒着的な半話者⁵²」であることは夙に亀井秀雄氏によって指摘されているが、この語りにおい
て明らかになるのも、主人公籟三の「富貴」に拘泥しない心に賛同し、「名誉を願ふ心」をよこしま
な「欲火」、心の「塵」汚れ、「心鏡くもり」と手厳しく批判してやまない、あるいは諸行にもれず「名
誉」もまた無常と観じている、語り手の存在とその意識、その倫理観なのだ。

だが語り手は、籟三に向けたそのような厳しいまなざしを、続く場面において、次のように変容さ
せていることに注意しなければならない。それは、「三寸の胸中欲火つねに燃えて」いるにもかかわ
らず、「さればとて世に媚び、人に媚ること、生をかへぬ限りならぬ質」の自身が甘んじなければな
らない不遇にたいする憤懣を、「見をれ此腕なにが住むか、一飛得意の暁にはと、人も聞かぬ大言は
きて、纒かに」「冷やす」籟三が、ある朝、その鬱憤を払いのけるかのように、亡師の「寺参り」に
出かける場面である。

寝ぬに明けたる或る朝、おく庭草の露を見て亡師のことふツと思ひ出し、俄かに寺参り仕度な
り、垣根の夏菊無造作に折りとつて、お蝶が暫時と止むるも聞かず、朝飯まへに家を出けり(…)
がらりざらりと百足下駄に力を入れて、纏はる片裾うるさしと、捲くり上ぐるや空脛あらはに、
何の見得もなく、身は小男の面ざし醜くからねど、色黒々と骨だちて、高き鼻しまりし口、眼ざ
しぎろりと青く凄く、沈鬱の症何処か淋しく、紺薩の古手に白兵児の姿、懷中に建白書相応なれ
ど、右手に持つ夏菊の花の色、流石にやさしき処も見えけり

ここでは、先師への恩を忘れることなく律儀に掃苔におもむく籟三の風貌が語られているわけだ
が、語り手は、ひたむきに画道に精進しているにもかかわらず、「業世と合はず、我れと埋もるゝ」
境涯から抜け出すことのできない薄運を恨む、その「沈鬱」の面差しを、「何処か淋しく」と語って
いる。板の切れ端に藁の緒をすげただけの粗末きわまりない「百足下駄」を履き、みすばらしい「紺
薩の古手に白兵児」をつけた、「何の見得もな」い、そのあまりに懸命で哀しい姿が、「無造作に折り

とつた「夏菊」の「やさしい」「花の色」に喩えられているのは、このとき語り手が籙三に、まぎれもなく憐憫のまなざしを注いでいるからにほかならない。いったんは籙三の「名誉を願ふ心」を難じたものの、かくまでも一途に画道に専心し、名を挙げ報国することだけを切望してやまない彼の「淋しき」さまに寄り添う方向へと、語り手は微妙にその立つ位置を移しているのである。

そのような語り手は、つづく場面では、籙三に限りなく同化し、みずからを彼の本意を伝えるための透明な媒介のような存在に化してしまふ。だが、むしろそのことによつて、籙三の心の真のありよう、その美点が明らかにされることに注意しなければならぬだろう。以下の語りである。

心こつて見る目には、映るものも映る物も皆その色、細づくりの格子戸まへに、米澤数寄屋の肌つき美しくしき人、黒襦子の帯腰つきすつきりとして、芙蓉の面に淡彩の工合、楊柳の髪に根がけの好み、扱も美かな扱も美かな、此美にすさむ心がけを我が陶画の上に移して、共に協力の友を得たしと、茫然自失ながめ入れれば薄気味の悪るき人と、逃こまれて我れながら、取りとめ無き考へ馬鹿らしく、振むきもせず又五六歩、三歳ばかりの男の子のちよろくと馳せ出しが、袖なし浴衣の模様は何、籬に菊の崩し形か、夫れよ今度の香炉にあの書き廻しも面白かるべし

透綾をまとつた艶麗な女性の粹美から、あどけない幼児に着せ掛けられた浴衣の個性的な絵柄まで、ほんの数歩のあゆみの間に目に映じた美のわずかな徴にも心底から感嘆し、その美を陶画に写すことしか念頭にない、籙三の心の真のありよう——「美にすさむ心がけ」が、ここで初めて提示される。「すさむ」とは、荒む・進む・遊ぶの漢字表記がしめすように多義的な語ではあるが、同時代においてそれは、「心ノ荒ミニ賞玩ス⁵³」(大槻文彦『言海 第三冊』一八九〇〔明治二三〕年)と定義されている。心に湧き上がる勢いに任せてはなはだしく愛する、とても換言できようか。

そのようにはなはだしく、奇矯なまでに強烈に美を愛し、その美を「陶画の上に移し」たいと希う、いわば純粹無条件な美へのあこがれと表現欲が籙三のうちでは先ず存在し、「名誉」はその達成結果として願望されるのであつて、決してその逆ではないことが、ここで明示されているのである。

とすれば、以降の物語内容であるところの、「大日本帝國の名誉」を示威する「コロンブス博覧会」にふさわしい傑作美術品の完成が——すなわち「名誉を願ふ心」の成就が、最愛の妹の「不幸の家出」を招来したに他ならなかつたことを知つた籙三が、テキスト結末でつぎのように内言するのも、当然であつたといえるだろう。

生中陶画の粹と呼ばれし、先師の画工場に一と称へられて、我れは売らねど自からは人も知る名、貧ゆゑうつもるゝ事口惜しの念、我れ潔白の心に沸きて、願ふまじき名誉ねがひしは何故
「…」ゆるすまじきお蝶、不義の人にゆるせしは何故、汝れ汝れ此腕此藝「…」磨きし多年の筆故に最愛の妹ころさするか「…」我れ君子の道は知らねど、受けし恵みの泰山蒼海、無念骨髄に徹れど恩は恩なり「…」思へば恨らみは我れにあり、腕にあり藝にあり此花瓶にあり

「名誉を願ふ心」だけを熾烈に求めていたのであれば、つまり辰雄や「徳義を一つの名誉と心得る」「貴顕紳商」のように功利のみが目的化されていたのであれば、この内言の直後にある心中思惟——「見れば見れば月明りに、浮きて見える金銀閣寺、砂子一つ筋一本、心をこめぬ処もなく、まして廻

ぐりの金なし地、嗚呼幾年の苦の名残、描きも描きたり我れながら、天晴斯道の妙の妙「…」見よや海外の青眼玉、来たれ萬國の陶器画工、日本帝國の一臣民、入江籟三自まんの筆と、心に誇りし満足の品、これ何として碎かるべき是れ何として碎かるべき「…」お蝶ふたゝび帰りもせば、辰雄に邪心の無くも有らば、此品保存も成るべきを——にしたがって、これほどまでに精力を傾注した作品をそのまま「保存」し、博覧会に出品する道を、逡巡しながらも籟三は選択するはずである。そうしなければ、「濁流汚溝に身を投じて、爾かも汚れを知らぬ輩」との烈しい競争のなかで「名誉」を得ることは不可能であるからだ。

だが籟三はこのとき、「磨きし多年の筆故に、最愛の妹ころさするか、ねりし経営惨憺の苦は、汚濁を我が身に染みこませしか——傑作美術品を制作したいという熱望と力行が、われしらず、かけがえない妹を死に至らしめたことへの激しい後悔と、その畢生の大作を「汚」れた資金によって完成させてしまったことへの慙愧との、二重の無念に囚われている。

そのうえで、すべての責任を、「奸悪」を企てた張本人である稀代の悪役辰雄ではなく、みずからに帰し「思へば恨らみは我れにあり、腕にあり藝にあり此花瓶にあり」、「名誉を願ふ心」はもとより、みずからの天賦の才能も、「美にすさむ心がけ」というそれ自体は何ら邪心のない美への憧憬すらも全的に否定し、あらためて辰雄への「恩」を『史記』の一節を引いて確認する籟三は、ここで先の語り手の批判と同じく、「名誉」を「願ふまじき」ものとして語るに至るわけである——「貧ゆゑうづもるゝ事口惜しの念、我れ潔白の心に沸きて、願ふまじき名誉ねがひしは何故」。

だが、この印象的な独白は、籟三のうちにもまぎれもなく当初から、「潔白の心」——「貧ゆゑうづもるゝ事口惜しの念」や「名誉を願ふ心」と対置される、籟三のうちに昔時より内面化されていた前近代的な倫理観——が存在していたことを明かしている。つまり、名利の追及によって国利に貢献しようとする、熱心な愛国者にして立身出世主義者として定説化されてきた籟三のうちには、じつは「名誉を願ふ心」を「欲火」「心鏡くもり」と断じてやまない語り手と同じ、欲望の無制限な拡大を卑しむ倫理規範が内在していたわけである。

しかし、その一方で籟三は、この瞬間にもなお、「美にすさむ心がけ」を昇華させた「心に誇りし満足の品」への執着と、「金光我が身に輝いて、四方に沸く喝采の聲」への欲望とを完全に捨て去ることもできずに激しく葛藤している。いわば倫理と欲望のあいだで大きく揺らぎ、しまいには狂気のなかで花瓶を「投げ出」してしまふ籟三は、「軽薄浮佻を才子と呼ぶ明治の代」「兎角は金の世の中」にあつてなお、愚かしくも、節制や自足あるいは清貧という前近代的倫理観と、欲望という近代的価値観に引き裂かれているのである。

おそらく『うもれ木』が「混沌とした作品世界⁵⁴」と評される所以は、前近代的倫理観を体現する語り手に、その近代的価値観を批判される籟三のうちにも、前近代的倫理観がとよく残存しているという、この一様でない構造にあると思われる。言い換えれば、文体における、前近代的倫理観を体現する語り手と近代的価値観を受容している主人公との分裂、さらには、主人公の内面における、前近代的倫理観と近代的価値観との分裂というように、テキストはメタレベルにわたる分裂の構造を含んでいるのである。むろん見てきたように、語り手の位相も一様ではない。主人公が近代的価値観を懸命に成就しようとするさまに憐憫し、寄り添う意味では、語り手じしんも分裂的である。

だが、おそらく、その幾重にもわたる「混沌」とした分裂の構造にこそ、前近代と近代、倫理と欲望という二項において、後者が前者を凌駕し、駆逐し終えようとしている時代に、なおその二項を抱

え込み、そのあいだを激しく揺らぐ者の悲劇を描こうとした作者の意図を見ることができるとは言えない。

次節では、そのような主人公像をより明確に照らし出すための重要脇役——後者のいわば怪物的な権化としての篠原辰雄像を眺めてみよう。

五. 「徳義」という錬金術

ところで、そもそも「封建的身分制を解体し中央集権的行政制度を確立し、産業を近代化させたからといって、ただちに「…」国家への帰属意識をいなく「国民」が誕生するわけではない⁵⁵」のは当然として、徴兵令、教育勅語発布、大日本帝国憲法制定といった国家装置の創出が、人々のうちに国民意識を直ぐに根付かせたかといえ、それも首肯しがたいことは、近年の民衆史研究が証明する通りである。

改正教育令施行以前に「絵筆とり初め」た、一八六三（文久三）年生れの籙三の発話を確認しても⁵⁶、彼の帰属意識の在り処は「國」ではなく「世の中」であることは、その語彙の圧倒的な使用頻度が示している。むしろ、籙三も幾度か「愛國の志し」を熱く力説してはいるが、それは終始「斯道」すなわち「日本固有の美術」に携わる者としての視点に貫かれているのであり、それを離れた愛國心が吐露されることはない。昨今の「斯道の衰頹」を見るにつけ誓わずにはいられない「斯道挽回の志し」を彼自身のみずからの言葉で言語化していく過程で、そうした「我業疲弊不振」が「大日本帝國」全体の名誉に関わる問題として捉え直されているのである。しかしながら、その立脚点が揺るぎない分、かえって籙三の「愛國の志し」は、より真摯で切実であるともいえる。

一方、こうした籙三とは正反対に、「愛世済民」なる言辞に象徴される観念的な愛國論を繰り返すのが篠原辰雄である。かかる「愛世済民」の実践動機「人生まれながらに悪意なければ、迫まりては徳不徳取捨の猶予なく「…」世範これより乱れて國家の末いと危ふし」は、実のところ「貧海ノ中ニ淪没シテ日給ノ糧食缺乏スルニ困迫シ、策ノ他ニ出ル處ナク、已ヲ得ス一時犯罪ノ悪事ヲ敢為ス（…）富ノ不平均ヨリ結成シタル悪果ニシテ、邦國ヲ蠱毒スル深淺ニモ亦甲乙ナキ者ナリ⁵⁷」といった既存の治安対策的救貧論を踏襲しただけであることは明白であろう。「今日細民困窮のあり様」として辰雄が例示してみせる「錦衣九重の人」と「節婦」の対比も、例えば北村透谷「慈善事業の進歩を望む⁵⁸」（一八九四（明治二七）年）の表現と酷似していることから、同時代における慈善の必要性が説かれる際の常套的レトリックを借用したに相違なく、その愛國論自体は手垢のついた平板なものといえる。

つまり、辰雄の慈善事業にたいする情熱が不確かであるのと対照的に、驚くほど具体的なのは事業内容のほうである。「仁者」辰雄がその「幾萬の財産」をなげうつ対象として選んだのが、このころ国内規模で義捐金が供出されたノルマントン号遭難事件の犠牲者家族でも、死傷者およそ二万人をかぞえた濃尾大地震被災者でもなく⁵⁹、「博愛医院」建設であることは意味深長である。博愛社病院改称・日本赤十字病院⁶⁰に代表される慈善病院こそ、当時、美子皇后の令旨に皇族、華族、各種行政団体や名流婦人会がたちどころに賛同して発足した、「天皇制的慈恵⁶¹」を象徴する施設施設であった⁶²。当初は民間有志によって設立が企図されていた有志共立東京病院も、慈善を「國家社會の公益上即富国強兵の一端乃至基本として必要⁶³」とみなす宮内省からの下賜を得ることにより、皇室

の慈恵をあまねく示す東京慈恵会病院と命名されたように、当時、慈善病院とは、実質的には「天皇の名の下においてのみ⁶⁴」運営が可能だった。辰雄の着手した「博愛医院」設立とは、彼自身が言う通り、「富國利民」を方便に、「貴顕紳商」「何某の殿某の長官」、何より皇室の財と威信をやすやすと利用できる方術であるかぎりにおいて、その「美拳」とは鍊金術にほかならなかったのである。

そうした辰雄の投資行為を語り手は物語序盤から伝える。「清正公」近くの路端で、「五一の利足」の延滞を謝罪する老女に暴力を振るう男に対して、「何れ四海の内輪同士、金は我れ立て換へんと、紙入れ探ぐつて五圓札一枚一圓一圓」を与えてみせた辰雄はこのとき、仁徳を説いた『論語』の一節を名目に「五圓札一枚一圓一圓」と引き換えに得ることのできるものを犀利に計算している。それは、騒ぎを聞きつけ集った「小路に夥しき人だち」——むろんその中には「彼の横つら金で張つて、見事老女救つてやり度きもの」と内言する蝶も含まれる——に「光明赫灼として輝くとぞ拝まれぬ」こと、つまり「天晴れ仁者」として名指されることであり、あえて「名告」を断ることも「仁者」としての振舞いを完璧にするためにほかならない。辰雄は「此方彼方に名を呼ばれて、称へらるゝ」という噂の効用⁶⁵を十分心得ているのである。粗暴な男の捨て台詞「好ひ親分見付け出して是れから利の出ぬ金借りらるゝやら、人事ながら慈善家の末が案じられる」とは、ほかならぬその「慈善家」としての身振りこそが、いずれ確かな「利」を生むための投資行動であることを逆説的に裏付けた発話とみなすべきであろう。

そして、第八回で籟三が知るところとなる「奸悪の秘事」こそ、「國家の為」「國利國策」「國家の末を思ひいたれば」などの美辞を最大限に利用した詐術であることは言うまでもない。その過程で辰雄が籟三と蝶に示した行き届きすぎるほどの濃やかな厚誼、たとえば「二十金の生地二拾匁の金箔、此処四五月の費用幾度の窯代（…）猶心づけの數數」も「新年着の料にとて、送られし去年の反物」も「贈り物の品々」も、すべてはその奸計完遂に向けての「元手」＝投資の一環にすぎない。「山師ともいへ詐欺とも言へ、愚者に持たせて不要の財、引き上げる事世の為なり」とうそぶく辰雄とは、設備投資の拡充と基幹企業の勃興から近代経済成長の出発点⁶⁶といわれる明治二〇年代中期が生みおとした鬼子であり、『論語』を片手に資本主義経済を開拓したと評され社会事業にも尽瘁した（日本資本主義の父）澁澤栄一の陰画であるともいえようか。

さらには、物語内時間の三年後の一八九五（明治二八）年には、慈善事業のいわばこうした大衆化にもなつて、日本赤十字社の看護師を騙つて詐欺をはたらく不埒者が出現し、三面紙面を賑わすようになるが⁶⁷、慈善を営利手段として捉える辰雄も「天皇制的慈恵」制度じたいを哄笑しているとも別言できるだろう。

近代日本を欲望の時代と見定めたうえで、人々の「劣位ゆえの国民化」願望を刺激する愛國論を弁じ、慈善事業に投資することで致富を目論む。籟三とは正反対に、自己の功利的欲望の追求にどこまでも貪欲な辰雄であればこそ、籟三が切実に求めた地点「世上の評判赫と高く」「名をも知らるゝ境界」に立つことが可能であるという皮肉な現実を、一葉はその初期作から語っているのである。

あまつさえ「金満家」である辰雄は、例えば衆議院議員選挙法の規定では、三〇歳ともなれば被選挙権を得て⁶⁸、後続するテキスト『暗夜』の代議士波崎漂と同じように、名実共に「有力な貴顕」の仲間入りを果たすはずである。「経済的な強者が同時に政治的な強者となる」ことが制度的に保障された⁶⁹。財産選挙制を規定した大日本帝國憲法発布直後の物語にふさわしい帰結である。

「投げ出す一對庭石の上、戛然のひびき大笑のひびき、夜半の鐘声とほく引きて、残るものは片々

の金光一輪の月」という叙景描写で物語を閉じてしまった作者は、籟三が突然「秘蔵の短剣ひらめかして、彼の胸もとを貫く」展開を固く封印してしまったにちがいない。もはや正気を失いつつある彼の口から洩らされる呟きからも、それは明らかである。「交りを断つて悪聲を出ださぬ、我れ君子の道は知らねど、受けし恵みの泰山蒼海、無念骨髓に徹れど恩は恩なり、〔…〕思へば恨らみは我れにあり、腕にあり藝にあり此花瓶にあり」。

この期に及んでなお、『史記』に説かれた徳義「君子交絶不出惡聲」を押し、立身出世を願ったこと自体を悔やむ敗者籟三と、同じ時刻に「衡門」の内側でその籟三を「愚物」と嘲笑し「遣ひ道」を算段する勝者辰雄との対蹠性。「金光我が身に輝」くまぼろしを見る貧者籟三と、「光明赫灼として輝くとぞ拝まれぬ」富者辰雄との懸隔性。それこそ、その擬古文体とはうらはらに、近代それ自体を主題に据えた『うもれ木』の中心構造をなすのである。

樋口一葉のテクストに与えられた初の批評、星野天知の賞賛「筆は着想の凡ならざると共に鋭く、人をして其婦人の作なるを疑はしむるものあり」（前出）とは、そうした『うもれ木』のもつ近代批判性にふれた言辞にちがいない。

樋口一葉の文学は、その実質的な文壇デビュー作においてすでに、立身出世主義を懐疑的に語ることで、それを国是として称揚してやまない近代日本にたいする批判性を顕在させていたといえる。

六．制度と逸脱

先行する論考のなかには、テクスト第八回を辰雄の人格が急変した章とみなし、そのバランスを欠いたプロット展開を、作者の急な構想変更によるとした上で、その理由を一葉の伝記的事実（渋谷三郎の再接近）に求める説がある⁷⁰。そうした視座から眺めれば、本稿が提示した辰雄の人物像は多分に図式的であろう。だが、未定稿Aにおいて「滄浪の水にこれるは世の中にして錦のうらおもては人心の常と思ふに誰一人頼もしと見ゆるもなく」と書きつけられているように、当初から「人心の「うらおもて」の主題⁷¹は作者の念頭に置かれていたはずであり、それを渋谷三郎問題のみに帰するのは、この多義的なテクストに向き合うにあたって惜しい気がしないでもない。代りに、その主題を、述べてきたような近代の様相の一端として捉え直すことはできないだろうか。

たとえば、かつて樋口家を包みこんでいた情誼的な二つの共同体——故郷甲州大藤村の縁者らによる「第一のムラ」、出京してきた郷党の同志らによる「第二のムラ⁷²」——が、表向きは擬制的な大家族を装いながらも、維新期の経済的な混乱以降、かつての親密な相互扶助関係をあっさり崩壊させていったことに、「人心」の「うらおもて」の主題を読みとつてもよいだろう。前田愛氏が神島二郎『近代日本の精神構造』を援用しつつ述べた「自然村を離脱した都市生活者が手に入れることができた競争の自由と、そのメダルの裏をなしている孤立感⁷³」、すなわち「誰一人頼もしと見ゆるもなく」と心細い胸のうちを洩らさざるをえなかった「都市生活者」一葉の抱えるよるべきなさは、「友なく弟子なく女房なく、お蝶と呼ぶ妹相手にして、此處高輪の如来寺前に、夕顔垣にからみ蚊やり火軒にけふる侘住居」という籟三の境遇表現にそのまま反映されているだろう。

だが、そのように共同体から隔絶され、それゆえにいっそう固い紐帯で結ばれていた籟三と蝶兄妹もまた、近代の論理としての「孤立」の結末を免れない。数ある物語場面のうちから、兄妹の分断の様子を不穏な気配ただよう闇夜のなかに描きみせた初出誌『都の花』の武内桂舟の挿絵も、そうした

「競争」の果ての「孤立感」という近代の主題にみごとに照応しているのである。

みてきたように『うもれ木』は、到来した自由競争社会における勝敗と、その競争を過熱させることで維持強化される近代日本というシステム——そこからの逸脱の様相が描かれているテキストである、とさしあたり結論できる。

しかし当時の一般的な状況を眺めれば、個人と国家制度のあいだには軋轢が生じるどころか、テキストに登場した画工や問屋がそうであったように、むしろ積極的な折り合いがなされていたことに注意しなければならぬ。そのような時代にあつて、興味深いことに『うもれ木』の物語言説ときわめて近似した表現「金銀の世」「利己主義の世」「強い者勝ちの世⁷⁴」で近代を怨詛した出口なおの存在が近代日本全体からすれば「周縁的⁷⁵」であつたならば、『うもれ木』もまた、特異で周縁的なテキストであつたにちがいない。同時代における芸道ないし美術を主題化したテキストを見渡してみても、前掲した露伴『風流伝』ではお辰に対する珠運の恋慕は作品完成によって昇華されるし、紅葉『裸美人』(二八八九〔明治三〇年〕)にみられる可笑性は新興〈美術〉の制度的背景にまでは及んでいない。巖谷小波『妹背貝』(同年)と江見水蔭『旅絵師』(同年)の場合は、画工を視点人物としつつも、彼等の恋愛における心的葛藤それ自体が主たるプロットなのである⁷⁶。

だが、これまで行ってきたように、分析対象を籟三と辰雄の二者に限定しては、そうしたテキストの独自性の一面を読解したにすぎない。籟三と辰雄の双方に深く関与することによって、制度からの逸脱という特異な方向へと物語を実際に導引してゆくのは、蝶にはかならないからである。

その三者の関係性については、すでに先行研究によって次のように指摘されている。「愛」の求める二重の束縛によって引き裂かれ⁷⁷、「死出の旅につく蝶は、「死」なぬかぎり桎梏から逃れられない女の生のあり様⁷⁸」(橋本めぐみ氏)を体現している。同時に、その蝶の出走こそが「辰雄の悪計をはぐらかすとともに、籟三に自らの「存在」への懷疑を抱かせ、またそれまで信じていた「芸」の超越性をも疑わせていった⁷⁹」(塚本章子氏)のであり、つまり蝶は「金や力や名誉にとらわれた男性たちを相対化していく役割⁸⁰」(岡野幸江氏)を負っている。

以上のフェミニズム批評的解釈の成果に首肯しつつ、それとはやや異なる観点から本稿が注目したいのが、蝶をめぐる語りである。テキスト第二回において、老女を救済する辰雄の颯爽とした「若紳士」ぶりに完璧な異性像をみた彼女は、再会の際、「我れは君の妻、君を置きて我が夫なし」という可憐なロマンス願望を抱くようになるわけだが、以下はその際の語りである。

飽かれまじ厭はれまじ喜こばれ度し愛されたし、何とせば永世不滅の愛を得て、我れも君様も完全の世の過ぐさるべきと、欲は次第に高まりて、さまざまの想像わき来たれば、

「富貴に眼をとち貧賤に心をみがきて、今年十八年くもりなき美玉」の蝶に初めて萌した「恋といふ胸の一物」は、むしろ功利的目的から生じたわけではない。だが『十三夜』(一八九五〔明治二八年〕)のお関の場合がそうであったように、「社会変動の激しい近代化の時代には、学歴を武器に「出世」できる男たちに対して、結婚は、女性が階級帰属をえらびなおす生涯で唯一のチャンス⁸¹」だったことは紛れもない事実であった。つまり「永世不滅の愛を得て」というお蝶の罪のない願いは、客観的には、婚姻による階級上昇への願望を意味する。このとき語り手が挿入した「欲」という「望ミ物ヲ貪ル情⁸²」を意味する一語こそ、近代婚姻制度のもつ階級上昇機能を直截に語った言葉にほかな

らない。籟三の「名誉を願ふ心」を「欲火」と批判的に述べたように、ここでも語り手はお蝶の「飽かれまじ厭はれまじ喜ごばれ度し愛されたし、何とせば永世不滅の愛を得て、我れも君様も完全の世の過ぐさるべき」を「欲」と否定的な言葉遣いで表現していることに注意する必要がある。

「我身卑賤の教へもなきに、君様世上に敬まはるゝお身、成るまじき願ひと我れを叱かりて」とあるように、蝶じしんも辰雄との婚姻が階級上昇を意味することに自覚的だった。だからこそ「我れ望みは身分でなくて親でなし、其人自身の精心一つ、行ひ正しく志し美事ならば」という辰雄の「鮮かな詞」に応えるために、「いよく身の行いつゝしみて、徳を修むる事専一と心がけ、姿木綿のいやしきは恥ぢねど、詞づかひ立ふる舞、家の内の経済より始めて、世の交際人づかひと、細かに顧み」——すなわち、同時代に鼓吹されていた、家族国家観の下での「国粹主義的な婦徳論」³の実践に似しむのである⁴。だがテキストは、辰雄の巧言に「操を破つて操をたてんか」と懊悩した蝶が、「手跡のうるはしき」「形見」の「一封の文」を残して出奔してしまう結末を用意する。

恋愛の成就というロマンス願望を、功利的な階級上昇「欲」ではなく、家族国家観の下での「近代家父長制」⁵、家族制度の一環であった正統的婦道として受容し、その婦道の修養に専心したことが仇となって——すなわち、その近代家族制度への参入意欲を悪用した辰雄の奸計に嵌って——、蝶はその近代家族制度から逸脱してしまう。そのプロットは、傑作芸術を創造したいという美への憧憬を、功利的な「名誉」「欲」ではなく、〈日本美術という制度〉の下での報国行為として受容し、万博出品の制作に専心したことが仇となって、籟三が〈日本美術という制度〉から逸脱する流れと同一であることはいうまでもない。

安丸良夫氏は、『近代天皇像の形成』のなかで、近代日本において広汎な人々が「天皇制に直接的にかかわる正統性観念」⁶としての諸制度にすんで参入することによって、「天皇の権威を介してみずからの願望や欲求に普遍的な意味を与え、みずからのなかからその可能性と活力とを汲みだそうとし」⁷た姿を明らかにした。

『うもれ木』もまた、「みずからの願望や欲求」を、近代日本の「天皇制に直接的にかかわる正統性観念」としての制度に参入することによって、「普遍的な意味」へと変換しようとした兄妹を描いたテキストである。だがテキストは、見てきたように、人々の「可能性と活力とを汲みだそうと」してやまない近代日本の「天皇制に直接的にかかわる」そのメカニズムを悪用する「愛国」を騙る「詐偽」「紳士」を介在させることによって、兄妹の「願望や欲求」の挫折を描くとともに、「正路潔白」では到底叶えることのできない近代日本の正統性観念の在り様に対する、ひいてはその正統性観念を唱和する近代日本それ自体に対する懐疑を示している。圧倒的多数の人々がその正統性観念を叶えることを目的化するなかにあつて、きわめて特異な視点をもつテキストであるといえるだろう。物語内時間の三年前、海軍旗条例によって制定化された天皇旗・金色菊花御紋章⁸を連想させる金彩模様「菊桐」「菊の丸」「菊がら草」、そして歴史画の数々が、何の名残もとどめない「片々の金光」となって夜陰に散在する結末は、「天皇制に直接的にかかわる正統性観念」からの逸脱の様相と、その正統性観念への懐疑を語ったテキスト『うもれ木』にふさわしい締め括りであるにちがいない。

¹ 『うもれ木』テキスト（未定稿もふくむ）引用は、塩田良平・和田芳恵・樋口悦編纂『樋口一葉全集 第一巻』筑摩書房、一九七四年、所収による。

² たとえば、山根賢吉「一葉と露伴」『大阪學芸大學紀要』一四号、一九六五年、坂本政親「一葉

- と露伴」『福井大学教育学部紀要』一六号、一九六六年、等。
- ³ 北沢憲昭『眼の神殿』（美術出版社、一九八九年）全体、参照。
- ⁴ 「工」の芸であると同時に「工」の芸でもあるという「工芸」（『唐書』に淵源）が「美術」成立以前の包括概念であったが、そこから西洋美術と対応した絵画や彫刻等を抜き出した残余部が、近代日本における「工芸」と規定された（佐藤道信『日本美術の誕生』講談社、一九九六年、「第二章 五「工芸」という包括概念」）。
- ⁵ 同書、五七頁。
- ⁶ 佐藤道信『明治国家と近代美術―美の政治学―』（吉川弘文館、一九九九年）「第三章 美術と経済」、及び同「日本美術という制度」、『岩波講座 近代日本の文化史3 近代知の成立』（岩波書店、二〇〇二年）所収、参照。以下、本稿における日本美術に関する記述は、この佐藤氏の研究成果に多くを負っている。
- ⁷ 佐藤、前掲論文（「日本美術という制度」）、六八頁。
- ⁸ 佐藤、前掲書（『明治国家と近代美術』）、一〇七頁。
- ⁹ 佐藤、前掲論文（「日本美術という制度」）、六五頁。
- ¹⁰ ここでの「画工」とは薩摩焼画工をさす。和田芳恵、解説、注釈『日本近代文学大系 第8巻 樋口一葉集』（角川書店、一九七〇年）四〇六頁、補注三五（「いったん高い温度で焼いた素地に〔…〕上絵の具で絵付し」）。
- ¹¹ フェノロサ「日本歴史画の将来」（一八八五〔明治一八〕年）、天心『国華』発刊の辞（一八八九〔明治二二〕年）、外山正一講演「日本絵画の未来」（一八九〇〔明治二三〕年）。三者の発言内容については、順に、佐藤、前掲書（『日本美術の誕生』）、一一五―一六頁（フェノロサ）、一〇四―一五頁（天心）、六九―七一頁（外山）。
- ¹² 佐藤、前掲論文（「日本美術という制度」）、六九頁。
- ¹³ 佐藤、前掲書（『日本美術の誕生』）、「第三章 ジャンルの形成 3 「歴史画」」、参照。ここで佐藤氏は「国家思想、国民意識の喚起と絵解きの象徴として、歴史画が重視された」（二〇六頁）と指摘している。
- ¹⁴ 同書、「第三章 ジャンルの形成 3 「歴史画」 武士の絵」一一七―一九頁。
- ¹⁵ 同書、一一九頁。
- ¹⁶ 同書、「第三章 ジャンルの形成 3 「歴史画」 神話画の隆盛」一二二頁。
- ¹⁷ 同書、一二〇―一二二頁。
- ¹⁸ 同書、「第三章 ジャンルの形成 3 「歴史画」 仏教画題」一一五―一一七頁。
- ¹⁹ なお、「美術史家」という言葉は、鷗外「外山正一氏の画論を駁す」（一八九〇〔明治二三〕年）において見られるが、そのように、制作者に「美術家」の対概念として「美術史家」なる言葉を用いるのは先駆的であったという（同書、七四頁）。「美術家」という言葉は「美術」という概念の浸透（同頁）を良く物語っているとされるが、「美術史家」なる言葉の誕生も然りであろう。
- ²⁰ 同書「第三章 ジャンルの形成 3 「歴史画」」、参照。
- ²¹ 同書、一二〇―一二二頁。
- ²² エドワード・W・サイード 今沢紀子訳『オリエンタリズム 上』（平凡社ライブラリー11、一九九三年）五八頁。
- ²³ 戸松泉「第一部 作品篇 うもれ木」前掲『樋口一葉事典』二四頁。
- ²⁴ 同書、二二―四頁。
- ²⁵ 兵藤裕己『（声）の国民国家・日本』（NHKブックス〔900〕日本放送出版協会、二〇〇〇年）、第二章とりわけ「自由民権運動と演説」（四七頁）を参照すれば、テキスト全体をつらぬくこの「悲憤」慷慨調の文体には、明治一〇年代を風靡した自由民権運動の壮士による政治演説スタイルの影響も認められるのではないか。
- ²⁶ 牧原憲夫『客分と国民のあいだ 近代民衆の政治意識』（吉川弘文社、一九九八年）一九四頁。語り手も「立つや我れより高き人、くじき度きが此輩の常」と付言している。
- ²⁷ 横山源之助『日本の下層社会』（底本『日本之下層社会』教文館、一八九九〔明治三二〕年）（岩波文庫、一九四九年）九一頁。なお同くだけは、牧原、前掲書、一九四頁にも引用されている。

る。

²⁸ 島田三郎「日本之下層社会 序」、同書（横山）、所収、四頁。

²⁹ 佐藤、前掲書『明治国家と日本美術』「第一部第二章「美術」と階層」及び、同、前掲書

『（日本美術）誕生』「第四章 美術の環境」、参照。

³⁰ かつて薩摩焼陶工は土族の処遇を享受し、最盛期には七百石の知行を与えられる存在であった（十五代沈壽官「薩摩焼の世界性」鹿兒島純心女子大学国際文化研究センター編『新薩摩学』世界中のさつま』南方新社、二〇〇二年所収、一八三頁）。画工の身分自体は詳らかではないが、御用絵師の場合は士族待遇が多く、実際幕藩期における薩摩焼は専ら島津家用あるいは贈答用であることとから（同論文、一八六頁）、画工も御用絵師的な存在であったと推測される。横浜港に近い東京田町で苗代川から送られてきた白生地地の絵付を行っていた沈壽官も、安政四年島津斉彬が苗代川に開いた磁器工場で磁器方主取を勤めている（同論文、一九〇頁）。未定稿A口2には「我さつま出身にも非らず鹿兒嶋縣の肩書きつく身ならねば縣下の名与いひ立てにして富貴にはこる何某貴けんの玄関先画工疲弊の陳情書をしひろげて」とあり、籙三は薩摩出身者ではない人物として設定されているが、上記の事情を踏まえれば、籙三の立場も本来であれば「売国の奸商どもに左右されて」〔…〕さらでもの瘦せ腕ねぢられ」るような低位にあるべきはずはない。

³¹ 佐藤、前掲書『（日本美術）誕生』「第四章 美術の環境」に述べられている通り、行政面から制度としての日本美術を支えた旧薩摩藩士町田久成（一八〇頁）や「薩摩藩名門の黒田清輝」（一六八頁）の躍進をみても、美術界における薩摩閥が優勢であったことは確かであろう（同書、同章「出身藩と立身出世」を中心に参照）。

³² 美術と工芸の境界領域的な分野にある陶画だが、新時代の美術にあつては絵画こそが上位藝術であり工芸はその下部に位置付けられるなかで、陶画は「コロンブス博覧会」で「各種の絵画」として出品を認められている（日野永一「万国博覧会と日本の「美術工芸」、吉田光邦編『万国博覧会の研究』思文閣出版、一九八六年、所収、三二—三三頁）。

³³ 島田、前掲文（「日本之下層社会 序」）、三頁。

³⁴ 石附実「シカゴ閣龍博と教育」、吉田、前掲書、所収、一九八頁。

³⁵ 同論文、一九八頁。「その規模の大きさではこれまでのどの世界博覧会をも凌駕」したという。

³⁶ 「政府はウイーン万博のときから褒賞制度に注目しており、〔…〕この褒賞制度が、制作上の質的な指標の提示、品質向上にむけた競争原理の導入、新政府の権威の示威に、大きく役立ったことは事実だった」（佐藤、前掲書『明治国家と近代美術』、九六頁）

³⁷ 日野、前掲論文、三三頁。

³⁸ 一八九二（明治二六）年一〇月一六日付「ちり中日記 今是集」、塩田良平・和田芳恵・樋口悦

編纂『樋口一葉全集 第三卷（上）』筑摩書房、一九七六年、所収。

³⁹ 日野、前掲論文、三八頁。

⁴⁰ 佐藤、前掲書『（日本美術）誕生』、「第三章 ジャンルの形成 3 「歴史画」 勤王の画家」一一—四頁。

⁴¹ それぞれ、佐久間文吾、曾山幸彦による同一作品は、一八九〇年第三回内国勸業博覧会に出品された「歴史画隆盛の一大頂点を示す」（佐藤、前掲書『（日本美術）誕生』、一〇六頁）作品である。一葉自身も同博覧会に出掛けており（雑記二）、草稿断片「作品」⁴²では同博覧会の売り子を志す娘の物語を試みている。

⁴² 橋本めぐみ『『うもれ木』にみる〈国民〉の実態』『社会文学』第一五号、二〇〇一年、一三三頁。

⁴³ 同論文、一三二頁。

⁴⁴ 同右。

⁴⁵ 同論文、一三三頁。

⁴⁶ 竹内洋『立身出世主義 近代日本のロマンと欲望』（日本放送出版協会、一九九七年）一八頁。

⁴⁷ 牧原、前掲書、二二二頁。

⁴⁸ 同書、「第二章 1 劣位ゆえの国民化」、参照。

⁴⁹ 前掲『樋口一葉全集 第一巻』に、「浮雲」に「ふうん」とルビ。

⁵⁰ 和田、解説、注釈、前掲書は、「風前の塵」は「物事のはかないさまのたとえだが、意味より七五の調子を整えるために用いた語と思われる」(六二頁、注九)とする。

⁵¹ 亀井秀雄「文体創造の秘儀」『国文学解釈と教材の研究』二九(二二)、一九八四年一〇月では、『たけくらべ』や『にこりえ』などの表現がすぐれた喚起力を備えているのは、作中に姿を現さない(潜在的な)語り手の視点による描写(いわゆる地の文)が、半ば肉声化されていたためである。しかもその肉声がおなじく作中に姿を現わさぬ他者の発話との応答的な調子を帯びていた。このような地の文の潜在的な会話が、作中人物の発言を誘発し、さらにはそれと応答しながら展開してゆく(四七頁)と概括されており、示唆を受けた。

⁵² 亀井秀雄『感性の変革』(講談社、一九八三年)一三六頁。一葉のテクストにおける語り手の位相について、同書第六章「口惜しさの構造」第七章「非行としての情死」及び、亀井、同右論文(「文体創造の秘儀」を参照)。

⁵³ 大槻文彦『言海 第三冊』(一八九〇〔明治二三〕年)六二五頁。上田萬年『大日本國語辞典』(富山房、一九一五〔大正四〕年)にも「すさむ 荒〔…〕心のすさぶままに賞玩す。」(二〇九八頁)とある。

⁵⁴ 前田愛『前田愛著作集 第三卷 樋口一葉の世界』(筑摩書房、一九八九年)二四頁。

⁵⁵ 牧原、前掲書、二二九頁。

⁵⁶ 例えば「竈の烟の立居にまで、かしこき大御心なやませ奉る」という待遇表現には、幕末から維新期にかけて天皇が「現世利益をもたらす民間信仰の対象としてのカミと混同され」(T・フジタニ『天皇のページェント』日本放送出版協会、一九九四年、一四頁)、万能の「生き神」(同書、五六頁)として庶民に崇められていた名残が垣間見られるように思われる。むろんこの籟三の発話の背景には、一八九〇〔明治二三〕年の米価急騰の際皇后から困窮者に義捐金が下賜されたことが発端となり、次第に皇后が慈恵にみちた国母として表象されるようになった経緯もある。この籟三の発話には「貧民の苦しみなぞ見向きもしないようにみえる政府・議会に対して、つねに心を悩ましてくださる天皇・皇后、という構図」(牧原、前掲書、二二八頁)が同時に透けて見えると思われる。

⁵⁷ 奥平昌邁「富ノ不平均ハ國力ヲ萎靡スルノ論」『郵便報知新聞』第一五四四號、一八七八〔明治一一〕年三月二二日、投稿欄、明治文化研究會編輯『明治文化全集 第十五卷 社会篇』(日本評論社、一九五七年)所収、六五―六六頁。

⁵⁸ 「巍然青空を突ける建物あり、曰く侯伯貴人の歓娛する所なりと、是れ近く築かれし者なり。爰に黒塗の馬車は輻輳し、管弦や音楽や啾唳として人樂ましむるの声起る。〔…〕天寒むく雪降れるに暖かき火を囲みて顔色ある者幾家かある、彼等が帰り来れる主人公を慰めん為めに供ふるの肉何片かある、妙齡の少女頬に紅ひなく」『明治文學全集』²⁹ 北村透谷集』筑摩書房、一九七六年、一六四頁)と貧富の格差が対比的に叙述されている。

⁵⁹ 明治期「慈善」をめぐる大衆化現象については、奥武則『大衆新聞と国民国家 人気投票・慈善・スキヤンダル』(平凡社選書²⁰⁸、二〇〇〇年)第三章 2 「慈善と健康」全体を参照。

⁶⁰ 日本赤十字病院は皇后自らが開院(一八八七〔明治二〇〕年)、皇后は皇室財産の土地と一〇万円を下賜した(オリイヴ・チェックランド 工藤教和訳『天皇と赤十字』法政大学出版会、二〇〇二年、三八―三九頁)。

⁶¹ 池田、前掲書「口 第二節 明治国家形成期の救済思想」第三節 明治国家の慈恵政策」全体を参照。同書はここで「明治国家の救済政策は、「仁恵ノ御主旨」という表現に代表されるように天皇の慈恵として道徳主義的に認識されていた」(一六四頁)と述べたうえで、明治近代における福祉政策を「天皇制的慈恵」(二七九頁、節タイトル)と表現している。

⁶² 同書、二二二頁。

⁶³ 窪田静太郎「財団法人中央社会事業協会創立の事情と其の後の推移」『窪田静太郎論集』(日本社会事業大学、一九八〇年)五一―一頁。

⁶⁴ チェックランド、前掲書「まえがき」頁。

⁶⁵ この噂の効用は、後の一葉の作品群『にこりえ』『たけくらべ』『われから』等において物語構造の中核要素を成すようになるが、その原型を『うもれ木』のこうした箇所求められよう。

⁶⁶ 中村隆英『明治大正の経済』（東京大学出版会、一九八五年）五六頁。設備投資拡充や基幹企業の勃興は、金銀比価の低下による輸出需要の増大を主因とするなど、同時期の経済事情に関しては同書「第二章」全体、参照。

⁶⁷ 龜山美知子『近代日本看護史』戦争と看護（ドメス出版、一九八四年）五三―五四頁によれば、同事件は「毒婦の入込み」『日出新聞』一八九五（明治二八）年八月一〇日に報道された。この他、日赤の名称を騙る似非団体が登場するなどしたという（同頁）。

⁶⁸ 永井秀夫『日本の歴史 第25巻 自由民権』（小学館、一九七六年）三三八頁。同頁によれば、貴族院議員は皇華族を除き、「国家に勤労あり学識ある」として勅選された者、各府県で多額納税者上位一五名のなかで互選された者と規定されていたから、この時点で辰雄は将来、衆議院のみならず貴族院の被選挙権を得る可能性も無いとは言えない。

⁶⁹ 牧原、前掲書、一七八頁。なおこの財産選挙制によって大多数の人々が「国民」から除外される矛盾を解消し、「すべての『日本人』を天皇との関係で一元化する」ために考案された言葉が「臣民」（二八二頁）だが、『うもれ木』においても「国民」という語彙は使われず正しく「臣民」に統一されている。

⁷⁰ 阿部美智子「『うもれ木』論」『日本文学ノート』第二二号、一九七五年二月、橋口晋作「『うもれ木』の本質―再初期小説の展開から」『近代文学論集』第二〇号、一九九四年一月所収、等。
⁷¹ 中山和子「初期作品をどう読むか」『国文学 解釈と教材の研究』二九（一三）、一九八四年一〇月、所収、には、「裏切りの主題」（五九頁）とある。

⁷² 前田愛は、柳田国男『明治大正史4 世相篇』と神島二郎『近代日本の精神構造』を引きながら、「家鄉ないしは出身校を軸心とする擬制村」を「第二のムラ」（前田、前掲書『前田愛著作集 第三巻 樋口一葉の世界』一三五頁）、「大藤村の縁者たち」を「第一のムラ」（一三五―一三六頁）と述べている。

⁷³ 同書（前田）、一三四頁。
⁷⁴ 以上、安丸良夫『出口なお』（朝日新聞社、一九八七年）六九頁、一九三頁。

⁷⁵ 安丸良夫『近代天皇像の形成』（岩波書店、一九九二年）二二二頁。

⁷⁶ 硯友社系作家と美術小説については、猪狩友一「〈美術〉の時代と硯友社」『硯友社文学集 新日本古典文学大系』（岩波書店、二〇〇五年）所収、五六―一五七二頁、参照。

⁷⁷ 橋本、前掲論文、一三九頁。

⁷⁸ 同右。

⁷⁹ 塚本章子「一葉『うもれ木』における〈芸〉の歴史的位相」『近代文学試論』一九九八年、所収、一一頁。

⁸⁰ 岡野幸江「封じられた言葉の行方―『うもれ木』の深層、新フェミニズム批評の会編『樋口一葉を読みなおす』（学林書林、一九九四年）所収、五四頁。

⁸¹ 上野千鶴子『近代家族の成立と終焉』（岩波書店、一九九四年）八七頁。

⁸² 大槻、前掲『言海』「欲」の項。

⁸³ 上野千鶴子「解説（二）」、小木新造、熊倉功夫、上野千鶴子校注『日本近代思想体系23 風俗性』（岩波書店、一九九〇年）五四七頁。

⁸⁴ 具体的には、『婦女鑑』（二八八四（明治一七）年）などの説く「四行」の実践。なお、『婦女鑑』自体は「欧化主義を踏まえて、広く和漢洋の婦女子の善行が集められ」（片野真佐子『皇后の近代』講談社選書メチエ、二〇〇三年、五八頁）しているため、物語時間に頭揚されている「国粹主義的な婦徳」とは微妙な差異もあるうが、美子皇后が示した婦徳、婦言、婦容、婦功の四行からなる孝子節婦像にお蝶の身振りはそのまま該当しているといえよう。

⁸⁵ 上野、前掲書（『近代家族の成立と終焉』）、九四頁。

⁸⁶ 安丸氏は前掲書（『近代天皇像の形成』）において、C・グラック氏の論考を引用しつつ、その具体例に「天皇、忠義、村、家族、国家」（二七一頁）を挙げている。

⁸⁷ 同書、二八〇頁。

⁸⁸ 長志珠絵「ナショナル・シンボル論」『近代日本の文化史 三 近代知の成立』（岩波書店、二〇〇二年）所収、一四七頁。

第二章 『暗夜』と日清戦争下の女性表象

一. はじめに

樋口一葉『暗夜』¹（初出『文学界』一八九四〔明治二七〕年七月〜一月 表紙目次表記『闇夜』）において、つねに議論の焦点とされてきたのが、〈外面似菩薩、内心如夜叉〉として語られる主人公お蘭の特異な人物像である。

本章は、その典拠の詮索に傾きがちであった従来の研究史から一步離れて、テキスト初出時、すなわち日清戦争時という時代文脈のなかに、〈外面似菩薩、内心如夜叉〉なる女性表象を置いて論考を展開する。そこから見えてくる事柄とは、お蘭と、日清戦争期の象徴的女性像であった篤志看護婦と美子皇后との意外な適合性である。テキストは、大胆にもお蘭を篤志看護婦および美子皇后と相似形に造形することによって、時代に言祝がれる女性シンボルたちもまた、お蘭と同じように外面と内面が乖離した存在にほかならないことを、別言すれば、彼女たちの光輝あふれる表象の下には陰影を帯びた実像が隠されていることを、比喩的に物語っているのである。

『暗夜』が、近代初の対外戦争である日清戦争期に夥しく生成された女性表象の虚構性を提示した、特異なテキストであることを、以下に詳しく見てゆくことにしたい。

二. 〈看護する女〉の誕生

『暗夜』が『源氏物語』の影響が濃厚なテキストであることは、これまで数多くの論考において検証されているので、ここではその詳細については述べない。²だが「河原の院」「夕がほの君ならねど」「五條わたりの軒のつま」「夕がほの猶や花々しかるべき」といった語句が明示的に挿入されている点からも、あるいは蓬生の巻を容易に連想させる「松はなけれど瓦に生ふる草の名の、しのぶ昔はそも誰とか」の措辞からも、前田愛氏が述べるように、読者は源氏の物語世界を直截的にイメージしながらテキストを読み進めるよう促されているのは明らかである。³

しかし、このテキストの興味深い点は、末摘花の廃邸を踏まえたときられる劈頭の語り⁴「取りまわしたる邸の広さは幾ばく坪とか聞こえて、閉じたるまゝの大門は何年ぞやの暴風雨をさながら、今にも覆へらんさま危ふく」と、終端の語り「汽車は国中に通ずる頃なれば」との非対称性である。つまり語り手は、その冒頭においては、古色蒼然とした王朝風の物語世界を造形しているにもかかわらず、その締め括りでは、これが近代の物語にほかならないことを明確にしているのである。しかもその物語内時間は、間接的ながらもきわめて限定的な私たちで告げられている。すなわち「汽車」が「国中に通ずる頃」といえば、一八八九〔明治二二〕年の東海道本線全通を経て、日本鉄道会社による東京―青森間が開通した一八九三〔明治二六〕年前後と規定され得よう⁵。同テキスト註釈は、国内鉄道網の一応の完成時期を述べたこの最終文を文脈上「唐突」であるとしているが⁶、確かにいささか「唐突」なこの年代への言及にこそ、物語内時間に対する語り手の少なからぬ拘泥のほどがうかがえよう。あたかも語り手は、これが一八九三〔明治二六〕年前後の物語であることを失念せぬよう、最後に読者に念を押ししているかのようである。

つまり、『源氏物語』をはじめ、指摘されているだけでも相当数にのぼる古典の引用がちりばめられた『暗夜』は⁷、いわば王朝文学の世界を「借景」⁸しながら、その物語時間を一八九三（明治二六）年前後に限局したテキストなのである。さながら近代における国風物語とでもいふべきであろうか。付言すれば、テキストに顕著なこうした古典的特徴は、作者一葉の教養背景をかたちづくった萩の舎が、いわゆる御歌所派の和歌や平安朝文学を教授していたことによるだろう。だが、同時代状況に眼を向ければ、激化する自由民権運動への懼れと欧化主義の跋扈にたいする反動から、一八八七〔明治二〇〕年頃より国体の精華を鼓吹する国粹主義が台頭しはじめ、日清戦争を期にその気運は最大の昂まりをみせていたのであり、近代における国風物語というテキストの特徴は、じつはこの明治二〇年代における日本主義という時代文脈によく符合しているのである。つまり『暗夜』とは、復古的であるがゆえに、きわめて明治二〇年代的なテキストなのだといえよう。

したがって、主人公お蘭の表象——彼女をめぐる描写や修辭、そこから惹起されるイメージなど——もまた、すぐれて古典的であると同時に、一八九四（明治二七）年という時代性を色濃く帯びているのである。

俗にくだきし河原の院も斯くやとばかり、夕がほの君ならねど、お蘭さまとて冊かるる娘の「……」紫檀の机に肘を持たして、深く思ひ入りたる眼は半ばねふれる如く、折々にさざ波うつ柳眉の如何なる憂ひやふくむらん、「……」こちたき髪のうるさやと洗しけるは今朝、おのづから緑したゝらん計なるが肩にかゝりて、こぼるゝ幾筋の雪はづかしき頬にかゝれるほど、好色たる人に評させんは惜しゝ、何とやら観音さまの面かげに似て、それよりは淋しく、それよりは美し

以上は、テキストにおいてお蘭が初めて登場する場面であると同時に、その外貌がもつとも詳細に描写されている箇所である。ここで語り手は、お蘭の端麗な容姿——「夕がほ」を彷彿とさせるたおやかな座姿、仏の三十二相に似た優婉な「柳眉」¹⁰、「緑したゝらん計りなるが肩にかゝ」った垂髪——をひとつひとつ述べた上で、それを「何とやら観音さまの面かげ」という一言で形容している。

これを布石として、（その四）ではより明確に、お蘭は「観音さま」「女菩薩」と名指される。語り手は、人事不省に陥った直次郎を一週間にわたって介抱するお蘭を、終始「女菩薩」と呼び称えているのである。このとき直次郎の「心耳にひびく」ように聞こえてくる「優しの御言葉」は、その表現形式においても抜苦与樂を保証する内容においても『法華経』『観世音菩薩普門品第二十五』¹¹の反復というべきであり、同章の大部分を占めるそのナラティブがお蘭＝「女菩薩」という結びつきを決定的にしていよう。直次郎は、その「美しくしき御声になぐさめられ、柔らかき御手に抱かれ」、「宛然天上界に生れたらん如く」といった感覚に包まれて、ひたすら眼前の「女菩薩」を「伏拝む」わけだが、ここでお蘭は観世音菩薩の化身として完全に表象化されるのである。

以上のようなお蘭をめぐる一連の語りは、やはり復古的といふべきものであろう。もとより観音信仰は広く平安文学における靈験譚を生成させ、「提婆達多品」ではあるものの『法華経』は宇治十帖にみられる女人往生論の拠りどころともなっている¹²。そのように複数の古典文学表現の断片を縫合するように形成されているお蘭の表象は、「女は二十才ばかりの丸顔の色白、扮装から思は藝妓にもあるらしく、さして美人といふにはあらねど、愛嬌はしたゝるばかり」¹³（田沢稲舟『しろばら』一

八九五（明治二八）年」といった、同時代小説にまだ残る戯作風、ないし硯友社風の女性表象とは明らかに異なるのである。

だが同時に、傷を負い病を得た直次郎を慰藉し看護するお蘭を、ことさらに救済の神・観世音菩薩として表象するような物語言説は、じつはきわめて一八九四（明治二七）年的であるともいえるのだ。たとえば、『暗夜』が再掲された『文藝倶楽部 臨時増刊閨秀小説』（一八九五（明治二八）年）に所収されている三宅花圃『萩桔梗』には、次のような興味深い記述がある。

大御心も廣島なる、赤十字の病院は、この後の宮の思召になれりとて、こゝに足なく、手なく、憎むべき敵の弾丸にうちなされ「a」憤怒みちちくく横たはるも、恵の露にぬれては、うれし泣にも泣ぬべきに、こゝに名にしおふ愛子、特志看護婦となりて、「…」看護に心を盡せば、痛みを身をもだへ、枕に取継り、「b」いかで彼首取らずは死なじくくと、「c」夢の堺にももたゆるも、彼京までと熱にうかざるゝも、「…」「d」愛子の顔みれば心清々しと、あなたにもこなたにも、愛子を慕ふ事一方ならず、「e」この腕によりてと乞ひて安く眠ぶるやうに死ぬもあり、不具ながらも看護の功あらはれ、うち合はされぬ片手ながら、「f」あなたの御信切忘れじと揮すもあり、佛も神も愛子の胸一ツに、やどれるやうに思はるゝに¹⁴、

以上は、日清戦争に出征した陸軍少佐の妻である主人公・愛子が「廣島赤十字病院」（広島予備病院）の「特志看護婦」（篤志看護婦）となつて傷病兵の看護に心を盡くすという場面である。

敵への「a」「憤怒みちちくく横たはり」「c」「熱にうかさ」れ「夢の堺」をさまよう兵は、かたわらで献身的に看護する愛子を「f」「神」とも「佛」とも思い、不自由な片手を立てて「揮す」。その叙述はすぐさま気付くように、「敵の世の中」への憤懣を抱え「苦熱」にうかされ「夢に過ぐ」す直次郎が「枕のもとにありて介抱し給ふ」お蘭を「女菩薩」として毀拝する様子と、きわめて良く似ていよう。しかも、「b」「いかで彼首取らずは死なじく」と苦悶する傷病兵の「d」「心清々しくさせ」「e」「腕によりて」労わる愛子と、「恨は必らず返へせ」と苦吟する直次郎の「胸の中すゞしく」させ「此腕に寄り此膝の上に睡るべし」と宥めるお蘭は、介抱にあたつての癒し方にいたるまで酷似しているのである。

断っておきたいが、ここで『暗夜』と、同テキスト初出に約一年遅れて発表された『萩桔梗』との、表現上の影響関係を指摘しようというのではない。のちに「大人も子供も老人も、女も、明けても暮れても戦争のことばかり話し合った。町内のバカ者、天保銭という名で通るような男でさえも、マジメな顔で戦争の話をした¹⁵。」（生方敏郎『明治大正見聞史』一九二六（大正一五）年初出）と追懐されるほどの、国民規模の未曾有の熱狂を生みだした近代初の対外戦争において、はじめて女性たちの銃後の守りがにぎにぎしく論じられ¹⁶、「看護する女」という表象が誕生した時代状況¹⁷が、この奇縁浅からぬ二人の女性作家のテキストに共に写し出されていることに注意を喚起したのである。

たつたいま国民規模と述べはしたが、前掲した生方敏郎の回想記『明治大正見聞史』によるならば、この戦争勃発に接して初めて、真に「大人も子供も老人も、女も」、国民という「想像の共同体¹⁸」の成員になった、と言い直すべきであろう。たとえば『婦人矯風雜誌』（一八九四（明治二七）年八月）にも、「五十餘歳の婦人」までもが「看護等相應の職掌に服し、聊か國家の爲めに盡さんとて¹⁹。」自弁で従軍した顛末が報道されているように、このとき女性たちにとって最も具体的な報国のかたち

「皇后陛下軍人救療ノ事業ヲ奨励アラセラル、至仁至慈ノ聖徳ヲ奉體²⁰。」する篤志看護婦に志願することだったのである。

この篤志看護婦とは、一八八七（明治二〇）年、有栖川宮熾仁親王妃董子を中心となって組織化された日本赤十字社篤志看護婦人会が募集、育成したボランティアナーズである。同会の設立目的は、戊辰戦争を濫觴とするそれまでの看護婦が「頗ル微賤ノ位置²¹」に貶められている弊を改め、その社会的地位の向上を目指すとともに、本格的な戦時看護体制を確立することにあつたが、同会規約が「本會ノ目的ハ日本赤十字社々則第一條ニ由リ戦時軍人患者ノ看護法ヲ研究スルモノトス²²」に始まることからわかるように、設立の主眼はあくまで後者であるところの、戦時看護体制の本格的確立に置かれていた。同会創設には美子皇后の積極的な働きかけがあつたとされるが、皇后の意向も「報国恤兵思想²³」に基づいた従軍看護婦の育成にあつたからである。

この皇后の命を受けた先の有栖川宮妃をはじめ、伊藤博文夫人・梅子、松方正義夫人・満佐子、大山巖夫人・捨松ら貴顕令室たちが、こぞつて篤志看護婦人会の発起人名簿に名前を連ねたのも当然であろう²⁴。したがって、こうした名流婦人たちの動向を、憧憬と称賛の入り混じった言葉づかいで事細かに伝えていた草創期の女性誌²⁵が、篤志看護婦をめぐる一連の言説を生成、流布してゆくことになる。そして、それらメディアにおいて看護婦にかんする記述がかつてない多さをみせ、つとに「ナイテイングール伝」などを紹介していた『女學雜誌²⁶』に篤志看護婦の募集広告も登場するようになるのが²⁷、テクスト初出時Ⅱ日清戦争期だったのである。

亀山美知子『近代日本看護史』によれば、一八九四（明治二七）年八月、宣戦布告がされると直ちに約二〇名の看護婦が広島予備病院におもむき看護活動を開始するのだが、特記すべきは、このとき一行が広島駅に降り立ったさい、出迎えた広島市民が彼女たちを「白衣観音²⁸」と評したことである。もつとも、当初その名指しは、未だかつて見たこともなかった看護婦の白衣戴帽姿を市民が無邪気に揶揄したものだのだが、このあと小松宮妃、北白川宮妃たちが続々と同病院を慰問し、救援活動に参加する様子がメディアのなかで恭しく紹介されるようになると、国民の間にはにわかに見守る看護婦に対する敬仰の念が生じることになる²⁹。彼女たちが三〇時間以上にわたる不眠不休の看護活動に挺身する様子や、うち四名が伝染病に罹患し覚悟の死を遂げたことなどが美談として喧伝されていくなかで³⁰、しだいに看護婦は慈愛にみちた「神佛」として、実際に表象されてゆくのである。

ジーン・ベスキー・エルシュテイン氏は、こうした近代における看護婦をめぐる表象の誕生について、次のように説明している。「一八五〇年代のクリミア戦争中にフロレンス・ナイテイングールが突破口を開いた後は³¹」、息子や夫の傷病を癒すのは母親や妻ではなくて看護婦なのであり、「救助し、痛みを和らげ、治療し、看護し、慰めを提供する³²」母性の象徴としての従軍看護婦は、「慈悲の天使³³」となった、と。

むろん当然ながら、『暗夜』の直次郎は負傷兵ではない。それどころか、テクスト執筆時が号外の刻々と伝える戦況によつて「都會も田舎もすべて興奮と感激と壮烈とで満されてゐた。萬歳の聲は其処此処できこえた³⁴」（田山花袋「出発の軍隊 日清戦争」『東京の三十年』一九一七（大正六）年）時期にあたることを考えれば、やや奇異な印象を抱かせるほど、語り手はこの時局について固く沈黙を守っている。だが、仮にその沈黙が積極的に選ばとられたものでなかったにせよ、テクストは多くの場合――否おそらくテクストというものは例外なく――、書き手の意図とは関係なく、その時代性をおのずと

帯びてしまっているものだ。その意味において、お蘭が「女菩薩」と名指されるのが直次郎を介抱する場面のみ限られていることは、それが偶然にせよ、そうでないにせよ、看過しがたい要点に思われる³⁵。「数日の飢と疲れに綿のごとく成し身を、又もや車の歯にかけられて、痛みと驚きとに魂いつか身を離れて、氣息の絶えける」直次郎とは、他郷で「一身を犠牲に」奮闘するさなかに倒れた青年である点において、比喩的にいえば傷ついた兵士であり、したがってその彼を「嬉しく床しくなつかしく、親しさは「…」母のやう」に介抱する「女菩薩」お蘭とは、エルシュテイン氏の定義にみごとに合致する擬似的な看護婦なのである³⁶。

お蘭の表象が日清戦争下の看護婦のそれに類似している点は、他にもある。看護婦たちは「温和優切³⁷」といった形容によって紹介、賞美されていた一方で、時として「雄々しき」といった男性的な賛辞が与えられている場合もあった。たとえば『日本赤十字』(第二十九號、一八九四〔明治二七〕年二月二日)の以下の記事。

過日熊本より四名の看護婦廣島に赴きたるがその中の一人西嶋峰子といふが「…」日清の争起りてより婦女の身なりとて座して見るべき時ならずと志を起して看護の業に従事し勉めはげみ給ひしが此の度の撰にも漏れず彼の地に到り給ふこととなりぬ「…」我子の顔を見つめつゝ唯一言もいはずして汽笛の声と諸共に袂を分ち給ひしは実にも雄々しき限りにて送りの人々誰れ彼れも袖をぬらさぬ者なかりき 皇御國の御為に盡す忠義「…」進みてたゆまぬ志殊勝の事と云つべし³⁸。

事に臨むにあたって怯むことなく、初志を貫徹するためには情も顧みないというこの烈婦像は、『明治孝節録』(一八七七〔明治一〇〕年)や『婦女鑑』(一八八四〔明治一七〕年)が亀鑑とする、危難に際しては「男勝り³⁹」の働きをしてみせる貞孝烈女たちの延長線上に置くことができるだろう。そしてお蘭もまた同様に、「女子なれども計り難き意志の」「どれほど強き心を持てば彼の様に平気に落ちつきて」と感嘆されるほどの「一節」通った気丈さを具えているのである。

「温良柔順举止優雅⁴⁰」であると同時に、報国のためには身命を賭した「雄々しき」行動をも厭わないと語られた看護婦とは、日清戦争期の帝国が求めたもつとも模範的な女性シンボルであった。あくまで補助役を逸脱せずに、だが公的活動に懸命にいそむ彼女らの清新な姿は、戦時におけるありうべき女性像だったのである。そしてお蘭こそ、「本邦婦女ノ美風⁴¹」を体現することを託された彼女たちに、その表象においてきわめて相似していたのだった。テキスト冒頭から語り手がお蘭の面差しを「観音さまの面かげ」に繰り返し喩えていたことはすでに確認したが、それはお蘭の気品ある柔和な女性的美貌のみを強調した修辞なのではない。同時代の代表画・狩野芳崖『悲母観音』(一八八八〔明治二二〕年)にも淡い髷が印象的に描かれているように、「両性具有的⁴²」な形象をとる観世音菩薩こそ、そのように女性性と男性性を兼備するお蘭を表象⁴³代表していたのである。

にもかかわらず、物語の進展につれて、お蘭の意志はこの擬似看護婦像をことごとく裏切り、その範型を踏み外してゆくだろう。そもそも彼女は、『萩桔梗』の愛子のように、華々しく篤志看護婦に志願する資格自体をあらかじめ奪われてしまっている女なのである。

三. 「女菩薩」と「女夜叉」

篤志看護婦人会がもっぱら貴紳夫人たちによってのみ構成されていたことは、前述した通りである。愛子の夫も「獨乙へ四年越しの洋行に、彼國の兵制視察して⁴³」帰朝した、選良の「陸軍少佐」であった。それは、慢性的な財政不足に陥っていた明治政府が美子皇后の令旨を奉戴して名流夫人たちを総動員し、彼女たちの寄進によって社会扶助費を賄おうと企図していたからだとされる⁴⁴。したがって、親王妃を除いた会員——伊藤梅子、松方満佐子、大山捨松、山縣友子、井上武子、樺山登茂子、鍋島栄子⁴⁵など——は、その苗字からも容易にわかるように、いずれも錚錚たる元勳の令室たちであり、彼女たちは同会のほかにも皇室が眷護する複数の婦人団体に加盟し、慈善活動を麗々しく展開していたのだった。とすれば会規約に、「第十條 篤志看護婦ニハ給料ハ勿論報酬金ヲ贈賂スルコトナシ⁴⁶。」とことわられるのも当然であり、つまりは充分な経済的背景を持つ「高等婦人⁴⁷」以外の女性たちには、報国恤兵への道は閉ざされていたに等しかったわけである。慈善にせよ看護にせよ、このとき女性の国民化とは、有り体にいえば貴紳の有閑夫人であることを前提要件としていたのである。

ところでテキストにおいて、往時「財産家」を誇ったお蘭の父が「山師」の誹りに値するどのような「投機」を行い破滅したのか、その具体的な経緯は不問に付されているが、「観月のむしろに雲上の誰れそれ様、つらねられる袂は夢なれや」「口に正義の髭つき立派なる方様のうちに、恐ろしや実の罪はありける物を、手先に使はれける父の身はあはれ露払ひなる先供なりけり」の叙述から、彼が資本の本源的蓄積過程において何らかの策謀によって淘汰され、他のきわめて特権的な競合相手にその富を収奪されていった「御用商人⁴⁸」——〈政商〉の一人だったであろうことは推測できる。重工業・鉱山業の資本蓄積過程をめぐる鈴木淳氏の研究でも、金属山への投資の場合は当初から「まともった投資を必要としたため、その初期の担い手は、政府のほか、政商や旧大名家を中心となつた⁴⁹」と指摘されている。

ちなみに、鈴木淳氏は続けて次のように述べている。「長州系政商の藤田組は旧長州藩主毛利家の出資を得て小坂を、小野組出身の古河市兵衛は旧中村藩主相馬家、ついで渋沢栄一の出資を得て足尾を開発した⁵⁰」。ここで想起せずにはいけないのが、その足尾銅山の巨利をめぐる明治期屈指の醜聞騒動・相馬事件に一葉自身がすくなからぬ関心を寄せていた、という事実である⁵¹。あえてイメージ化するならば、いわばお蘭の父とは、足尾銅山や阿仁銅山など国内有数の富鉱を擁する鉱山王であり、閨閥形成によって古河財閥を勃興発展させた立志伝中の大政商・古河市兵衛⁵²になり得なかつた——テキストの言葉を借りれば「遣りそこね」た、古河市兵衛の陰画とでもいえようか。

いずれにせよ、山路愛山が言うように政商とは「政府が自ら干渉して民業の発達を計るに連れて自から出来たる人民の一階級⁵³」である限りにおいて、お蘭の父と深く関わった「雲上の誰れそれ様」「口に正義の髭つき立派なる方様」とは藩閥政治家やその周辺の高級官員——つまりは篤志看護婦人会員の夫たちと考えて相違ないだろう。

したがって、彼らに「毒味の膳にあてられ」た父が遺した「背負ふにあまる負債」を抱え、「鮒馬の君」として彼らに連なる代議士・波崎から「日蔭ものゝ人知らぬ身」になるよう仄めかされているお蘭は、慈善看護に明け暮れる（ことのできる）彼らの妻たちとは決定的に隔絶された女なのである。それどころか義憤を含んだ口吻の物語言説によれば、お蘭の父が「一人犠牲にのぼりたればこそ、残る人々の枕たかく春の夜の夢花をも見るなれ」なのだから、正確には篤志看護婦人会員たちの今日の

境位は、松川父娘の「犠牲」の上に確保されたというべきであろう。そのために、戦争を期に性的規範がいつそう強まるなかにあつて、妻になることから母になることから疎外されてしまっている孤身のお蘭とは、篤志看護婦らの貴顕夫人としての自己同一性を二重の意味で下支えしている者にほかならない。

お蘭は「山師の末路はあれと指されて」「醜名ながく止まる」「見わたす限り物すさまじき」廃邸の、「廊下いく曲りはるかにはなれ」た「奥の奥の奥坐敷」の「孤燈かげ暗き一室」に、「都ながらの山住居」のごとく逼塞している。そのように外界から何重にも遮蔽されているお蘭の私的空間のありようは、彼女が明治社会において幾重にも周縁化されていることの暗喩として読むべきであろう。そもそも彼女の住まう松川邸自体をめぐって繰り返される仔細な空間描写が、何よりそれを明瞭に物語っている。

時は陰暦の五月二十八日月なき頃は暮れてほどなければも闇の色ふかく、こんもりと茂りて森の如くなる屋後の檜の大樹に音づるゝ、風の音のものすごく聞えて、其のうら手なる底しれずの池に寄る浪のおとさへ手にとるばかりなるを「…」さしも広がる邸内を手入れのどゝかねば木はいや茂りに茂りて、折しもあれ夏草ところ得がほにひろければ、忘れ草しのお草それらは論なし、刈るも物うき雑草のしげみをたどりて裏手にめぐれば幾抱への松が枝大蛇の中にのぞめる如くうねりて、下枝はぬるゝ古池のふかさいくばくぞ「…」

荒れ放題に荒れはてた、晦冥に沈む脱中心としての廃墟・松川邸は、明治国家の陽のあたる場所から排除された「捨られ物」としてのお蘭のアナロジーなのである。

今日の学知からみれば、この構造は広義におけるオリエンタリズムとしてのそれであろう⁵⁴。「闇の色ふかく」、「古池のふかさいくばく」、「底しれず」、「木はいや茂りに茂り」、「あれ夏草」、「雑草のしげみ」、「あまりも浅ましく荒れて」、「籬は荒れて庭は野らなる秋草の茂み」といった語句の重畳によつて形象されるおどろな松川邸は、秩序立った合理的な文明開化社会の対極空間なのであり⁵⁵、そこを統べるお蘭もまた、時代の生んだ輝かしい女性シンボル・篤志看護婦と対極的な他者だからである。

だがここで留意しておくべきは、お蘭はいま述べてきたような社会的属性のみによつて他者像を引き受けているのではなく、彼女の意志もまた篤志看護婦に体现される戦時の女性規範を踏み外し、女性国民としての振舞いを逸脱している、ということなのである。

若桑みどり氏が実証しているように、古今東西を問わず、戦時において母や看護婦たち年長の女性は「行きなさい！」と男性を叱咤激励し、負傷した彼をふたたび戦場へと送り出してゆく鼓舞者であつた⁵⁶。『暗夜』の初出翌年に発表された藤島雪子『手箱の内』（一八九五〔明治二八〕年）でも、年高の令嬢が隣家に住まう少年を前に「支那征伐の双六をひろげ」、「昨日は平壤の戦を物がたりつ。今日は海洋島の海戦なりと、樺山中将のこと、坂元少佐のうへ、又まだ定遠は沈みませぬかと問し水兵の事などをわきやすく物語るに「…」さては大きくならば兵士のうちに入て、國の為に勤むべき事など語⁵⁷」って聞かせていたように、年上の女たちは男たちのいさおしを語り継ぎ、年少の若者たちを更なる戦いへと駆り立てていく煽動者でもあつたのである。

そしてお蘭もまた、それが「言はゞ死地に導くやうの成行」になるかもしれないと案じつつも、傷

病の癒えた年下の直次郎に行くことを指示する。対する直次郎の勇猛果敢な返事も、まさしくこれから戦地に赴こうとする兵のそれにほかならない。「相手が仆るか我れが死ぬか二つに一つの瀬戸際に我れ助からんの汚なき心にて後髪を引かるゝ物ありては、いさぎよき本望は遂げられまじ」〔…〕我れはいさぎよく死にまする」。

だが、お蘭が直次郎を行かせるその肝心の目的とは、彼を「医者の修業」の道に戻し立身出世させ、たとえば軍医として従軍させるなどといった国家奉仕とはいささかの関係もない。それどころかお蘭が直次郎を行かせる理由とはほかでもない、父と自分を踏み台に「官臭とやら女子の知らぬ香のする堂」にぬくぬくと収まりおおせた新進の若手代議士「波崎漂」という男に私怨を晴らすためであり、つまるところそれは「才子の君、利口の君万々歳の喜（世）」としての明治国家に対する報復にほかならないのである。

しかも、そのようにお蘭が直次郎に波崎暗殺を教唆し、彼がそれを唯々諾々と承知したのは、前田愛氏が指摘するように「直次郎の愛の告白を聞き果たしたお蘭」が「彼の自己破壊の衝動をたくみに誘導し、波崎の刺殺を使喚⁵。」したためである。つまり、松川邸の門前で負傷し倒れた直次郎をお蘭が手厚く看護したことに端を発した物語は、いわば擬似的な傷病兵―看護婦の関係にあった二人を「心の良人」―「妻」の誓いを交わす関係へと変容させ、代議士・波崎襲撃という特異な結末へと進んでいくわけだが、だとすれば擬似看護婦としてのお蘭は、ここで最大の禁忌を犯していることになるのである。

森鷗外とともにドイツへ留学し、帰朝後は鷗外の上官でもあった帝国陸軍軍医監・石黒忠恵が「軍事病院二真ノ看護婦ヲ付ケタノハ、此ノ時〔日清戦争時―引用者註〕カ初メテアルカ⁴、性的関係ニ就テ頗ル心配⁵。」したと述懐していたように、看護婦の誕生に際して何より危惧されたことは、広島予備病院をはじめとした衛戍病院における風紀の紊乱であり、それによる軍紀の壊乱と兵の士気低下であった。救援に就くにあたって看護婦たちは「決死以て婦徳を全うするの覚悟⁶。」の有無を徹しく問われたように、彼女たちはあくまで「慈悲の天使」であるよう強く要求されたのであり、些かなりとも「性的」な存在であってはならなかったのである。

だが、自分と同じ他者性（両者の形容はともに「捨てられ物」である）と、それゆえの死への衝動とをあわせもつお蘭に強く惹きつけられてしまった直次郎の告白はどうか。「明くれ御姿を見御聲をきゝ、それに満足せば事なかるべけれど、唯々心は火の燃ゆるやうにて」〔…〕静かに顧みれば勿躰なや恥かしき思ひの何処やらに潜みて」〔…〕思へば恥かし我れは餓鬼道のくるしみに、美妙の御聲も身を焼く炎と成ぬ」。

こうした生々しい感情を年下の壮丁に惹きさせ、その心情を赤裸々に告白させてしまったお蘭は、看護婦をめぐるディスクールにおいて、「不品行等の失態あらんか其影響の及ぶ所為に帝国の名譽を毀損⁶。」する悪女に堕されてしまうだろう。

テクスト執筆・初出時こそは、「號外く」と引きもきらぬ大路のさまに、士は足をつまだて、商は算盤を投遣にして、たゞく其方の雲行のみを氣遣ふ²。（前出『萩桔梗』）といった、いかなれば国民戦争に日本国中が没入していた時期である。見てきたように、女性作家たちのテクストにも、この初国民戦争をめぐる沸き起こったかつてない緊迫感や高揚感、そしてそれらを共有することから生じた国民的一体感といったものが活写されていた。

だが、そうした未曾有の時局をよそに、表象においては篤志看護婦そのものであった女が、その意

志において篤志看護婦に体现される戦時女性規範を大幅に踏み外してしまうという反時代性を示しているテクストが、『暗夜』なのである。外見は「女菩薩」にして内面は「女夜叉」という、表象を大胆に裏切るその人物造形は、注釈⁶³においても、女人罪障を説く際の古典的修辞（外面似菩薩、内心如夜叉⁶⁴）との関連が指摘されているだけであるが、ほかならぬ国民戦争のただなかにあって、その反時局的な女性像はひととき異彩を放っているだろう。

だが、さらに興味深いことには、一八九四（明治二七）年の言説空間から一歩離れ、巷間に飛び交う雑多な声に耳をすませば、〈外面似菩薩、内心如夜叉〉なる措辞は意外なことに、じつは看護婦たちにも当て嵌まるのである。彼女たちはその表象においてこそ、「温和優切」と「雄々し」さを兼ね備えた孝子節婦として称賛されたが、貴顕夫人たちを除いた看護婦たちは、「患者力荒々シイト云フコトハ世間ニ知レ渡テ居ルノテ（…）応募セル婦女ハ孰レモ所謂「バクレン」者ア（…）海二千年山二千年、男ヲ男トモ思ハ又輩⁶⁵」（前出、石黒忠憲談）であると噂されていた。

今となつてはまさしく隔世の感があるが、当時、看護とは男性患者の身体に接触する「賤業⁶⁶。」と見なされていたのであり、そうした労働に従事せざるをえない女性は極貧者であるか、三従七去の婦道に背いた者と蔑視されていたからである⁶⁷。一九世紀英国で、ナイティンゲールは「大酒飲みの娼婦という広く浸透した看護婦のイメージに闘いを挑⁶⁸」まなければならなかったと言われるが、それと同様、明治日本においても、若桑みどり氏が述べるように「国策や視覚表象においては称揚された看護婦も、現場の実態や看護婦を見る一般の目はまったく惨憺たるものであった⁶⁹」。

近代日本の看護婦の歴史をつづった稀少な二書——高橋政子『写真でみる日本近代看護の歴史 先駆者をたずねて』、亀山氏の前掲『近代日本看護史』——もまた、戊辰戦争後の一時期、看護に従事した者のなかに、「生活の崩れを思わせるものもい⁷⁰」た、「吉原のやり手婆」をはじめとした「莫連者⁷¹」がいた、と記している。もともとこの二書ともに、その叙述のすぐ後で、「近代看護教育⁷²」を教授されていない彼女たちは、あくまで「応急的⁷³」な存在であることわり、彼女たちが「看護婦と混同⁷⁴」されたことを問題視している。だが、その短い記述以降の全篇をとおして、正統な看護婦たちの品格の高さと功績の大きさを強調し、その存在を顕彰しているこの二書こそ、看護婦のイメージをめぐる、メディアと世間との乖離の歴史を、はしなくも語ってしまった資料であるとも考えられるのではないか。

事実、千田武志氏によれば、日清戦争下の広島地方紙には、公式記録にはけっして見ることのできないような記事も掲載されているという⁷⁵。「看護婦の痴談」なる見出しのその記事は、「広島陸軍予備病院に此醜態痴情を演ずる看病婦⁷⁶。」と傷病兵との性的関係を報じたものであり、そのなかで同看護婦は、「兵士の名誉を害する極悪人かのように実名をあげて糾弾⁷⁷」されているのである。看護婦こそ、そのイメージ論『看護婦はどう見られてきたか』のなかで分析されているように、「永遠の純潔を誓った尼僧⁷⁸。」と「男性の裸体に触れ」る「娼婦⁷⁹」、あるいは「天使のような母親⁸⁰。」と「邪悪な誘惑者⁸¹」、すなわち聖と性という相反する二つのイメージをつねに投影され、その両極のイメージのあいだを絶えず揺らいでいた、きわめて両義的な存在であった。しかしながら、（従軍）看護の黎明期にして、封建的女徳の鼓吹期でもあった日清戦争期にあっては、とりわけ後者の「娼婦」「邪悪な誘惑者」という性的イメージが肥大化し、蔑視の対象に留め置かれていたのである。

つまり看護婦たちもまた、お蘭とおなじ明治社会の周縁者、性的規範の逸脱者にはかならなかつたわけである。篤志看護婦という女性シンボルは、その晴れがましい表象の内に矛盾を抱え込んだ存在

だったのだ。

『暗夜』というテキストは、〈外面似菩薩、内心如夜叉〉をキーワードに、お蘭という擬似看護婦を表象と実像が分裂した女性として造形することによって、当時おびただしく生成されていた篤志看護婦をめぐる美的表象の虚構性を、期せずして暴露してもいるのではないだろうか。

だがテキストはそれに留まることなく、より高次の女性表象がはらむ矛盾をも、問わずがたりに語ってしまっているのである。

四．「女夜叉」と「花紅葉ゆかしの女」

一八九五〔明治二八〕年五月末、三国干渉に対する世論の憤激は沸点に達していたものの、天皇と皇后のあいづく凱旋帰京によって帝都が戦勝奉祝ムード一色に包まれていた頃、一葉と花圃はそれぞれ次のような文章をものしている。

空くもれり 今日ハきささきの宮の還幸あるへき日なれはいかて雨ふらさらんやうにといのる

（一葉『水の上』一八九五〔明治二八〕年五月三一日）

皇后宮「…」御賢徳をひろく志らせまほしくて、こゝにかいつけんとう「…」去年より吹あれし浪風のはげしかりしを、いかに御心なやまさせたまひけん、海なす御心の廣島に、勝軍の志らせはうちつゞきぬとも、おほとのごもりも安うはあらで、仮宮におほんみづから旅たゞして、上の御けしきうかゞひ給ひけん、御操のうるはしさ、きづつきぬるをしたしうとはせたまひけん御なさけの深さに、つはものもいよくいそしみて、かの嵐は名残なう吹晴れ「…」⁸²

（花圃女史「特別寄書 梅雨のつれく」『婦人新報』第五號、一八九五〔明治二八〕年六月二八日）

他の世事の記述にくらべて日清戦争に関するそれが些少かつ淡泊な点で示唆的⁸³な一葉の日記『水の上』だが、この日一葉は例外的にも皇后が行啓地・広島から「還幸」する旨を書きつけ、その帰途の天候にまで心配りをみせている。一方の花圃もまた、率先して広島大本営に赴き皇軍を鼓舞した皇后の「御操のうるはしさ」と、皇后みずから設立に尽力した広島予備病院へ傷病兵慰問に駆けつけた「御なさけの深さ」を称え、その二つの「御賢徳」がどれほど皇軍を力づけ、勝利に絶大な寄与をしたかを縷々説いている。つまり戦争終結に際して、閨秀文壇を代表する二人の女性作家は間接的・直接的の違いこそあれ、比喩的にいえばその墨蹟に濃淡の差こそあれ、共に美子皇后の戦時における行跡について言及しているのである。

怖れず野営地に赴きつわもの達を激励すると同時に、厭わず野戦病院を訪れ負傷兵を慰めるといった美子皇后の行跡——花圃流にいえば「御賢徳」とは、勇ましさと慈悲深さの兼具にあるといえようが、それはそのまま雄々しさと慈愛にみちた優しさを併せもつ篤志看護婦像に重なることに気付く。だがそれもそのはずで、そもそも日本赤十字社篤志看護婦人会自体が美子皇后の令旨によって結成されたことから明らかなように、ドイツ帝国皇后兼プロイセン王国王妃アウグスタによって提唱された報国恤兵思想の献身的な実践者であった美子皇后は⁸⁴、いわば看護婦の統合的象徴として、のみならず全ての女性役割の包括的象徴として、「慈母」「国母⁸⁵」と崇められていたのである⁸⁶。

当時メディアにおいて、美子皇后の誕生日を奉祝する地久節がさかんに称揚され、その祝日化が熱心に叫ばれていたのも⁸⁷、この美子皇后Ⅱ「慈母」「国母」の表象が広く一般化していた現れであろう。英字紙『ジャパン・メール』（一八七〇〔明治三〕年に横浜で創刊）においても、「看護婦教習所を持つ慈善病院」にみずからの御手許金を拠出し、篤く保護する美子皇后に対して、「敬意と敬愛の念を表明する」社説が当時掲げられていたことを、アリス・ベーコンは『明治日本の女たち』で印象ぶかく綴っている⁸⁸。

上掲した一葉と花圃のテキストは、こうした時代文脈のなかで書かれていたのである。つまり、篤志看護婦をもって日清戦争期の唯一の女性シンボルと考えるのは誤りであり、篤志看護婦たちの頂点に立つて戦期における女性規範を真に体现していたのは、美子皇后その人だったのである。

論じてきたように『暗夜』の要諦は、「女菩薩」そのもののお蘭が、じつはその戦時女性規範をめぐりに裏切る「女夜叉」にほかならなかった点にあるが、だとすれば彼女は先ず、くだんの女性規範の真の体现者たる美子皇后に相似していなければなるまい。関礼子氏も「貞淑さの影に実は年下の男性を鼓舞する烈女であった」という明治皇后美子像を象徴的な女性表象とする日清戦争期との関連は興味深い⁸⁹と、その『暗夜』論で註を加えているが、以下では美子皇后の表象を瞥見しながら、お蘭との共通項を具体的に検討してみたい。

物語内時間における美子皇后の表象は、楊斎延一『銀婚式大典奉祝之図』（一八九四〔明治二七〕年錦絵）、小林清親『野戦病院行啓之図』（一八九五〔明治二八〕年）、同『皇后陛下の御仁慈』（一八九五〔明治二八〕年錦絵）の三枚の画布が如実に示している⁹⁰。『銀婚式大典奉祝之図』の美子皇后は、洋装の天皇とは逆に古式ゆかしい十二単に身を包んでいるが、それは戦争勃発による復古的気運の高揚を背景に、皇后のしとやかな伝統的女性イメージが強調されたためであろう。ここで思い起こされるのが、テキスト冒頭で語られる「夕顔」に擬されたお蘭の和装姿である。「こちたき髪の「…」おのづからの緑したゝらん計なるが肩にかゝ」った垂髪に象徴されるいかにも平安風なそのシルエットは、楊斎延一描くところの美子皇后像にそのまま重なり合う。あるいは清少納言ながら「秋は夕ぐれ夕日花やかにさして、ねぐらにいそぐ鳥の声さびしき比「…」籬の菊に日映りのをかしき」さまを愛でる、そのゆかしき姿を、純和風のよそおいを凝らして観菊園遊会に毎年臨んだとされる美子皇后⁹¹と重ね合わせてもよいだろう。まずは身体表象において、両者の相似性が確認できるのである。

他方、清親の筆がとらえた二つの皇后像は、広島予備病院に行啓する姿と、眼前の机に山積された包帯を軍人に与える姿であるが、ここでは看護を通じて国家奉仕にいそむ、例の優しくも凛冽とした「国母」のイメージが提示されている。じじつ、負傷兵や出征軍人に手製の包帯や防寒用真綿などを惜しげもなく下賜したといわれる皇后⁹²は、「ナイチンゲールの再来」と讃嘆され「仁慈の女神⁹³」とも恭敬されていたと同時に、微恙の天皇に代わって軍艦に果敢に乗り込むなど⁹⁴、三歳年少の天皇を凌駕するほどの気丈さでも知られていた⁹⁵。

見てきたようにお蘭もまた「女菩薩」として直次郎を優しく救済する一方で、「強き心」で彼を先導してゆく年上の女でもある。元田永孚をして「堅忍謹慎ノ厳正ナルハ決シテ男子ノ及フ所ニ非サル⁹⁶」と感歎せしめた美子皇后に、神功皇后を想起させる「戦鬪的な守護女神⁹⁷」のイメージを託した画こそが、原田直次郎の傑作『騎龍観音』（一八九〇〔明治二三〕年）だが⁹⁸、「女子なれども計り難き意志」を秘めもつお蘭もまた、両性具有的な「観音さま」に譬えられていたことを思い出した。つまり両者は、女性性と男性性の兼備という点において、観世音菩薩という具体的比喻まで一致して

いるのである。「天のなせる麗質よきは顔のみか、姿とゝのひて育ちも見事に、斯くながら人の妻とも呼ばれたれば、打つに点なき潔白無垢の身なりける」お蘭は、「日本女性の最高最美の権化。」⁹「日本女性の模範¹⁰⁰。」と絶賛された美子皇后の表象に、かくも近似しているのだ。

ちなみに、お蘭が「女夜叉」としての相貌をはじめて露わにした場面（その七）に挿入された謎のような一語「千載の後まで花紅葉ゆかしの女に成りおほせ」¹⁰¹は、この美子皇后像を想定した言葉なのではあるまいか。一葉の日記における言語態を委細に分析した野口碩氏に従えば¹⁰¹、一葉にとつて「花紅葉」とは、塵にまみれた市井の労苦とはおよそ無縁の優雅な風流韻事や上綺羅などを象徴する言葉、すなわち明治最上流階級の換喩である。ならば、なかでも「千載」＝千年の後までその令名を残すことのできる女性は、皇后をおいて他にあるまい。

だとすれば、「巫峡の水の木の葉舟かゝる流れに乗りたる〔…〕悲しき怕さ口惜しき」を味わいつくしたのちに、一転して、「悪ならば悪にてもよし、善とはもとより言はれまじき素性の表面を温和についでいざ一と働き、仆れてやまば夫までよ」「とても狂はゞ一世を闇にして、首尾よくは千載の後まで花紅葉ゆかしの女に成りおほせ」と不敵に言い放ち、まさに〈外面似菩薩、内心如夜叉〉に成りおほせることを決意したお蘭は¹⁰²、このとき〈菩薩〉の体現像として「千載の後まで花紅葉の女」＝美子皇后を思い浮かべていたわけである。

これまで見てきたように、戦争前後を通して美子皇后をめぐる美的表象は日々生成され、人々の内に深く浸透していた。本節冒頭に掲げた一葉の日記もそうであったように、同時代メディア言説や視覚表象をおのずと反映させているテキスト『暗夜』それ自体が、お蘭の「打つに点なき」「表面」すなわち「女菩薩」にも似たその「外面」を、勝利と救済の美神・観世音菩薩の化身と崇められて止むことのなかった美子皇后に重ね合わせていたのである。

五・ 閨秀〈花檀〉における『暗夜』の異色性

明治近代に生きる女たちのなかで紛れもなく周縁に位置するお蘭が、女たちの最高位に座する美子皇后に相似している。のみならず、国家に加護と安寧を授ける観世音菩薩になぞらえられる美子皇后と同じ「女菩薩」とたとえられる彼女は、じつは当の明治国家におのがルサンチマンの刃を突きつける「女夜叉」である——この大胆きわまりない転倒の構図に、『暗夜』の特異性を看取することができるだろう。

だが『暗夜』が真に特異な点は、お蘭が、戦時女性表象の下に隠された現身の美子皇后にも、きわめて類似していることにこそあるのだ。

たとえば憲法発布祝賀パレードでは、ダイヤモンドがちりばめられた宝冠と裾長のドレスで正装し、天皇と仲睦まじく馬車に同乗して、近代国家の后にふさわしい麗姿をはじめて国民の前に現れた美子皇后だが¹⁰³、この時じつは皇后は、片野真佐子氏の言葉を借りれば「自らの性的屈辱を隠そうともせず時流の先端を指し示¹⁰⁴」そうとしていたのだった。つまり、そこに参列した国民はみな、『雲上新聞』や噂話などを通じて後宮の存在を熟知していたのであり、数カ月後に立太子礼をおこなう予定の明宮嘉仁の生母が美子皇后ではなく、天皇の寵愛する権典侍・柳原愛子であることも周知の事実だったのである¹⁰⁵。たとえば当時、華族女学校や東京女子高等師範学校で教鞭をとっていた前出アリス・ベーコンも次のように記している。「皇后御自身は子宝に恵まれず、夫と他の女性とのあ

いだに子が生まれるのを目のあたりにすることになった。その子が皇位を継ぐことになる。このようななか、孤独で不幸な思いもしているに違いない¹⁰⁶。」

「小柄で、華奢で、腺病質で〔…〕肺炎、脚気、赤痢、リニューマチ〔…〕およそ考えられるかぎりの病気に次々に罹った¹⁰⁷」ためか、子をなすことのなかった美子皇后は、それでも国民の前で懸命に近代国家の后としての役割を務めつづけた。その晴れやかな表象とはうらはらな陰影をまとった美子皇后のこうした実像は、婚約者波崎の心移りという「人しらぬあはれ」を抱えたお蘭をめぐる物語言説——「哀れお蘭が独寝の枕に結ばぬ夢の行衛はこれなり、誰が為まもる操の色ぞ松の常盤もかくては甲斐なき捨てられ物に、一身つくく」と観じては〔…〕生ざりの経仏に為事なしのあきらめ——と奇妙な一致をみせてはいないだろうか。しかも、皇后を暗喩する例の言葉「千載の後まで花紅葉ゆかしの女」が登場するのは、この語りの直後なのである。

つまり、濃密な闇に閉ざされた廃邸の女主お蘭は、日清戦争期の輝かしい女性シンボル・美子皇后ないし看護婦の、うるわしい表象の下に隠蔽された実像を一身に体现する存在として、描出されているのだ。女性誌メディアや視覚表象にはけっして現れ出ることのない、あつてはならない女性シンボルたちの影——「暗」の部分を引き受けているのがお蘭なのであり、それゆえにこそ彼女は他者なのである。

ここでもう一度オリエンタリズム論を援用すれば、他者とは自己——ここでは美子皇后や看護婦——の否定的イメージが具現化された存在であり¹⁰⁸、その「不在を前提」とする「虚構¹⁰⁹」にほかならない。そうしたお蘭のフィクション性、つまりは他者性を証し立てるかのようには、テキストは彼女にかんする生活実態をいっさい示さず¹¹⁰、彼女の存在を唯一証明していたはずの松川邸も瓦解させ、彼女の生の痕跡を完全に消した「怪しき」結末を用意したのではあるまいか。

だが、他者が自己の影——「暗」を恣意的に投射した虚構¹¹¹であるならば、時代に言祝がれる美子皇后たちもまた、お蘭とおなじ影——「暗」を有しているということだ。いうなれば美子皇后たちとお蘭は、ひとりの女性の美しく化粧の施された顔とその下の素顔なのであって、懸隔ある別人なのではない¹¹²。『暗夜』とは、奇しくも「怪し」くも、そのことを物語ってしまったテキストなのである。闇ではいっさいの光が失われている代わり、影もまた存在しえないように、まさしくテキスト『暗夜』^{やみよ}のなかでは、光輝あふれる美子皇后たちも、暗影を背負ったお蘭も、その輪郭の差異を失っている。プロット展開とは直接関与せず、時間軸も曖昧で非現実的な、きわめて独立的な節(その四)に挿入されている意味深長な言葉「醜美善悪曲直邪正、あれもなし、これもなし」とは、この差異の消滅の謂であり、テキストの核心に触れる言辭として読むべきであろう¹¹³。

*

『暗夜』が再掲された『文藝倶楽部 特集閨秀小説』は、近代メディア史上はじめて、女性作家たちの肖像写真を掲げたことで知られている。博文館ならではの、この新奇な企画には¹¹⁴、たしかに「女性作家に刻印されたジェンダーを明瞭にみる¹¹⁵」ことができよう。同号巻頭を飾る中島歌子の和歌「石山寺のむかしおぼえて／優にうるはしき作家たちのみ／つどへたまへりときゝて」「花といふ／花をあつめし／こゝちして／みるふみいかに／たのしかるらん」が如実に謳っているように、この時期、閨秀作家に求められていた物語は、花のようにうるわしく楽しいそれであった。

だが同時に、この閨秀作家の写真掲載という斬新なところみは、自社刊『日清戦争実記』(二八九四〔明治二七〕年)が新技術である写真銅版口絵を多用したことによって空前の売上げをしるした¹¹⁶経

験を踏まえたものだったのであり、そのこと一つをとっても、同特集号には戦争の記憶もまた、はっきりと刻印されていたとみるべきであろう。たとえば本稿で取りあげた同号所収の『萩桔梗』や『手箱の内』なども、花やかな楽しさを奥ゆかしく漂わせるなかにも、戦時における女性規範を余すところなく明示していたのだった。

そうした閨秀小説のうるわしい花壇にあって、『暗夜』はその異色性を際立たせずにはいないテキストなのである。

*今日では「看護師」と記述すべき箇所は、テキスト初出時の呼称に従い「看護婦」とした。また、閨秀作家、閨秀小説は、その漢字表記それ自身が「女性作家に刻印されたジェンダー」（前出、関礼子氏）を本質的に表していることを念頭において記述されている。

¹ 『暗夜』テキスト（未定稿をふくむ）引用は、塩田良平・和田芳恵・樋口悦編纂『樋口一葉全集 第一巻』筑摩書房、一九七四年、所収による。その他、和田芳恵、解説注釈『やみ夜』前掲『日本近代文学大系 第八巻 樋口一葉集』、菅聡子校註『暗夜』、関礼子・菅聡子、校註『樋口一葉集 新日本古典文学大系 明治編 二四』（岩波書店、二〇〇一年）所収も併せて参照。

² 『暗夜』の「引用の織物としての「テキスト」が本来的にもつ複数性に着目した「相互テキスト性」（七八頁）について、関礼子『暗夜』の相互テキスト性再考』『国文学 解釈と鑑賞』二〇〇三年五月号、参照。

³ 前田愛「一葉の転機―『暗夜』の意味するもの」『樋口一葉の世界』（平凡社ライブラリー）4、一九九四年）は、「蓬生」と「夕顔」の巻の「イメージを透き写しにこの物語を読みすすめて行く姿勢」を読者に要請している（二五〇―一五一頁）と述べている。

⁴ 同書、一六〇頁。

⁵ 菅聡子校註、前掲『暗夜』関礼子・菅聡子校註、前掲『樋口一葉集』所収、五〇四頁、補注、及び、高田知波「鉄道と女権―未来記型政治小説への一視点」『国語と国文学』一九九三年五月号。

『暗夜』が再掲された『文藝倶楽部第十二編 臨時増刊 閨秀小説』（二八九五〔明治二八〕年二月）に所収された他のテキストにも「その頃は鉄道も已に開通せしかば」（かざしの花『村時雨』八九頁）などの記述が見られる。

⁶ 菅、関、校注、前掲書、一〇一頁。

⁷ 北川秋雄「やみ夜」論―年上の悪女―、樋口一葉研究会編『論集樋口一葉』（おうふう、二〇〇二年）九―一〇頁には、『暗夜』の典拠をめぐる論攷が総覧的に挙げられており、参照した。

⁸ 関、前掲論文（『暗夜』の相互テキスト性再考）、八〇頁。

⁹ 山根賢吉「第二部 項目篇 萩の舎」前掲『樋口一葉事典』二八七頁。

¹⁰ 出原隆俊氏は『暗夜』の背後』『日本近代文学』第五三集、一九九五年五月において、『御伽草子』『うたゝね』『湯島詣』をその典拠として挙げながら「美人の修辭一般ではない」「仏の三十二相としての「柳眉」（一六頁）であることを指摘している。

¹¹ 菅、関、校注、前掲書は『法華経』「観世音菩薩普門品第二十五」（七三頁）の影響を、和田、解説、注釈、前掲書は『観音経』（二一九頁、四〇九頁）の影響を指摘する。

¹² 目崎徳衛『王朝のみやび』（吉川弘文館、一九七八年）二一九頁。

¹³ 田沢稲舟『しろばら』『文藝倶楽部 臨時増刊 閨秀小説』第一卷第十二編、一八九五〔明治二八年〕年二月、一〇五頁。

¹⁴ 花圃女史『萩桔梗』『文藝倶楽部 臨時増刊 閨秀小説』第一卷第十二編、一八九五〔明治二八年〕年二月、一三三頁。

¹⁵ 生方敏郎『明治大正見聞史』（底本『明治大正見聞史』春秋社、一九二六〔大正一五〕年）（中公文庫、一九七八年）三七頁。

¹⁶ 平田由美『女性表現の明治史』（岩波書店、一九九九年）第三章 女の小説を読む 四 挫折する共同性——「萩桔梗」においても、「愛子という特志看護婦のヒロインの登場は、まさに日清戦争後、新聞紙面に軍人の妻や娘たちによる銃後の働きがにぎにぎしく掲げられ時期であった」（二一五頁）と指摘されている。看護婦に象徴される日清戦争時の女性役割と同時代小説のヒロイン像の関係分析について、同書を参照。

¹⁷ 一例をあげれば、『婦人矯風会雑誌』第一号、一八九三（明治二六）年一月にも「看護談」という特集が編まれ、その中で「竹中すえ子 赤痢に罹りし者の心得」（目録二二頁）が掲載されている。また『文藝倶楽部第八編』巻頭頁にも、看護婦を描いた梶田半古の口絵「水雷士官」が掲げられるなど、看護婦をめぐる表象が生成されていた。生方、前掲書にも、日清戦争時に前橋郊外で催された幻燈会で「赤十字の看護婦が負傷兵を世話している図があらわれた」（四三三頁）とある。

¹⁸ ベネディクト・アンダーソン 白石隆・白石さや訳『想像の共同体 ナショナリズムの起源と流布』（リブポポート、一九八七年）

¹⁹ 「雑報」表題「婦人従軍を願ふ」『婦人矯風雑誌』第一〇号、一八九四（明治二七）年八月二日、三五頁。

²⁰ 日本赤十字社編刊『日本赤十字社史稿』（出版社名不記載、一九一一（明治四四）年）九〇二頁。なお亀山美知子『近代日本看護史』日本赤十字社と看護婦』（ドメス出版、一九八三年）二二二頁にも同文が引用されている。本稿における近代日本の看護婦に関する記述は、同書の他、亀山美知子『近代日本看護史』戦争と看護』（ドメス出版、一九八四年）、同「看護婦の誕生」、奥田暁子編『女と男の時空—日本女性史再考— 関ぎ合う女と男—近代』（藤原書店、一九九五年）所収を併せて参照した。

²¹ 神戸務『日本赤十字社発達史』（帝國癩兵慰藉會、一九〇六（明治三九）年）四八三頁。

なお亀山、前掲書（『近代日本看護史』）二四頁にも同文が引用されている。そうした「一般社會ノ健康ヲ維持シ戦時ニ於テハ負傷軍人ノ患苦ヲ安慰シ由テ以テ一層ノ勇氣ヲ振起セシムル」（前掲『日本赤十字社史稿』九〇二頁）ような敬重される看護婦を育成することは、既に公衆衛生学の確立を果たしていた欧米列強に日本の先進性をアピールするための外交上の政策でもあったとされる（亀山、同書『近代日本看護史』、二四頁）。

²² 同書（『日本赤十字社史稿』）、九〇三頁。亀山、同書（『近代日本看護史』）、二二二頁にも同文が引用されている。

²³ 亀山、同書（『近代日本看護史』）、二七頁。これは西欧、なかんずくドイツ帝国のアウグスタ妃が、自らの名を冠した病院を設立するなど、看護事業に熱心に携わっていた事情を岩倉使節団が見聞したことによる輸入思想である。美子皇后と看護事業との関わりについては、若桑みどり『皇后の表象』（筑摩書房、二〇〇一年）における章「皇后の国家的役割—看護・殖産・教育」に詳細である。その他、オットマール・フォン・モール、金森誠也訳『ドイツ貴族の明治宮廷記』（新人物往来社、一九八八年）にも「ドイツ帝国皇后兼プロイセン王国王妃アウグスタの実例が、日本の皇后にとつて模範となった（…）皇后がぜひ知りたいた願われたのはこうした王妃としての仕事」（五四頁）であり、その実践としてアウグスタ病院に倣った衛戍病院が設立された（六五—六七頁）とある。

²⁴ 大山捨松たち名流婦人が慈善・看護活動を展開した経緯やその活動内容に関しては、久野明子『鹿鳴館の貴婦人大山捨松』（中央公論社、一九八八年）、参照。

²⁵ 名流婦人たちの動向を熱心に伝えていたのは女性誌だけではない。例えば『文藝倶楽部』第九編、一八九七（明治二八）年九月二〇日、「雑報」欄にも「伊藤梅子、大山捨松、松方満左子」ら「各大臣夫人の如み」（二三四頁）が挙げられているように、当時、名流婦人らは新興する雑誌メディアにとつて格好の取材対象だった。

²⁶ 平田、前掲書にも、「ナイティンゲール伝」「女性に共同結社の力ありや」「看護婦の資格」など、『女學雜誌』で編まれた看護婦関連記事が紹介されている（一一四—一一五頁、二四五頁、注釈）。

²⁷ 亀山、前掲書（『近代日本看護史』）、二二二頁。

²⁸ 神戸、前掲書、四八八頁。同書（亀山『近代日本看護史』）、四八—四九頁にも同比例「白衣

観音」について言及されている。

²⁹ 「此ノ役ヤ、全国ノ有志者争テ廣島ニ来リ、患者ヲ慰問スルト同時ニ看護婦ノ行動ヲ実見シテ感賞セザルナシ〔…〕東髪ハ報国結ト謡ハレ、白衣ハ名誉服ト称セラレ、妙齡ナル婦女子ノ如キハ、俄カニ看護婦志願ノ念ヲ生ジテ、赤十字出張所ニ願書ヲ呈出スルモノ日々絶ユルコトナク」（同書『神戸』、四八九―四九〇頁）、『日清日露の両役には、白い帽子に白い服の看護婦なるものが人目を引いた。ことに赤十字の看護婦は全国の良家の子女にさえも、その志願者を得たことである。〔…〕とても現今の看護婦のような人気のないものとは同日の談ではなかった。』（生方、前掲書、二二七頁）

³⁰ 亀山、前掲書『近代日本看護史』、五四頁。

³¹ ジーン・ベスキー・エルシュテイン、小林史子、廣川紀子訳『女性と戦争』（法政大学出版局、一九九四年）二八四頁。従軍を含めた看護婦一般の表象について他に、イヴォンヌ・クニビレール、カトリヌ・フーケ、中嶋公子、宮本由美訳『母親の社会史』（筑摩書房、一九九四年）、アーン・ハドソン・ジョーンズ編、中島憲子監訳『看護婦はどう見られてきたか―歴史、芸術、文学におけるイメージ』（時空出版、一九九七年）、参照。その二書（エルシュテイン、クニビレール）に関する言及も含む「非戦闘員としての女性が戦時に担う一般的役割」については、若桑みどり『戦争がつくる女性像』（ちくま学芸文庫、二〇〇〇年）、参照。

³² 同右（エルシュテイン、二八四頁）。

³³ 同右。

³⁴ 田山花袋『東京の三十年』「出発の軍隊（日清戦争）」（底本『東京の三十年』博文館、一九一七〔大正六〕年）、平岡敏夫、監修、解説『明治大正文学回想集成2 東京の三十年』（日本図書センター、一九八三年）、九三頁。

³⁵ お蘭は直次郎が快復するやいなや、「夢に見たりし女菩薩をお蘭さまと為れば、今見るお蘭さまは御人かはりて」と彼が当惑するほどに「恐ろしく怕きやう」に変貌してしまう。

³⁶ お蘭は直次郎を看護する以前から「天地に一人の父をうしなひて、しかも病ひの床に看護の幾日」を過ごしているためか「気の付しと見ゆるに葉今すこしという声その枕に聞えて」「酷く疲れて居るらしければ、静かに介抱して遣るがよし」など、その看護の様子は手馴れている。他にも「老爺は不起の病にかゝりぬ、観念の眼かたく閉ぢては今更の医薬も何にかはせん」「これも天寿と医薬の後ならばさても有るべし」「医者になるは芋大根つくりたてるとは豎が違ふぞ」「医は仁術と勿体ぶる事穢なし」など、テキストが意外なほど多く医学にまつわる挿話を含んでいることも単なる偶然ではないだろう。何より直次郎自身が「一郷の名医」といわれる祖父をもち「こゝ東京に医学の修業して聞つたへたる家の風いざや、とばかり」粒々辛苦していたさなか、お蘭と邂逅したのだった。

³⁷ 「○佳伝 ナイティンゲールの傳（一）」「女學雜誌」第三拾一號、一八八六（明治一九）年八月五日、一三頁。平田、前掲書にも掲げられている、香軒生「看護婦の資格」『女學雜誌』第二百三十七號、一八九〇（明治二三）年一月一日では、冒頭、看護婦の理想的範型として「健康、克己、信實、清潔、明察、精密、節制、秩序、従順、温和、硬直、美声、美風」（二二三頁）が挙げられている。

³⁸ 『日本赤十字』第二十九號、一八九四（明治二七）年二月二二日、四〇―四一頁。亀山、前掲書『近代日本看護史』四九頁にも同文の一部が紹介されている。

³⁹ 横山順編『幼年教育 婦女鑑』（明昇堂、一八九四（明治二七）年）「緒言」にも、「婦女子の道は一途ならず〔…〕不幸にて如何に困しきことありとも心を渝えず其苦を夫と共にし又時として男勝りに勇氣もなくばあらず」（一頁）と諭されている。美子皇后の内旨により編纂された女訓書については、若桑、前掲書『皇后の肖像』、『明治孝節録』と『婦女鑑』のモラル、参照。

⁴⁰ 亀山、前掲書『近代日本看護史』、二七頁。

⁴¹ 日本赤十字社編刊、前掲『日本赤十字社史稿』、九〇二頁。

⁴² 「衆生を救うためにさまざまに神通変化するといふ」属性を見届けてみるとはじめから男性身とか女性身とかにこだわることなく、仏教的尊像として成立し、多様な形象を展開した菩薩である」（金岡秀友、柳川啓一監修『仏教文化事典』佼成出版会、一九八九年、四八九頁）と定義されるものの、

その起源をめぐって「元来はイラン系の女神で〔…〕佛教では男子化された。そのため、鬚をはやしており、また女性の局部のシンボルである蕾の形の蓮を持つことが多い」（岩本裕『日本佛教語辞典』平凡社、一九八八年、一六四頁）とも説明される観音は、「両性具有的」（中村生雄「観音信仰と日本のカミ——とくに「自然」と「身体」の視点から」、速水侑編『観音信仰事典』戎光祥出版、二〇〇〇年、所収、二四九頁）な画像をとる尊像である。ただし彌永信美『観音変容譚 仏教神話学Ⅱ』（法蔵館、二〇〇二年）によれば、「インド以来、菩薩は基本的にすべて男性と考えられ〔…〕観世音菩薩も、当然男性の尊格として信仰されて」おり、「ある時代以降の中国および朝鮮半島と、そして日本で（そしておそらくヴェトナムで）観音が広く女性神と信じられるようになったことは、きわめて驚くべき例外である」（二五二頁）という。

⁴³ 花圃女史、前掲『萩桔梗』、七頁。

⁴⁴ 若桑、前掲書（『皇后の肖像』）、二七八頁。

⁴⁵ 篤志看護婦人会会長は鍋島直大夫人・栄子だが、彼女が萩の舎主宰・中島歌子と旧来より親交し、同門代表格をも務め、歌子は鍋島邸に出稽古に赴いていたことを思えば、萩の舎内弟子だったこともある一葉自身も篤志看護婦人会に関する何らかの情報を得ていたと推測されよう。但し一葉の日記における鍋島家に関する記述には、同婦人会に関する直接的な言及は見当らない。

⁴⁶ 日本赤十字社編刊、前掲『日本赤十字社史稿』、九〇四頁。

⁴⁷ 一葉は萩の舎に集い来る貴顕夫人・令嬢たちを「高等婦人」（『につ記 二』一八九二〔明治二一五〕年三月一〇日、前掲『樋口一葉全集 第三卷（上）』所収）と称し、自身の境位との懸隔を痛切に表現している。

⁴⁸ 永谷健『富豪の時代 実業エリートと近代日本』（新曜社、二〇〇七年）によれば、明治二〇年代前半、雑誌メディアは「成功致富した新興商人」に対して、「政府の「寄り木」となって成功した商人」の意として「御用商人」なる「表現」（九六頁）をしばしば用いていた。同時に、「巧みに金銭を扱う商人」の意として「きわめて批判的」に「山師」「詐欺師」といった類の表現（同頁）をも使っていたという。同書「第一部富裕層への視線 奸商イメージの時代—明治二十年代前半」は、『暗夜』執筆に近い時期における新興商人たちが、「維新前後の混乱期に乗じて富を得た「僥倖」者であり、その「僥倖」をわがものとした「詐欺師」のイメージ」として、又「庶民に重税が課せられているのは「殖産策」の一環で政府が御用商人たちを保護しているためであるから、彼らは「一般人民学識なきが為め此機に乗じ不正の行を以て賭博場裡に奔走し時に奇利を博した「奸商」（以上すべて九六頁）であるとして眼差されていたことを詳細に論じている。このかぎりにおいては、お蘭の父は、必ずしも字句通りの「山師」すなわち鉱山開発のみに携わっていたわけではないことになるう。⁴⁹ 鈴木淳「第四章 重工業・鉱山業の資本蓄積」、石井寛治・原朗・武田晴人『日本経済史 一 産業革命期』（東京大学出版会、二〇〇〇年）所収、一三四頁。

⁵⁰ 同右。

⁵¹ 森山重雄「一葉の「やみ夜」と相馬事件」『日本文学』一九七一年四月は、「毒味の膳に当てられて一人犠牲にのぼりたるこそ」の記述の背景に、相馬家旧藩主・誠胤が「一時毒殺されたものとして報道された（解剖の結果、死因は毒殺ではなかった）ことを踏まえているようである」（五八頁）など同時代史実を照覧した指摘を交えつつ、「やみ夜」はその背景を相馬事件によって構想し、おのれの零落した姿をお蘭に託しながら、政商社会への批判に立ち向かった作品である」（五九頁）と結論づけている。前田愛氏は同論文について『暗夜』と相馬事件との関連にやや重きをおきすぎている点に疑問がのこるが、一葉の作品系列における『暗夜』の位置にはじめて正当な評価をくだしたすぐれた論考である」（前田、前掲書『樋口一葉の世界』「一葉の転機—「暗夜」の意味するもの」、一七八頁）としている。相馬事件をめぐっては、錦織剛清『神も仏もなき闇の世の中』（底本、春陽堂、一八九二〔明治二五〕年）『明治文学全集 96 明治記録文学集』（筑摩書房、一九六七

年）所収、参照。

⁵² 古河市兵衛を山師とみなす巷談を裏付けるエピソードとして、澁澤栄一による古河市兵衛評を以下に掲げる。「何しろ無闇と山を買込む。其の買込方も頗る大雑把のやり方で、大概は一目見て好い加減に鑑定を下し、どしどしと買取つて仕舞ふ。〔…〕一度自分で見込を附けたが最後、何と云はれても勇往邁進、窮極に達しなければ止まぬので、之が為に損害を被つたこともある。氏は洵に

珍らしい進取的人で、鉦山にかけては殆ど猪突的であった」（傍点原文、澁澤榮一『青淵百話坤』同文館、一九一二年〔明治四五〕年、五九一―五九三頁）。なお、古河の陰画としての父像については、終章で詳述した。

⁵³ 山路愛山『現代金権史』（初出『商工世界太平洋』一九〇七年三月―二月連載）、大久保利謙編『明治文學全集 三五 山路愛山集』（筑摩書房、一九六五年）所収、一一頁。

⁵⁴ そうしたオリエンタリズムをめぐる学知を代表する論攷として、丹治愛「フイクションとしての他者 オリエンタリズムの構造」『知の論理』（東京大学出版会、一九九五年）所収、参照。

⁵⁵ 川本三郎氏は、その優れた廃墟論であり佐藤春夫論である「廃墟のなかの幻覚」『大正幻影』

（新潮社、一九九〇年）において、谷川渥「形象と時間」を引用しながら、「日本文学の場合、廃家の特徴づけるのは「植物の繁茂」である」「廃園には人間の力（文化）を無視するように「植物の繁茂」が始まる」（二八四頁）と述べ、近代日本文学に描かれた廃墟・廢園が「生産性や効用性を重視する都市（文明）」（一八三頁）のアンチテーゼであったと指摘している。

⁵⁶ 若桑、前掲書『戦争がつくる女性像』第一章「チアリーダー」「戦争援護」集団としての女性の動員」（一一五頁）、参照。ここではホメロス『イーリアス』やプルタルコス『倫理論集』から日本の国定教科書、『主婦之友』にまで広汎に認められる戦争「チアリーダー」としての女性像が例示されている。

⁵⁷ 藤島雪子『手箱の内』、前掲『文藝倶楽部 臨時増刊 閨秀小説』第一卷二二編、一八九五〔明治二八〕年一二月、一五一頁。ちなみに同テキストにおける西洋とオリエント（支那人）「黒人」をめぐる二項対立的描写は、まさしく典型的なオリエンタリズム的視点に貫かれており、一九世紀末日本の女性作家の手になるオリエンタリズム小説の好例として同テキストは一考に価するであろう。追って別稿を期したい。

⁵⁸ 前田、前掲書『樋口一葉の世界』、一七六―一七七頁。

⁵⁹ 亀山、前掲書『近代日本看護史』、四七頁。

⁶⁰ 日赤看護婦取締・高山盈子による檄という（同右）。なお、平田、前掲書にも同様の引用がある（一一六頁）。

⁶¹ 同右（亀山『近代日本看護史』）。

⁶² 花圃女史、前掲『萩桔梗』『文藝倶楽部 臨時増刊 閨秀小説』、二二頁。

⁶³ 菅、前掲、校注『暗夜』は、次のように述べている。「お蘭の造型にかかわると思われる「外面似菩薩、内心如夜叉」（外面は菩薩に似て、内心は夜叉の如し）は『宝物集』巻五にみられる。『宝物集』の叙述は以下の通り。所有三千界 男子諸煩惱 合集為一人 女人之業障 女人地獄使 能断仏種子 外面似菩薩 内心如夜叉〔…〕この部分の出典を、『涅槃経』とする伝本と、『法華経』とする伝本とが存在するが、いずれにも当該場面はない。なお存覚「女人往生聞書」（元亨四年）には、『唯識論』にはく、「女人地獄使永断仏種子外面似菩薩内心如夜叉」。この文のこゝろは女人は地獄のつかひなり、ながく仏の種子をたつ、ほかのおもては菩薩にいたり、うちのこゝろは夜叉のごとしとなり」とあり、また日蓮『女人成仏鈔』（建長五年）には「されば華嚴経ニ云ク女人地獄使能断仏種子外面似菩薩内心如夜叉 云々」とある。（五〇三頁）

⁶⁴ 「外面似菩薩、内心如夜叉」の出典について、中村元、福永光司、田村芳朗、今野達、末木文美士『岩波 仏教辞典 第二版』（岩波書店、一九八九年）には、以下のように記されている。「日蓮遺文にちれんいぶんには「華嚴経に云く」として紹介され、存覚そんかくの『女人往生聞書』には「唯識論にはく」として掲載されているが、いずれの経典や論書にも、このことばは見あたらない。

最古の用語例は『宝物集』（1200年以前）に見られ、古本系は涅槃経、改変本は華嚴経の所説としている。日蓮・存覚もこれに依つたもので、もとは安居院あぐい流の唱導などが、不邪姪を説く説法の方便として作出した句かと考えられる。（二七九頁）また、中村元『広説 佛教語大辞典 上巻』（東京書籍、二〇〇一年）には、『成唯識論』『華嚴経』『大宝積経』などに出ているというが見当たらない。おそらく日本で平安時代につくられた句であろう（三八七頁）とあり、岩本、前掲書『日本佛教語辞典』にも、「この句の出典について、『成唯識論』『大智度論』『華嚴経』『大宝積経』『涅槃経』などとする説があるが、詳細は不明。平康頼の『宝物集』に「華嚴経云」として此の文を挙げるのが最古とされるが、恐らくは平安朝末期の頃にわが国で作られた語であると考えられ

る。」(二三八頁)とある。

⁶⁵ 一九二三(大正一二)年、石黒忠恵の講演内容。亀山、前掲論文(「看護婦の誕生」、三四一頁、亀山、前掲書『近代日本看護史II』、一五頁。

⁶⁶ 神戸、前掲書によれば、当初、看護婦を「白衣観音」として「嗤笑」(四八八頁)した広島市民も「小松宮北白川宮両妃殿下」らの様子を目の当たりにし「看護ハ賤業ニ非ズト云フコトヲ悟」(四八九頁)つたという。このエピソードは同時代の偏見的な看護婦観を如実に示している。

⁶⁷ 亀山、前掲論文(「看護婦の誕生」、三四一―三四二頁。

⁶⁸ ジョーンズ、前掲書、三頁。

⁶⁹ 若桑、前掲書『皇后の肖像』、二八〇―二八一頁。

⁷⁰ 高橋政子『写真でみる日本近代看護の歴史 先駆者を訪ねて』(医学書院、一九八四年五月)二頁。

⁷¹ 亀山、前掲書『近代日本看護史II 戦争と看護』、一五頁。

⁷² 高橋、前掲書、一二頁。

⁷³ 亀山、前掲書『近代日本看護史II 戦争と看護』、一六頁。

⁷⁴ 同右、及び、高橋、前掲書、二頁。

⁷⁵ 『芸備日日新聞』一八九四(明治二七)年一月二日、黒沢文尊、河合利修編『日本赤十字社と人道救援』(東京大学出版会、二〇〇九年)第五章 軍都広島と戦時救援(千田武志)、一五〇頁より引用。

⁷⁶ 同右。

⁷⁷ 同右。

⁷⁸ ジョーンズ、前掲書、一〇四頁。

⁷⁹ 同右。

⁸⁰ 同書、三頁。

⁸¹ 同右。

⁸² 花圃女史「特別寄書 梅雨のつれく」『婦人新報』第五號、一八九五(明治二八)年六月二八日、三一―四頁。

⁸³ 成田龍一氏は「新聞を読む樋口一葉」『文学』第一〇巻・第一号、一九九九年において「現存する日記において新聞を介した日清の戦闘についての記述はほとんどみられない。[...] 調印された講和条約にはふれられず、そののちのいわゆる三国干渉についても一葉は関心をよせていない」(八八頁)と述べて、それまでは熱心な新聞読者であった一葉が、一八九四年九月二五日の平田禿木宛て書簡では号外にすら眼を通さなくなったことを報告している事実から、彼女が「日清戦争の時期に「国民」としての「擬態」を放棄したこと」(同頁)を読み取っている。菅聡子『女が国家を裏切るとき―女学生、一葉、吉屋信子』(岩波書店、二〇一一年)は、「われわれの仲間では、少しも戦争なんて影響されませんね」(穴澤清次郎「一葉さん」旧筑摩書房版全集月報「一葉」第二号所収、『樋口一葉全集 三巻(上)』四〇三頁、補注)という一葉の時局観をめぐる証言と併せて醸成される「日清戦争に対して「毅然とした態度」をとる女性作家・樋口一葉、といったイメージ」「(神話)」「(二四六頁)に対し、他の日記記述や戸川秋骨の証言を掲げ、「一葉と日清戦争をめぐる解釈の可能性が、従来の日清戦争に対して無関心な一葉、というただ一つに限られたものではない」ことを指摘、「あらためて一葉と日清戦争の関係を見直すこと」(二四七―八頁)の必要性を提起する。

⁸⁴ 亀山、前掲書『近代日本看護史I』、二四頁。

⁸⁵ 片野真佐子『皇后の近代』(講談社選書メチエ、二〇〇三年)七三頁。

⁸⁶ 品田悦一教授より、慈悲の積極的な担い手であろうとした美子皇后の念頭には、施薬院、悲田院を設立するなど、后として史上はじめて飢病の徒の療養に尽くした、光明皇后の存在があったのではないか、という御教示をいただいた。

その指摘から考えをすすめると、「仏教信仰に基づいて日本ではじめて公的かつ大々的に貧民救済の事業を興した人であり、中世初期における叡尊や忍性による非人救済の営みの先駆者」(彌永、前掲書、二四二頁)であった光明皇后もまた、疥癩病者の垢や膿を吸うといった湯施行伝説を背景に、皇后じしんが創建した奈良法華寺に安置された十一面観音の「化身」(同書、二四〇頁)と考えられ

ていたのであり、こうした観音の化身という表象においても、光明皇后と美子皇后は重なり合うのである。美子皇后もまた、博愛病院（改称、日本赤十字社病院）をみずから設立し、他の慈善病院も保護するなど、病者の賑恤に尽くしている。

もし仮に、天平の光明皇后と、近代の美子皇后の慈恵とに、その内容的な差があるとすれば、天皇、皇后による保護が明記されている日本赤十字社の事業理念（「忠君愛国ノ観念ヲ基礎トシテ報国恤兵ヲ主旨トシ、博愛ヲ従ト為ス」、黒沢、河合、前掲書、一三三頁）に示されているように、美子皇后の場合は、理念上、兵士が慈恵の優先的な対象とされた点であろう。そしてそのことは、品田悦一教授による、美子皇后をめぐる、注112に示した御教示とも関わってくるかと思われる。

⁸⁷ 片野、前掲書、七三―七五頁。

⁸⁸ アリス・ベーコン 矢口祐人・砂田恵理加訳『明治日本の女たち』（みすず書房、二〇〇三年）

一二七―一二九頁。

⁸⁹ 関、前掲論文、脚注（六）、八二頁。

⁹⁰ 以下、美子皇后をめぐる視覚表象については、若桑、前掲書『皇后の表象』「錦絵と公式記念壁画に描かれた皇后の役割」（二七二―二七七頁）及び「ふたたび和装する皇后」（二八五―二八七頁）、参照。

⁹¹ 片野、前掲書、六一頁。

⁹² 片野真佐子「近代皇后像の形成」『近代天皇制の形成とキリスト教』（富坂キリスト教センター

一、一九九六年）所収、一二二頁。

⁹³ 若桑、前掲書『皇后の肖像』、八〇頁。

⁹⁴ 片野、前掲書、四五頁、及び、フォン・モール、前掲書、一七五―一七六頁。

⁹⁵ 片野、前掲論文（「近代皇后像の形成」）、一〇九頁。

⁹⁶ 元田永孚「還暦之記」『元田永孚文書』第一卷（元田文書研究会、一九六九年）一四一―一四二

頁。片野、前掲論文（「近代皇后像の形成」、一〇二頁にも、同引用をふくむ元田による皇后賛辞が紹介されている）。

⁹⁷ 若桑、前掲書『皇后の肖像』、四一八頁。

⁹⁸ ベーコン、前掲書でも、「美子皇后は、伝説の英雄である神功皇后とともに、日本女性を自由に幸せな生活に導いた傑出した指導者として後世に名を残すことになるだろう」（二三二頁）と述べられており、当時、美子皇后＝神功皇后という表象がかなり一般的であったことが知られる。

⁹⁹ 『太陽 特集皇太后崩御』一九二三年五月一日、扉頁。若桑、前掲書『皇后の肖像』、七八

頁、参照。

¹⁰⁰ ベーコン、前掲書、一二六頁。

¹⁰¹ 野口碩氏によれば「花紅葉」は「春の花や秋の紅葉に和歌を添えて贈った王朝の雅びが転じて、実生活とかかわりのない余計な綺麗事やつまらない美意識でとらえられたものを意味する」（『キーワード事典』前掲『樋口一葉事典』、三九〇頁）。同頁にはその用例として以下の日記文が掲げられている。「敷嶋の哥のあらず田あれにける様を見しりけるよりすべてのよのあさましさはかなさまでおもひたどられて何か又さらに花々敷むしろにつらなりおこめかしくひらぎ居ぬべき心地もせず万憂を捨て、市井のちりにまじはらむとおもひたちける身に花紅葉何のうるはしき衣かきるべき」（『蓬生日記』一八九三「明治二六」年七月七日）。この激越な一文には、わずかに残された外出着さえも売り払わざるを得ない憂いなど露ほども知らずに、歌道に興じる明治上流社会に対する一葉の憤りがあからさまに発現していると同時に、全てを手放すことと引き換えに、自らが負ったその「万憂」の意味を最底辺の場所から捉え返してみせようとする、彼女のしたたかな決意を見て取ることができる。一葉のなかで或る価値転換が行われつつあることを鮮やかに示す印象深い文章だが、いずれにせよここで「花紅葉」とは、「市井のちり」の中の「万憂」とは対極的な、歌道の宴や「うるはしき衣」を象徴する語として現われている。

¹⁰² まさにこのお蘭の延長上に、「泣きてののちの冷笑」（斎藤緑雨）と評された（奇蹟の期間）の女主人公たち、および一葉自身の「憤りはむねにミちつゝ猶そしらぬ顔にかへししたゝむる」（『水の上』一八九六「明治二九」年七月一日、前掲『樋口一葉全集 第三卷（上）』）姿を置くことができるだろう。

103 片野、前掲論文（「近代皇后像の形成」）七九頁、及び、フォン・モール、前掲書、一九二—九二頁。

104 同論文（片野）、八三頁。

105 同論文、八二頁、九三—九五頁、及び、片野、前掲書、四九頁。

106 ベーコン、前掲書、一三二頁。

107 片野、前掲論文（「近代皇后像の形成」）、八五頁。

108 丹治、前掲論文、一七七頁、一八〇—一八二頁。

109 黒田壽郎「オリエンタリズム」、今村仁司編『現代思想を読む事典』（講談社、一九八八年）所収、一一〇頁。

110 テクストにおいて、お蘭をめぐる情報は徹底的に封印されている。彼女が莫大な負債を抱え、邸の所有権も移転していることだけは示されているが、ならば主従三人のたつきの道は何によるのか。もとより彼らが何の生活手段も得ていないのは明白であり、且つ松川邸では「一年三百六十五日客の来る事なく、客に行く事なく」とあるのだから、お蘭が第三者から直接的な経済的庇護を受けている可能性も否定されなければならない。或いは波崎が「我れを何処までも日陰ものゝ人知らぬ身として仕舞はゞ、前後に心ざはりなくて胸安からんの所為」として、松川邸の提供を含む何らかの経済的援助を買って出ている蓋然性もあるうが、それを匂わず記述は存在せず、むしろ実際にそうならばお蘭は「日陰ものゝ人知らぬ身」であることに甘んじていることとなり、彼からの「邂逅」の誘いを峻絶する後文と文意が矛盾する。波崎からお蘭のもとに届けられるのは「度々」の「文の便り」だけであり、それも最近は「久しき途絶え」とあるのだ。こうしたお蘭にかんする情報の醜化は、直次郎の場合が祖父の職業「一郷の名醫」、外祖父の生業「水呑み百姓」、母親の境遇「野中の草がくれ、妻とは言われぬ身」、故郷の在所「鹿野山の麓」の「天羽郡」、東京での生計の方途「湯屋の木拾ひ」「蕎麦やのかつき」「権助、庭男」「場末の旅店に、帳つけ」に至るまで、逐一詳述されているのは極めて対照的である。

111 丹治、前掲論文、一七七頁、一八〇—一八二頁、及び、黒田、前掲文、一一〇頁。

112 〈外面似菩薩、内心女夜叉〉として造型されているお蘭と同様、陰影ある個人としての内面が、近代皇后像にふさわしい晴れやかな外面と乖離していた美子皇后は、お蘭と懸隔ある別人ではない。この点に関連して、品田悦一教授より、美子皇后における〈外面似菩薩、内心女夜叉〉とは、陸軍病院にみずから赴き傷病兵を慰労したり、手製の包帯や防寒真綿などを惜しげもなく下賜するといった、慈愛にみちた〈菩薩〉のような行為が、実は兵士をふたたび戦場へと送り出す〈女夜叉〉としての行為に他ならなかった事実をも示した措辞と言えるのではないか、という卓見をいただいた。

113 お蘭の父が投身し、そこから『暗夜』の物語が始まったという意味において、濃い闇に閉ざされた松川邸の深奥にある暗黒空間「底しれずの池」をめぐる語りこそ、テクストの象徴的中心であろう。「浪は表面にさはぐと見ゆれど思へば此底は静なるべし、暗くやあらん明くやあらん」〔…〕唯この池の底のみは住よかるべし」と語られるそこは、「醜美善悪曲直邪正、あれもなし、これもなし」と同様、一切の差異が消滅した彼岸の理想郷であろう。この語りの背景には、一八九二（明治二五）年九月一七日に、東京図書館で閲覧して以降、「一葉の思想にかなり大きな影響を与へた」（前掲『樋口一葉全集 第三卷（上）』一八〇頁、注87）といわれる、「西村遠里『雨中問答』巻二」に示るされた「三界唯一心 心外無別法 心佛及衆生 是三無差別」、原據は『華嚴經』三十七、十地品（以上、かぎ括弧内引用はすべて、前掲『樋口一葉全集 三卷（下）』六五〇頁、注4）の教えが存在すると思われる。

114 坪内祐三「編集者大橋乙羽」、鈴木貞美編『雑誌『太陽』と国民文化の形成』（思文閣出版、二〇〇一年）所収、および、永嶺重敏『雑誌と読者の近代』（日本エディタースクール出版部、一九九七年）第三章「明治期『太陽』の受容構造」、参照。

115 関札子『姉の力』（ちくまライブラリー、一九九三年）二〇三頁。

116 浅岡邦雄「明治期博文館の主要雑誌発行部数」、国文学研究資料館編『明治の出版文化』（臨川書店、二〇〇二年）所収、一五一—一五七頁。

第三章 同時代言説の顛倒——『にっこりえ』注釈の空白箇所をめぐって

一．はじめに

現存する資料では、雑誌『女学生』（一八九二〔明治二五〕年一二月）所載の星野天知「明治廿五年文会」を発端とする一葉研究史は、以降、現在に至るまで、全集、作品集、歌集、影印、資料目録などを基礎文献として、書誌研究、伝記・評伝、時代考証、作品論、現代語訳等々、多岐にわたる研究が蓄積されてきた。

とりわけ注釈・注解、考証に関しては、全集はもとより文庫本においても語句にはそれぞれ詳密な注が付され、今日との一二〇年近い年月の隔りによって未知のものとなった風俗世態が読み手にじゅうぶん理解されるよう、工夫が施されている。

むろんそれら注釈作業は、前田愛氏が「文学研究の基礎的な作業である注釈というのは、単にテキストを読みやすくするという目的だけではなくて、いわば虫喰いだらけになったそのテキストの空白部分を補うことによつて、もう一度文学テキストを同時代のコンテキストのなかに置きなおす、そういう目的をもっている。これが注釈というものの役割である¹⁾」と述べている通り、作品世界の総体的理解に向けてなされていることは言うまでもない。

とくに、臍化された表現が多くふくまれる一葉のテキストの場合は注釈研究の必要性は高く、たとえば近年だけでも、紅野謙介、小森陽一、十川信介、山本芳明『十三夜』を読む²⁾、高田知波「註釈 一葉日記（明治二十八年五月―明治二十九年一月）」³⁾、関礼子、菅聡子校注『樋口一葉集 新日本古典文学大系 明治編 二四⁴⁾』などの優れた注釈が提出されている。

しかしながら、「テキストの一字一句にこだわり、文脈をたどつて裏の真の意味をさぐり、行間さえ読むという、作家と向き合う読み方も、一葉の場合は読者によつて最初から、なされていた⁵⁾」（西川祐子氏）と述べられているように、現在まで委曲を尽くして精読されてきた一葉『にっこりえ』の注釈史にあつても、管見ではいまだ言及されていない箇所が存在する。

本節は、いわばこの注釈の空白箇所を補完することによつて、作品世界を新たに「再建。」（関良一「注釈のあり方」）するための試論を提出することとしたい。「試論」と述べたのは、注釈とは一方では「一つの批評のスタイル⁷⁾」（石原千秋「注釈という読み方」）であり、一つの読みでもあるからだ。作品全体と有機的な関係を維持するという注釈の基本姿勢を遵守し、注釈がテキストを読み替える一視点となり得ることを目指しながら、以下に議論を進めることにしたい。

二．研究史の死角

今日に至るまでの『にっこりえ』研究史は、もっぱら「この作品自体の抱懐する不透明さ、不可解さ、構成の矛盾・欠落や疑問箇所。」の解明に費やされてきたといつても過言ではない。その「不透明さ」とは、具体的には、最終章冒頭から唐突に語り出されるお力と源七の死をめぐる「不透明さ」に収斂されるわけだが、初出当時からこの「不可解な」結末に対しては、次のような指摘が行われてきた。

蒲団や源七との関係を写す事も余りに淡白にして何に依てお力が斯る惨刻なる災禍を蒙りしかは極めて曖昧模糊として悲劇的進行を写したりといふを得ず。全篇の構作より見れば源七との関係を正写して結城朝之助に於ける影の物語となすこそ普通なるべきに之を顛倒せしは其権衡を失ひしに似たり。加之、源七の境界を写せし叙事も又疎笨にして暗弱庸愚なる白物が殺人の大罪を犯す弾機とし見るべきものは頗る薄弱なりといはざるべからず¹⁰。

(前掲、魯庵生「一葉女史の『にぎり江』『国民之友』第二二六號、一八九五〔明治二八〕年一〇月)

就中第八章を以て直に第七章の後を承け草々局を収めたるは、権衡宜きを得ずして、読者の付度に任せたる区域の餘り廣すぎしこと争ふべからず¹¹。

(露伴他「雲中語 にぎりえ」『めさまし草 卷之十五』一八九七〔明治三〇〕年三月二一日)

あるいは、「女史の諸作のあまりに神韻を残さんが為に、時に晦渋に陥るの失あるに服せざる¹²」(前掲、無署名「一葉『青年文』」の一文もまた、「不透明さ、不可解さ」を一葉のテキスト全般、とりわけ『にぎりえ』に顕現する瑕疵としている例であろう。

この呆気ない二人の死の「不可解さ」に対する解釈を試みようとするならば、内田魯庵(魯庵生)も述べているように、「蒲団や源七」とお力の関係性の内実を問わざるを得ない。しかし、この二人の関係性こそ「曖昧」な「不透明」性を色濃く帯びているのであり、だから、これまた多くの論者が「蒲団や源七」とお力の関係性の分析に紙幅を費やしてきたわけである。まさしく、「にぎりえ」の問題点は、銘酒屋菊の井の酌婦お力と馴染み客である源七、それに正体の知れない客結城朝之助のからみがすべてだとされてきた¹³。(出原隆俊氏)のである。

もともと源七のお力に対する心中は、テキストにおいて、一度、明らかにされている。「あのやうな狸の忘れられぬハ何の因果かと胸の中かき廻されるやうなるに」、「思ひ出したとて今更に何うなる物ぞ、忘れて仕舞へ諦めて仕舞へと思案は極めながら、去年の盆には揃ひの浴衣をこしらへて二人一処に蔵前へ参詣したる事なんと思ふともなく胸へうかびて、盆に入りては仕事に出る張もなく」という二箇所であり、源七の心が、「胸の中かき廻されるやう」な、あるいは「仕事に出る張もなく」なるほどの、お力をどうしても「忘れられぬ」という激切な執着に囚われていることは明白である。

一方、お力の源七に対するそれは、論者の間でも大きく意見が分かれる。「内心は源七に対する愛着憐憫の情を断ち切りがたいものがあるらしく思われるが、「…」お力が心を傾ける方向にある頼り所はすでに結城なのである¹⁴。」(山本洋氏)、「かつてはともかく、現在のお力は源七を愛しているとは見えない。「…」彼女の愛情はむしろ結城朝之助に注がれていると見るべきで、源七の存在はときとして彼女の心にくらい影を落とさせただろうが、今もなお源七を全身全霊をこめて愛していたとはどうしても受け取れない¹⁵。」(岡保生氏)のように、お力と源七の「思」が非対称であることを指摘する説は多い。

これに対して、お力が源七を、結城朝之助の「人間心理を鳥瞰する」「素性をかくした客観主義」の眼差しに無遠慮にさらされる事を恐れ¹⁶。(金井景子氏)ていることをテキストから読み取り、そこにお力の源七に対する「思」を看取できるとする説があり、その二つの解釈の中間に「お力は新しい客結城に真の愛を求めてその結果絶望し、他方古くからのなじみである誠実な源七を恋いつづけて

おり、その二律背反の葛藤の中におかれている¹⁷」（塚田満江氏）といった説が存在する。

つまり現在までの研究史は、時にモデル人物の詮索や一葉の伝記的事実とのすり合わせ等も行いながら、このきわめて「不透明」な主人公お力の物語の解明につとめてきたと言えるだろう。このとき源七の存在は、彼自身の発話量が些少であることにくらべて語り手による心内叙述が明確であるせいなのか、主人公お力のはるか後景に退いてしまい、その分析もおのずから二次的なものに留まってきたわけである。お力が主人公であるかぎり、それは当然の帰結ではあるが、本章ではテキスト『ごりえ』が本来的に内包している複数的な視点に注目したい。

たとえば今一度テキストの構成を確認すれば、お力だけに焦点化して物語が叙述されているのは、じつは五章後半と六章のみである。

新開で繁昌名高い「菊の井」店先が活写された一章、結城朝之助の登場によって物語の展開が予兆される二章、お力と結城の掛け合いの中で源七をめぐる語りが誘発される三章をうけて、四章では零落した源七一家の叙述に章全体が割かれている。苦界に沈潜する朋輩達の、繰言とも嘆きともつかない声と、お力の異常な離人体験が連続的に語られる五章、お力がみずからの閱歴を語る六章に続いて、七章では救済のない破局への前奏ともいべき源七とお初の切迫した応酬が交わされ、そのまま一気に終章を迎える。

この構成をみれば判然とするように、『ごりえ』の物語空間は「菊の井」と源七の「棟割長屋」の二ヶ所にほぼ限局されており、しかもその二空間は、「二間間口の二階作り、軒には御神燈さげて盛り塩景気よく」誇らしげに殷賑を見せつける銘酒屋と、「同じ新開の町はづれに八百屋と髪結床が庇合のやうな細路地」に佇む「九尺二間」のうらぶれた矮屋という、表現上の二対の対比を示しているのである。むろん「新開の光りが添はつた」存在としてのお力は別格であり、主人公であることに疑いを差し挟む余地はないのだが、この構成ひとつを眺めても、お力の物語は自律的に存在しているのではなく、源七の物語と相互作用的、ないし相互補完的であることは明白であろう。

「源七を中心に据える、と言うと極端かも知れませんが、源七にとにかく視線を注いでいくと、もつと違う世界が出てくる¹⁸。」とは山田有策氏の指摘だが、それを受けて言えば、「蒲団や源七」とは一体いかなる人物なのか。その発見がお力の物語、総じてはテキスト自体の「再建」に何らかのかたちで寄与することはないのか。ここで本章の主題を提示すれば、語り手が唯一与えている源七の属性情報「蒲団や」こそ、現在までほぼ等閑視されてきた¹⁹。注釈の空白箇所なのである。

三・テキストの共時性——『ごりえ』と「小石川の実弟殺し」

研究史において、今まで殆どかえりみられることのなかった「蒲団や」に私註をほどこす前に、以下のきわめて興味深い新聞の三面「雑報」記事を掲げておきたい。

管見に入ったところでは、一葉が丹念に眼を通していたらしい新聞記事内容を実証的に検討した論文として、成田龍一「新聞を読む樋口一葉²⁰。」が挙げられるが、日記に転写された新聞記事内容から、一葉の国民意識の形成から崩壊にいたる過程をさぐった同論攷は、したがってその言及のほとんどが紙面一頁目を飾る政治記事に限られており、三面の「雑報」に関する考察は副次的であると言えよう。これに対して中山清美「新聞小説としての「うつせみ」」は、当時『読売』『東京朝日新聞』三面「雑報」欄に「狂気」をめぐる事件記事が数多く掲載されていることを調査、小新聞読者が『読売』

に連載された「うつせみ」を読んだ場合どんな読みの可能性が広がっていたのか²¹」を分析した論攷として注目される。

当時、一葉が貧苦にあえぐ生活のなかでも怠らず購読していた新聞紙は、『東京朝日新聞』『国会』『読売新聞』『郵便報知新聞』など数紙あるが²²、それらのうち、日記に購読日が明記されている紙面すべてにじっさいに眼を通すと、前掲した二論文では言及されていない一八九二（明治二五）年九月一六日付『東京朝日新聞』三面「雑報」に、次のような、注目に値する記事が掲載されていることに気付く。

●小石川の夷弟殺し 色情といふ悪魔に魅られてハ斯くまで前後無差別になるものか小石川区柳町廿六番地の蕎麦屋西浦與三郎（四十二）といふハ元茨城県の平民にて一昨年中郷里より出京し夷弟金兵衛（三十五）と共に年来為なれた商売とて柳町へ蕎麦屋を開業せしが兎角婦人の手がなくてハ不自由なりと昨年中茨城生れのおりき（三十一）といふ茶屋上りのばくれん女を女房に貰ひ日々セッセと稼ぐより見世も相応に繁昌せしにいつかおりきハ亭主の目を掠め其の弟金兵衛と怪しい中となり「…」²³

『にぎりえ』の物語舞台と同じ「小石川区柳町²⁴」で、同じように「祭り」の頃、しかもあるところか「おりき」という名の「茶屋上りのばくれん女」をめぐって起きた、やはり三角関係のもつれの果ての刃傷事件を、例によって扇情的なナラティブで伝えるこの「三面」記事を、この晩、一葉は確かに眼にしたはずである。

というのも、同日付の日記には、「図書館へたねさがしに行く。「…」今宵『朝日新聞』通読。」と書きつけられているからであり、その「通読」とは、小説執筆の「たねさがし」を兼ねた読書行為のつづきと推測することも可能であろう。

むろん、このころ一葉はまだ菊坂町の寓居で、王朝風の物語世界を模した落魄の美女、松坂俊夫氏の言う「谷中の美人²⁵」をひたすら造形していた初期習作期にあたり、同記事がただちに創作上の啓示を与えたとは考え難い。おそらくそのまま記憶の奥底に沈澱したであろう、この徹頭徹尾紋切り型にはまった通俗的な三面記事は、その後一葉が下谷龍泉町をへて、いよいよ終焉の地、小石川「新開」にたどり着いたとき、初めて現実的な色彩を伴ってその識閥に浮上したのだろうか。

だがここで非常に重要なのは、この雑報記事が果たして『にぎりえ』のプレテキストであったか否かという議論それ自体では決してなく²⁶、一葉がきわめて近似した素材を扱いながらも、結果として、この記事を貫くナラティブをまったく異質に変奏させたテキスト『にぎりえ』を創作したという点なのである。

「與三郎」と「金兵衛」の運命を狂わせる自堕落な「茶屋上りのばくれん女」という表象には、いわゆる小新聞の〈続き物〉における毒婦の系譜²⁷を看取できよう。しかし、同時代に即して言えば、当時各メディアにおいてかつてない苛烈さで指弾の的とされていたのが、日清戦争を控え「国光を海外に顕さなければならぬ²⁸」「我国の恥²⁹」と断じられた「醜業婦人³⁰」（醜業婦に付きての所感）『婦人矯風雜誌』第十號、一八九四（明治二七）年八月）であり、「我まゝ」な「茶屋上りのばくれん女」なる名指しも、彼女たちの身振りを虚実の境なく報道するメディア文脈と連動していたとも考えられる³¹。たとえば、やはり一葉が購読した一八九三（明治二六）年二月七日付『東京朝日新聞』にも、「八大

地獄の外に行く羽織地獄のお清(二十一)とて各警察署の刑事巡査に名を知られたる白首」が「拘留」(三面)された顛末が好奇を混じえた文体によって報道されているが、その「白首」は「三舎を避くべき剛の者」(同)とまで、露悪的、扇情的に形容されている。

しかし、偶然にせよ、そうでないにせよ、一葉は同じ「小石川区柳町」に棲む、同名の「おりき」という、やはり同じく(元)私娼をめぐって惹起された刃傷事件を描きながら、その雑報記事とはおよそ異なる物語世界を創造してみた。ここであらかじめ結論を先取りするかたちで述べれば、その物語世界の造形に「蒲団や」が少なからぬ関与を果たしていると思われるのである。

未定稿において、源七の職業は「畳や」「大工」「下駄や」と次々に書き替えられ、彼の生業を決定するまでに作者が試行錯誤を繰り返した痕跡が認められる。しかし最終的に、それら職業のなかから、わざわざ「蒲団や」が選択されなければならなかった理由とは、それが「新開」であればこそ盛んな商品流通が可能となる商売であり、それを背景としなければ起り得なかった源七の蕩尽と、それに向き合ったお力との差し迫った関係を、作者が物語内容の前提に据えようとしたからである。

つまり、この三面雑報記事をはじめとした、花柳界を「穢い、卑しい、忌むべき、嫌うべき、悪むべき」³²、「人間の社会を離れて仕まふ」³³「獣類」³⁴(前掲『醜業婦に付きての所感』『婦人矯風雜誌』)の世界と規定する同時代言説と、そう名指される世界にあつて「人間」的な交情が現前してしまう『にこりえ』とは、先鋭的な対立の構図を示していることになるのである。

そのように「蒲団や」という至極日常的な語句は、『にこりえ』の物語構造において看過できない意味作用を担っているのであり、換言すれば「蒲団や」とは『にこりえ』という物語を「再建」するためのキーワードに違いないのである。

四. 「蒲団や」の注釈

先の内田魯庵が「源七の境界を写せし叙事も又疎笨」と述べているように、テキストにおける源七の「境界」をめぐる具体的な「叙事」が、決して豊富でないことは確かである。

その数少ない源七をめぐる「叙事」にあつて、それは物語進行上、最初に、どのような文脈において語られているのだろうか。

私は身につまされて源さんの事が思はれる、夫は今の身分に落ぶれては根つから宜いお客ではないけれども思い合ふたからには仕方がない、

次に読み手にもたらされる源七の情報も、次のような言葉づかいによって語られる。

申談はぬきにして結城さん貴方に隠したとて仕方がないから申ますが町内で少しは巾もあつた蒲団やの源七といふ人、久しい馴染でござんしたけれど今は見るかげもなく貧乏して八百屋の裏の小さな家にまいくつぶろの様になつて居ます、女房もあり子供もあり、「……」此様な店で身上はたくほどの人、人の好いばかり取得とては皆無でござんす、

つまりテキストは読み手に宛てて、源七に関する最優先情報として、「落ぶれて」「見るかげもなく

貧乏して「まいくつぶるの様に」「町はづれ」の陋屋に逼塞しているという事態を語っている。このことは、その前段階として、かつて源七が「中もあつた」「宜いお客」であつたことを言外に伝えており、つまり源七のこうした著しい零落ぶりをめぐる語りは、往時の源七の隆盛ぶりととの激しい落差においてこそ、物語られる価値が発生しているわけである。

このとき、お力は源七を「久しい馴染」と発話しているが、具体的にどのくらいの期間、源七が上客であつたかを推測すれば、二人が「去年の盆」には「揃ひの浴衣をこしらへて二人一処に蔵前へ参詣し」ていること、未定稿Bでは源七とお初が「夫婦共かせぎに身上あげよ」と「三年前」「祝月十五日」に婚姻していること、定稿では「十年つれそふて子供まで儲けし」とある太吉が「四つ計」であることを勘案して、少なくとも一年以上、長くて三、四年程度と考えられよう。またお力は「此様な店で身上はたくほどの人」と語つてはいるが、最終的に源七の家産を破らせたのが「菊の井」であるとも受け取れ、二人が「久しい」間柄とある以上、「赤坂」以来の「馴染」＝「情夫³⁵」である可能性も捨てきれないため、源七は「新開」、あるいは「新開」と「赤坂」の狭斜においておよそ三年あまり遊興を重ねた末に、「身上」を蕩尽したことになるだろう。

ちなみに「赤坂」とは、「新橋・柳橋と並び称された東京の有名な芸者街³⁶」、「現在の港区赤坂でなく、この土地の花柳界をさす³⁷」などの旧来説ではなく、本稿では「花柳界としては下級の土地柄³⁸」であつた「東京市赤坂区田町ないし赤坂溜池町³⁹」を指すとしたい。「向島」「駒形」「蔵前」などの実在地名をテキストに挿入し、小石川柳町の、その猥雑で殺伐とした風俗を知悉した上で、その周縁空間性をより象徴的に物語るために、あえて俚称「新開」に表記を統一するなど、地政学的感覚にきわめて鋭敏な作者が、わざわざ「赤坂」のみを架空地名としてテキストに挿入するとは考え難いからである。

試みに、この「赤坂」花柳界について書き記した、撫松服部誠一の『東京柳巷新史 卷之二』（一八八五〔明治一八〕年）を引用してみよう。

（元漢文）

原来此の地に遊ぶ者は。近傍の人。其の大半を占め。屢ば来り遊ぶと雖も。豪遊を為さず。蓋し為さざるに非ず能わざるなり。故に妓も亦小成に安んじ。爪牙軟弱〔左訓「ツメキバモヨハク」〕。敢えて慾を逞ふせず〔左訓「ヨクモスクナイ」〕。来て聘号を辱ふする者有れば〔左訓「クチガカル」〕。則ち欣然として即諾す。直に地に裳を掲げて〔左訓「スクニスソヲハシヨリ」〕。軽軽歩し去る者は。赤坂妓流の習流なり。其の風此の如し。豈に些の驕色も有らんや〔左訓「タカブライナイ」〕。偶ま驕色有る者は。其の斑〔左訓「ナカマ」〕に入らしめず。〔…〕廉売即諾。私窩子と大徑庭する所有らず〔左訓「タントチカハヌ」〕。而て其の然る所以の者は。亦已むを得ざるが如し独り奈何んせん。本地の游客は。概ね小經紀的〔左訓「コアキンド」〕に属するを以つて⁴⁰。

後年の花街風俗誌も、「明治二十七八年の日清戦役、当時勲章や一時金にありついた軍人や、戦時の請負で儲けた御用商人達」が「かねを蒔いたことも赤坂の繁昌を助けた事⁴¹」と追懐するように、「赤坂」が柳橋・新橋と比肩しうる花柳界に変貌を遂げたのは日清戦争以降のことであり、お力が身過ぎをしていた一八九五〔明治二八〕年以前の「赤坂」とは端的に言えば、「赤坂なんざついで此の方まで蕎麦屋の二階へお座敷で来て、一貫も御祝儀を遣りやすく転ぶついでいふんで皆珍しがつて出か

けたもんでさ⁴²」(永井荷風『腕くらべ』一九一七〔大正六〕年)という、醜陋の雰囲気さえ漂う土地柄にほかならなかった。

長らく貧困を窮めていた上に、「肺結核」で世界した母親の薬代もかさんでのことか、父も早逝したのち、おそらく借財を負ったお力を選択しうる生計の途は一つしかなく、しかし布令一四五号(東京府貸座敷渡世規則)〈娼妓規則〉(二八七五〔明治六〕年)にある条項「父兄、親族の連印」および「在籍地戸長の奥印⁴³」を満たすことが出来なかった天涯孤独の彼女は、そのような手続きを必要としない芸妓——但し、歌舞管絃の巧手であることなど要求されない「廉売即諾」の不見「転」——となる以外になかったはずである⁴⁴。そのようにして「赤坂」にやってきたお力は、しかし同地に似つかわしくない「驕色」を放つ水際立った存在であり、だからこそ遊興ではなく、商用のために小石川「新開」から「赤坂」に足繁く通っていた「小商人」源七の注目を惹いたのであろう。

そこで以下から、その源七の生業である「蒲団や」に私註を加えることを試みたい。

物語内時間である一八九五〔明治二八〕年当時、じつは「蒲団や」とは、きわめて新奇な業種であった。吉村武夫『ふとん綿の歴史』によれば、それまで「蒲団」は、綿屋と呉服屋からそれぞれ綿と夜具地を購入して各家庭で仕立てるか、古着屋で調達するのが通常であり⁴⁵、たとえば府内の主要商店・問屋の屋号が網羅された一八九〇〔明治二三〕年度出版『東京買物獨案内⁴⁶』にも、「蒲団や」は一切登場しない⁴⁷。同ガイドブックには、のちに高級寝具専門店へと成長する日本橋西川商店も名前を連ねているが、あくまで「畳表蚊帳」専門問屋としての記載である。しかし、同店が実際は一八八七、八〔明治二二、二〕年から、僅少とはいえ「蒲団」販売を開始しているように⁴⁸、一八八七〔明治二〇〕年頃より支那綿の紡績工程で排出される落花を利用した「蒲団」が生産されはじめ⁴⁹、それを期に府内に「蒲団や」が誕生しはじめたのである。さらに一八九二〔明治二五〕年から日清戦争期にかけての繊維業界未曾有の好景気が「蒲団」製造を本格化させ、〈商品〉としての蒲団が次第に市場に出回るようになる⁵⁰。

その数年後に著された『東京風俗志』(一八九九〔明治三二〕年)には、

夜具は大概三布の敷蒲団、五布のかけ蒲団など、地方に見る所と異ならざれど、上にかくるには多く夜被をも襲ね用う。〔…〕上品は絹・縮緬・八丈・郡内などいろいろあり。敷蒲団には、特に「シーツ」を被うもあり、夏は更に花席を敷く⁵¹。

とあり、日清戦争を機にその輪郭を徐々に現し始めた消費生活社会において、絹製の高級蒲団や「シーツ」といった多様な「夜具」の需要が興っていたことがわかる。だが、ようやく都市に流通し始めたばかりの「蒲団」は当然ながら高価であり、一九一一〔明治四四〕年においてさえ、日本橋西川商店の花嫁蒲団一式(敷蒲団二枚、掛蒲団二枚)の小売価格は百円⁵²、それらが高級蒲団であることを差し引いても、同年国内平均賃金(一日あたり)五六銭⁵³と比較してみれば、その購買層はおのずと限定されよう。

それでも、こうした高額商品の買い手を日に日に増加させる東京は、他方では次のような人々をも、抱え込んでいた。

家賃の外に貧民の重荷となるはけだし蒲団の損料か。四幅蒲団一枚一銭五厘はよき方にして

二枚以上蒲団を備うるは少なく、一枚に二三人くるまり、辛うじて眠を取るもの稀ならず。窮し来れば損料蒲団だも典入し、寒中蒲団なく夜を明かすもあり⁵⁴。

（横山源之助『日本之下層社会』一八九八〔明治三二〕年）

蒲団、綿、夜具地、枕、座布団、蚊帳、シーツなどの販売とあわせて、こうした蒲団賃料と打ち直し料を収入源として確保していた「蒲団や」は⁵⁵、一八九六〔明治二九〕年時点で府内にわずか七七軒しか開店していなかった⁵⁶ことを考えると、一店舗あたりの収益は少なからぬものであったと推測できよう。『西川四百年史』に掲げられている売上帳によれば、日本橋に二店舗あった前出の西川商店における一八九七〔明治三〇〕年度総売上は五万七千六八円であり⁵⁷、同年の三井物産における綿布取扱高・三万九千五百円を遥かに凌いでいるのである⁵⁸。ちなみに、東京最古の「蒲団や」とされる芝露月町の加藤蒲団店は、他の「蒲団や」の大半がそうであるように、古着商からの転業であり、一八七七〔明治一〇〕年頃の開店の後は新橋、烏森の花柳界を得意先に抱え、大いに繁昌したという⁵⁹。

一方、源七の「蒲団や」は「町内で少しは中もあつた蒲団や」とあり、その「町内」とは特に断りが無い以上、小石川柳町一帯の「新開」を指しているはずである⁶⁰。『臨時増刊風俗畫報 小石川之部其一 新撰東京名所図会』（一九〇六〔明治三九〕年）の「小石川柳町」の記述を引けば、以下の通りである。

◎小石川柳町景況〔…〕町内もと古着古道具商多かりしに。近年漸く其数を減じ。日用の雜貨店。軒を列ねるに至れり。〔…〕更に西の方表町。戸崎町に接近するの地は。工職の徒。多く家居せり⁶¹。

町内にはもともと「古着商」が多く所在していたという事実は、「蒲団や」の前身がおおむね「古着商」であつたことを思うと、源七の店がこの柳町「新開」に開業していたという設定自体に強いリアリティを与える。あらためて一葉のテクストが風俗世態を緻密に写していたことに驚きを覚えるが、ここで重要なのは、「工職の徒。多く家居せり」というくだりである。この「工職」は当時二千人を優に越す東京砲兵工廠の職工⁶²を指すと思われる、隣接する小石川掃除町、小石川戸崎町の記述にも「西の方戸崎町に接するの辺は工職の徒多く⁶³」、「南の方久堅町に隣れる所。諸工場ありて。工職の居宅其過半を占めたり⁶⁴。」とあるように、「新開」は砲兵工廠、およびその関連工場に働く職工の一大居住地区にほかならなかつた。戦争特需に沸く彼らはその人員を日々増加させており、だから徒党を組んで「菊の井」の「下坐敷」で景気よく「井たゝいて甚九かつぼれの大騒ぎ」を繰り広げているのである⁶⁵。

源七はお初と結婚した一〇年前の時点で、ある程度の経済的基盤を整えていたとすれば⁶⁶、一八八五〔明治一八〕年頃にはすでに「蒲団や」を開店させていたと考えるのが妥当であろう。一八八七〔明治二〇〕年前後、いまだ「蒲団や」の存在がきわめて新奇であつた時代から、源七の店は常時数千人を数える「工職」の家庭に蒲団を賃貸、販売したり、あるいは打ち直しを請け負つたりしていたはずである。

『小石川区史』（一九一七〔大正六〕年）によれば、同区では一八九〇〔明治二二年〕頃より「入寄留

者」人口が「本籍者」人口に迫る勢いで急増し、一九〇二（明治三五）年にはそれが完全に逆転するが⁶⁷、そのように住民移入の夥しい土地に、「蒲団」の需要が増大するのは想像に難くない。また、テクスト冒頭で銘酒屋街を素見ぞめく「兵児帯の一むれ」は、柳町に東隣する本郷区に下宿する書生たちであろうが、時には上京してきた彼らに夜具を賃貸、販売した可能性もあり得よう。そして彼ら職工や書生たちを遊客として迎え入れる矢場や銘酒屋や「蕎麦屋」——前掲した「小石川実弟殺し」や、前出した荷風『腕くらべ』にも、その業態が仄めかされているよう——や「曖昧屋⁶⁸」もまた、「蒲団や」の有力な得意先であろう⁶⁹。

他方、「新開」とはうって変わって、荷風の生家のあった金富町をはじめ、小石川はその丘陵地帯に富裕な邸宅を多く擁してもいたのだから⁷⁰、そうした顧客層には「工職」向けとは別種の商品販売も可能だったはずである。その上さらに源七は、小石川から二里程度の距離に位置する⁷¹、陸軍聯兵屋敷群⁷²と花柳界のある「赤坂」にも商機を見いだし、営業に赴いていたと考えられるのである。

こうした推測の手がかりとなり得るのが、『小石川区勢総覧』（一九三四（昭和九）年）に記載のある、小石川指ヶ谷町一一六番地に実在した蒲団商「石川屋商店」である。その前身は定かでないが、同商店は一八八一、二（明治一四、五）年頃から同地に店を構えており、「区内は固より山の手方面の老舗として有名である⁷³」とあることから、小石川から「山の手」まで販路を拡大して久しかったことがわかる。店主の威風堂々とした肖像写真の傍らに、彼が数種の名誉職を兼ね「公共事業に盡瘁して居る⁷⁴」と附記されているのは、同氏がかなりの素封家であり、地元名望家であることを含意しているだろう⁷⁵。

以上の事柄を勘案すると、源七はじゅうらい考えられてきたような「倦怠懦弱⁷⁶」、「精根の薄い男⁷⁷」、「商才に富み機を見るに敏で才のはじけたような男ではなく愚直に近い男⁷⁸」などではなく、むしろその正反対の人物像——小石川における「蒲団や」の将来性を見越し、おそらく近隣で最も早く店を開業させ、地元はむろん「山の手」「赤坂」にまで労苦を厭わず徒歩でも営業に赴き⁷⁹、町内で「巾」を利かせるまでに店を伸展させた〈立志〉〈勤勉〉を体現する男性像——が浮上するのである。むろん、源七の店は、先に挙げた日本橋西川商店などには規模、格ともに遠く及ばないのは当然としても、これまで研究史においてほとんど顧みられることのなかった、「町内で少しは中もあつた」という源七像をめぐるお力の発話表現には、精細な注意を払う必要があるのではないだろうか。

源七は、そのようにして一〇年余りをかけて「蒲団や」で築いた恒産の全てを、わずか三年程の間に、お力一人のために消尽したことになる。しかもその遊興地は、「廉売」を以って知られる「赤坂」と、やはり「銘酒屋は主に東京で〔…〕純然たる淫売店、三十銭より五十銭で女を相手に冷かな夢を結ぶことが出来る。」（蛇道子「花柳界の敵」『文芸倶楽部増刊 花柳風俗誌』一九〇五〔明治三八〕年七月）「新開」である。ならば両地におけるその遊興費の使いぶりは、単に「宜いお客」と囃される程度の穏和さではなかったはずである。『柳橋新誌』、『新柳情譜』、『東京妓情』などの花街風俗誌に、その優婉な風情が謳われた新橋、柳橋、芳町といった一流花柳界ならまだしも、それらとはおよそ似ても似つかぬ格下の、情趣を欠いた卑俗で安直な私娼街で、源七はお力を敵娼に浪費を尽した果てに破産したのである。もはやその一部始終は、遊治などと言う長閑な形容では収まりきらない狂気——テクストの表現で言えば「氣狂ひ」沙汰の様相を呈していたことであろう。

たとえば「赤坂」の料亭、待合と「新開」の「菊の井」に落とした金銭は、たとえそこが鄙陋な花

街であったとしても、度重なれば多額となる。一九〇四〔明治三七〕年の「赤坂」を例にとれば、玉代は二時間毎に二本（三七錢五厘）、御祝儀として一円、指名の有無に関わらず芸者に支払う（お約束）（新橋の場合、二時間玉二二本）のほか、〈台の物〉は全て遊客側の負担になるため、店側の計らいひとつで際限なく費用を釣り上げる事は可能だった¹⁾。銘酒屋とも「曖昧茶屋²⁾」とも弁別不能な「菊の井」でも、「杯盤」と「鉢肴」が女中によって供され、結城が「御祝儀」をはずんでいることから、一九〇四〔明治三七〕年時点の「赤坂」と事情は大同小異であろう。お高がくりかえし「私は身につまされて源さんの事が思はれる」と述懐するのも、その蕩尽の顛末をつぶさに見知っていたからにほかなるまい。

五．注釈と読解

狭斜における遊蕩の末の破産、心中といったプロットにおいて『にこりえ』との相同性を指摘されることの多い広津柳浪『今戸心中』（二八九六〔明治一九〕年）だが、同テキストでは善七の吉里への思情は最後まで成就されず、それが悲惨小説の体をなお一層鮮明にさせているのは異なり、源七とお力の場合は、お力の側に源七のこの蕩尽に値するだけの〈眞実〉³⁾があつたと考えるべきであろう。遊里における人情の機微に通曉しぬいた京伝が、「傾城に真があつて運のつき³⁾。」（『傾城買四十八手 真の手』一七八〇〔寛政二年〕と書き残したとおり、「交際しては存の外やさしい処があつて女ながらも離れともない心持がする、あゝ心として仕方のないもの面ざしが何処となく冴へて見へるは彼の子の本性が現はれるのであらう」と語られるお力であればこそ、源七も「命をも遣る心」で応じたと想像されよう。

たとえば、お力は結城の挑発に促されるかたちで「此様な店で身上はたくほどの人、人の好いばかり取得としては皆無でござんす」と嘲笑気味に源七を語ってみせはするものの、その最中にも「表を見おろし、素気なく追い返した源七の姿がもはやそこに無いことを確認すると、「茫然として居る」。結城にその様子を揶揄されて、「お医者様でも草津の湯でもと薄淋しく笑つて居る」のは、当時流行していた、「惚れた病」を不治の病に喩えた都々逸⁴⁾ないし俗謡⁵⁾に心情を托しているのだから、その真意は明白であろう。また、花柳界において、寝食を共にする朋輩同士が互いの事情に良く通じているのは、先の『今戸心中』にも描かれている通りだが、テキストでも、お高が「思ひ合ふたからは仕方がない」と語っていることから、お力と源七の「思ひ合ふた」関係性は裏付けられるだろう。ならば、何故お力は「逢つては色々面倒な事もあり、寄らず障らず帰した方が好い」と語るのか。三章の最末尾に書き付けられた、次の一文を見過⁶⁾ごしてはなるまい。

結城さんと呼ぶに、何だとして傍へゆけば、まあ此処へお座りなさいと手を取りて、あの水菓子屋で桃を買ふ子がござんしよ、可愛らしき四つ計の、彼子が先刻の人でござんす、あの小さな子心にもよくく憎くと思ふと見えて私の事をば鬼々といひまする、まあ其様な悪者に見えまするかとして、空を見あげてホツと息をつくさま、堪へかねたる様子は五音の調子にあらはれぬ。

太吉がお力を「鬼々」と呼ぶのは、むろん母親であるお初がお力を日頃からそう忌み呼び捨てるのを無邪気に真似ている、あるいは、お初が幼い太吉に意図的にそう教唆しているとも考えられようが、

この「鬼」という名指しは五章冒頭の「白鬼」と照応しており、お力をはじめとした〈酌婦〉たちが「逆さ落しの血の海、借金の針の山に追いのぼすも手の物」の地獄（私窩子の掛詞）の「鬼」に喩えられていたことによる。

その「鬼」の表象がそのまま具現化した出来事が、「二葉やのお角に心から落込ん」だ「裏町の酒屋の若い者」が「かけ先を残らず使ひ込み、夫れを埋めやうとて雷神虎が盆筵の端にいたが身の詰り、次第に悪るい事が染みて終ひには土蔵やぶりまでした」事件なのだが、この「酒屋の若い者」を強盗犯罪へと使喚させたことになる「二葉やのお角」と、源七に借財を負わせまいとするお力の間には、実は決定的な差異線が引かれているのである。

テキストにおいて、源七一家の困窮ぶりをあらわす挿話はじつに豊富だが、「使ひ込み」や借金をわずかでも匂わすような叙述は、注意深く排除されている。たとえば、お初は、意気阻喪する源七を前に、「氣を取直して稼業に精を出して少しの元手も拵へるやうに心がけて下され」、「男らしく思ひ切る時あきらめてお金さへ出来ようならお力はおろか小紫でも揚巻でも別荘こしらへて困うたら宜うござりましょう」と、時に懇願、時に叱咤激励をもって説得を試みるのだが、どちらの発話にも債務を負っていることを暗示するいかなる情報——『大つごもり』の八百屋安兵衛一家が一円五〇銭の「をどり」（金利）の工面をめぐってどれほど難渋していたかを思い起こしたい——も存在しない。つまり、お力は、「恨まれるは覚悟の前、鬼だとも蛇だとも思」われることを承知の上で、「寄らず障らず帰」すことよって、源七を「酒屋の若い者」が陥ったような破滅から救済していると考えられるのである。

たとえばテキスト冒頭、語り手がお力という女を形象する方途として先ず、彼女のいでたちを微細に語るとき、当代一流の新橋芸者〈洗ひ髪おつま〉風の、およそ「新開」には場違いな「洗ひ髪の大嶋田に新わら」で粹に装いつつ、良く見れば「黒縹子と何やらのまがひ物」の「引かけ帯」を締めていることを漏らさず付け加えるのは、お力の風体が所詮は「此あたりの姉さま風」であることを単に読み手に知らせるためだけではないはずだ。そう願ひさえすれば得ることが可能だったはずの過大な贈与を、お力は「情夫」源七から受け取ってはいないのである。源七がお力に贈与したことを暗示する品物は、唯一「揃ひの浴衣」のみである。

ここて是非確認しておきたいのが、終章における町の噂「何しろ菊の井は大損であらう、彼の子には結構な旦那がついた筈、取にがしては残念であらう」が端的に語っているように、お力は「菊の井」の「一枚看板」ではあっても、決して「帳場めきたる処」を差配する「女主」ではあり得ない、という、自明の事柄である。同時代、たとえば『女學雜誌』には、近頃とみに増加してきたお力たち「茶屋醜業酌婦」の存在の「弊害」⁷が説かれる一方で、彼女たちに対する「茶屋の主人」⁸の虐待的扱いが告発されているが、それは次のようであった。

「所云る酌婦とは、多く怪しからぬ密業を為すものにて、而も之をせでは主人の苛酷なる取扱を蒙むると云ふ」、「〇酌婦は給金一ヶ月廿五銭、食物は沢庵か鮭一切れなり、干物一枚余計に食すとも其代を拂はせらるゝ事〇酌婦となりしものは不正の業を為さずば到底其前借金を返す能はざる事」⁹、「初め一円五十銭の前借にて来りしもの、遂に十年間報告せしもあり、小松本と云ふ茶屋の老主人は、既に七百人の酌婦を手に掛け其中より十二人を懲役に入れたりと得意に談話し居るの状態なりとぞ」¹⁰。

つまり、常日頃どれほどお力がその「容貌」を自慢に「我まゝ至極の身の振舞」をしようとも、実際のところ彼女は「菊の井」の「売物買物」＝商品に過ぎないのであり、「帳場めきたる処」から常に送られてくる「女主」の厳しい視線に囚われながら、「客を呼ぶに妙ある」「技両」を発揮することを強いられているのである。花柳界とも呼べぬような安直な「新開」銘酒屋街とはいえ、否、猥雑で無秩序な「新開」であればこそ、源七はそのような「売物買物」としての「菊の井のお力」と会うためには「命をも遣る」覚悟で散財しなければならなかったはずである。それはお力ひとりの意志によつて変更可能なシステムではあり得ず、従つてその先に待つものが「酒屋の若い者」と同じ運命であることは想像に難くない。〈酌婦〉たちが「逆さ落しの血の海、借金の針の山に追ひのぼす」地獄の「鬼」と呼ばれる背景には、こうした陰惨で暴力的な支配構造が存在していた。テクスト表層からは見えてこない、「新開」「銘酒」という文化記号を読解することによつてのみ知ることのできる、近代都市東京の裏面である。

だが、そのように「不正の業を為さずば到底其前借金を返す能はざる」といわれ、なかには窮するあまりに「懲役に入る」ほどの業を為してしまう者さえ少なからず存在するという〈酌婦〉にほかならないお力は——実際、その〈酌婦〉としてのお力の身振りを語り手は、「情けは吉野紙の薄物に、螢の光びつかりとする斗、人の涕は百年も我まんして、我ゆる死ぬる人のありとも御愁傷さまと脇を向くつらさ」と語っている——、その〈酌婦〉としての擬態を捨て、自身の「借金」返済による自由の実現や、ことによつては生命すらも犠牲にして、源七を「借金の針の山」あるいは「懲役」から救済していることになるのだ。

改めて言えば、テクストにおいて、源七にたいするお力の真意は完全に空白に付されている。おそらくその理由は、それが、「蒲団や」という屋号や、〈酌婦〉をめぐる巷の評判や、流行歌の一節や、「二葉やのお角」をめぐる挿話や、妻お初から夫源七への叱咤激励などの多声によつてしか表現しえない、テクスト表層では到底語ることのできない深く複雑な思いだからであろう。

いずれにせよ、「情夫」源七にたいする思いをあえて空白にすることによつて、その人物像に深い奥行きが与えられているはずのお力が、同時代の〈酌婦〉をめぐる類型的な表象「逆さ落しの血の海、借金の針の山に追ひのぼすも手の物」とは截然とした差異ある人物として造形されていることは間違いない。その証拠に、地の文は、この「借金の針の山」の語りの後いったんは「白鬼」なる形容詞を生成した町の声を伝えるものの（「寄つてお出でよと甘へる聲も蛇くふ雉子と恐ろしくなりぬ」）、直ちにそれに反意をしめして（「さりとも胎内十月の同じ事して」「紙幣と菓子との二つ取りにはおこしをお呉れと手を出したる物なれば」）、「真からの涙をこぼす酌婦たちの声を伝えたあとで、「菊の井のお力とても悪魔の生れ替りにあるまじ」と語り始めるのである。

こうした語りの流れのなかに、「花柳社会の業に従事する者は、固より人を誘惑し人を墮落せしむると云ふ事の大罪悪を犯して居るのである、彼等に言はしむればそれは墮落するものが馬鹿なので、自分たちの関する所でない」と澄しこむのである。全然罪悪感もなく道徳観念もないのである。¹⁰『東京學』一九〇九（明治四十二年）といった予断——すなわち「紙幣」の亡者という表象とは異なる、お力の、源七に対する真摯な「思」いに支えられた「道徳観念」なるものが確かに垣間見られるのである。

「蒲団や」の注解は、『にこりえ』論の焦点であったお力と源七の「不透明」な関係性に、以上のような結論をもたらすことになる。差し当たりそれが本稿の結論でもあるが、しかしテクストには

まだ、それ以上に書きつけられた何かがある。その意味においては、この結論は物語構造の前提解釈に過ぎないのである。

六. 『にぎりえ』の独自性

この頃、場末の歓楽街「新開」とは遙か遠く離れた場所で、そうした金銭をめぐる「道徳」を喧しく啓蒙していたメディアが流通していたことを、むろんお力は知る由もなかったであろう。以下は、「家内の大蔵大臣」である「主婦」に向けて論旨する『女學雜誌』——一葉自身もしばしばその読者であった——の記事である。

経済は、予算なり、紀律なり、節儉なり、克己なり、勤勉なり、犠牲なり、積善なり、献身なり。故に、経済は、道徳を導き、道徳は、経済を伴ふ。道徳と経済と決して相ひ離るべからず。経済なき道徳は、空論に流れ易し。道徳なき経済は、卑吝に陥り易し。経済は、実行なり、慈善なり。故に、道徳は、之によりて、現実の教となる。⁹²

(社説・経済の道(中) 『女學雜誌』第参一五七号、一八九三(明治二六)年一月)

ピューリタリズムに儒教的教条を混交したような、この「経済の道」なる論が三回にもわたって縷々説かれる理由は、井上哲次郎『勅語衍義』(二八九—(明治二四)年)が提唱した「国民ノ臣民ニ於ケル、猶ホ父母ノ子孫ニ於ケル如シ、即チ一國ハ一家ヲ拡充セルモノニシテ。」⁹³という、いわゆる〈家族国家観〉の下で、富国殖産の最小基盤としての「家庭」における「経済」が、きわめて重要視されていたことによる。まさしく、「家庭は一の天地なり、一の国家なり。」⁹⁴「一家の経済を能く料理する人あらば、亦た一國の経済をも能く整ふべし。」⁹⁵、「一家に借錢多くして国家は富を殖すと云ふ経済家は信ず可かず。」(社説・家庭は一國なり 『女學雜誌』第参百廿四号、一八九二(明治二五)年八月)というわけである。

同時代コンテキストにあつては、「経済」と「道徳」は不可分なものとして堅固に結び合わされ、「犠牲」や「献身」といった〈婦徳〉⁹⁷の有無を指標する物差しとして立ち現れる。当時「女子の読むべき書物」(『婦人新報』第弐號、一八九五(明治二八)年三月)として、『西国立志編』や『小公子』等に混じって『経済と道徳』なる本が推奨されていることから⁹⁸、この「経済」倫理をめぐる〈婦徳〉概念の称揚のほどが知られよう。

ならば皮肉なことに、この開明的をもって任ずる同誌が、

所云る酌婦とは、多く怪しからぬ密業を為すものにて、而も之をせでは主人の苛酷なる取扱を蒙むると云ふ〔…〕茶屋醜業酌婦の曖昧はほとんど押しなべての景況なり、大方の女はみな最初は酌のみと心得て来り、初めは驚ろき、中ごろは困り、遂に三四ヶ月のうちに悪風に染り、恬として恥ぢず、生まれ付き当然の營業の如くに汚らはしき需めに応ずとぞ。⁹⁹

(前掲「雑録 近県の所謂酌婦」 『女學雜誌』第参百七号、一八九二(明治二五)年三月)

と口を極めて非難する「醜業酌婦」であるはずのお力こそが、この〈婦徳〉を体現してしまい、反

対に、「真正の伉儷は真正の家族なり、真正の家族は健全なる国家の基ひたるなり¹⁰⁰。」と、「夫婦〔…〕和樂¹⁰¹」（社説・天下の大勢）『女學雜誌』百八十九号、一八八九（明治二二年一月）を最優先させる近代家族概念にあつては、夫・源七をついに懐柔しえなかつた妻・お初のほうが批判の対象へと転落してしまふという、奇妙な屈曲、ないしラディカルな顛倒を、テキストは内在させているのである。

ちなみに事件後、幼い太吉を抱えたお初の行く末は、五章に登場する息子のある〈酌婦〉が暗示しているだろう。源七もまた、近代家族における性分業を完全に放擲し、「土方の手伝ひ」へと転落した挙句、まさに近代家族イデオロギーが反映されたお初の説得——「よく考へて見てください、たとへ何のやうな貧苦の中でも二人双つて育てる子は長者の暮しといひます、分れれば片親、何につけても不憫なは此子とお思ひなさらぬか」——にも耳を貸すことなく死を選択したことをかながえても¹⁰²、『にこりえ』は反近代家庭小説としての様相を幾重にも呈していることになる。

ここで顧みれば、『にこりえ』というテキストは、遊里を舞台に、妓女の馴染みへの思慕感情や、苦界生活の厭わしさなどが涙まじりに切々と語られ、花柳風俗のへうがち¹⁰³が従属的な位置に後退する——こうした特徴において、寛政の改革以降の後期洒落本との連続性が認められると、ひとまず言つて良いだろう。じじつ一葉自身のけつして多くはない蔵書目録を確認すれば、梅暮里谷峨『傾城買二筋道』（二七九八〔寛政一〇〕年）と作者未詳『部屋三味線』（寛政年間とのみ伝）を所有していたことが知られるが、しかしそれら近世テキストと『にこりえ』を分かつ要素こそ、〈家庭〉なのである。

上記の洒落本には、たとえば『傾城買二筋道 夏の床』には、放蕩を嘆く親への配慮（「お袋を日干しにもされねへわな¹⁰³」）や、『部屋三味線』では、病弱な親への気遣い（「とつさんもよい／＼になつてさつぱり出入が出来ねへそうだが¹⁰⁴」）などの、親子関係を軸とした「家」をめぐる発話はあるものの、〈家庭〉をめぐるそれは皆無といつて良い。田中優子氏も「近世の家族像」で次のように指摘している。「生産拠点でもあり、社会と不可分な近世の家庭は、ごく特殊な武家社会をのぞいて、「家庭像」を強制されることはあまりなかった。具体的な親子関係や、産業の場としての現実的な機能だけが問題にされていたようだ¹⁰⁵」。

前田愛氏は、荷風のテキストを素材に、「一方の極には新しい家、家庭というものがあり、一方の極には花柳界があるという、こういう図式のうえに、近代文学の作品のなかに内蔵されている基本的な物語のコードを指摘することができる¹⁰⁶。」と述べたが、『にこりえ』こそ、「家庭」と「花柳界」という近代が創出した対蹠的な二極空間を「物語のコード」として含み込んだテキストであろう。

しかし述べてきたように、『にこりえ』はそのうえで、この近代概念としての「家庭」／「花柳界」、主婦／〈酌婦〉の対立項を顛倒させる力学を潜在させている。これは別言すれば、両空間の対抗関係を煽動してやまない近代メディアが娼婦に付与した「白鬼」「醜業婦」「ばくれん女」という差別的表象を解体しようとするはたらきを、テキストが秘めていることを意味する。たとえば、テキストにおいて「鬼」の形容を一身に浴びる「二葉やのお角」も、事件がお初による間接話法で叙述されることによつて事の真偽は攪乱され、彼女が稀代の〈毒婦〉か否かは、じつは不可知にされているのだ。

他方、メディア言説、たとえば『にこりえ』と同時性を有する「小石川の実弟殺し」の構造は、その逆を示している。先ず「戸の建らぬ人の口近所の噂話し」がいたずらに実体化され、それが発端となつて事件が生起されることによつて、「おりき」＝「ばくれん女」という表象が一層強化されてゆくのである。

『にこりえ』は、性を商品化せざるを得なかつた女性たち——一八九五（明治二八）年当時、戦勝

に沸きかえる都市の暗部に存在した無数のお力／「おりき」たち——をめぐると同時代の抑圧的言説を超越する力学を秘めた特異なテキストなのである。

- 1 前田愛「文学テキスト入門」『前田愛著作集 第六巻 テキストのユートピア』（筑摩書房、一九〇年）一三七頁。
- 2 紅野謙介、小森陽一、十川信介、山本芳明『十三夜』を読む『文学』季刊 第一巻 第一号、一九九〇年冬。
- 3 高田知波「注釈 一葉日記（明治二十八年五月―明治二十九年一月）」『文学』季刊 第10巻・第1号、一九九九年冬。
- 4 関、菅、校注、前掲書。
- 5 西川祐子「性別のあるテキスト―一葉と読者」『文学 一葉特集』vol 56、一九八八年七月、八頁。
- 6 関良一「注釈のあり方」『樋口一葉 考証と試論』（有精堂出版、一九七〇年）三二六―三三六頁。
- 7 「意識の流れなどではなく、さまざまな文化現象を書き込んだテキストを注釈は「評価」する」点において「注釈とは一つの批評のスタイル」（石原千秋「注釈という読み方」『日本近代文学』第六一集、一九九九年五月、一九八―二〇一頁）。
- 8 『にこりえ』一八九五〔明治二八〕年（未定稿もふくむ）テキスト引用は、『樋口一葉全集 第二巻』所収による。
- 9 山本洋「第一部 作品篇 にこりえ」前掲『樋口一葉事典』六〇頁。
- 10 魯庵生、前掲「二葉女史の『にこり江』」『国民之友』第二二六號、一八九五〔明治二八〕年一〇月、二八頁。
- 11 露伴・緑雨・學海・鷗外・篁村・紅葉・思軒「雲中語 にこりえ」『めさまし草 卷之十五』一八九七〔明治三〇〕年三月三十一日、概論家の発言（二頁）。
- 12 無署名、前掲「一葉」『青年文』第三巻一號、一八九六〔明治二九〕年二月、五頁。
- 13 出原隆俊「にこりえ」の〈彼の人〉『文学』第五巻・第二号、一九九四年、八二頁。
- 14 山本洋「にこりえ」の丸木橋『国語国文学』第四七巻・第四号、一九七八年四月、二二―四頁。
- 15 岡保生「お力の死―『にこりえ』ノートから」『學苑』一九七〇年一月、三頁。
- 16 金井景子「女」の来歴―『にこりえ』論への視角『媒』vol 5、一九八八年十二月、四三頁。
- 17 塚田満江『誤解と偏見―樋口一葉の文学』（中央公論事業出版、一九八七年）三二〇頁。
- 18 山田有策「共同討議樋口一葉の作品を読む にこりえ」『国文学』一九八四年一〇月、九五頁。
- 19 『にこりえ』注釈史において、山本洋編『近代文学初出翻刻 一 樋口一葉集』（和泉書院、一九九四年）が「明治二九年現在」「軒数七七軒」（五九頁）と註を附しているが、それ以上の情報は記されていない。
- 20 成田、前掲論文（「新聞を読む樋口一葉」『文学』第一〇巻・第一号、一九九九年冬）。
- 21 中山清美「新聞小説としての「うつせみ」、前掲『論集樋口一葉』所収、一一八頁。
- 22 中丸宣明「一葉読書目録」、前掲『樋口一葉事典』所収、四八五―四八六頁。
- 23 以下に続く同記事アウトラインは次の通りである。「密かに金兵衛と逢引して居たを戸の建られぬ人の口近所の人の噂話から不図與三郎ハこの事を聞き以つての外なりと大いに驚き〔…〕昨今小石川音羽町の小日向神社の祭禮にて〔…〕おりきハ金兵衛と手を取り合ひ何やら話ながらぶら／＼帰るを確と見認め〔…〕とうく金兵衛に追ひつき左の手に緊かと胸中を抱へ右の手に洋小刀を取り左の脇腹を愚差と一突突きたるに金兵衛ハ人殺しと一声叫びしま、其の場に打仆れて苦呻き居たるが〔…〕多分一命ハ取止るならんとのこと」（三三―三三三）
- 24 『にこりえ』初稿である未定稿Aでは、「新開」を小石川柳町と設定している。また、詳細な作品舞台考証である前田愛「樋口一葉の文学風土」、前田、前掲書『前田愛著作集 第三巻 樋口一

葉の世界』所収、一五三—一六三頁、関礼子・菅聡子校注、前掲書『樋口一葉集 新日本古典文学大系 明治編 二四』二二七頁でも、小石川柳町と推定している。

²⁵ 松坂俊夫『増補改訂 樋口一葉研究』（教育出版センター、一九七〇年）「一葉小説の構想とその展開」三二—四〇頁。

²⁶ そもそもこの「小石川の実弟殺し」では、刃を受けたのがおりきの相手Ⅱ金兵衛であり、また、記事途中から視点人物がおりきから與三郎へと転移し、刃傷の瞬間の様子が血腥く描写されている点において、『にぎりえ』とは相違している。しかし、まさしくそれら相違点こそ、文学テクストとしての『にぎりえ』と三面雑報記事とを分かつ要素なのであり、粗放な表現を承知で言えば、樋口一葉『にぎりえ』を『にぎりえ』たらしめる要素でもある、と思われる。

²⁷ 小新聞の毒婦物にかんしては、本田康雄『新聞小説の誕生』第四章「雑報記事の連載」第五章「続き物の発生」（平凡社選書183、一九九八年）、および平田由美「物語の女・女の物語」、脇田晴子・S・B・ハンレー編『ジェンダーの日本史 下——主体と表現 仕事と生活』（東京大学出版会、一九九五年）、所収を参照。

²⁸ 緒方仙之助「醜業婦に付きての所感」『婦人矯風雑誌』第十號、一八九四〔明治二七〕年八月二日、二四頁。

²⁹ 同記事、二五頁。

³⁰ 同右。

³¹ 一八八〇年代の松方財政、一八九〇—一九〇〇年代の日清・日露戦争に向けられた軍備予算擴張は地方財政を圧迫、膨大な流民層が産出され娼婦の供給基盤となるが（記事にあるように、窮乏の果て渡航売春する者も出現）、日本公娼制度は軍隊需要に支えられ彼女たちを易々と吸収してゆくことになる。しかし娼婦運動家や新聞・雑誌メディアが糾弾の対象としたのはあくまで「醜業婦」たる娼婦たちであり、「公娼制度は下層社会に生きる民衆からの収奪機構である」という認識はまったく存在しな（藤目ゆき『性の歴史学』、不二出版、一九九九年、一〇四頁）かった。『にぎりえ』分析において不可欠である近代日本公娼制度および売買春と娼婦運動に関する学知を、本稿は同書から得ている。

³² 緒方、前掲記事、二四頁。

³³ 同記事、二五頁。

³⁴ 同右。

³⁵ 高田知波氏の「声というメディア—『にぎりえ』論の前提のために—」、『論集樋口一葉』（おうふう、一九九六年）所収では、酌婦たちにとって「馴染」と「情夫」が厳然とした差異をもつ（二六—二七頁）という重要な指摘が行われている。

³⁶ 塩田良平『たけくらべ 他三編』（旺文社文庫、一九六七年）七六頁。

³⁷ 和田、解説、注釈、前掲書、一七九頁。

³⁸ 関、菅、校注、前掲書、二二六頁。

³⁹ 山本、前掲書『近代文学初出翻刻 一 樋口一葉集』、五二頁。

⁴⁰ 服部誠一『東京柳巷新史 卷之二』（南伝馬町・叢書閣、日本橋・丸善商社書店他、一八八五

〔明治一八〕年）二二—二四頁。

⁴¹ 林田亀太郎『芸者の研究』（潮文閣、一九二九〔昭和四〕年）三八八頁。

⁴² 永井荷風『腕くらべ』、『荷風全集 第一二卷』（岩波え書店、一九九二年）所収、三六頁。

⁴³ 吉見周子『売娼の社会史』（雄山閣出版、一九八四年）二五頁。

⁴⁴ 山本洋『にぎりえ』の背景』『文林』第二二号、一九七八年三月、四二—四三頁。同論文は、『にぎりえ』物語世界に関して極めて詳細な考証が施されており、中でも本稿は、お力の来歴と

「銘酒屋」「赤坂」に関する考証成果を参照したことを記しておく。

⁴⁵ 吉村武夫『ふとん綿の歴史』（ふとん綿歴史研究会、一九六六年）二七三—二七四頁。

⁴⁶ 上原東一郎撰者兼発行人『東京買物獨案内』（出版社不明、一八九〇〔明治二三〕年）八一頁。

⁴⁷ 一八九八〔明治三一〕年刊の『日本の下層社会』所収「東京府下の小工業」にも、「蒲団や」ないし「蒲団」製造などの記述は見当たらない（横山源之助『日本之下層社会』岩波文庫、一九四九年、八一頁）。

⁴⁸ 西川社史編纂委員会『西川四百年史』（非売品、一九七六年）一三三頁。また同書には、「明治二五年以後、日清日露の戦争の時期を通じて西川家の営業成績は急速に発展して行く。日清戦争後は我国の近代工業が急速に発達した時期であり、特に繊維業界の発展はその最たるものであった。」（一三五頁）とある。

⁴⁹ 減産の一途をたどる国産綿の代替として、一八八七（明治二〇）年頃より安価な支那綿が急激に輸入され、一八九〇（明治二四）年の支那綿輸入税撤廃により、その輸入高はますます増大した（吉村、前掲書、一一四―一一九頁）。

⁵⁰ 同右。

⁵¹ 平出鏗二郎『東京風俗志』（明治三二年）復刻版（八坂書房、一九七二年）三二〇頁。

⁵² 週刊朝日編『続・値段の明治大正昭和風俗史』（朝日新聞社、一九八一年）二二五頁。

⁵³ 同書、二三五頁。

⁵⁴ 横山、前掲書、五五頁。

⁵⁵ 吉村、前掲書、二七六頁。

⁵⁶ 平出、前掲書、八一頁。

⁵⁷ 西川社史編纂委員会、前掲書、八六頁。

⁵⁸ 安藤良雄『日本の歴史 第二八 ブルジョワジーの群像』（小学館、一九七六年）二六七頁、掲載「三井物産会社商品別取扱高表」、参照。

⁵⁹ 吉村、前掲書、二七七頁。

⁶⁰ 蓮實重彦「樋口一葉の『にこりえ』―「恩寵」の時間と「歴史」の時間」『文学』第八卷・第二号、一九九七年春）の正鶴を射た意見（「主要な舞台装置となる場所の名前をめぐって、かたくな

なまでに禁欲的」（五一頁）なテクストの特性を尊重するべきである）を踏まえた上で、ここでは

「蒲団や」をめぐる注釈を施すため場所の特定を試みた。

⁶¹ 『臨時増刊風俗画報 第三百四十八号 小石川之部 其一 新撰東京名所図会 第四十四編』

（東陽堂、一九〇六〔明治三九〕年）二九頁。

⁶² 関、菅、校注、前掲書、二四四頁。

⁶³ 前掲『臨時増刊風俗画報 新撰東京名所図会 第四十四編』、三〇頁。

⁶⁴ 同書、三二頁。

⁶⁵ 『にこりえ』物語空間の近景としての砲兵工廠の意味について、磯田光一「丸山福山町と日清

戦争―『にこりえ』の近景と遠景―」『国文学 解釈と教材の研究』29（13）一九八四年一〇月、

参照。

⁶⁶ 小木新造、熊倉功夫、上野千鶴子、校注『日本近代思想大系 23 風俗 性』「解説（上野）」

には、一九〇四〔明治三七〕年二月二一日付『平民新聞』の以下の記事が掲げられている。「今日の

夫婦関係をみるに、男子は生活の余裕ができた所で、娯楽のための女房を取る。女子は年頃になれ

ば、生活の地位を得るがために嫁ぐ。」（五一二頁）又、山本、前掲論文（『にこりえ』の背景）も

「資本をたくわえ商売を順調な軌道に安定させてから結婚するのが、堅実な商人の行き方」（三九

頁）と述べている。

⁶⁷ 『小石川区史』（小石川区史編纂室、一九三五年）七四七―七四八頁。

⁶⁸ 蛇道子「花柳界の敵」『文芸倶楽部 定期増刊 花柳風俗誌』第拾巻巻第拾號、一九〇五〔明治

三八〕年七月には、「花柳界の強敵中最も其数多くして、又全国到る所に跋扈するものは、此の曖昧

屋と称する内に居る女」と述べられ、「此の曖昧屋」として「料理屋」「汁粉屋」「蕎麦屋」「寿司

屋」などが挙げられている（一三八―一三九頁）。

⁶⁹ 山本、前掲論文（『にこりえ』の背景）にも「風俗営業・接客業の店においては、各種の蒲団

の需要は非常なものだったにちがいない」（五〇頁）との指摘がされている。

⁷⁰ たとえば、前掲した『新撰東京名所図会 第四十四編』の小石川指ヶ谷町の項には「町内。東

南丘陵の邊は邸宅地なり。閑屋祐之助（一番地）。原龍太（七番地。理學博士）。〔…〕姉崎正治（七

十八番地。文學博士）邸等あり。」（三七頁）と記されており、居住地としての小石川が丘陵―邸宅

地、谷地―貧家町として住み分けられていたさまがわかる。

⁷¹ 山本、前掲論文（『にこりえ』の背景）、五〇頁。

⁷² 岸井良衛『女芸者の時代』（青蛙房、一九七四年）三七八頁。

⁷³ 藤原清編『小石川区勢総覧』（東京輿論新聞社、一九三四〔昭和九〕年）三三四頁。

⁷⁴ 同右。

⁷⁵ 前掲『小石川区史』における「小石川区日用品販売店数表」（七〇三頁）によれば、調査開始の

⁷⁶ 一九一六〔大正五〕年において「夜具蒲団蚊帳」店は二九軒。

⁷⁷ 前掲、魯庵生「一葉女史の『にこり江』『国民之友』第二二六號、一八九五〔明治二八〕年一〇月、二六頁。

⁷⁸ 長谷川時雨『長谷川時雨全集 第四卷』（日本文林社、一九三二〔昭和七〕年）九頁。

⁷⁹ 山本、前掲論文（二に「こりえ」の背景）、三九頁。

⁸⁰ 小石川区に市電が開通するのは、一九〇五〔明治三八〕年五月、外堀線飯田橋水道橋間である（藤原、前掲書、二二六―二二七頁）。

⁸¹ 蛇道子、前掲記事、「▲銘酒屋と碁会所」一四五頁。なお同記事は、山本、前掲論文（二に「こりえ」の背景）五七頁にも紹介されている。

⁸² 岸井、前掲書、三八一頁、及び山本、前掲論文（二に「こりえ」の背景）、四四頁。ちなみに、岸井、同書によれば、一八九七〔明治三〇〕年頃における新橋芸者の玉代は、一時間三本（一本一〇銭）、御祝儀が一円、お約束が二時間一本、御祝儀が二円（三五四頁）。一八九七〔明治三〇〕年の柳橋の場合は、約束が一時間六本、御祝儀が三円（二二九―二三〇頁）。

⁸³ 正太夫「金剛杵」『めさまし草 まきの一』一八九六〔明治二九〕年一月、四頁。

⁸⁴ 山東京伝『傾城買四十八手 真の手』、中野三敏・神保五彌・前田愛校注『日本古典文学全集四七 洒落本 滑稽本 人情本』（一九七一年、小学館）所収、一四四頁。同テクスト書誌情報に関して水野稔『山東京伝年譜稿』（ぺりかん社、一九九一年）四〇頁、参照。

「お医者様でも草津の湯でも」の注釈をめぐって、管見では、それを都々逸とする説と、俗謡、とりわけ「惚れた病はコリヤ治りやせぬヨ」の詞が後続する草津節、あるいは草津湯のみ歌（ただし、今日ふつう言われる、草津湯のみ歌とは、「お医者様でも」の詞をふくまない、「ヨホホイ」という囃し詞が挿入された歌を指す）とする説の二つに大別される。

前説を主張するものとして、山本洋「工場」「草津の湯」考——「にこりえ」注解のうち——『高野山大学国語国文』一九八二年三月、と、菅聡子校注、前掲書『新日本古典文学大系明治編 24 樋口一葉集』がある（なお山本、同論文によれば、久保田万太郎、戸板康二、次田潤氏も、この都々逸説を採っている）。

後説を採る側はいずれも、その根拠をとくに示していないが、前説を採る側、とりわけ、この「草津の湯」について詳細に考証している山本、同論文は、都々逸説を採る根拠を、次のように述べている（一三六―一四三頁）。長文のため、以下、要約する。

岩波文庫『日本民謡集』、群馬県郷土史家の酒井正保『日本民謡全集』³、同、萩原進『草津温泉史』『群馬県郷土民謡集』などを確認すると、「お医者様でも」の詞をふくむ草津節が、上州草津町で歌われ始めたのは、大正七年頃であるとする説が複数存在するものの、真の発生時期と事情については不明である。少なくとも、堀秀成『草津繁昌記』（慶応元年）にも、大槻文彦『復軒旅日記』（明治一二年）にも、草津節の記述はない。そこで「お医者様でも」の詞をふくむ俗曲を、明治初年頃から広く探してみると、海賀変哲編『端唄及都々逸集』（大正六年）都々逸の部に、「お医者さんでも有馬の湯でも、惚れた病は癒りやせぬ」が存在する。

「有馬の湯」とは、いうまでもなく古来より名湯の誉れ高い有馬温泉（現兵庫県）のことだが、『東京新繁昌記』（明治七年）によれば、明治六年ごろから東京に出現しはじめた「新温泉場」とも「再生温泉」とも呼ばれた新興の入浴施設（湯中に湯花などを入れた施設らしい）のなかには、しばしばその名称に、この有馬の名を借用するものがあらわれていた。その東京の「有馬の湯」のなかで、やはり同時期から明治一五年ごろにかけて「熱狂的に流行」していた「都々逸」として、「お医者さんでも有馬の湯でも、惚れた病は癒りやせぬ」が盛んに歌われるようになったのではないかと、この東京市内の「再生温泉」は、明治一〇年には四四箇所を数えるようになるが、そのなかには、

上州の名湯、草津温泉の名を冠するところも多く出現する。そうした「市中に草津伊香保のいかばかり出湯のけふり立ちなひくらむ 開けゆく御代の恵みは都にも草津熱海の出湯ありけり」〔明治

事物起原』大正一五年」と歌われるような状況のなかで、先の都々逸における詞「有馬の湯」が「草津の湯」へと変容したのではないか。

ちなみに、明治期の草津温泉は、「あたかもハンセン病と梅毒患者の専有のやうに思はれて、一時は浴客も減少」（前掲『草津温泉史』）し、大規模な火災の影響や強引な客引きの弊風も重なって衰退していたが、大正一〇年前後から客数が再び「爆発的に増加」するのは、この都々逸としての「草津の湯」の全国的な伝播が草津温泉の名声を再び高めた為と推測される。

したがって、「お医者様でも草津の湯でも」という文句は、本来「有馬の湯」であった都々逸を原歌とした替え歌の一節であり、明治二十年代から三十年代にかけて東京市内の再生温泉隆盛の世相のなかで、恋煩いの「不治性」をうたつた都々逸として歌われていたと考えるべきである。」（一四三頁）

また、菅聡子校注『にこりえ』（前掲『新日本古典文学大系 明治編²⁴ 樋口一葉集』所収）は、

「都々逸「お医者様でも有馬の湯でも惚れた病は癒りやせぬ」を「草津の湯」に入れ替えたもの。坪内逍遙『当世書生気質』（明治十八―十九年）には、「草津とし云ば、臭気も名も高き、其本元の薬湯を、こゝにうつしてみつや町に、人のしりたる温泉あり」とあるように、ここでの「草津の湯」は上州草津温泉でない可能性も高い」（二四六頁）と注釈する。

⁸⁵ 俗謡、ないし草津節、草津湯もみ歌とする注釈として、管見では、和田芳恵、前掲書『日本近代文学大系 第8巻 樋口一葉集』一八八頁、木村真佐幸『樋口一葉』（桜楓社、一九八〇年）八四頁、中野博雄『校注 樋口一葉』（双文社出版、一九八二年）一一頁がある。山本、前掲論文によれば、塩田良平、岡田八千代、山根賢吉、関良一、岡保生、前田愛氏など、多くの論者がこの俗謡ないし草津節、草津湯もみ歌説を採っている（一三六頁）。

⁸⁶ 「雑録 近県の所謂酌婦」（表紙には「近県酌婦制痛論」と表記）『女學雜誌』第三〇七号、一九九二（明治二五）年三月五日、八〇八頁。

⁸⁷ 同右。

⁸⁸ 同右。

⁸⁹ 同記事、八〇九頁。

⁹⁰ 同記事、八〇八―八〇九頁。

⁹¹ 石川天崖『東京學 復刻版』（新泉社、一九八六年）四九〇頁。

⁹² 「社説 経済の道（中）（八） 経済と道徳とは双子なり」『女學雜誌』第三五七号、一九九三（明治二六）年一月一日、四四一頁。

⁹³ 井上哲次郎『勅語衍義』（鈎玄堂蔵版、成美堂、文魁堂発兌、一九九一（明治二四）年）一〇一―一頁。

⁹⁴ 「社説 家庭は一国なり」『女學雜誌』第三二四号、一九九二（明治二五）年八月六日、一一二―一頁。

⁹⁵ 同右。

⁹⁶ 同右。

⁹⁷ 「婦徳」ないし「女徳」とは極端な欧化主義の反動として明治二〇年代初頭より発刊された女性誌、たとえば『日本之女學』『貴女之友』などにおける中心的概念であり、それら雑誌と「家政を文明開化の風に行ひ得る丈行」（『女學雜誌』第三二四号、一九九二（明治二五）年八月）うことを目指した開明的な『女學雜誌』とは対照的な関係にあった。しかし教育勅語発布後の女性誌は、おしなべて「国粹的主義的な婦徳論」に傾斜し、「近代家族の中の性分業を正当化」（前掲『日本近代思想大系²³ 風俗 性」一解説（上野）」、五四七頁）していった。この流れからいえば、一九九二

（明治二五）年の段階の『女學雜誌』が実質的に「婦徳」「女徳」を称揚することに矛盾はないだろう。この他、近代家族概念および家族国家システムに関して、伊藤幹治『家族国家観の人類学』（ミネルヴァ書房、一九八二年）、落合恵美子『近代家族とフェミニズム』（勁草書房、一九八九年）、上野千鶴子『近代家族の成立と終焉』（岩波書店、一九九四年）、西川祐子『近代国家と家族モデル』（吉川弘文館、二〇〇〇年）等を参照。

⁹⁸ ちとせ「女子の読むべき書物」『婦人新報』第二号、一九九五（明治二八）年三月二十八日、一八頁。

⁹⁹ 前掲「雑録 近県の所謂酌婦」『女學雜誌』第三〇七号、一八九二（明治二五）年三月五日、八〇七―八〇八頁。なお、同記事の同部分は、既に関礼子氏が前掲『姉の力 樋口一葉』一一四頁、前掲『語る女たちの時代 一葉と明治女性表現』二五四―二五三頁で引用している。とりわけ『語る女たちの時代』においては、「お力の多義性」を提示するための有益な一次資料となっており示唆を受けた。「記号化されざるもの―『にこりえ』」の章を参照のこと。

¹⁰⁰ 「社説 天下の大勢」『女學雜誌』第一八九号、一八八九（明治二二年一月三〇日、三七八頁）。

¹⁰¹ 同右。

¹⁰² 菅、前掲書（『女が国家を裏切るとき』も「お初の境遇は、お力の酌婦仲間である「与太郎」の「母」の姿と重なる」（二四二頁）と指摘し、源七も「酌婦のためという極私的なことのために死んだ（…）国家の大義に背戻する男」（二四四頁）であると正しく述べている。

¹⁰³ 梅暮里谷峨『傾城買二筋道』、中野・神保・前田、前掲書、所収、一七五頁。

¹⁰⁴ 作者未詳『部屋三味線』、水野稔編『洒落本大成 第十九卷』（中央公論社、一九八三年）所収、七九頁。

¹⁰⁵ 田中優子「近世の家族像」、上野千鶴子・鶴見俊輔・中井久夫・中村達也・宮田登・山田太一編集『変貌する家族2 セクシュアリティと家族』（岩波書店、一九九一年）所収、二五四―二五五頁。

¹⁰⁶ 前田、前掲書（『文学テキスト入門』一三〇頁）。

第四章 御伽話への訣別——『わかれ道』と〈働く貧困層〉

一・日本資本主義確立期のテキスト『わかれ道』

一八九五〔明治二八〕年も終わりに近づくと、初の対外戦争であった日清戦役が連戦連勝のうちに終結した半年あまり前の、国全体をあまねく覆っていた熱狂的な戦勝気分はあらかた消失し、かつてない深刻な不況の様相が明らかになってきたのだった。軍事公債の発行や日銀からの借入などによって、二億二五〇〇万円余という、当時の国家財政からすれば破格の巨費が投じられたこの戦争は、その勃発直後から金融市場を混乱、低迷させ、結果、米価をはじめとした諸物価は暴騰を続けていた。にもかかわらず、三国干渉をうけ、臥薪嘗胆を誓った政府が提出した戦後経営に向けての来年度予算額は、戦前の二倍以上という規模であり、それを賄うべくあらたな増税が決定された¹⁰。先行きの圧倒的な不透明感が、一八九五〔明治二八〕年師走の日本に広がっていた。

この時代の空気を、以下の雑誌記事は良く伝えている。

茲に、明治二十八年の往くを送りて種々の感慨あり。人生の行歩は実に不可思議にて、寸前の変化を明らかに豫察し得たるものは嘗て太はだ稀なり。去年、俄然として戦端の啓けたるや、既に予想外なりき。戦かつて大いに勝ち、斯迄に支那大帝國が弱からんとは、また何人か想定せし。當時、國民皆な膨張し、元氣充滿し、一種の奇しき風全國に吹渡りて、前途の春意爛漫として只だ盛んなりき。此時に方りて、誰か亦た今日の枯冬あることを知らんや。而して、嚴冬に接し、人意自から寒きの今日、來らんとするものの果して如何なるかを、今にして明らかに言ひ得るものは蓋し多からじ¹¹。

（社説「歳暮の回顧及警戒」『女學雜誌』第四百十七號、一八九五〔明治二八〕年十二月二五日）

「元氣充滿」「春意爛漫」とした祝祭的気分から一転、「枯冬」「嚴冬」とも喩えられる出口の見えない厳しい不況が、すでに顕在していた国内の貧困問題を、より深刻化させたのはいうまでもない。日清戦争を契機とする産業資本の確立は、膨大な数の生活困窮者をあらたに都市下層社会に流入させたが、この未曾有の戦後不況は、その流れにいつそう拍車をかけたのである。

しかも、可決された翌年度予算では地租増税は見送られ、「細民の幸福を減削して特に富民を保護するもの¹²」、「彼等〔細民〕は其消費する砂糖及鹽に於ては岩崎三井と同一の租税を払ふものなり¹³」と大批判されていた消費税も一部増徴¹⁴されることになったのだった。背景には、急速に富を独占するようになってきた資本家や寄生大地主による政党への働きかけがあったとされており¹⁵、したがって賃金上昇¹⁶や小作料軽減も抑制されたままである¹⁷。

「中産人民の破産倒財益々多きを加へ。遂に富者と貧者との二大階級を社会に現出せしむに至れり¹⁸」、「競争益々激甚なるに従ひて無数の貧民を生じ、欧米諸国の如き惨状に陥るを免かれざるべし¹⁹」、「貧富懸隔の勢非常の速度を以て進みつつある²⁰」。近代日本初の一般経済雑誌²¹である『東京経済雑誌』（一八七九〔明治一二〕年創刊・田口卯吉主筆）寄稿者たち²²や毎日新聞社主・島田三郎など、当時の経済系論壇を担っていた識者たちが異口同音に述べているのは、貧困者の激増と貧富の格差

拡大である。

同時に彼らが「貧富懸隔の結果は憎疾の原因となり、憎疾の結果は平和攪擾の原因とならん¹⁴」といった言葉遣いで一様に危惧するのが、その帰結としての社会不安の増大だった。すでに開戦直後から、大阪では二〇〇名ばかりの貧民が堂島の米穀取引所に押しかけ米をよこせと口々に叫び暴動を起こした、米価のあまりの高騰を恨んだ佐渡相川の窮民らが米穀商を襲撃しようとした、などの騒擾事件が新聞紙面を賑わしてもいた¹⁵。強盗・窃盗事件も各地で頻発¹⁶、まさしく世相は「人意自ずから寒きの今日、來らんとするものの果して如何なるか」まったく不明の混迷状態に陥っていたのである。それは、初の対外戦争を大勝のうちに終えたばかりの近代日本がはじめて直面する、かつて経験したことのない閉塞状況だった。

まさにちょうどこの一八九五〔明治二八〕年一二月に執筆・脱稿され、翌月発行『国民之友 第貳百七拾七號附録 藻鹽草』(一八九六〔明治二九〕年一月四日)に初出されたテキストが、これから本稿が論じようとする樋口一葉『わかれ道』なのだが、同時代において威を示していた文藝誌『めさまし草』の紹介文によれば、そのプロットは以下の通りである。

一寸法師と綽号せらるゝ傘屋の吉三といふ小僧あり。もと角兵衛獅子の子供なりしを、今は亡くなりし傘屋の婆が拾ひて育てしなり。性質すなほにて善く働けども、人々嘲りて齒せず。唯裏屋ずまひにて、縫物に口を糊するお京といふ美人のみは、あはれがりて交際ひぬ。お京が貴人の妾にならんとするとき、吉三諫れども甲斐なし。作者一葉樋口氏は處女にめづらしき閱歴と觀察とを有する人と覺ゆ。筆路は暢達人に超えたり¹⁷。

(婦休庵〔森鷗外〕「鷗翻搔」『めさまし草 まきの一』一八九六〔明治二九〕年一月)

「もと角兵衛獅子の子供なりしを、今は亡くなりし傘屋の婆が拾ひて」、すなわち、かつて孤児であったという少年を主要人物のひとりに据えた設定は、上述した社会状況と無関係ではないはずである。前出『国民之友 藻鹽草』に同時掲載された他の小説も、後藤宙外『ひたごゝろ』をのぞいた全てが(江見水蔭『炭焼の煙』、星野天知『のろひの木』、泉鏡花『琵琶傳』)孤児を登場させていることも、たんなる偶然の一致とは思いたい。『東京経済雑誌』(一八九四〔明治二七〕年五月一九日)に掲げられた「貧民の統計」によれば、困窮者の増大にもなつて、孤児ないし棄児の数は判明しているだけでも毎年五千人をゆうに超していた一方で、主だった保護施設(東京市養育院・福田会育兒院)に收容された孤児の人数は、わずか六〇〇人弱に過ぎなかった¹⁸。本節冒頭に掲げた『女學雑誌』目次頁にも、「孤女學院」への義捐金募集広告や「岡山兒兒院寄付金追加」記事が掲載されているが、増加の一端をたどる孤児や棄児の数は、それら公私あわせた保護施設の收容能力の、到底およぶところではなかったのである¹⁹。起伏に富む物語にふさわしい存在として描かれることの多い孤児ではあるが、とりわけこの時期、大不況の被害をもつとも直截的にこうむって巷にあふれだした窮民たちの姿は、格好の描出対象であっただろう。

だが、婦休庵すなわち鷗外が正しく概括しているように、このプロットの帰結は「お京が貴人の妾にならんとするとき、吉三諫れども甲斐なし」にほかならない。『最暗黒之東京』(『国民新聞』一八九二〔明治二五〕、一八九三〔二六〕年、単行本初版・一八九四〔明治二七〕年)で、そのあまりの貧状ぶりに驚愕した著者・松原岩五郎が「日本一貧乏者の麴園²⁰。」「日本一の塵芥場と許したるこの地の境界は、

あらゆる不潔を以てあらゆる溷雑を料理し、淤水縦横して腐鼠日光に曝露され「……」人間生活最後の墜落²¹」と形容したほどの、芝新網町という近代日本の最底辺のスラムで孤児として使役されてきた吉三の、あらゆる辛苦を知り尽くした上での掻き口説くような「諫」め——「何もお前女口一つ針仕事で通せない事もなからう、彼れほど利く手を持つて居ながら何故つまらない其様な事を始めたのか、余り情ないでは無いか「……」お廃しよ、お廃しよ、断つてお仕舞な」を以てしても、「お京が貴人の妾にならんとする」決意を翻意させることができなかった。それが小説『わかれ道』の大筋であり、要諦なのである。それから約一〇〇年を経た今日の『わかれ道』解説文も、この鷗外による梗概文と変わるところがない。「はつきりしているのは純真な吉三の必死な叫びが、明日妾になるために長屋を立ち去るお京の予定を変更し得ないという事実だけ²²」。

付言すれば、このような、女性登場人物が「貴人の妾にならんとする」までを描いた、別言すれば「妾にならんとする」までしか描かれなかった物語は、じつは同時代にあつてきわめて特異である。三人もの権妻を手に入れるまでの豪商（岩崎弥太郎がモデルとされる）の色道を描いた尾崎紅葉『二人妻』（一八九二〔明治二五〕年）は別としても、旧刑法制定（一八八二〔明治一五〕年）に至る議論において一夫一妻制が声高に称揚されてゆくなかで、同じ紅葉の『おぼろ舟』（一八九〇〔明治二三〕年）、三宅花圃『八重桜』（一八九〇〔明治二三〕年）、同『空行月』（一八九八〔明治三一〕年）、広津柳浪『妾』^{おもひもの}（一九〇三〔明治三六〕年）、鷗外『雁』（一九二一〔明治四四〕—一九二二〔明治四五〕年初出、物語内時間は一八八〇〔明治二三〕年）などの諸作はいずれも、すでに妾である女性たちが、その「軽蔑れて、馬鹿にされて居る²³」「卑しい身分²⁴」「妾」を脱するまでを、あるいは脱しようと試みるプロセスを描いているからである。

これに対して『わかれ道』は、その物語内時間を、お京が転居する前夜（十二月三十日の夜）までの数日間に、厳密に限定している。その晚以降のことは、すなわちお京が妾宅に移る一二月三一日から後のことは、語り手は何ひとつ、どのような些細な暗示すらも語っていない。つまり『わかれ道』とは、お京が妾宅に入る直前に生じた出来事だけに、正確に絞った物語なのである。妾宅を抜け出すことに力点を置いた他の小説群とは、正反対のベクトルを示しているのだ。

だがそれにもかかわらず、既に指摘されているように、『わかれ道』には「仕事屋」お京の過去に関する情報はもちろん、現在の心中思惟語もほぼ存在せず、なぜ「お京が貴人の妾にならんとする」のかが判然としない。かえって『雁』をはじめとした上掲諸作のほうはずっと、妾宅あるいは妻妾同居生活に入るまでの女性主人公の来歴や事情、その内面を詳細に語っているのである。後藤積氏も述べるように「傘屋と同じ町に住むようになって十ヶ月足らずの生活のなかで仕立てまでの生計を断ち切つてなぜ妾奉公に転身しなければならぬのか、その理由、動機については最後まではっきりと示されていない²⁵」。

一人の女が、いかなる痛切な諫言にも翻意せず、みずから嘲り蔑む「腐れ縮緬着物で世を過ぐ」生き方を選択するまでの数日間だけを物語りながら、その理由は明示しない。言い方を変えれば、「若い傘職人吉三と年上の裁縫師お京の別れにちなむ²⁶」タイトルを冠したテキストであるにもかかわらず、その「わかれ」の真因が明らかにされていない——。そのため、同テキスト研究はいずれも、題名・主題・結末すべてを兼ねたキーワードである両者の「わかれ」の真因を探るかたちで論じられているわけだが、なかでも、関礼子「貧者の宵——『わかれ道』試論」が先鞭をつけて以降、その真因を「貧者」ふたりを圍繞する「社会的・制度的なもの²⁷」に求める論攷が提出されてきた²⁸。

本稿は、それら論攷とは似て異なる観点から——つまり、それら論攷が明述してこなかった資本主義の観点から、『わかれ道』を論じようとするものである。それは、『わかれ道』執筆・初出時（一八九六〔明治二九〕年一月前後、すなわち産業革命期であると同時に、日本資本主義確立期前夜における〈格差社会の本格的出現〉という経済的文脈のなかにテクストを広げ、お京と吉三の物語を読みなおす試みにほかならない。本稿冒頭で一八九五〔明治二八〕年末の経済状況に触れておいたのも、その布石である。

近年における日清戦後の経済・労働政策思想に関する研究によれば、テクスト初出当時、明治初年期から受容されてきた自由放任主義の下での「経済的自由競争の展開は、労働者に対するさまざまな弊害を生み出し²⁹」、貧富の格差を顕現させていた。もつとも、明治初年に主として『明六社』同人たち——西周、津田真道、神田孝平、福沢諭吉らによって受容され、田口卯吉によって最も熱心に提唱された自由（競争）主義・自由放任主義が、当時かならずしも支配的な経済政策思想であったわけではない。若山儀一、杉亨二、大島貞益、犬養毅らが主張していた保護主義との鼎立ないしは拮抗状態にあったのであり、つまりはテクスト初出当時の経済政策とは、自由放任主義を基調としつつも、あるいは理想としつつも、新興工業／産業に対する政府の保護や介入をおおむね歓迎するという、現実的方向性が採択されていたといえよう³⁰。

だが、寄生地主制と貧富の格差拡大という、一八四五〔昭和二〇〕年の終戦時まで継承される問題を産み出した地租改正が、自由主義陣営の神田孝平による具申をひとつの参照にしていたことは、付記しておかなければなるまい³¹。神田は、圧倒的多数の人々が従事する農業（および農地）を「私的所有と市場競争の原理のうえに立脚させる³²」ことを企図し、その帰結として確実に拡大するであろう貧富の格差を、「西洋自由主義経済学に内在する無慈悲な基本原則³³」として是認していた。「人の性智愚あり、勤惰あり、儉奢あり。その智勤儉を兼ねる者はようやく富み、愚惰奢を兼ねる者はようやく貧しきは、当然の理なり³⁴」と彼は述べたというが、近代日本における最重要改革のひとつに、そのような自由放任主義思想が流入している点は重要である。

いずれにしても、自由放任主義にせよ、その対立軸としての保護主義にせよ、あるいは日清戦後に国家経済政策の根幹に据えられた商工立国論にせよ、財政基盤や貿易や開発をめぐる政策論議は活発化する一方で、働く者たちをめぐる問題じたいは黙過されていたのだった。たとえば、一八八七〔明治二〇〕年頃から相次ぐ都市貧民ルポルタージュの出版化は、地租改正と、その実施者・松方正義のデフレ政策によって、膨大な数の棄農民が流民化した事態を背景としているが³⁵、その流民層を最大の労働力としていた工場における労働法「工場法」もまた、その検討『わかれ道』初出一八九六（ころ）から施行（一九一七〔大正五〕年）まで他国に類を見ないほどの長期間を要したという事実が、近代日本の経済・労働政策論議において「一方の当事者である労働者が強制的に退去させられ³⁶」ていた事態を示している。そのような状況の中で『わかれ道』のお京と吉三が属する職人層もまた、産業革命の進行につれて経営側が「職場集団に対する介入を強化し³⁷」た結果、その「階層化・集団化が進展し³⁷」ていった。労働者問題は、国家と実業界の双方による「限りなく資本としての利害（競争力の維持強化）を貫徹する³⁸」という論理下において黙過されていたのである。

そうした明治初年からテクスト初出時にいたるまでの経済・労働状況について、簡潔にして要をえた概括を残しているのが、やはり横山源之助であろう。彼は『対話 佐久間貞一君』（一八九八〔明治三二〕年）のなかで、自由放任主義から保護主義への変遷を振り返りながら（「当時の学者なる者亦た

浅薄なる学理に心酔しマンチエスター派の経済論を主張して当時の田舎書生―政治家に助言し煽動しければ政治の方針は悉く放任を事とし、組合と謂ふが如きも甚だ之を嫌ふの極端なるに至れり、「…」原動有れば反動あり、極端の放任を主義とせし所の政府は爰に反動生じて全く相反せる干渉の方針として政治を施すに及べり、労働環境そのものは悪化の一途をたどっていると記しているのである（「社会の生存競争旧に倍して激甚なるに至れると共に資本を有せる受負者の勢力益々大を致し、終に多数の職人は受負者の前に叩頭するに至りぬ。」）。

『わかれ道』は、日本が資本主義国家としての確立をほぼ果たしたとされるその時代⁴⁰の、都市に生きる「貧者⁴¹」たちの物語である。しかし、その内容は、都市スラムを「異界⁴²」とみなす一連の「探訪」ルポルターージュとも、あるいは二葉亭四迷が抱いていたような「強てイリユージョンを作つて総ての貧民を理想化しようとした」⁴³「…」感傷的なヒューマニズム⁴³とも、明らかに一線を画している。そもそも『わかれ道』は同時代テキスト、たとえば先行する「探訪」ルポや、貧困問題が日を追うごとに深刻化するなかで「硯友社文学に対する批判に応えて、すこし写実の中を拵げたにすぎない⁴⁴」と評される悲惨小説が点描するにすぎなかった、女性の賃労働者の姿をとらえている点において、きわめて稀少なテキストなのである。

そうした同時代のテキスト群が黙過してきた近代における女性の賃労働者―今日の言葉に置き換えてみるならば（働く貧困層^{ワーキングプア}）の女性は、『わかれ道』の語りのなかで、いかにその具体的な姿を現すのか。本稿では、とりわけ「運」／「出世」、「面白くない」／「詰まらない」というテキストに頻出する言葉に注目し、その言語態分析を試みながら、彼女の具体的な姿を浮き彫りにすることを通して、『わかれ道』の同時代における特異性について指摘することにする。

二 「貧困なる労働者」の出現

お京さん居ますかと窓の戸の外に来て、ことごとくと羽目を敲く音のするに、誰れだえ、最う寐て仕舞つたから明日来てお呉れと嘘を言へば、寐たつて宜いやね、起きて明けてお呉んなさい、傘屋の吉だよ、己れだよと少し高言へば、嫌な子だね此様な遅くに何を言ひに来たか、又御餅のおねだりか、と笑つて、今あけるよ少時辛棒おしと言ひながら、仕立かけの縫物に針どめして立つは年頃二十余りの意気な女、多い髪の毛を忙がしい折からとて結び髪にして、少し長めな八丈の前だれ、お召の台なしな半天を着て、急ぎ足に沓脱へ下りて格子戸に添ひし雨戸を明くれば、

日頃からの吉三とお京の親交ぶりをうかがわせるテキスト冒頭の一節だが、仔細に読むと「ことごとくと羽目を敲く音のするに」とあり、とすれば、ここで語り手は「羽目を敲く」吉三ではなく、「羽目を敲く音」を長屋内で聞くお京と一体化していることがわかる。つまり、ほかならぬテキスト劈頭において語り手が焦点化しているのが、深夜にもかかわらず仕立物に勤しむお京の姿なのである⁴⁵。それは、吉三の再三にわたる呼びかけにようやく「針どめして」「急ぎ足に」彼を迎え入れなければならぬ程の仕事量に追われ、そのために「結び髪にして」「前だれ、お召しの台なしな半天を着」、急ぎ立てられるように針を進める居職人としての座姿にほかならない。

この明治二〇年代後半、職人たちをとりまく環境は、激変に見舞われていた。従来、職人とりわけ

居職人——「もつぱら労力を売って生活する純然たる労働者」である出職人に対して「下駄職の如く堤燈職の如く裁縫職の如き⁴⁶」職人——は、荷主・仲買人から原料を仕入れ、これを加工してみずから問屋に販売していたが、新規参入の自由化によって急増した問屋が強大な力を持つようになる、漸次、仲買人が淘汰されていった⁴⁷。こうして、生産から流通にいたるまでの権利すべてを問屋が掌握する「問屋制商業資本」が確立されると、旧幕時代は、同業者組合による保護のもとで一定の自律性と独自の職業的矜持を持ちえた居職人たちは、「商業工業の上に勢力を占め、隠然平民社会の主権を握り居れり⁴⁸。」といわれた資本力ある問屋に隷属する低廉な賃労働者へと零落、その生活条件はいちじろしく悪化していったのである⁴⁹。『東京経済雑誌』はその様子を次のように記している。「徳川時代には彼等は随分社会の尊敬を受け、随分利益を占め、随分勢力を有したり〔…〕然るに維新以来彼等の勢力は頓に衰へたり〔…〕彼等は需要の度に應じて其の賃金を上下することを知らず、常に最低の賃金に甘ずるが故に、益す貧困に陥れり⁵⁰。」（「我邦の職人社会」『東京経済雑誌』一八九〇〔明治三三〕年九月六日）。

職人間の競争が激化し、それがさらなる労働価値の低下をもたらし、かつては徒弟制技能者集団であった職人社会に、たとえばお京のような比較的修業年限の浅いであろう家内労働者も参入しやすくなることで、「甲の尻を乙は攫み丙の得意場は丁これを侵し、競争また競争〔…〕かくの如き黒闇々たる職人社会⁵¹。」といわれるような惨状を、この時期の職人社会は呈していたのである⁵²。お京の属する職域「和服」は『日本之下層社会』において、そうした「黒闇々たる職人社会」の一角に挙げられているのだ。

貧困なる労働者は自活力を有する一種の奴隷たり。〔…〕彼等は生活の資を求むるが為め。自ら進んで奴隷となり。毎日十五六時間宛日曜日は勿論。周年殆ど無休息にて労働することを。

〔…〕蓋し彼等は斯くせずんば生活し得ざれば也⁵³。

（台水瀧興治「政治家は貧民の惨状を無視すべからず」『東京経済雑誌』一八九四〔明治二七〕年六月二三日）

どれだけ働いても貧しさから抜け出すことが出来ないという意の現代用語（ワーキングプア）を想起せずにはいけない「貧困なる労働者」のお京もまた、厳冬の歳末の夜更け、「御餅を焼くには火が足らない」ほどの火鉢ひとつで、「今夜中に此れ一枚を上げねば成らぬ」という過重労働に耐えていた。しかもその「角の質屋の旦那どのが御年始着」を徹夜で仕上げたのちも、「今日明日は忙がしくてお飯を喰べる間もあるまい」と嘆息される労働がなおも続くのだ。

一八九五〔明治二八〕年末は、商況全体の停滞にともなって職人層全体の賃金がさらに下落していた一方で、先述したように物価は暴騰していた戦後不況の只中でもある⁵⁴。職人一人当たりの労働時間はさらに延長せざるを得ず、『東京経済雑誌』の伝える「毎日十五六時間宛日曜日は勿論。周年殆ど無休息にて労働すること」は、もはや常態と化していた。翌年の同誌社説も以下のような一文から始まっている。「近時諸物価の騰貴せるに係らず、東京市中に於て明家の少なきと職人の多忙なるとは一の奇想なり⁵⁵。」。

関礼子氏も調査しているように、一八九六〔明治二九〕年時点での和服仕立職の平均日給は、平出鏗二郎『東京風俗志』では約四五銭から七〇銭⁵⁶、『日本之下層社会』で掲げられている「第十三次

農商務統計書」の「全国諸傭平均賃金」では二九銭六厘⁵⁷（いずれの場合も性別による賃金差があったかは不明）。テキストには物語空間をめぐる具体的呼称は登場しないが、さしあたり『東京風俗志』が記した日給四五銭から七〇銭とみれば、お京の収入は、一九〇一〔明治三四〕年時点での女性賃金の最高額である織物女工の日給二四銭⁵⁸より多額となる。だが、「日清戦後までの賃金水準をみれば、工場労働者を示す鍛冶職〔労働者平均からみて高賃金であった 引用例注〕ともっぱら都市下層社会でくらす日雇・人夫の賃金水準のあいだに基本的な差はなく、両者の生活構造は同一の水準にあった⁵⁹。』という産業革命期研究を参照すれば、お京の日給が工場女子労働者賃金のそれを大幅に上回るとは考えがたい。「居職人としては比較的安定した収入があった⁶⁰。」と今日推測されるお京ではあるが⁶¹、仮にそうだとすれば、ほかならぬ彼女自身が「私は常住仕事畳紙と首つ引の身」と語ってみせている通り、それは連日深夜にまでおよぶ長時間労働によって初めて可能な収入だったはずなのである。

「此様な遅くに何を言ひに来たか、又御餅のおねだりか」、例の如く台処から炭を持出して、「焼きあがりし餅を両手でたゞきつゝ例も言ふなる心細さを繰返せば」、「十二月三十日の夜」「…」帰りは例の窓を敲いて、「お京が例の窓下に立てば、此処をば毎夜音づれて呉れたのなれど」などの傍線部の、お京と吉三の日常風景をあらわす反復表現は、二人の親しい交流を読者に印象づけるための表現でもあるが、しかしそれ以上に、恒常的にくりかえされるお京の深夜労働を強調することに力点がおかれた表現として読むべきであろう。

職人社会全体における労働条件の劣悪化といった面とあわせて、彼女の長時間労働は、女性労働全般における賃金の廉価性といった側面からも見なければならぬはずだ。たとえば、「朝末明ヨリ夜十時頃マテ絶エス作業⁶²」「…」することを女性労働者たちに課したことによって、労働史上きわめて悪名高いのが当時のマツチ製造工場だが、「彼の婦女が乳飲兒を背負ひ、四五歳の小兒を傍に置きながら⁶³」「…」でも長時間就労から離れることができなかったのは、女性の労働市場がもとより狭小であり（第九節で詳述）、且つその賃金があまりに低廉だったためである⁶⁴。「婦女をして八時間以上労働せしむるは惨酷なり」「…」宜しく之を厳禁すべし⁶⁵。」といった意見も挙がるほどだったが、そうした声は次のような自由放任主義の立場から直ちに批判されることになった。

労働時間を減縮すれば、其の賃銀の減少するは経済世界の道理なり。「…」賃金の高低は経済の理に基くものなれば、人力を以て左右し得べきものにあらざ。労働せざれば賃銀を得べからざるは経済の理なり。之と同じく小時間の労働は小賃銀を得べきものたるも亦た経済の理なり。如何ぞ此の憫むべき婦女が多く労働して巨額の賃銀を得んとするを遮りて之をして飢餓に瀕せしめて可ならんや⁶⁶。

（田口卯吉「慈善家は貧民の職を得るを妨害すべからず」『東京経済雑誌』一九〇一〔明治三四〕年八月一〇日）

同情は時間を制限し若しくは夜業を廃止するにあらずして、全く之を放任して経済自然の調和に委することは考究を要する程の事情にもあらざるべし⁶⁷。

（田口卯吉「労働時間の制限と夜業廃止」『東京経済雑誌』一九〇一〔明治三四〕年九月七日）

自由放任主義の唱道者・田口卯吉の面目が躍如しているといつて良い上掲文は、工場法案制定論議

をうけて書かれたものだが、それ以前の『東京経済雑誌』を紐解いてみても、こうした文字通りの自由「放任」主義を謳い上げる論説は枚挙にいとまがない⁶⁸。そうした論調は『東京経済雑誌』だけに顕著なのではない。当時、実業界の参謀本部とも評されていたという⁶⁹。「農商工高等会議」(第一回、一八九六〔明治二九〕年一〇月二四日)において、今日社会事業家としての側面でも高く評価されている澁澤栄一も、女子労働者保護より生産効率を優先させるのは経済発展上の自明の理であるとの意見を開陳しているのである。「間断ナク機械ヲ使ツテ行ク方ガ得デアル、之ヲ間断ナク使フト云フニハ夜業ト云フコトガ経済的ニ適ツテ居ル〔…〕夜間ノ仕事ヲサスル方ガ、算盤ノ上デ利益デアルカラ、ヤツテ居ル〔…〕職工ガ段々衰弱シタト云フ事実ハ〔…〕私共見出サヌ⁷⁰」。

「多く労働」しなければ「飢餓に瀕」してしまうという貧困女性の労働実態は置いたまま、「之を放任して経済自然の調和に委すること」を是とするこうした時代文脈のなかでは、お京の労働量は、今日テキストを一読するだけでは到底想像できない、苛酷な重みをもっていたはずだ。

ともあれ、テキストはその冒頭文から、吉三ではなく、深夜彼の訪れる音を聞くお京を——一八九五〔明治二八〕年末、過度な自由競争社会の到来のなかで、連日の長時間労働によって想像以上の緊張と疲労が蓄積されているにちがいないその座姿を——先ず焦点化している。そのような常住坐臥の針仕事によって辛うじて糊口をしのぐ彼女を苛んでやまない肉体的痛苦を物語って余りある徴が、「小指のまむし」であることは、いうまでもないだろう。すでに関礼子氏も、「仕事と余暇の分節化も定かではなく、いつ果てるかもしれない、日々同じような貌を見せる「居職人」としての「仕事屋」の時間⁷¹」に拘束されているお京像を呈示したうえで、「富裕な女たちにとってはあるいはコケティッシュな身ぶりの表徴ともなりうる小指も、お京においては身体に印された「仕事屋」の徴しである⁷²」と正しく指摘している。

だが、ここで明確にしておかなければならないのは、指を變形ないし硬直化⁷³させてしまうほどの重労働を強い、「余暇」の時間を篡奪することによって彼女を真に拘束しているのは、圧倒的な長時間労働を必然的に要求する自由放任主義経済、すなわちこのころ確立をみた日本資本主義にほかならない、という経済史的事実なのである。

八節であらためて詳述するが、本稿のキーワードでもある「私は洗ひ張に倦きがきて、最うお妾でも何でも宜い、どうで此様な詰らないづくめだから」の「詰らないづくめ」とは、そうした経済的事実を背景とした言葉だと、ひとまずは言えよう。

三二「運」の時代

テキスト導入部において、吉三の呼びかけに応えたのち、ふたたび急いで針を取るまでのお京の姿を仔細に物語ることで、同時代状況を明瞭に浮かび上がらせた語り手は、次いで、「出世」をめぐる二人の会話へと物語を繋げている。テキストにおいて、同時代状況すなわち自由放任主義経済を軸とした社会の到来と、この「出世」なる言葉が、浅からぬ関連性を有していることが予想されよう。

この「出世」をめぐるダイアローグは、以下の引用部分から、テキスト(上)の終端まで続く。

私は今夜中に此れ一枚を上げねば成らぬ、角の質屋の旦那どのが御年始着だからとて針を取れば、吉はふんと言つて彼の兀頭には惜しい物だ、御初穂を我れでも着て遣らうかと言へば、

馬鹿をお言ひで無い人のお初穂を着ると出世が出来ないと云ふでは無いか、今つから延びる事が出来なくては仕方が無い、其様な事を他処の家でもしては不用よと気を付けるに、己れなんぞ御出世は願はないのだから他人の物だらうが何だらうが着かぶつて遣るだけが徳さ、お前さん何時か左様言つたね、運が向く時に成ると己れに糸織の着物をこしらへて呉れるつて

『わかれ道』における「出世」の意味自体については、すでに藤井淑禎氏⁷⁴や菅聡子氏⁷⁵らによって、立身出世主義の男女における意味の相違といった観点から、委曲を尽くして論じられている。それら先行研究とは角度を変えて、ここで本稿が指摘したい点——それは、「出世」という言葉が、つねに「運」という言葉を伴って語られているという点だ。こころみに、語彙としての「出世」が登場する箇所をすべて拾ってみる。

(上)

お京「人のお初穂を着ると出世が出来ないと云ふでは無いか」↓吉三「御出世は願はない」
吉三「運が向く時に成ると」↓吉三「着物をこしらへて呉れるつて、本当に調べて呉れるかえ」↓吉三「お前さんに運の向いた時の事さ」↓お京「そんなら吉ちやんお前が出世の時は私にもしてお呉れか」↓吉三「己れは何うしても出世なんぞは為ない」↓吹矢の一本も当たりを取るのが好い運さ」↓吉三「お前さんなどは以前が立派な人だと言ふから今に上等の運が馬車に乗つて迎ひに来やすのさ」↓お京「親が無からうが兄弟が何うだらうが身一つ出世をしたらば宜からう」

(下)

お京「上等の運が馬車に乗つて迎ひに来た」↓吉三「その好い運といふは詰らぬ処へ行かうといふのでは無いか」↓吉三「何んな出世に成るのか知らぬが其処に行くのは廃したが宜らう」

こうして改めて列挙してみると、お京と吉三の両者にあつては、「出世」と「運」は、交換可能な語として使用されていることが判然とするだろう。「出世」と「運」は、互いにその言葉を置き換えられながら、雑誌見開き四頁足らずのこの短編全体を通じて、等しく六回ずつ頻出するのである。

興味深いことに、じつは他の同時代小説においても、「出世」（あるいは「立身」と「運」という二語は、密接不可分な関連を取り結んでいる。たとえば、零落した素封家の跡取りである望月正太郎がふたたび世に出て篤志家になるまでの、妻おみよとの夫唱婦随を描いた、中島湘煙の『一沈一浮』（初出『文藝倶楽部』一八九七〔明治三〇〕年一月⁷⁶）。

「東京三界にかく貧乏世帯するかとおもふ⁷⁷」暮らしのなかで、「おれも一代の中一度は立身しておまへに楽さして見たいと思ふばかりでこんな有り様だ⁷⁸。」となげく正太郎に、おみよは次のような励ましの言葉を与えている——「しれぬものは運ですよ、運さへ来れば、どんなに立派になるかしれやしません⁷⁹」。そして、当代一の易占家「高島吞象」よろしく「算木をひねくり廻は」す占師の宣託——「正太郎に運がぶらさがっている⁸⁰。」を嬉々として伝えるのである。ほかに「時の運」「授つた運」など、「運」をめぐる語彙は、この小品にも少なからず登場する。

また意外なことに、一八九四〔明治二七〕年五月一九日付『東京経済雑誌』にも、貧困解消を訴える記事の中に、やはり「運命」なる言葉が見られる。「抑々人に賢愚の別あり、其の運命に幸不幸ある以上は、社会に富人と貧民とあるは免がれざるの結果なりと雖も、貧民をして成るべく少からしむべ

きは為政の要務なり^{8.1}。近代日本初の総合経済誌にして自由主義の拠点誌でもある『東京経済雑誌』においても、「富人と貧民」の差を決定付ける要因のひとつとして「運命」の「幸不幸」が挙げられているのだ。

こうした明治二〇年代後半期における「出世」と「運」の用例から見えてくるのは、人々とりわけ貧者たちにとって「出世」と「運」がほとんど同義として認識されていたという、きびしく痛切な現実である。吉三やお京たちからすれば、そもそも「運」とは、巷間よく言われるように、みずから掴み取るものではなく、「馬車に乗って迎ひに来る」、あるいは「授」るもの——すなわち完全な恩寵の賜物であり、偶然の天恵なのだった。そのような意味内容が込められた「運」を、いわば補完語のように常に伴いながら語られていた言葉が、「出世」だったのである。

当時「出世」とは、「運」という、およそ個人の意志や努力のおよばない、たぐいまれな僥倖によってしか叶えられないものとして、人々に受け止められていたわけである。絶対的な国是として、ほとんど信仰にも近かったはずの立身出世主義、それが何より強調する自助努力とは対極の、この「運」への依存、いわば「運」の偏重は、何を契機として広がりを見せるようになったのだろうか。

本章第一節でふれたように、自由競争社会の到来を、その契機のひとつに挙げることできよう。基本的に自由競争社会、少なくとも過度の自由競争社会とは、最強の者たちがすべての資源を占有し、それ以外の者たちを持たざる存在にする社会の謂であろう。持たざる者たちはあらゆる資源の乏しさゆえに、景気や戦争や天災、あるいは怪我や疾病といった外的要因に容易に翻弄される弱者、すなわち個人の力の及ばぬ出来事^{8.2}「運」に絶えず左右される脆弱な存在となってしまう。

そのような弱者であるという漠とした自己認識、あるいはいつ弱者に転落するかわからない不安定な存在であるという自己認識が人々のうちに生じてゆくなかで、「運」という言葉がかつてない切実な重みを持ちはじめたのではないか。とりわけ一八九五〔明治二八〕年末という戦後不況の只中にあるのは、「運」の良し悪しに人々はいっそう敏感にならざるをえなかったはずだ。『わかれ道』や『一沈一浮』にきわだつ、語彙としての「運」の頻出は、そうした時代状況の反映といえよう。

第二の契機は、次の吉三の発話に端的に示されているように——「己れは何うしても出世なんぞは為なのだから。〔…〕何うで盲目縞の筒袖に三尺を背負つて産て来たのだらうから、洪を買ひに行く時かすりでも取つて吹矢の一本も当りを取るのが好い運さ、お前さんなどは以前が立派な人だと言ふから今に上等の運が馬車に乗つて迎ひに来やすのさ」。

すなわち、「産て来た」境遇の良し悪しがその後の人生を決定づけるという、貧富の世代間連鎖の出現である。ふたたび同時期の『東京経済雑誌』を紐解いてみれば、多分に治安維持的防貧論に傾いているとはいえ、この世代をまたぐ貧困の継承を真摯に憂慮した記事を眼にすることができ。曰く、「政治家の多くは徒らに欧波米濤に耽溺し。只漫に僻論空説を逞ふして。政権争奪、党派競争に余念なく。〔…〕選挙区民の歡心を失はざらんが為。僅々たる地租割の増加を排斥し。大地主の負担を減少せんが為め。力を儘して地方税中の有害なる租税廃止に反対し。大地主大資本家に便佞阿諛して。貧民の困苦を度外視し。只管富商の権利を拡張し。豪農の勢力を高むることに狂奔せり^{8.3}」。「議會は地主會議なれば地租軽くして戸數割を重くする為に細民の困難斯の如くに至るなり^{8.4}」。そのような「貧民の課税重くして。富民の課税軽い^{8.4}」「租税賦課の失當^{8.5}」が貧富の格差を固定化するため、貧民の子弟は「幼より貧困の家庭に成長し。勞を修め智を研くの資力なく。職を得ざるか為めに飢餓に迫り。遂に梁上の君子となるに至るなり^{8.6}」。

要するに、既得権益の「只管」な保護という政治運営が、貧富の格差が天与のものだった封建時代への逆行現象を惹起してしまったという主張だが、そうした天賦人權ならぬ天賦貧困の時代の再到来もまた、「運」がものを言う時代の到来にほかならない。言わずもがなのことだが、出自こそ、個人の力が及ばない事柄の最たるもの、すなわち完全な「運命」だからである。

物心がついたときには既に、「新網」という、その『東京経済雑誌』の危惧例をはるかに凌ぐ悲惨な事例にあふれた近代の奈落にあり、孤児ゆえに角兵衛獅子として使役されていたところをたまたま先代の「老婆さま」に「拾」われたものの、その生い立ちを今も周囲から侮蔑され続けている吉三は、その出自ゆえに被ってきた辛酸の度合いの大きさという点で、この天賦貧困の時代をもつとも端的に生きているといえよう。つまり、お京があえて与えた叱咤激励「身一つ出世をしたらば宜からう」の実現可能性の限界を誰よりも知り抜いているのが吉三であり、それを具体的に表現したのが、前掲した発話なのである。

最後に、第三の契機として、以下のような事柄を挙げることはできないだろうか。

前述したように『一沈一浮』には、「高島吞象」に勝るとも劣らないと自負する占者「太助」が登場するが、次のような彼の発話がある。「高島吞象（…）おれも吞象位の後にはさがらぬ積りだ。日清戦争の結果でも、吞象はどう見たかしらぬが、この太助がいつて置た通りになつたからネ、不思議だて⁸⁷。」当時そのように人口に膾炙し易聖とすら呼ばれていたのが、各界要人たちを相手に筮竹を振り⁸⁸、とりわけ姻戚関係をむすぶほど親交の深かった伊藤博文⁸⁹に請われて日清開戦をめぐる占筮をも立てたという⁹⁰、吞象高島嘉右衛門だった。清国への宣戦布告に先立って、その占筮結果は一八九四（明治二七）年六月二七日付『國民新聞』紙上に、「朝鮮事件に対する高島嘉右衛門氏の易断⁹¹」として掲載されたのである。

むろん、新聞誌上に掲載された高島易断と現実の一致が、当時の人々にいかなる心的影響を与えたか否かを知るすべもないし、そもそも「高島吞象」をめぐる明治期政治裏面史についても、その真偽をふくめ、明らかでない点が多い⁹²。だが少なくとも、この『一沈一浮』の発話から読み取ることができるのは、同時代小説にも記されている通り——「號外くと引きもきらぬ大路のさまに、士は足をつまだて、商は算盤を投遣にして、たゞく其方の雲行のみを氣遣ふ。」（前掲『萩桔梗』、戦局の推移とその結末とを固唾をのんで見守っていた人々のうちに、不可知の未来を予見することに對する欲望が生まれていた、という事実であろう。近代初の対外戦争、しかも大国・清を相手とする国民戦争をつうじて、ひとりひとりが「高島吞象」の名に象徴される「不可思議の運命」に対する関心を強めていたのである。

実際、本稿第一節で掲げた『女學雑誌』社説「歳暮の回顧及警戒」にも、次のように説かれていたのを思い出したい。「茲に、明治二十八年の往くを送りて種々の感慨あり。人生の行歩は実に不可思議にて、寸前の変化を明らかに豫察し得たるものは嘗て太はだ稀なり。去年、俄然として戦端の啓けたるや、既に予想外なりき。戦かつて大いに勝ち、斯迄に支那大帝国が弱からんとは、また何人か想定せし。當時、國民皆な膨張し、元氣充滿し、一種の奇しき風全國に吹渡りて、前途の春意爛漫として只だ盛んなりき。此時に方りて、誰か亦た今日の枯冬あることを知らんや⁴」。これに続くのは、「人の現世に處する、自ら招かざるの大勢次第に來り亦た往くに際會して、断えず不可思議の運命と相ひ逢觸す⁵」の一節なのである。

「予想外」の開戦と大勝、そしてその後の「想定」だにしていなかった深刻な経済不況。さらに戦

中戦後を通して強いられている耐乏生活の報奨として待望されていた遼東半島割譲の、三国干渉による思わぬ頓挫。まさに「自ら招かざる」出来事が思いがけず訪れたり去ったりするのが「人の現世」のありようであり、そのように「豫察し得」えない「運命」の不透明性に「断えず」翻弄されて止まないのが人生にほかならない。『わかれ道』執筆と同年同月である一八九五（明治二八）年一二月に刊行された『女學雜誌』「社説」が示しているのも、そのような運命論的人生観であり、それは日清戦争を経験した人々に共有された実感でもあった。

たとえば『わかれ道』所収誌『国民之友』主筆の徳富蘇峰も、三国干渉がもたらした自らの予期せぬ心境変化を、やはり「運命」という語彙を用いてつぎのように述べている。「此の遼東還附が、予の殆ど一生に於ける運命を支配したと云つても差支へあるまい。此事を聞いて以来、予は精神的に殆ど別人となつた。」。列強大国が支配する弱肉強食の国際政治の力学下においては、新興小国の一人など「運命」に盲従するほかない微小な存在にすぎないという圧倒的な無力感が、ここには表出している。「運」ないしは「運命」という言葉は、日清戦中・戦後を語るさいに不可欠な語としても流通していたわけである。

以上述べてきたような、三重の意味における「運」の時代のなかで、『わかれ道』は執筆されているのである。

「運」と「出世」をめぐる飽くことなく語り合うお京と吉三の、それぞれの職業能力の高さを語り手がしきりと強調するのも、この「運」の偏重時代の反映、より踏み込んでいえば、この時代への反撥と考えられよう。「仕事屋」お京の場合は、引きも切らない様子の注水量がその技能水準の高さを言外に証明しているが、なにより吉三の一言「彼れほど利く手」がそのきわだった技術を端的に示している。その「傘屋」吉三にしても、「親方の息子」を「番ごと喧嘩をして遣り込め」ても格別の咎めを受けず、妬んだ朋輩に「仕事の上での仇を返され」るほどの、「油ひきに、大人三人前を一手に引うけて鼻歌交り遣つて除ける腕」を持つ。だが、いかに卓越した「手」と「腕」——すなわち天性の器用さに磨きをかける刻苦努力を惜しまなかった者だけが得ることのできる熟練技能——の持ち主であっても、かつての近世的職人社会に代わって成立した問屋制資本主義の下では単なる賃労働者にすぎず、今後襲ってくるであろう産業転換の荒波にひとたび晒されれば（藤井淑禎氏によれば、既に和傘から洋傘への転換は始まっていた）、簡単に職を失ってしまう「運命」にあるのだ。彼らの未来を左右するのは「腕」や「手」ではなく「運」にほかならない。少なくとも、彼ら自身はそう感じていたはずである。

そのように「人さまの仕事をして居る境界」を一日一日辛うじて生きるお京と吉三にとって、あるいは無数の脆弱な賃労働者たちにとって、その不如意で理不尽な「境界」をあらわすキーワードが、「運」だったのである。

四・運命鑑定家と『わかれ道』

『わかれ道』における「運」の問題を考える際、思い起こさずにはいない人物が、一葉評伝において「明治社会の闇の底にうごめく異形の者。」として特記されている運命鑑定家、天啓眞術会主宰の久佐賀義孝であろう。天啓を頭す術の眞の使い手を標榜する、このいかにも胡散臭い観相家兼相場師は、しばしば新聞に自身の広告を掲載しており¹⁰⁰、窮迫した生活とゆきづまった人生の打開

策を模索していた一葉がこれを見、歌塾をひらくための資金を引き出そうとみずから接近した——。この捨て身の大胆行動は、一葉評伝のなかでもとりわけ名高いエピソードではあるが、興味深いことに、一八九四〔明治二七〕年二月二三日から翌年五月まで続く、この「奇怪な交渉¹⁰¹」は、日清戦争開戦前夜から日清講和条約締結をへて三国干渉が始まった時期、すなわち本節で述べてきた「運」の時代にちょうど重なっている。本節では、テクスト論から一旦離れて、『わかれ道』生成に、この「久佐賀体験¹⁰²」という一葉個人史がどのように投影されているか、若干の考察を試みたい。

一八九四〔明治二七〕年二月二三日、本郷眞砂町の久佐賀邸をはじめて訪れた一葉は、慇懃すぎるほど丁寧な言葉づかいで長々とした前口上を述べたあと、以下の内容を語っている。ちなみに、この久佐賀邸訪問は、一葉も自覚している通り、当時の女性規範をはるかに超えた（をしかけて参ての罪あさからさると女子の身にできまりをこえ¹⁰³）、したがって従来の一葉の行動規範をも著しく逸脱した出来事だったわけだが、そうした尋常ならざる言動、とりわけこのとき久佐賀に向けて語った言葉にこそ、一葉の内面をうかがい知るすべが含まれているはずだ。一葉自身も初めて久佐賀を前にして——むろん、あくまでその真意の程は不明ではあるもの——、これから胸襟を開いて忌憚なく語るつもりであることを告げている（かくいほんといほんとおもひもうけしこと八時にあたりてさもいふましきことありさらに我がむねを開くこともありかし¹⁰⁴）。

以下は、その内容の主要部分に当たる。

我身父をうしなひてことし六年うきよのあら波にたよひて昨日は東今日ハにしあるは雲上の月花にましはり或ハ地下の塵芥にましハリ老たる母世のことしらぬいもとを抱きて先ごぞまては女子らしき世をへにき「：」今は下谷の片ほとりにあきなひといふもふさはしかるまじきいさゝか成る小店を出し而こゝを一身のとまりと定むれどなぞやうきよのくるしミのかくて免がるべきに非らず／老たる母に朝四暮三のはかなきものさへすゝめ難く而我がはらからの侘び合へるハこれのミ／すでに浮世に望みハ絶えぬ「：」さらば一身をいけにゑにして運を一時のあやふきにかけ相場といふこと為し而見ばや／されども貧者一銭の余裕なくし而我が力に而我がことを為すに難くおもひつきたるハ先生のもと也「：」

『日記ちりの中』一八九四〔明治二七〕年二月三日

ここには、はからずも『わかれ道』物語内容に通じる、「貧者」と「運」と「出世」をめぐる一葉の認識が表出しているよう。一葉が久佐賀に問われるままに語っているのは、およそ次のことである。一八九四〔明治二七〕年の父の没後、次第に困窮生活の泥沼に捕らわれていったこと。老いた母と未だ世慣れぬ妹との女世帯三人、細々とした内職と借金と質入とによって辛うじて凌いできた生活もいよいよ破綻し、最後の活路を求めて下谷龍泉寺町に転居、小商いを営みはじめたこと。しかし窮状は改善するどころか、却って二進も三進も行かなくなったこと。それら「うきよのあら波」「うきよのくるしミ」に揉まれ「たよ」うばかりの「貧者」の境涯から抜け出し、「我が力」で「ことを為す」ためには、「相場」という「運」に賭けてみるほかないこと。

つまり、一葉の切迫した息遣いが今にも伝わるようなこの発話は、(一) 貧困が自らの力の及ばぬ出来事（一葉の場合は父の弔事）を契機にもたらされると認識している点、(二) 貧者を外部状況に翻弄されるばかりの弱者と捉えている点（うきよのあら波にたよひて昨日は東今日ハにし）、(三)

貧者の境遇から出世するには「運」の力が不可欠だと考えている点において、『わかれ道』のお京と吉三の発話にたしかに重なり合っているのだ。

見落としてはならないのは、そうした「運」と「出世」をめぐる一葉の認識をかたちづくった樋口家の近代史が、資本主義形成期から企業勃興期、産業革命初期を経て本源的蓄積期にいたるまでの近代日本経済史の端的な反映である点だ。つまり、本源的蓄積期の格差社会に生きる無産者の物語『わかれ道』には、近代日本経済に翻弄されながら、前出した中島湘煙『一沈一浮』とは逆のコースで「浮」き「沈」んでいった樋口家という市井の一族の、ささやかだが痛切な歴史が投影されているのである。やや長くなるが、ここで樋口家の近代史を辿っておきたい。

一葉評伝によれば、父・則義は、東京府（のち警視庁）官吏として俸給を得るかたわら、不動産売買や事業投資、闇貸付などの副業によつて、無産化する多くの旧下級士族に比すれば、ある程度の恒産を蓄えていた時期もあったという¹⁰⁵。苦勞して八丁堀同心の株を買い入れ¹⁰⁶、ようやく下級幕臣の列に加わったばかりのところで維新を迎え、激しい経済的混乱の中にあつて幸運にも新政府に出仕できた則義にとつて、利殖こそは、小官吏生活を側面から安定させてくれる保障だったのであろう。その利殖熱がはじまるのが一八七三、四〔明治六、七〕年¹⁰⁷とされるが、これはいうまでもなく、一八七三〔明治六〕年に布告された地租改正条例¹⁰⁸と秩禄処分法、翌年の大久保利通『殖産興業に関する建議書』の提出を背景としているだろう。旧士族として小額とはいえ秩禄公債¹⁰⁹を手にした則義は、地租改正による土地の市場化と内務省主導による各種商業の振興という、日本資本主義黎明期をかたちづくる大流に乗じて利殖を始め、一八七七八一〔明治一〇—一四〕年のインフレ期における不動産需要の拡大を追い風に（一八七六〔明治九〕年一二月の東京府退職も賞典金を投資に充てる為と推測されよう）、利得を徐々に蓄積していったと想像されるのである¹¹⁰。この段階において則義は、社会階層を転落していった多くの下級士族たちとは異なり、蓄財にむけて着々と歩を進めるだけの才覚にも「運」にも恵まれていたことになる。

一八八八〔明治二一〕年、前年五八歳で警視庁を非職となつた¹¹¹則義が荷車請負業組合設立を企てたのも、一八八六〔明治一九〕年後半から興つた企業勃興期¹¹²を後景としているはずである。一八八五〔明治一八〕年を極とする松方デフレによる「人民非常の貧困を致して而して富める者ハ益々其富を増加せし¹¹³」（『東京経済雑誌』一八八五〔明治一八〕年五月三〇日）という極端な格差状況を、「畢竟全体に於ては富貴貧賤の波瀾は十分に動揺せしめて社会をして自ら治療せしむるの外致し方なかるべきなり¹¹⁴」（『東京経済雑誌』一八八七〔明治二〇〕年三月五日）といった放任主義的経済思想にもとづいて積極的に肯定する時流のなかで退職期を迎えつつあつた則義は、かねてから定年後の生活を確かなものにする方途を模索していたのだろう。本来であれば、折り良く一八八四〔明治一七〕年に施行された一般文官恩給制度の対象者¹¹⁵だつたはずの則義だが、前述したように一八七六〔明治九〕年、退職一時金である賞典金を投資に流用するためか東京府をいったん退職したことで、惜しくも受給資格を欠格していた背景もあつたと推測される。同時に則義は、新規事業をもつて、一八八七〔明治二〇〕年に病死した長男・泉太郎に要した多額の療養費を埋め合わせようと目論んでもいたはずだ。

そこで、紡績をはじめとする第一次企業勃興熱による商況の活発化にともなつて高まる一方の需要に応えるべく、「道路運送業における初の同業組合¹¹⁶。」として結成されたそれは、則義退職後の樋口家にひきつづき経済的安定をもたらすはずだつた。だが、既存の陸運問屋を統合した陸運元会社にたいする保護法・太政官布告第二三〇号の廃止（一八七九〔明治一二〕年）を機に、運送業への民間参

入が急増し、このころから運送各社はげいしい競争にさらされるようになってゆく。おりしも山手線開通（一八八五〔明治一八〕年）によって生糸絹織物の輸送が飛躍的に効率化されると、陸送はしだいに鉄道にその役割を代替されるようになり、私設鉄道条例公布（一八八七〔明治二〇〕年）、鉄道敷法成立（一八九二〔明治二五〕年）ごろからは、運送をめぐる鉄道優先の時代へと完全に推移していったのである¹¹⁷。

殖産興業による保護政策から一転、財政整理による急激な自由競争化時代へ。そこに到来した鉄道の主流時代。運送という一産業分野をめぐる、こうした急激な環境変化を見通せなかったのである¹¹⁸、一八八九〔明治二二〕年三月に運輸組合設立計画は失敗、出資金も戻らず、これが樋口家の家運を大きく傾ける直接的な原因となった¹¹⁹。則義が失意のうちに死去したのは、同年七月のことである。

同年は、大旱魃と米の買占めによる米価高騰で餓死者が多数出現、富山県伏木と魚津で二千名規模の米騒動¹²⁰が勃発するという騒然とした年であり、翌一八九〇〔明治二三〕年も、全国に飛び火した米騒動のなかで、企業勃興にともなう民間資金需要の増加にたいする民間銀行の「払込資金急増を主因とする一八九〇年恐慌¹²¹」が起こった年だった。これ以降は、同恐慌を教訓とした「公債Ⅱ内債を機軸」とする「紙幣整理・財政整理と軍拡・交通機関整備・民間経済への資金供給¹²²」が推し進められ、大資本形成と無産者増大を条件とする資本の本源的蓄積期もまた、進行してゆくのである。

女戸主となった一葉は、この一八八九〔明治二二〕年からのきわめて困難な時代の渦中に、突然放り出されたわけである。巨大財閥形成への地歩を固めるべく、三井合名会社と三菱合資会社がそれぞれ発足した一方で、『最暗黒之東京』が初出された一八九三〔明治二六〕年には、樋口家は則義が生前に掛けておいた郷党の「頼母子講¹²³」から排除同然となり（我家貧困日ましにせまりて今は何方より金かり出すへき道もなし¹²⁴）、一八九五〔明治二八〕年に完全な無一物の暮らしとなっているが（今日夕はんを終りてハ後に一粒のたくはへもなしといふ 母君しきりになけき国子さまかくにくどく¹²⁵）、それも当然すぎる帰結であろう。

結局、則義は、あるいは残された樋口家の者たちは、このころ湖東小史が『世帯論』（一八八七〔明治二〇〕年頃刊と推定）に書き記しているところの——「近比家禄奉還ノ士族カ其金ヲ蓄ヘ之ヲ資本トシテ自立ノ産ヲ起セシモノハ真ニ僅々ノミ¹²⁶」、あるいは後年『興業意見』で顧みられているような——「士族ハ概ネ其邸宅器物ヲ売盡シテ又恩賜ノ祿券ニ放シ、士族ニシテ尚ホ公債證書ヲ所有スルモノハ纔二十中二三ニ過キス¹²⁷」、「真ニ僅々」の者には成り得なかった。恩給資格の失効や家族の疾病など、当時どこにでもある〈不運〉に躓いた挙句、産業革命初期Ⅱ第一次企業勃興期から資本の本源的蓄積期にかけての経済的変動を乗り切れることも出来ずに、家産をすべて失ったからである。

私見ではあるが、かりに則義が利殖の方向性を運送業設立に分散せず、不動産投資のみに絞ることが出来ていたら、あるいは樋口家は都心の一地主として今日も存在していたかもしれない。横山源之助が『明治富豪史』（一九一〇〔明治四三〕年）において「東京又は横浜の富豪を見るに、御用に依つて立身した者あり、銀行又は貸金に依つて資産を作つた者も多いが、土地の騰貴に依つて巨富となつた者が最も多いのである¹²⁸。」と断じているように、近代日本における致富のもつとも有効な手段とは、土地の取得に尽きたからである。だが、維新後まもない段階においてそれを実行できたのは、維新の混乱に乗じて好立地にあつた旧大名屋敷地を奪取した藩閥と、未だ首都と確定されていないかつた東京の可能性を予見し、広大な土地を「維新当時坪五銭乃至十銭、殆んど無代価同様に手に入れ

129」ることができた、わずかな有力幕臣と富商、つまり維新以前からの既得権益者たちにすぎない。したがって、いわばより大衆的な意味での土地取得をめぐる本格的なチャンスは、明治一〇年代末、すなわち西南戦争後のデフレ期に到来したわけだが、それを機にすでに都市で少しづつ財を形成していた者たちが貸家の建設を手がけはじめ、その利潤を土地の集積に振り向けることで富裕層へと転身していったのに対して¹³⁰、則義は荷車運輸業設立を企図、その計画の挫折とともに投資金百円と運転資金をも失ってしまう。遡ること一八七六〔明治九〕年、下谷練堀町の家屋を売却したのを手始めに、麻布三河町、本郷六丁目、下谷西黒門町などの家屋売買を繰り返して、一八八五〔明治一八〕年には湯島初花町の家屋を五〇円で購入、そのわずか五ヵ月後には京橋南横町の家屋を一三〇円で売却するなど¹³¹、不動産がもたらす利にじゅうぶん先覚的であったはずの則義が、なぜこの不動産投資をめぐる千載一遇の好機を掴むことができなかったのか。

推測するに、まさにこの好機が到来した頃に慢性気管支炎・肺結核を発症し、熱海で療養などをこころみながら関西での事業に失敗して病没した長男・泉太郎に多額を費やしたため（とりわけ高額にのぼった療養費は樋口家の家産を傾ける大きな原因となったという¹³²）、不動産を購入するためのまとまった資金が不足していたことと、この好機が到来した時点ですでに老境を迎えていた則義にとつて、残り少なくなった資金を元手に不動産転売をくり返しながら蓄財してゆくだけの時間も不足していたことを、理由として挙げられるだろう。そんな二つの〈不運〉が重なった則義と樋口家は、利の確かな不動産ではなく、先行きが不透明な新規事業に一攫千金を賭けざるを得ず、その結果、土地取得をめぐる絶好の機会、すなわち富裕へと上昇するための近代初の好機を失っただけでなく、家産もすべて失ったのである。

だが、おそらく同時代に生きる大半の者たちにしてもそれぞれの事情は則義と大同小異だったのであり、むしろこの急激な格差拡大期に「自立ノ産ヲ起セシモノ」に成りえたのは、みてきたように莫大な公債金を得た旧領主層や藩閥関係者や官員・政商など、ごく「僅」かな既得権益者たちに過ぎなかった¹³³。つまり底辺層に近づくほど厳しさを増してゆくのが、当時の（そして現在の）自由競争社会に他ならなかったのである。そこで、『わかれ道』をふくむ前掲してきた多くの同時代小説／言説は、立身出世に不可欠な要素の一つとして、しばしば「運」を挙げざるを得なかったであろう。

興味深いことに、このころ一葉は横山源之助と「人間の運命と世相の眞實」¹³⁴について議論を交わしているが、こんにち横山からの書簡から断片的にのみ伝わるこの会話内容もまた、明治二〇年代後半期における社会経済状況Ⅱ「世相」と「運」との関係について言及されたものであろう。ともに、第一次企業勃興期に生家が没落し困窮するという辛酸を体験していた両者にしてみれば、この時代の貧困をめぐる不条理性——別言すれば出世をめぐる不条理性を、身をもって理解しぬいていたはずだからである。『わかれ道』は、その絶望的な理解、あるいは冷静で客観的な時代認識を基底とするテキストなのだ。

付言しておけば、一葉が家相家・尾関碩間に易断を依頼したというエピソードも¹³⁵、久佐賀と、くだんの高島嘉右衛門について語り合ったという興味深いエピソードも¹³⁶、あるいは蓮門教官の二十二宮人丸への接近も、結局は一葉がいかにこの不条理で不如意な「運」の時代に拘束されていたかを物語っているだろう。「易経を修め大に得る所あり」〔…〕「頭真術会を創設し以て其の得たる処弘む君亦予言に妙あり人身の吉凶諸相場の高低一としての中せざるはなし世人もつて神となす。〔…〕政友会東京支部評議員、喜久家株式会社取締役、本郷区衛生會幹事〔…〕公私各般の業務に関する

所枚挙に暇あらず¹³⁷」(『京浜実業家名鑑』一九〇七(明治四〇)年所収の久佐賀紹介文)——要するに、「易」「予言」をなりわいとしながら実業家でもあったという久佐賀義孝とは、易聖といわれながら鉄道敷設などの実業にも大功を成した呑象高島嘉右衛門のいわば矮小化された巷の擬似人物といえようが、そもそもそのような久佐賀への接近それ自体が、一葉がまぎれもなくこの「運」の時代の只中に身を置いていたことを示しているように。

その「運」の時代の渦中にあつた一葉の心境は、自身の来歴と来訪目的とを冷静に語っている前掲発話にあつて、唯一心情が吐露された一言に表出している。「すでに浮世に望みハ絶えぬ」がそれだが、この虚無的な胸中告白が久佐賀の憐憫をさそい金銭をひきたすための過剰な自己演出でないことは、この発話の直後に久佐賀に投げかけた言葉「要する処ハ好死処の得まほしきぞかし 先生久佐賀様この好死処ををしへ給らすや」や、当時の日記に綴られた有名な一節「虚無のうきよに好死処あれバ事たれり¹³⁸」に現れている切迫性、迫真性からも明らかであろう。このころ一葉が囚われていたのは、むしろ自身で語ってみせた以上に深い「浮世」|| 同時代への、「望みハ絶えぬ」|| 絶望だったのである。

一葉にとつて久佐賀体験とは、前田愛氏の卓見の通り、「自分のおかれている境位が「うきよに捨て物の一身」にほかならないことをあらためて確認する¹³⁹」経験に違いないが、本節の論旨に沿ってさらに言い進めれば、久佐賀に問われるままに「うきよに捨て者」としての身上を語ることを通して、不条理で不如意な「運」の時代に翻弄される者の絶望を「あらためて確認する」経験でもあったのだ。前田愛氏は久佐賀事件のいわば産物として『暗夜』を挙げており¹⁴⁰、なるほど確かに明治社会に怨詛を募らせてゆく「女夜叉」お蘭は「生の感情の歪みにとらわれていた一葉の自画像¹⁴¹」にほかならないが——その証拠にお蘭は一葉自身の自己認識と同様「捨てられ物」と形容されているが——、久佐賀事件をきっかけに改めて自覚された絶望感に限っていえば、それは『わかれ道』のお京と吉三の人物造型により色濃く投影されているのではあるまいか。

『わかれ道』は、久佐賀との交渉を通して改めて確認された一葉自身の絶望を、同時代に生きる都市単身無産者のそれとして捉えなおし、とりわけ同時代小説が黙過するか『一沈一浮』のように予定調和的な大団円物語のなかで点描されるに過ぎなかった女性賃労働者の内面へも思いを致した、普遍的であると同時に当時としてはきわだつて特異なテキストなのである。あるいは柳村上田敏が同テキストを「一葉女史の作物中で傑作と推すべきものは如何あつても別れ道だ、短いのだが詞も想も善い¹⁴²」(傍点本文、「短くはあるが秀逸といふべきは『別れ道』である¹⁴³」)と激賞した理由も、格差社会がふたたび到来した今日いっそう際立つその普遍性と、同時代テキストに比した場合の特異性(六節、九節で詳述)との、稀有な両立に求められるのではないか。その意味において『わかれ道』は、久佐賀体験が期せずともたらした豊穡な実りのひとつといえよう。

一葉評伝における特筆事項である久佐賀体験が『わかれ道』生成に与えた影響をめぐって、縷々述べてきた本節内容は、奇しくも以下の『わかれ道』同時代評に余すところなく言い尽くされているので、最後にそれを掲げておきたい。

一葉が諸作を読めば隠約の間に女史は一個の人生観を有するを認め。蓋し女史は人生の缺陷を觀たり、従て缺陷によりて生ずる人生の悲惨を觀たり、缺陷の世界、不如意の人生、人は常に運命の羈絆する所となり、境遇の繫縛する所となる、必至なり、必然なり、あせれども脱し得可

からず、もがけばますます縄目を堅くするのみ。人は静かに此悲惨の運命に堪へ、苦酸の境遇に處らざる可からず。「……」人、望あるが為に生く、絶望は即ち死なり、彼の形骸は猶存して飲み且食ふも、其人は實に精神的には死せるなり。彼は何の事としてなさざらむや、死したる彼には毀譽褒貶何の耳をかすに足らむや。是れ人生悲絶惨是絶の境遇なり。一葉はよく此絶望の人物を捉へ、これが性行を描くに当りて、これにそゞくに溢るゝの同情と、湧くが如きの熱涙を以てす。その『濁江』の、お力を見ずや、『十三夜』の高阪録之助を見ずや、『別れ道』のお京を見ずや、いづれも人生に絶望し、世をすね世を背きたるものにあらずや¹⁴⁴

（無署名「一葉」『青年文』第三卷一号、一八九六〔明治二九〕年二月）

五. 「面白くない」／「詰まらない」

希望を喪失した者は精神的亡者に等しい、と述べる前掲『青年文』だが、たとえば以下の一八九四〔明治二七〕年六月二三日付『東京経済雑誌』寄書も、それと良く似通った内容を展開している。

近時に至りて中産人民の破産倒財益々多きを加へ。遂に富者と貧者との二大階級を社會に現出せしむるに至れり（……）蓋し彼等貧民の多くは。（……）仮令生活すと雖も。死と同様な苦痛あればなり。於是乎失望し落胆し。（……）乞ふ毎年貧困の餘遂に自殺の惨状に陥りしものを見よ。諺に曰く「四百四病のやまひより貧程つらきものはなし」（……）彼等が斯く人情を破るに至る所以のものは。蓋し貧困の極已むを得ざるに生づる也。豈に亦た無惨の次第ならずや¹⁴⁵。

前掲『青年文』の書評は、『わかれ道』をはじめとする一葉諸作の秀逸性を、「缺陷の世界」において希望を喪失し精神的死者となつた者たちの「絶望」を「良く捉へ」た点に置いているが、この『東京経済雑誌』寄書はその「缺陷の世界」の具体的状況を——すなわち「富者と貧者との二大階級」の「現出」が〈希望をめぐる格差〉を現出させたという時代状況を、良く伝えているといえよう。

偶然にも『わかれ道』初出同年同月、前述した横山源之助は不況下の正月風景を取材するために東京市中を巡り歩いていたが、そのとき彼が採録した街の声もまた、まさしくその〈希望をめぐる格差〉、すなわち〈希望の喪失〉を訴えているのである。「己だつて貧乏ア為たかアないが斯くな身になツちや、希望がなくて、から面白くないから遊ぶんだツて¹⁴⁶。」「（貧民の正月）『毎日新聞』「都会の半面」欄、一八九六〔明治二九〕年一月）。

『わかれ道』でも、とりわけ吉三の発話において幾度も「面白くない」とその近似表現としての「詰らない」が繰り返されており、またその真意をめぐって議論はあるものの、お京が一度だけ心中を吐露した発話にも「詰まらない」という表現が登場するが、この両者の言葉と横山源之助が聞き取りをした街の言葉との符合を、単なる偶然と看過するわけにはいくまい。「希望がなくて、から面白くない」という街の声と同様、吉三とお京が頻繁に口にする「面白くない」「詰らない」もまた、希望の喪失を最も素朴に、それだけに最も強烈に表現した言葉だからである。本節では、吉三とお京それぞれの「日常性に根ざす感覚¹⁴⁷」であると指摘した関礼子氏の論攷以外、余り掘り下げて論じられることのなかったこの二語を、同時代文脈のなかにふたたび置きなおす試みから始めたい。

（上）

「a」もう一年も生きて居たら誰れか本当の事を話して呉れるかと楽しんでね、面白くも無い油引きをやつて居るが己れみたやうな変な物が世間にも有るだらうかねえ、

(下)

「b」己れはお前が居なくなつたら少しも面白い事は無くなつて仕舞ふのだから其様な厭やな戯言は廃しにしてお呉れ、多々詰らない事を言ふ人だと頭をふるに、

「c」お前その好い運といふは詰らぬ処へ行かうといふのでは無いか、「……」三つ輪に結つて総の下つた被布を着るお妾さまに相違は無い、「……」其お邸に行くのであらう、

「d」彼れほど利く手を持つて居ながら何故つまらない其様な事を始めたのか、余り情けないでは無いかと吉は我が身の潔白に比べて、

「e」最うお妾でも何でも宜い、何うで此様な詰らないづくめだから、寧その腐れ縮緬着物で世を過ぐさうと思ふのさ。

「f」何だか己れは根つから面白いとも思はれない、お前まあ先へお出でよ後に附いて、

「g」あゝ詰らない面白くない、己れは本当に何と言ふのだらう、いろいろの人が鳥渡好い顔を見せて直様つまらない事に成つて仕舞ふのだ、

「h」お前は不人情で己れを捨て、行し、最う何も彼もつまらない、何だ傘屋の油ひきになんぞ、百人前の仕事をしたからとつて褒美の一つも出やうでは無し

右に掲げた「面白くない」「詰らない」の全登場箇所は、「面白くない」「詰らない」の対象が明確であるか否かによつて、二種類に大別される。連体修飾語として使用されているために対象(＝被修飾語)が明確であることから意味内容が判然とする場合と、述語などとして使用されているために何が「面白くない」「詰らない」のかを一義的に確定するのが困難な場合の、二種類である。

「a」「面白くも無い油引き」、「c」「詰らぬ処」、「d」「つまらない其様な事」はむろん前者に属するので、その意味内容の確定は容易であろう。たとえば、「d」「つまらない其様な事」、「c」「詰らぬ処」はお京の妾奉公と妾宅を直接指しており、ここでの連体修飾語としての「つまらない」「詰らぬ」は、明治初年から盛んに主張されてきた廃妾論の代表的論拠——「夫婦ハ人倫ノ大本禮義ノ大源ニシテ人民ノ品行ヲ立邦國の景象ヲ発スル基」に對置される「淫逸放蕩ノ悪習」¹⁴⁸——に奔出しているような、蓄妾あるいは妾にたいする当時の蔑視観を反映させた形容詞であろう。明治二〇年代後半期すでに人々に内面化されて久しい、この妾にたいする侮蔑観、賤視観を如実に示したもうひとつの言葉が、むろん「e」「腐れ縮緬着物」である。

また、「a」「面白くも無い油引き」における「面白くない」は、「h」「何だ傘屋の油ひきになんぞ、百人前の仕事をしたからとつて褒美の一つも出やうでは無し」で語られているように、栄達によつては「褒美」＝叙勲の可能性を大いにふくむ明治立身出世主義の王道としての職業——高等官員や軍人——と、「心を勞する者は上にあり、力を勞する者は下にあり」¹⁴⁹として劣位に置かれていた力役としての「油引き」との格差に触れた、自嘲や屈辱感が入り混じつた言葉であらう。

「今の傘屋に奉公する前は矢張己れは角兵衛の獅子を冠つて歩いていたのでから」という発話からも明らかであるが、一般児童ですら就学が低調だった教育勅語発布(一八九〇「明治二三」年)、小学校令改定(同年)以前¹⁵⁰に学齢を迎えた吉三が初等教育を受けたはずもなく、したがって彼には学問を通じた立身出世の道があらかじめ閉ざされていたのはいうまでもないが¹⁵¹、といつて、テクス

ト初出時にはすでに色褪せつつあったその学問による立身出世の夢——一八八〇〔明治一三〕年には『学問のすすめ』（二八七二〔明治五〕年）の発行部数は激減、明治中後半期には同書や太政官発布「学制」（同年）の「神通力は失われた¹⁵²」という——に代わって登場してきた博文館雑誌『少年世界』（明治一八年一月発刊）がいざなう職業軍人の夢もまた¹⁵³、菅聡子氏が指摘するように¹⁵⁴、その矮小な身体と旧制中学未修了の学歴によって潰えているに等しい¹⁵⁵。

その意味においては「面白くも無い油引き」とは、『少年世界』の読者である青少年たちと吉三自身との〈希望をめぐる格差〉を表現した言葉であり、同時代の青少年たちが揃っていただく青雲の志をあらかじめ失っている吉三の〈希望の喪失〉をあらわす言葉でもあろう。

問題は、そのような吉三が「b」「f」「g」「h」で繰り返す、意味を一義的に解釈するのが困難な、後者タイプの「面白くない」「詰らない」である。一つだけ明確なのは、それら吉三の言葉は全て、お京と吉三の訣別の夜が描かれた（下）において、翌日からのお京の不在にかんする発話のなかでのみ登場する、ということだ。

吉三がお京の存在をどのように捉えていたか、別言すれば、お京とどのような関係を結びたいと願っていたかをめぐっては、今日、藤井貞和氏の卓見が定説となつていよう。つまり、「姉と弟との擬制的家族ユートピア¹⁵⁶」としての関係であり、それはほかならぬ吉三本人が語っている内容からしても——「お前のやうな人が己れの真身の姉さんだとか言つて出て来たら何んなに嬉しいか」——、いささかの異論を挟む余地もない。

一方、これもおなじく一八九五〔明治二八〕年の言説空間のなかで生成されたテクストである前掲『青年文』は、現在多くの論攷が自明視する「姉と弟」という関係性だけに還元しきれない何かを、つまり「姉と弟との擬制的家族ユートピア」それ自体はまったく正しいとして、その上でなおわずかに残された両者の関係性の余剰部分を、つぎのように指摘するのである。「一寸法師の傘屋のしづひきに、二十余の意気な女の独住居。一葉ならぬ者の真似はならぬ舞台なるべし。例の厭味なき文章ますく円熟して、何の事とも解からぬ情愛に、何となく面白味あり¹⁵⁷」。

翻つて今日において、お京と吉三の関係性に「姉と弟」以上のものを看取する論攷のひとつが、関礼子氏の前掲論文であろう。同論文は「両者間に性的なものを想定するには無理がある」と断りながらも、「お京が現れてから」の吉三の「上機嫌」な振る舞いは「あきらかに性的な気配を感じさせる軽やかな身ぶり」であるとし、「帯屋の大將のあちらこちら（中）という人々の見立ては性的な配偶という点では不釣り合いな二人の関係を評したのだが、意外に真相を衝いているのかもしれない」、「傘屋周辺に流通するウワサのなかの二人は期せずして性的な関係を演じている¹⁵⁸」と指摘する。また、高田知波氏も、吉三にとつてお京は「へまぼろしの母」への思慕をベースにする「…」ひたすら聖化された存在¹⁵⁹」であると同時に、他方で吉三はお京に「おとなの世界に自分を優しく案内してくれる年長者の存在¹⁶⁰」としての役割も期待していたと指摘、お京Ⅱ「姉」という定式を超える視点を示してみせた。同じように「擬似姉弟」の「姉とは、考えようによっては、弟にとって母親役と恋人役の両方を兼ね備えもつ存在なのではないだろうか¹⁶¹」と述べた山崎真紀子氏の論文も、お京Ⅱ「恋人役」という新たな図式を提示した論攷であろう。戸松泉氏も、「吉三の前に現れた「愛想を見せ」るお京は、母であり姉であり、或いは妻にもなりうる、「家族」幻想を抱かせるに充分な、曖昧で多義的な存在であった¹⁶²」とし、「十六歳という子供から大人へという微妙な年齢にさしかかった、ステイグマを抱えて揺れ動く吉三の心の奥¹⁶³」で次第に「紡がれ」ていった「お京」像

と、彼女との共同幻想（一体化願望）（「…」）吉三の中でそれはあたかも〈恋〉というに等しいものに
変貌しつつあったのではないか¹⁶⁴」と指摘、吉三のお京に対する感情を「恋」と規定した上で、
それが「大人にならない少年」吉三に何らかの〈成長〉促す契機¹⁶⁵」になったと述べている。

以上を統合するならば、吉三にとってお京とは、絶対的な「聖」性と、「おとなの世界」を象徴する
「性」性——だがそれは高田氏が正しく指摘している通り、「半次」や「元頭」が体現する「不潔
さ¹⁶⁶」とは無縁の¹⁶⁷、いわば善き大人の徴としての成熟性である——を併せ持つ存在ということ
になるだろうか。結論からいえば、本稿は、そのように聖性と成熟性を兼ね備えたお京と〈手を携えて〉、
明治二〇年代後半期の希望なき格差社会を生き抜くことこそが吉三の唯一の希望だったと考
えているが、その参照例として次節で取り上げてみたいのが、〈働く貧困層〉の男女を描いた同時代テ
クストである。

六．同時代小説『一沈一浮』、『刷毛彩色』、『雨』

たとえば、「四百四病のやまひより貧程つらきものはなし」と書き付けられた前掲『東京経済雑誌』
と同様に、「いかに軽くとも病は病、四百四もありといふ中に、いづれか苦しからぬものあるべき。
されど其數の中に算まへられぬがあり。貧といふ病ぞかし¹⁶⁸」からはじまる石樽わか子『刷毛彩色』
（一八九五〔明治二八〕年）は、上京してきた若く貧しい一組の「夫婦」が、同郷者の企てる悪計にも与
することなく、艱難辛苦のすえに彩色請負業を大成させざるまでを描いたテクストである。「こゝぞ
わが運の来りし処と、心の内の嬉しさいはむ方なく¹⁶⁹」、「我運は逆も来らぬかと歎きあるまに¹⁷⁰」、「
「わが運むかへりと、夫婦は手の舞ひ足の踏処をしらず¹⁷¹」といったように二転三転する「運」に
翻弄されながらも、夫婦が貧困からの上昇を叶えるというそのプロットは、すぐさま気付くように前
出『一沈一浮』のそれときわめて類似している。

だが、ここでプロットの類似以上に重要な類似は、そのふたつの立身出世譚において、「手携はり¹⁷²
」、『刷毛彩色』などの言葉に象徴される〈夫婦の共助〉がくりかえし強調されている点だ。例を
挙げれば、『一沈一浮』では、あまりの困窮ぶりに離縁を勧める叔父に対して「嫁」のおみよが、「た
とひこの前いか程苦勞いたしますとも（「…」）私か今この家を出ましては、正太郎の相談相手がなく
なります¹⁷³」と敢然と言いつつ様子が描かれ、『刷毛彩色』でも、やはり貧窮がもとで病に臥した
「妻」の磯子に向かって「夫」の濤太郎が、「扶け助けらるゝ」ことマのなマかマむらマには、夫婦といふもの
何の世にいるへき¹⁷⁴」と決然と語ってみせる場面が登場するのである。

中島湘煙〔岸田俊子〕と石樽わか子という、明治中後期における先取的な女性がそろって描いたそ
れら場面を、家庭概念の訓導誌『家庭雑誌』、『国民之友』と同様、徳富蘇峰主宰・一八九二〔明治二五〕年創
刊）などが頻繁に説いていた夫婦和合（「夫妻は其心を一にせざるべからず¹⁷⁵」）の浸透ぶりをしめ
す好例として理解すべきなのか、あるいは閨秀作家から一般女性へと発信された女訓箇所として理
解すべきなのか。それをここで検討する紙幅はないが、いずれにせよ、『わかれ道』と同年初出のふ
たつのテクストにおいて、「手携はり」「扶け助けらるゝ」ことマで貧苦を克服し出世していく男女のあ
りようが理想的に描かれていることだけは確かである。

それはいわゆる閨秀小説に限った傾向ではない。たとえば、広津柳浪『雨』（初出『新小説』一九〇二
〔明治三五〕年）は悲惨小説の名にふさわしく、新網町付近に住まう貧しい紺屋の手間取り職人吉松が、

苦楽を共にしてきた「女房」八重の母からの無心を断りきれずに預り品を質入してしまい、夫婦ともども逐電するという、ふたつの閨秀小説とは結末も趣もまったく異なるテキストである。だが、一向に好転しない困難な暮らしを「お互に苦勞の為ツくら、辛抱の競ベツくらを為ようツて約束だ¹⁷⁶」といった固い結束によって乗り越えようとし、それが叶わなかった時には「二人手を携へて¹⁷⁷」出奔するという男女のありよう自体は、たしかに『一沈一浮』『刷毛彩色』に理想的に描かれたそれと共通しているはずだ。

夫婦の無償の共助関係を言祝いだともいえる以上の三テキストは、当然ながら、一夫一婦制称揚という政治性が伏在した物語として読むことができよう。さらに深読みするならば、イギリス家族史研究家エドワード・ショーター氏が指摘したところの、近代家族の成立要件のひとつである「ロマンス革命¹⁷⁸」¹⁷⁸ 夫婦愛の強調を、近代日本が受容したことを示す好例として読むこともできるかもしれない。

だが、それらテキストが夫婦愛を強調するもつとも基本的な理由は、そもそも彼・彼女らは、その関係性の内実いかに関わらず、助け合うよりほかに生きる方途がなかったからである。明治二〇年代後半から三〇年代の日本資本主義確立期における労働者類型論によれば、『刷毛彩色』の彩色職人にせよ『雨』の紺屋職人にせよ「傘屋の油引き」にせよ、仮に彼らを「一定の熟練度を必要とするか、あるいは重筋労働」をとまなう上位層の職人とみなしたとしても、彼らは「単独で家族を維持することは困難であり、多くは家族による家計補充を必要としていた¹⁷⁹」。他方、彼らを軽労働に従事する家内工業労働者とみなした場合家族による家計補助が絶対不可欠だったのはいうまでもないが、それでも家計窮迫に陥るケースは都市の至るところに見られたという¹⁸⁰。テキストにおいて妻の内職、あるいは夫婦そろっての家内就業の様子がかならず描写されている通り、明治二〇年代後半期の東京府下では、一部の富裕層を除いた一般的世帯においては「家族の構成員が種々の仕事に従事する多就業の形態をとらざるをえなかった¹⁸¹」のである。

そうした日本資本主義確立期における、労働形態と家族形態をめぐる厳しい現実を、夫婦間の共助の物語として変換させたのが、同時代の文学だったのではないか。つまり、いずれのテキストにも、人々のまさに赤貧洗うがごとき暮らしぶりをめぐるエピソード——『刷毛彩色』と『雨』には、窮余の一計として借り物の羽織を質入するという全く同じ挿話が登場する——が横溢しているような時代、具体的には『雨』冒頭に書きつけられたような「一週間も此雨霽れずんば、先づ米屋を手初として、酒屋質屋などの打壊が初まるであらうと、穏かならぬ噂さへ立つて、引立つは米の値ばかり¹⁸²」という時代にあつては、その時代風景が陰惨であればあるほど、人心が荒廃すればするほど、一対の貧しい者同士による無償の「扶け助けらるゝ」物語がおのずと要請されたのではあるまいか。

別言すれば、悲惨小説という表現ジャンルが誕生し、たった数日の「雨」によって生存すらも危うくなる人々を描いた小説が上梓されるような時代——それは、彼・彼女らを題材にした〈商品〉としての小説〉の読者も存在するという格差時代にほかならない——であればこそ、物語では「其日々に朝夕の料を稼がねばならぬ」「難渋」「雨」をともに担う伴侶が、切に求められたのではないか。

その傍証に、『雨』には、吉松が八重に宛てた次のような興味深い発話がある。「お前と離別れて何を為たツて面白い事があるものか¹⁸³」。

おそらく『わかれ道』の吉三が、明日からのお京の不在を知って思わず発した悲嘆——「己れはお前が居なくなつたら少しも面白い事は無くなつて仕舞ふ」¹⁸⁴は、その吉松の言葉と重なりあう響きを持

っている。「f」「g」「h」の「面白くない」「詰らない」も同様である。

七．希望の風景の喪失

むろん、『わかれ道』の吉三とお京は夫婦ではあり得ず、そもそも両者の間にいささかでも「性的なもの」を想定するには無理がある¹⁸⁴。というのは、研究史における大方の定説である。だが、前掲した三作に登場する人物たちが皆そうだったように吉三もまた、否、孤児という被傷性を抱えた吉三であればなおさら、その極めて「難渋」で不如意な格差時代を生きるにあたって、徹頭徹尾みずからに寄り添いつづけてくれる伴侶の存在を切望していたはずだ、と考えても不思議はないはずである。

「あゝ詰らない面白くない、己れは本当に何と言ふのだろう、いろ／＼の人が鳥渡好い顔を見せて直様つまらない事に成つて仕舞ふのだ」という吉三の悲憤も、いっさいの〈縁〉から疎外されて生きてきたヴァルネラブルな彼が、「面白くも無い油引き」の毎日のなかで、束の間でない関係性を誠実に維持してくれる相手を、いかに切実に求めてきたかを言外に物語っているといえよう。

付言すれば、ほんらい伴侶とは「つれ」だって「とも」に生きる「なかま¹⁸⁵」のことであり、かならずしも配偶者を意味しない。だが、真摯な意志によって結ばれた、したがってあるていど永続的な関係性を前提とする、苦楽を共有できる相手、とでも換言できるそれが誰かと問えば、同時代の前掲三作を考えても、「姉」より配偶者のほうが該当的ではないだろうか。

一方、お京は、吉三の行き場のない感情——「此処を死場と定めたるなれば厭やとて更に何方に行くべき」「一寸法師と誹らるゝも口惜しき」「何時を精進日とも心得なき身の、心細き事を思ふては」「…」こぼるゝ涙を呑込みぬる悲しさ」「乱暴も慰むる人なき胸ぐるしさ」——をすべて受けとめた上で、「戯言まじり何時となく心安く」和ませ、時には「励ま」し、時には「優しく言ふて呉れ」、「夜でも夜中でも」「…」案じて「振向いて見て」「…」呉れ「るといふ、まさに前掲三作に描かれた理想的伴侶像そのものの善き成熟性を、「今年の春より」吉三に示しつつつけてきた。のみならずお京は、みずから「火の車」と喩えるほどの「随分胸の燃える事が有る」と吉三に語ることで、周囲から「火の玉のよう」と「怕がられる」ほどの「怒り」を抱えてきた吉三と自分との通脈性を、吉三に向けて明らかにしてもいる。

そのようなお京に対して、吉三が識閥下において、末永く「手携へて」「扶け助けらるゝ」未来の配偶者像を夢想していたと考えるも、荒唐無稽とはいえない。仮にここで、吉三の「仇名」である「一寸法師」の原テキスト『御伽草子』を『わかれ道』の「インターテキスト¹⁸⁶」として扱うならば——つまり、三条の宰相の姫君を娶る念願を成就させる一寸法師の物語を、その一寸法師とおなじように肉親から庇護されず、「十六歳」になっても背丈が伸びない吉三にそのまま当て嵌めるとするならば、なおさらである。

むろん、指摘されているように「永遠の少年¹⁸⁷」「その小さな身体の中に、それ以上大人になるう、男になろうとするエネルギーを押し込めてしまっている「…」男としての性をもたない存在¹⁸⁸」として造形されている吉三が、お京の姿に未来の理想的配偶者像を重ね合わせていることを示すいかなる語りもテキストには存在しない。あくまで本節の意図するところは、吉三がお京に、「人さまの仕事をして居る境界」の辛苦をともに分かち合う、いわば生活と人生の両面における伴走者役を期待していたということに尽きる。

だがそれにしても、長屋を去るにあたってお京が固く約束しようとしたこと——「何も私が此処を離れるとてお前を見捨てる事はしない、私は本当の兄弟とばかり思ふのだもの」——を吉三が受け入れなかったという事実は、むしろ妾奉公におもむくお京を「潔白」な吉三が許せなかったという側面から理解するべきなのだが、しかしそれは同時に、彼がお京に対してかならずしも姉弟の契りだけを待望していたわけではない可能性をも、示しているのではないか。

さらにもう一点付け加えれば、お京への頻繁な接触を嫉妬まじりに「翻弄」う朋輩に、「男なら真似て見る〔：〕傘屋の吉が来たときへ言へば寝間着のまゝで格子戸を明けて〔：〕引入れられる者が他に有らうか」と高飛車に返してみせるその口吻には、戸松泉氏が既に指摘しているように、お京を介して芽生えた「男性性¹⁸⁹」の片鱗をうかがうことが出来、それが男性的物言いの精一杯の模倣であったとしても、その発話を受けた語り手が「背さへあれば人串談とて免すまじ」と評するほどの一人前の存在¹⁹⁰に、吉三はすくなくとも年齢の上では近づきつつある。以上の二点は指摘しておきたいと思う。

いずれにせよ、吉三にとってお京とは、まちがいに擬似的な「真身の姉さん」であり、同時に「母親や父親や」「兄さんの様」でもあり、あるいは理想的配偶者のようでもあるという、あらゆる身内の幻像を一身において体現してくれる¹⁹¹、かけがえのない存在だったことは確かである。「己れは何うもお前さんの事が他人のやうに思はれぬは何ういふ物であらう」という吉三の感慨は、彼がお京をそのような、いわば象徴的な身内として眼差していることを裏付けている。

それは物語言説をみても明らかである。というのも、テクストにおいて吉三が一度だけ直截に語った「変てこな夢」とは、「平常優しい事の一言も言つて呉れる人が母親や父親や姉さんや兄さんの様に思はれて〔：〕」本当の事を話して呉れる」こと、つまりあらかじめ失われていた家族とのまぼろしの邂逅だが、その吉三のせつない白日夢に込めるように物語に登場してくるのがお京だからである。「仮にも優しい言ふて呉れる人のあれば、しがみ附いて取つて離れがたなき思ひなり。仕事屋のお京は今年の春より此裏へと越して来し物なれど物事に気才の利きて」。

こうした「夢」をめぐる吉三の発話とそれに呼応する地の文の連なりからは、彼の希望の風景がおのずと浮かび上がってくるだろう。それは、「難渋」で不如意な格差時代において、立身出世という「大きな物語¹⁹²」(リオータル)を叶える風景ではなく、『雨』の吉松と八重のように、あるいは『刷毛彩色』の濤太郎と磯子や、『一沈一浮』の正太郎とおみよのように、象徴的な身内としてのお京と離れず共助しあうという風景である。

そのささやかな幸福観は、立身出世のイデオロギーに完全に背反している点において、つまり同時代の価値規範を完全に逸脱している点において、じつは明治近代に対する鋭い批判性を放っているとも言えるわけだが、それはともかく、同時代の価値観からすれば卑小すぎるその希望は、彼にとつては生死を賭けるほどの切望にほかならなかったのである。吉三は、まさしく前掲『青年文』の警句通り——「人、望あるが為に生く、絶望は即ち死なり」、もしそれが叶えられるなら「往生しても喜ぶ」ほどだが、無理ならば「今のうち死んで仕舞た方が気楽だと考へる」とまで語っているのだ。にもかかわらず、前述したように、明治二〇年代後半の希望なき格差社会をお京とともに生きるといふ、吉三のその希望の風景は、十二月三〇日の夜に唐突に失われることになる。

その夜、「私は明日あの裏の移転をするよ」というお京の「不意」な事後報告に、吉三は当初激しく動揺し、必死に翻意をこころみ、悲憤をぶつけ恨み言を述べ、最後に「涕の目に見つめて」訣別を

告げる。「b」「f」「g」「h」の「面白くない」「詰まらない」は、希望の風景のあつけない崩壊に直面した吉三が、その大きな衝撃のなかで繰り返し口にする言葉であるかぎりにおいて、やはり〈希望の風景の喪失〉という一点に収斂されてゆく言葉にほかならないだろう。それは、同時代小説に描かれたような、「手携へ」「扶け助けらるゝ」関係をお京と築くことが叶わなかった吉三の「絶望」を、もつとも真率に、それだけでもつとも激しくあらわした言葉なのである。

以上を踏まえたうえで、では対するお京の発話「最うお妾でも何でも宜い、何うで此様な詰らないづくめだから、寧その腐れ縮緬着物で世を過ぐさうと思ふのさ」にある「e」「詰まらない」を、どう読み解くべきか。次節でそれを詳述するまえに、お京と吉三の言葉の異相を問題化した小森陽一氏の発言を掲げておきたい。氏が「吉三とお京の言葉がはっきりと対立的な観念あるいは立場、イデオロギーを持つ」と述べる、その「言葉」のひとつこそ、本稿のキーワードである「面白くない」「詰まらない」だと思われるからである。

基本的に一葉の魅力というのは、個の言葉とか、ひとりの言葉あるいはひとつの人格の言葉という形ではなくて、望む望まないにかかわらず相互に言葉を共有してしまうような空間があつて、そこからドラマが始まっていく、という展開をしてきたところにあると思うんです。それがこの「わかれ道」でははつきりと個の言葉が、つまり吉三とお京の言葉がはつきりと対立的な観念あるいは立場、イデオロギーを持つ形で、いわば対話の葛藤が初めて一葉の文学の中で自立する。そういう作品だろうと思うんです。その意味で、言葉自体が「わかれ道」になっているのだらうと¹⁹³。

八. 「詰らないづくめ」の女たち

すでに第二節で確認したように、お京の「e」「詰らないづくめ」は、何ととっても、産業革命期初期＝本源的蓄積期であり自由競争期でもある明治二〇年代後半期における「仕事や」の、きわめて苛酷な賃労働に対する深い嘆きの言葉にほかならない。

だが、その言葉は、来る日も来る日も「洗ひ張」と運針に明け暮れる「仕事や」としての現在だけを嘆いた言葉とは限らない。むしろ、そうした現在を招来した過去をも、あわせて悲嘆した言葉と考えるほうが、より自然ではないか。そもそも「づくめ」という表現自体、現在を含めたお京の人生が、「詰らない」出来事に覆い尽くされていたことを示唆しているよう。にもかかわらず、それらの「詰らないづくめ」の具体的内容は不明である。テキストにおいて「お京の身の上に関する一切の言説」は、「意識的に」「消し去¹⁹⁴」られてしまっているからである。

高田知波氏は、そうしたお京をめぐる「設定表現空白化の効果¹⁹⁵」の一つとして、「お嫁に行くを嫌やがつて裏の井戸へ飛込んで仕舞つた」「紺屋のお絹さん」と『十三夜』の「お関」を例示しつつ、「読者の想像力の自由を刺激しながら、そのことによつてお京が、単一ではないさまざまな女の不幸を背負った複合的な存在になり得ている点¹⁹⁶」を挙げている。あるいはかつてお京も「紺屋のお絹さん」のように、意に染まない「脅迫結婚¹⁹⁷」を強いられた過去があつたかもしれない、現在の「お京は、その「お絹さん」が「自殺ではなく自活の道を選ぶ¹⁹⁸」ことで自分の意志を貫いた¹⁹⁸」場合の姿かもしれない。またあるいは「お関」のように、玉の輿ゆえの気苦労と孤独に懊悩した過去があつ

たかもしれず、現在のお京は、その「お閨」が懊悩したあげくに婚家には戻らず自活の道を選んだ場合の姿かもしれない¹⁹⁹、というのである。

高田氏の述べるその「読者の想像力」を、さらに一葉の他のテクストにも及ぼしてみるならば、あるいはお京は、便りの絶えた桂次への思いを捨てきれぬまま、継母の手前、家を出て自活せざるを得なくなった場合の、もうひとりの「お縫」(『ゆく雲』一八九五〔明治二八〕年)かもしれないし、子供が誕生したのも夫への不満を解消できず、しかし養家にも出戻ることができなかった場合の、もうひとりの「実子」(『この子』一八九六〔明治二九〕年)であるとも、考えられるかもしれない。

こうして高田氏の指摘に示唆を受けつつ考えを進めてゆくと、一葉の「奇蹟の期間」の物語世界にあつては、女たちの多くは不遇な結婚生活(もしくは不実な相手との関係)を生きており、だからといって仮に結婚生活を解消したとしても、今度は自身の口を糊するための並大抵ではない苦勞を生きたければならないように描かれていることに、改めて気が付く。つまり、結婚をしても、自活をしても、どちらにしても、一葉の描く女たちは「不幸」を生きたければならないわけである。

たとえば『十三夜』の「お閨」をはじめ、『にこりえ』の「お初」、『われから』の「お町」と「美尾」、『この子』の「実子」、『軒もる月』の「袖」は、それぞれの結婚生活において深刻な葛藤を抱えている前者に属するヒロインたちであろう。他方、当該テクスト『わかれ道』のお京を筆頭に、『大つごもり』の「お峰」や『にこりえ』の「お力」は単身で生きる暮らしに窮している後者に属するヒロインたちだが、彼女たちと、前者に属する女たち、とりわけ「お閨」「お初」「実子」を隔てるものはほんの紙一重にすぎない。とすれば「不幸」な妻たちは、潜在的には「お京」を生きているのである、別言すれば「お京」もかつては「不幸」な妻を生きていたかもしれないのである。

「詰まらないづくめ」とのみ語られるお京の人生の空白を、そのように作者一葉が創造した他の女たちの物語によって補完してみるならば、その具体的ないきさつはあくまで不明に付されているにせよ、現在の自活生活と同様、おそらく過去の結婚生活も(もしくは結婚に近い出来事も)、お京にとつては「不幸」であつたと類推できるだろう。そのような、結婚をしても自活をしても「不幸」という八方塞がりの状況、今日的な表現でいえば自身の「居場所²⁰⁰」をどこにも得ることができないという状況——それを語った言葉が、さしずめ「詰まらないづくめ」ではないか。

そうした一葉の世界観、とりわけその結婚観は、貧しい夫婦の相互扶助を謳い上げた前出『一沈一浮』刷毛彩色『雨』の物語内容とはまったく異質であるわけだが、じつは同時代状況を確認すると、一葉のそれがけつして殊更に悲嘆的な認識ではないことがわかる。むしろ一葉は、他の閨秀作家たちが敢えて眼を向けようとはしなかった、あるいは知ることもなく知ろうとしなかった市井のあたりまえの現実を、同じ市井の内側にいて知り抜いていたと言えそうなのである。

たとえば、『わかれ道』初出同年における横山源之助の調査「都市の細民と地方の細民²⁰¹」、『毎日新聞』一八九六〔明治二九〕年一〇月二七日)によれば、地方においては「近隣には近隣の人情あり、親戚の義理は堅く之を守らざるべからず、都会の細民に比せば人情の天地遙に大なり²⁰²。」といった情誼的共同体のなかで互いに助け合いながら営まれていた結婚生活も、「人情なき荒涼たる都会²⁰³」東京においては情誼関係や友誼関係の希薄化を背景に「其の夫婦間の干係は肉情の上に止²⁰⁴」つていたという。横山はこの調査に先立つこと数ヶ月前、やはり東京各所に住まう妻たちから各々の世帯事情について聞き取り調査を行っているが、同じく『毎日新聞』(一八九五〔明治二九〕年一月)に掲載さ

れたその報告記事には、当時の大都市東京における市井の夫婦の具体像がより鮮明に記されているので、その一部を引用してみたい。以下は、鮫ヶ橋に住まうある妻からの聞き取り部分である。

昔日は立派な生活で居たんもんですわな其れがお前さん、妾の十八の時ぼっくり母親は死んじまッたんだよ。落胆して居るところへ、一ト月経たぬ間に又た父親に歿くなられたんだよ、真個に泣き面に蜂さね。爺様婆様はなく、兄弟はなく、一人ぼっちで茫然して居たもんだから、「……」親戚の悪漢共に財産を茶々無茶に為れちマッてきそうかう為て居るうちに、偶とした事から今の人と何して、「……」妾ア何故今の人と夫婦になつた歟と、今日になりてお前さん悔しくつてならないよ、毎日く酒ばかり飲んで、からッきし仕事も為らないで、ぶらく遊んで居るぢやないかへ。「……」「己だッて貧乏ア為たかアないが斯んな身になツちや、希望がなくて、から面白くないから遊ぶんだッて」「……」妾ア彼の人と夫婦に為つて居ちや、逆も将来の希望アないから、成るもんなら離縁れやうと思ふんだね。「……」あゝ世の中が厭になつたと敷居に腰掛け、髪も乱れて見る姿なき一個の女の、手を懐に入れ、悄然として身の上を語りつゝ、²⁰⁵

（横山源之助、前出「貧民の正月」一八九五（明治二九）年一月）

東京三大スラムの一角を占める「鮫ヶ橋くんだりへ流れて来」たというこの女とその夫を、明治二〇年代後半期における東京の一般的な夫婦像としてここで措定してしまうことは出来まい。だが当時、東京の人口構成は就業機会の拡大を背景に大量流入してきた「若年男子の超過型」²⁰⁶であり、したがって東京における結婚世帯のうちで少なからぬ比率を占めていたのが彼ら若年男子とその配偶者による世帯と推測されるのだが、それら世帯はおおむね深刻な生活苦に直面していた。というのも、産業革命期から本源的蓄積期の都市にかんする大門正克氏の研究によれば、工業部門（機械・金属・印刷など）における男子雇用がまだ限定的であったこの時期²⁰⁷、非熟練型労働に従事していた彼ら若年労働者層の賃金水準は「ひとりで暮らす程度に限られて」おり、「世帯を形成することは決して容易ではな²⁰⁸」かったからである。²⁰⁹

しかし第二節でも確認したように、そもそも日清戦後までの賃金水準は高位の工場労働者と都市下層に暮らす日雇との間で差異はなく²¹⁰、都市に官吏や会社員や「重工業大経営労働者」²¹¹を主体とする新中間層が登場するのは明治三〇年代後半以降のことであつて²¹²、同時期における人々の生活水準は「大きく限界づけられていた」²¹³のだった。つまり、鮫ヶ橋をはじめとする都市下層社会の暮らしぶりは、地域によつてその陰影の度合いを若干変えながらも、広く帝都全体に拡がっていたわけである。

とすれば、物心両面において荒廃したこの鮫ヶ橋の夫婦の生活実態は、じつは一部の上流層をのぞいた都市の多くの世帯に、程度の差こそあれ、当てはまったのではないか。その証拠に、この日、東京各所をめぐり歩く横山が眼にするのは、「手切れく」の着物纏へる「妻たちが「巻煙草」作りや和裁の「内職」に追われるのをよそに、夫たちが「居酒屋に在りて壮言放語し」²¹⁴「憂さを晴らしている光景ばかりなのである。

この日、鮫ヶ橋の女が語ろうとし、そして明治近代における最良のジャーナリストの一人であつた

横山源之助が印象深く聞き取ったものは、女の結婚生活への絶望感と（「夫婦に為つて居ちや、迎も将来の希望アないから、成るもんなら離縁れやうと思ふ」）、そうした「不幸な」結婚に至るまでの経緯（両親との早死別と、親戚による財産の横領）から生じた厭世感（「世の中が厭になつた」）である。女が抱えるそれらの負の感情は、貧しくとも「社会的結合が濃密であり、従来の関係（「近隣の人情、親戚の義理」）も残存していたため、世帯をかまえて生活する術があつた²¹⁵」とされる地方とは異なり、世帯形成が困難であるという経済状況自体は地方とさして大差がないにもかかわらず、血縁や地縁からは切断されて営まれていた東京の世帯の、心的結束を失つた生活実態の反映にほかなるまい。テクスト『わかれ道』に戻れば、ここでふたたび高田氏の述べた「想像力」を働かせてみる余地はないだろうか。「昔日は立派な生活で居た」ところを「十八歳」で両親を亡くして天涯孤独となり、頼みとする親戚からは家産を奪われ、偶然知り合つた男性といとなむ結婚生活も「不幸」だということの女の「身の上」を、お京のそれとして——むろんあくまでのその一部として——想像してみる余地である。

なるほど、言葉遣いも卑俗で、装いもだらしなく、意地も気概もどうに失つているこの鮫ヶ橋の女と、優れた和裁の腕で自活し、「気才」にも富み、生活姿勢も崩れていないお京をいささかでも重ね合わせるのは無理があるだろう。だが、お京も鮫ヶ橋の女と同様、「以前が立派な人」と噂され、自称「一人娘で同胞なし」で、何かに対する烈しい憤りを鬱積させているらしい女である（「ずいぶん胸に燃える事があるからね」）。むろんこのお京自身による身の上話と彼女をめぐる噂話は、あくまでその真偽は不明であるから、鮫ヶ橋の女の過去とお京のそれとを安直に重ね合わせることは慎むべきなのだが、お京に関してただひとつ確かなのは「今年の春より此裏へと越して来」たという彼女の、その出自や係累にかんする正確な情報を周囲の誰もが知らない、ということだ。そのことは取りも直さず、現時点において、お京があらゆる縁者たちとまったく無縁に生きる女であることを物語っている。少なくとも、その無縁性という一点をめぐっては、鮫ヶ橋の女とお京はたしかに共通しているのだ。

血縁共同体からも、生まれ育つた地縁共同体からも、あるいは職業を介した共同体からも扶助を得ることができない——すなわち、あらゆる類的存在から疎外されたそのような若い女が、格差拡大期の殺伐とした大都市において仮に異性と縁をむすぶとすれば、あるいは結婚生活を営むとすれば、鮫ヶ橋の女の例や先の横山源之助の調査が示しているように、その共同生活は経済的基盤と心的基盤の両面において心もとなく脆弱であつたと予想されよう。たとえば第一章でとりあげた一葉の『うもれ木』でも、一切の共同体から切り離された貧しい生活を兄と営むヒロイン蝶は、奸計をくわだて接近してきた男Ⅱ婚約者の正体を見破ることができず、兄ともども手酷く欺かれてしまう。婚姻問題を主題とした他の同時代小説を探してみても、「もはや嫁ぐべき、年にもなれば、身のかたづきをせむこそ、女の道ならめ²¹⁶」（深雪女史『うきよのあらし』一八九六〔明治二九〕年）などと身内から穏やかに諭されて、物心ともに豊かな選良の紳士との幸福な結婚を成就させるのは、大勢の係累や人脈に囲まれている富裕な貴顕令嬢にかざられた話なのである。とすれば、お京の経験したかもしれない結婚生活やそれに類する事柄が、鮫ヶ橋の女ほどの惨状ではなかつたにせよ、やはり絶望と厭世感情を内奥に深く刻むような出来事であつたと想像すること自体には、無理はないはずだ。

ここで付言しておかなければならないことは、女性をめぐる当時の労働事情が、この鮫ヶ橋の女とお京に共有されているはずの絶望と厭世をさらに深くしているという点である。鮫ヶ橋の女が「彼の

人と夫婦に為つて居ちや、逆も将来の希望アないから、成るもんなら離縁れやうと思ふ」と語りながらもそう出来ず、惰性に流される日々のなかで心の荒廃を進めている大きな理由は、女性の自活を長期にわたって可能にする職種は存在しないに等しく、したがって女たちは単身で生きる自己像をイメージできなかったためであろう。

次節でも詳述するが、具体的にいえば当時の「性別分業構造が強固²¹⁷」な労働市場にあつて女性の参入できる職域はきわめて狭小であり(家業としての農林業・商業のほか、家計補助的な家事労働と、繊維・燐寸・煙草工場労働に、ほぼ局限されていた²¹⁸)、しかも就労の許される層はきわめて薄く(工場女子雇用のばあいは、その過半数以上が二〇歳未満の未婚者で、勤続期間も六ヶ月未満ないし一年未満のものが最多であつた²¹⁹)、賃金も総じて低廉だつた(賃金体系が明らかになつてゐる工場労働のばあい日給三〇銭を上回ることとはなく、性差賃金によつて男性日給の半額という工場もあつた²²⁰)。結婚しても自活しても「不幸」——否、そもそも自活そのものの実現可能性すらきわめて乏しい閉ざされた状況のなかで、女たちは「詰まらないづくめ」の境遇にたいする絶望と厭世観だけを募らせてゆくほかなかつたのである。

おそらくお京が、普段はつとめて朗らかな素振りによつて覆い隠してきたその心の荒廃——絶望と厭世を、吉三の必死の説得を前にして「我れ知らず」露呈させてしまつた唯一の箇所が、くだんの発話「最うお妾でも何でも宜い、何うで此様な詰まらないづくめだから、寧その腐れ縮緬着物で世を過ぐさうと思ふのさ」であろう。だからなのか、この発話は、鮫ヶ橋の女がもらした詠嘆「世の中が厭になつた」と、きわめて近い響きをもつてはいはしないだろうか。

ともあれ、こうした明治二〇年代後半期における東京の、結婚をめぐる殺伐とした現実を眼の前にしてみると、閨秀作家たちによる夫婦の美しい共助物語『一沈一浮』『刷毛彩色』はいささか現実離れした、言うなればやはりこれも御伽話であつたことがわかる。だが、その御伽話としての共助物語におのが夢を託し、その夢物語をお京とともに実現させることを誰よりも希求せずにはいなかったのが、孤児として近代都市の奈落を生きてきた吉三だつた。そのような吉三にとつて、その夢がとつぜん崩壊した際の、すなわちお京との共助生活という希望の風景がとつぜん失われた際の、あまりに大きな絶望を表わした言葉が「詰らない」「面白くない」であつたことは、前節で論じた通りである。

他方、おなじく本源的蓄積期であり格差拡大期の大都市の酷薄な現実を生きるなかで、公助はもとより共助や扶助といった「(互恵性・助け合い) (reciprocity)²²¹」(ロールズ)の物語が御伽話でしかないことを身をもつて理解したのが、ほかならぬお京であつた。したがつてお京の語彙としての「詰らないづくめ」は、いわば希望それ自体をとうに失つた人生に対する絶望を表現した言葉であろう。

希望の風景の喪失と、希望それ自体の喪失——キーワード「詰らない」は、そのような吉三とお京それぞれの傷ましい内面が、どちらも「不幸」な二人の希望をめぐる異相が、もつとも端的にあらわれ出た言葉であるといえよう。まさしく前出した小森氏の発言「言葉自体が「わかれ道」になつてゐる」その「言葉」にはかならないわけだが、ならばそれはタイトル「わかれ道」の意味(両者の「わかれ」の真因)を解く上でも、きわめて重要なキーワードでもあるわけだ。さしあたりそれが本節の結論ではあるが、併せて次の事柄を付記しつつ本節をしめくくりたい。

結婚しても自活しても「不幸」。なるほど、およそ生きることは、いかなる時代のいかなる者たちにとつても、決して容易でないことは言うまでもないだろう。だが、既存資本がその資本の蓄積を急速に増加させ、「政商」から「財閥」へ転化²²²」を遂げた三井、三菱、住友、安田、大倉、浅野、

古河のうちからは貴族院勅選議員も多選され、彼らブルジョワジーに対する授爵も始まるようになる明治二〇年代末²²³——つまり都市が一部の圧倒的に富める強者とその他多くの無産者によって二つに分断されていた明治二〇年代末、その「互恵」なき市井の塵埃にまみれながら身過ぎ世過ぎをする女たちの生き難さをこのように印象的に描きえた、あるいはその内面をこのように切実に表現しえた作家は、同時代において樋口一葉のほかに果たして幾人存在したであろうか。

九・希望の範型への訣別

ところで、当時の「性別分業構造が強固」な労働市場にあって、女性の参入できる職域はきわめて狭小であったと前述したが、その極く限定的な職域において女性比率が九三・八パーセントと圧倒的に高かった職種が、「家事使用者²²⁴」であった。残る女性職域である工場のばあい、そこで働く女性たちの年齢がほぼ二〇歳未満であり、就労期間も長くて一年だったことを考えれば、歴大な人数の女性たちが「家事使用者」として就労していたと推測できよう。このことは、当時の女性たちが、資本の本源的蓄積を背景に登場してきた都市ブルジョワジー家庭における（奥様²²⁵）と、その奥様の指図の下で労働する「家事使用者」とに分解していた事態を物語っている。そして、本章さいごに分析が残されたお京じしんの語彙としての「運」「上等の運」は、その性内部における階層分解、格差出現という事態に深く根ざす言葉だと思われるのである。議論を先取りするかたちで言い直せば、これまで本稿においてしばしば言及してきたような同時代の貧困／「出世」をめぐる不条理性、理不尽性は女性にこそ顕著である——そのようなお京の現実認識を反映した言葉が「運」であると思われる。本節では、「詰らないづくめ」とならぶお京にとつてのもうひとつのキーワードであり、吉三のそれとは「対立的な観念あるいは立場、イデオロギーを持つ」（前出、小森陽一氏）もうひとつの言葉でもある、このお京の語る「運」について検討してみたい。その検討を終えたとき、日本資本主義確立期の格差社会における貧者たち、とりわけ貧しい女性の内面を映し出したこのテキスト『わかれ道』の、同時代言説空間における特異性が明らかにになるはずである。

本題に入る前に、やや遠回りをすることにはなるが、まずは「家事使用者」とは誰か、また「家事使用者」をふくむ女性全体の階層序列がいかなるものであったかを瞥見しておきたい。当時、働く女性たちの大部分を占めていたと推測されるだけでなく、女性全体の階層の主たる部分をも担っていたはずの「家事使用者」に関する学術研究は意外に僅少だが、その希少な一冊である上野千鶴子『家長制と資本制』は、近代日本における「家事使用者」の登場過程とその態様について次のように概説している。

貴族と武士階級を除けば「都市のブルジョワジー家庭」において初めて成立した「奥様」の身分は、「自律的 autonomous な「女の領域」を確保した上で、その中で意思決定権・指揮監督権を行使できる「女性の王国」の女王の座」を意味していた。したがって「都市ブルジョアジー」という新興の階級の形成期——それは同時に「労働市場がそこに無尽蔵に労働力を供給する大きな（外部）を持つている」時期にはかならない——には、「いつでもおびたしい」「家事使用人 domestic laborer」が登場する。「工場労働者が賃労働者であるのと同じように、家事労働者も賃労働者であり、前者が「自由に浮動する労働力商品」であるのと同じくらい後者もまたそうであった。近代化初期の就労機会のうちで、この家事労働の比率は無視できない部分を占めている²²⁶」。

かいつまんで言えば、近代日本が本源的蓄積期をむかえた明治二〇年代、資本の形成と無産者の増大というふたつの事態が並立する本源的蓄積の構図そのままに、資本家の「奥様」とその下で「賃労働」を行なう「家事使用人」が登場し、前者が最上層を、後者が下層を占めるピラミッド型の「女性の王国」が出現した、というわけである。

なるほどこうした経済史的状况を忠実に反映して、一葉のテクストには「家事使用人」が少なからず登場する。テクスト内で「奉公人」「下女」『大つごもり』、「召使の婢女」『十三夜』、「奴婢」「小間使ひ」「侍女下婢」「召使の人々」「婢女」「仲働き」(以上『われから』など幾通りもの名指しで呼ばれる彼女たちだが、いずれの呼称も、上野氏が指摘した以上にあからさまに、彼女たちが「奥様」に使役される存在であったことを告げている。「奥様」と「家事使用人」——両者のあいだには画然とした階級格差が存在していたわけだが、とりわけその両者間の隔たりが印象的に描かれ、それどころかその懸隔がプロット展開における重要な鍵にすらなっているのが、『大つごもり』(一八九四〔明治二七〕年)と『われから』(一八九六〔明治二九〕年)であろう。

骨身を惜しまず働くけなげな「下女」お峰の前借の依頼を、「機嫌かい」の「奥様」がにべもなく反故にしたことから物語が大きく展開してゆく『大つごもり』。「奥様お着下しの本結城」を得られなかったことを恨んだ、海千山千の「仲働きの福」による「口車」が発端となって、「奥様」お町の追放という結末が導かれる『われから』。どちらのテクストにおいてもプロットの基盤にあるものは、金銭／モノを所有する(正確には夫を介して所有する)「奥様」と所有せざる者である「家事使用人」との、潜在的でありながらも不可避的な対立の構図であろう。

作者一葉は、そうした「女性の王国」にひそむ緊張関係を炙り出すなかで、その一方の当事者である「家事使用人」の存在を奥行き深く描くことを通して——具体的には彼女たちの内面をまったく対照的に描き分けることを通して(たとえば奉公のあり方をめぐって『大つごもり』のお峰には「正直を我が身の守り」と心中思惟させる一方で、『われから』の福には「正直で務るものか」とうそぶかせている)——、他者の家庭を労働の場、もつといえは生きる場とする女性たちの姿を、おそらく近代日本文学史において初めて浮き彫りにしてみせたのである。

ここでテクスト『われ道』に戻れば、じつはお京が転身を決意した妾もまた、まぎれもなく、他者の家庭を生きる場とする女性にはかならなかつた。妾とは、「他人場の奉公」『われから』をするお峰や福とまったく同様に、ブルジョワ家庭に雇用された独身女性だったからである。近世期には武家における継子装置として半公認的立場にあった妾をめぐって、近代日本はその法的身分を規定するための議論をじつに喧しく行なったが²²⁷、当初(一八七〇〔明治三〕年の新律綱領と一八七三〔明治六〕年の太政官布告)は家系存続のためのやむを得ざる措置として親族(二等親)に定められた妾は²²⁸、最終的に旧刑法(一八八二〔明治一五〕年制定)において、その存在に堪ふる記述をいっさい削除された。近世武家における妾の位置付け——家系・家産継承のための被雇用人——をそのまま踏襲する存妾論を、家系・家産継承のための被雇用人であるからこそ法的対象にすべきではないとする廃妾論が駆逐したかたちだが、要するに、一八八二〔明治一五〕年の旧刑法制定をもって、妾は一夫一婦制家庭における「奉公人」²²⁹として、言外にその身分を規定されるに至ったのである。

お京の転身を知ったときの吉三の次の発話は、じつはそうした当時の妾の身分性についての説明効果を果たしていると考えることができよう。「仕事やお京さんは(…)お邸へ御奉公に出るのださうだ、何だお小間使ひと言ふ年ではなし、奥さまの御側やお縫物しの訳は無い、三つ輪に結つて総

の下つた被布を着るお妾さまに相違は無い」。いみじくもこの発話は、当時、妾が「お邸」の「奉公人」として、おなじく「奉公人」(『大つごもり』)と呼び慣わされていた「家事使用人」(ここで挙げられた例でいえば「お小間使ひ」や「奥さまの御側」や「お縫物し」)とほとんど同列の身分(朋輩²³⁰)にあったことを伝えているのである。

だとすればこの発話はまた、前出『大つごもり』『われから』の「家事使用人」たちがそうであったように、お京もこれから「お邸」という「女性の王国」の序列構造にいやおうなく組み込まれてゆくことを、読者に伝える効果をも果たしているだろう。そこから読者はさらに次のような想像を導かれることにもなるのである。ほかならぬ「奥様」の夫の「身の回りの世話や性労働をする²³¹」ことを通して、再生産能力のない継子を生きさない(場合の多い)「奥様」に間接的に仕えることになるお京は、「お小間使ひ」よりはるかに抑圧的な管理の網の目にとらわれてゆくに違いない。

この想像がたんなる憶測でないことを示してくれる同時代テキストには、たとえば本章第一節に掲げた、花圃『空行月²³²』や広津柳浪『妾』がある。奇しくも『わかれ道』と初出同年、同掲載誌に寄稿された『空行月』の主たるプロットは、某省の大臣とおぼしき「殿様」の邸内で継子を生きさない「奥様」と同居する妾・須磨が、偶然にも「奥様」が欲しがっていた高級帯を「殿様」から贈られたために「奥様」の激しい勘気を買ってしまい、出奔を余儀なくされるというものである。しかも帯をめぐるその一件を「奥様」にことさら偽悪的に注進したのは、日頃から須磨を卑しんでいた「下女」という設定になっている。『妾』のヒロイン、勲功新華族である海軍中将の妾・阿千満も、「家事の全権²³³」を握る「夫人の指揮の下²³⁴」にあつて中将家の継子となった実子に母の名乗りをすることも許されず、嫡母となった「夫人」の眼前で我が子から「召仕²³⁵」と蔑称されてしまう。これらのテキストに描き出されているのは、まさしく「女性の王国」の最下部にある者の受難であろう。そのような、本源的蓄積期をむかえた近代資本主義諸国にあまた出現した、広い意味での「家事使用人 domestic laborer」たちが、いかに抑圧的な境遇に置かれていたかについて、セシル・ドーファン氏は次のように述べている。

偶然のせいでは、あるいは間違いによつてか、正統とされた地位から離れてしまつてゐるため、かの女たちは「余剩人員」とみなされてゐた。「……」ひとりで生きるとは、他人の家で暮らすことだ！」だが、家内奉公人や女性家庭教師たちにとつて、それは苛酷な経験だった。それは、ひとつ家で暮らしながら、けつして親密になれないことであり、帰るあてのない追放の生活であり、家庭を管理しながら、自分自身は家庭をもたないことだった。この閉じ込められた生活は、身体を管理されることと、アイデンティティを否定されることを前提としていた²³⁶。

(セシル・ドーファン「独身の女性たち」、『女の歴史』 十九世紀 2『所収

曖昧で不安定な身分、孤立、女性身体に対する侵犯、存在自体の否定、そして「侮蔑²³⁷」。傍線を施した箇所を要約すれば、そのようになるだろうか。本源的蓄積過程に誕生したブルジョワ家庭という「他人の家」で、そうした幾つもの「苛酷な経験」を強いられる家内労働の最たるものこそ、妾奉公にはかならないであろう。

その「苛酷な経験」は「他人の家」の内部に限った出来事だったわけではない。たとえば前掲『妾』の阿千満は里帰りの際に、法学士となった実弟から「羞づ可き²³⁸」「卑しい身分²³⁹」の姉がいるば

かりに自分は「官途に望を断つて」……「一生下級に甘んじ」²⁴⁰。「世間の目に触れぬ様な職を取ら」²⁴¹なければならぬのだ、と責め咎められてしまう。やはり、本章第一節に掲げた鷗外『雁』²⁴²のお玉の場合は、世間に忌み嫌われる「高利貸」の妾であることも手伝って、近隣に使いに出した「小女」までもが「高利貸しの妾なんぞに売る肴はない」²⁴³と門前払いを受けてしまうのである。「世に所謂る妾と卑しむる者」²⁴⁴。「妾」に対する人々の賤視のまなざしは、「他人の家」の内外を問わず、否むしろ時として「他人の家」の外のほうが露骨であったことが、両作からうかがえよう。

付言すれば、その賤視のまなざしは、「周囲から陽に貶められ、陰に羨まれる妾と云いふもの苦しさ」²⁴⁵。「雁」とあるように、蔑みに妬みが入り混じった複雑な庶民感情を反映させたものであり、その妬みゆえに——妾たちは「総の下つた被布」や「縮緬着物」『わかれ道』や「しつた帯」(疋田絞り帯)²⁴⁶、『空行月』などで一見奢侈によそおっていた——、世間の妾たちに対する差別感情や敵対感情はいっそう昂まっていったふしがある。同時代小説をみても、彼女たちに冠された形容表現は「見かけによらぬ、人鬼」²⁴⁷。「果報やけて、今に鼻くた婆」にでもなりませう²⁴⁸。『空行月』、「莫連」²⁴⁹。「妾は妾だけの根性より外持たない」²⁵⁰。「妾」といった激越なものばかりなのである。先にドーファン氏の挙げた「帰るあてのない追放の生活」とは、この〈世間からの疎外〉の謂であるう。

「他人の家」(前掲「独身の女性たち」)の内と外における賤視と疎外。だから阿千満もお玉も、「考へれば考へる程、今の境界が厭はしい。」「……正き妻」となつてこそ、一個の人として世間へ顔が出されるもする²⁵¹。「妾」と心中思惟した挙句、「往来を通る學生を見てゐて、あの中に若し頼もしい人がゐて、自分を今の境界から救つてくれるやうにはなるまいかとまで考へ」²⁵²。「雁」るに至る——つまり婚姻による妾身分からの脱出を切望するわけである。この阿千満とお玉の心内語は、今日からみれば、巷間よく言われるところの「日蔭もの」『暗夜』の女性の内面をめぐる常套表現にすぎないが、旧刑法の制定とブルジョワ家庭の登場によって「正き妻」(前出『妾』)対「正統とされた地位から離れてしまっている」(前出「独身の女性たち」)女という二項対立が露わになり始めた同時代にあっては、説得力ある新しい表現であつたはずだ。

それを踏まえると、『わかれ道』のお京の発話表現のきわだつた特異性に驚かされずにはいない。同時代において「迫害を受けなくてはならぬ」²⁵³。「雁」とすら表現されるほど貶められ忌避されたこの妾への転身について、お京は「兎も角喜んでお呉れ悪い事では無いから」と語っているからである。それどころか『雁』のお玉が「不運」²⁵⁴「ないきさつから」妾と云ふものにならなくてはならぬ事になつた「悔やしき」²⁵⁵や「我身の運命を怨む」²⁵⁶「想いを」胸に鬱結²⁵⁷「させているのに対して、お京はその妾奉公の口入れ話を「上等の運が馬車に乗つて迎ひに来た」と表現しているからである。

さらに興味深い特異点は、『妾』『空行月』『雁』『八重桜』のヒロインたちがみな、零落した老父母を困窮生活から救うために『空行月』『雁』、あるいは前途ある弟(≡将来の戸主)の学資を得るために『妾』『八重桜』妾奉公に出たのに対して、お京の場合はそうした忠孝一本の家族国家観にもとづく動機付けをいっさい持たずに、あくまで自己ひとりの選択意志にもとづいて妾奉公に赴こうとしている点である。しかもその決意のほどは、吉三によるどれほど真率な非難や懇願によつても揺るがないほど固いのである。

だがここで十分留意しなければならない点は、同時代小説のヒロインたちとはきわめて対照的な、その主体的で積極的のみえる選択が、じつは同時代小説のヒロインたちと同様、決して本意によるも

のではないことである。次の表現に注目したい。「何も私だとして行きたい事は無いけれど行かなければ成らないのさ」²⁵⁹とて唯いふ言ながら萎れて聞ゆれば、「誰れも願ふて行く処では無いけれど、私は何うしても斯うと決心して居るのだから夫れは折角だけれど聞かれぬよ」。同時代小説のヒロインたちをやむなく妾奉公へと赴かせたものが、孝行の実践ないしは家父長制下における女性役割という絶対的な強制力であるならば、その強制力の支配圏外にいるはずの単身者お京を、それでもなお妾奉公へと向かわせるものは何なのか。テキスト論的に言い直せば、敢えてお京を妾奉公へと向かわせるものとして、テキストは何を想定、あるいは何を読者に示唆しているのか。

おそらくそれは、資本の本源の蓄積のもつ力であろう。資本主義的生産様式成立の原初段階である本源の蓄積期は、資本主義の本質としての格差拡大がもつとも端的な私たちで現出するから、自己の労働力を廉価で販売する以外に生きる術のない無産者に落ち込んだ者は、いかなる転業を試みようと、よほどの勤勉に幸運でも加わらないかぎり、不安定きわまりない「浮動する労働力商品」であることから浮上できない。とりわけ労働市場が狭小な女性賃労働者のばあいは勤儉力行を發揮できる場は無きに等しいから、たぐいまれな幸運が訪れて「奥様」にでも身分上昇できないかぎり、いつまでも「浮動する労働力商品」として都市を漂流せざるをえない。その彼女たちに開かれたほとんど唯一の労働空間が「他人の家」だったことは前述した通りだが、そこでの労働とは、幼若女性に限られていた「小間使ひ」や「奥様の御側」の軽労働²⁶⁰をのぞけば、『にこりえ』の年高の酌婦が語るような——「悲しきは女子の身の寸燐の箱はりして一人口過しがたく、さりとて人の台所を這うも柔弱の身体なれば勤めがたくて、同じ憂き中にも身の楽なれば、こんなこととして日を送る」——、「霜氷る暁」からの往復「十三回」以上もの水汲みに始まる「堪えがた」い「辛棒」『大つごもり』を耐える労働にほかならなかった。

したがって、もし仮にお京がその発話通り「洗ひ張に倦きが来て」、生産手段を独占し貨幣を蓄積する資本家Ⅱ問屋のもとの過酷な賃仕事から逃れようとすれば、すでに二〇歳を過ぎた「浮動する労働力商品」にすぎない彼女には、この「人の台所を這う」奉公か妾奉公か、ほぼ二通りの選択しかなかったことになる。常住坐臥いつ終わるとも知れない針仕事と洗張に明け暮れる「仕事や」の心身を蝕むような賃労働を通して、すでに非人間的な労働の〈怖さ〉を熟知するお京が、このとき他の似た境遇にある無産女性の例に漏れず「同じ憂き中にも身の楽」な妾奉公をえらぶのは、いわば選択の余地ない所為であったはずである。

むろん妾奉公とは、居職人としてまがりなりにも裁縫技能を販売していた「仕事や」よりはるかに無産者的な、自己の性それ自体を売却する、つまりは女性身体そのものを切り売りする労働であり、それがために「奥様」と「世間」から抑圧を被り続ける労働ではある。しかし「二十歳余りの意気」な美人で「物事に気才の利」といってお京の女性像と比べて、何ら遜色のない『にこりえ』のお力が、「新開」の「銘酒」屋の私娼として不特定者を相手に廉価で性を商品化していることを考えれば、それは「出世」とは言い難いにせよ——実はテキストにおいて妾奉公を「出世」と表現することは周到に避けられている²⁶¹、まさしく「同じ憂き中」における「上等の運」であるにちがいない。

以上のように資本の本源の蓄積期における女性労働市場をひとたび瞥見すると、この〈食べてゆく〉ための選択肢の圧倒的な貧しさ、その〈食べてゆく〉ためだけの労働の非人間的な劣悪さという、お京の囚われていた根源的な問題が浮かび上がってくる。

妾奉公が消極的選択にほかならないことを告げるくだんの発話「何も私だとして行きたい事は無い

けれど行かなければ成らないのさ」「誰れも願ふて行く処では無いけれど、私は何うしても斯うと決心して居るのだから」は、したがって当時の無産女性の労働、ひいては生きること自体をめぐる自由さを直裁に語ったものとして読むべきではないか。

たとえば時代は下るが、やはり小間使い、奉公人、女中、キャラメルやキューピー人形製造工場の女工など典型的な女性賃労働者として都市を転々と漂流した経験をもつ佐多稲子や林芙美子も、それら賃労働の辛さや生き難さを異口同音に次のように述べているのである。「やはり、よそのうちに奉公してゐるっていうことが、そりゃあもう、たいへんなことなんですネ²⁶⁰。」「生きるために働かなければならない。生きるために働くんだけれども、その働くということに疲れていって。『…』だから生きるために働かなければならないんならば、働くことに疲れてきたのなら、死ぬしかないじゃないかと『…』ただくたびれてて、もう嫌になつたから²⁶¹。」「朝から晩まで働いて、六十銭の労働の代償をもらつてかへる。『…』つくづく人生とはこんなものだったのかと思つた。『…』一日働いて米が二升きれて平均六十銭だ。又前のやうにカフエーに逆もどりでもしようかしらともおもひ、幾度も幾度も、水をくゞつて、私と一緒に疲れきつてゐる壁の銘仙の着物を見てみると、全く味気なくなつて来る。『…』こんな女が一人うじうじ生きてゐるよりも、いつそ早く、真二ツになつて死んでしまひたい²⁶²」。

辛い労働による疲労困憊と、その挙句の絶望感や希死念慮をめぐるこれら語りは、すぐさま気づくようにお京の語り「私は洗ひ張に倦きが来て、最うお妾でも何でも宜い、何うで此様な詰らないづくめだから、寧その腐れ縮緬着物で世を過ぐさうと思ふのさ」と通底する響きを持つてゐるわけだが、『わかれ道』物語内時間から二〇年以上も経た大正一〇年代ですら佐多稲子や林芙美子が女給に転身することにかんがりの躊躇があつたことを考えると、このお京の語り、あるいは一葉の文学表現の大胆さが際立たずにはいないのである。

ともあれ、前述したように、お京の語つた「上等の運」が、「仕事や」、「人の台所を這う」奉公、妾奉公、「銘酒」屋などでの性労働——いずれも辛く厳しい労働のなかから必ず一つを選択しなければならぬ彼女の境界を物語つた言葉であるならば、その重い言葉は、かつて吉三の語つた「上等の運」に対する完全な反語であるといえよう。なぜなら、かつて吉三がお京の未来を想像してみせた際の（「お前さんなどは以前が立派な人だと言ふから今に上等の運が馬車に乗つて迎ひに来やすのさ、だけれどもお妾に成ると言ふ謎では無いぜ」）「上等の運」は、第三節で確認した通り「出世」とほぼ同義をなすわけだが、一葉自身や²⁶³長谷川時雨も明記しているように、同時代文脈における女性の「出世」とは「玉の輿²⁶⁴」に乗ること、すなわちブルジョワ家庭の「正夫人²⁶⁵」「奥様」の座に就くことを意味したからである。だがそれは、これも一葉が明記しているように、市井の女性たちにとつては「百年の運」『十三夜』と形容されるほどの、万に一つあるかないかの僥倖だった（詳細は後述）。つまり吉三の語つた「上等の運」は、お京の未来にあらんかぎりの祝福を与えたいという無垢な善意から出た罪のない、だが現実離れした——おそらく話者である吉三自身もそれを認識してははずである——もうひとつの御伽話にほかならなかつたのである。

いずれにせよ、結局当時「玉の輿」を成就できるのも、換言すれば妾奉公を受忍せざるをえないのも、ひとえに「運」という一点にかかつてゐたことになる。少なくとも人々、とりわけ女性たちはそう認識してゐたことになるだろう。『わかれ道』以外でも『十三夜』のなかでエリート奉任官から請われて嫁したお関を「百年の運」「それだけの運のある身」などと表現している一葉は言うまでもな

いが、前出『一沈一浮』の冒頭から女性間の格差を決定するのは「時の運」であると語っているのも、むろん閨秀作家中島湘煙なのである——「女は暗き洋燈の底よそ目もふらず縫ふこぼれ梅のすそ模様は、いづれ時めき玉ふ奥様が肩に登る春衣にてもあらんか「…」赤切れの手を真綿になぶらるゝも時の運²⁶⁶」(前掲『一沈一浮』。ちなみに前出したセシル・ドーファン氏も、「運命の変転(父親の死、一家の破産など)にみまわれれば²⁶⁷」、一九世紀を生きた女性たちの誰もが「正統とされた地位から離れてしま²⁶⁸」う可能性を有していたことを指摘している。

つまり、女性たちの階層分解には理由がない——そのことを表現したに等しい言葉が「運」なのである。それは「正統とされた地位から離れてしま」った女たちにとつては、自分たちと「正統」な女たちとを分かつ理由がなにも存在しないという理不尽といえば余りに理不尽な事態をあらわす言葉なのであり、同時にそれはそうした「自分が何の悪い事もしてゐぬのに、餘所から迫害を受けなくてはならぬ²⁶⁹」、『雁』憤りやルサンチマンを「あきらめ」(同上)に転化するための方便としての言葉でもあったのだ。それを踏まえると、お京が一度だけその内奥にある烈しい憤りを垣間見せた次の印象深い発話は——「左様さ馬車の代りに火の車でも来るであらう、随分胸の燃える事が有るからぬ」——、それが「今に上等の運が馬車に乗つて迎ひに来やすのさ、だけれどもお妾に成るといふ謎では無いぜ」というまさに女性間格差をめぐる発話に応えたものであるかぎりにおいて、その憤りは、女たちの境界をめぐるこの理不尽きわまりない同時代状況と決して無関係ではないはずだ。

なるほど、かつて井上章一氏が『美人論』で指摘したように、一八七一(明治四)年の通婚の自由令によって「妻の選択基準が「姿容」に傾斜した²⁷⁰」結果、美貌を梃子にした階級上昇Ⅱ玉の輿が「飛躍的に増大した²⁷¹」という状況も確かに存在はしたのである。だが佐伯順子氏が小杉天外『魔風恋風』(二九〇三(明治三六)年)をめぐる仔細に分析しているように、明治三〇年代、人々の間ですでに「自由恋愛」が浸透していたにもかかわらず、未婚男性に選択された婚姻形態とは、美貌に知性も兼ね備えた時代のヒロインⅡ女学生との「自由結婚」より、「財産や家柄などに左右される結婚²⁷²」だった。「現実的打算²⁷³」を優先させる彼ら選良青年たちには、美貌とは氏索性正しき富豪の令嬢であるかぎりにおいて初めてその価値を放つようになり始めていたのであり、そのように門閥令嬢がそのまま「時めき玉ふ奥様」へと移行することの多くなった明治中葉期とは、階級内結婚の始まりの時代、すなわち玉の輿婚の終焉の時代にほかならなかつたのである。

明治初年期には容色とそれに裏打ちされた社交術を武器に(正妻)へと階級上昇を叶えることができた女性たちは、明治二〇年代末になると次第に(権妻)としてしか遇されなくなった。格差社会の深化にともなう女性間の格差も固定化されてゆくなかで、彼女たちを含めた貧しく無力な女性たちが「奥様」に転身するには、したがって「百年の運」なる語に象徴される偶然的要素が不可欠となってきたわけである。この女性の階層移動の途絶という事態はじつは本源的蓄積期の看過されてきた重要な側面と思われるのだが、そうした時代状況のなかに生きるお京は、だからこそ面前の吉三から「運の向く時に成ると」すなわち玉の輿が迎えに来ると「糸織の着物をこしらへて呉れるって、本当に調べて呉れるかえと真面目だつて」問いかけられた時、その思いがけず真摯に受け取られていた約束を違えまいとして、直ぐさま「私が姿を見てお呉れ、此様な容体で人さまの仕事をして居る境界では無からうか、まあ夢のやうな約束さ」と「笑つて」訂正したのではなかつたか。

他方、その方に一つの「百年の運」が訪れてヒロインたちがめでたく玉の輿婚を成就させるという、まさに「夢のやうな」大団円をもって閉じられるのが、同時代小説『空行月』『妾』なのである。『空

行月』の須磨は戻り帰った実家で偶然にも医師となった初恋の男性と再会し、「かの須磨の浦わもにはよく和、更にうたふ高砂の、相生の松、枝をつらね、都をあとに²⁷⁴」し、『妾』の阿千満も弟の学友である「都下にて有数の弁護士²⁷⁵」にその身の上を同情され結婚、「厭う可き妾の境界を脱して、望通に立派な妻に成り得²⁷⁶」る。それが両テクストの結末である。すなわちヒロインたちは同時代状況をいともやすやすと乗り越えて、いささか唐突ともいえる事の運びで「女性の王国」における「奉公人」から「女王」へとみごとな転身を遂げてしまうのである。

もつとも、興味深いことにこれも両テクストともに、その最末尾にはヒロインたちの不吉な未来を暗示する語りが置かれている。「露また結ぶ、玉しく庭、光をましゝまじらひも、いづれは、かはり安き、男氣の其村雲のわざならんとか²⁷⁷。」「『空行月』、「腹の中の児に約した事〔既に阿千満が懐妊していた子を結婚相手・熊元仙吉が養子として養育するという約束―引用者〕を實行されざるにも甘んじ〔…〕今の処では〔阿千満は―引用者〕楽しいく境界と満足して居ると云ふ事である²⁷⁸。」「『妾』。筋立て自体はそれまで虐げられてきたヒロインに世にもめでたい幸運を贈りつつ、語り手が最後にその幸運に水を差しておくというこのテクストの二重構造は、あまりに首尾が良すぎる御伽話を最終段階で現実的方向へと修正しようとした痕跡なのか、貧しい女性たちの階層移動をめぐる欲望を無意識裡に危険視した挙句の²⁷⁹——とりわけ奥ゆかしい女徳を重んじる『藪の鶯』の作者花圃であれば危険視どころか断罪した挙句の——結末処理なのか。それとも、あくまで男性次第のその幸運の脆弱性、ひいては家父長制社会における女性の立場の脆弱性を小さな声ながらも訴求しようとした跡と考えるべきか。

しかしいずれにせよ、この二作品や前掲『雁』『八重桜』といった同時代〈妾小説〉はすべて、ヒロインが「厭う可き妾の境界を脱して、望通に立派な妻に成り」（前出『妾』おおせることが出来るか否かという一点のみに焦点化している意味で、それらテクストは同時代における女性間格差をそのまま前提するところからプロットを構成していることになる。むろん「厭う可き妾の境界」に対する同情的視点はそれらテクスト全体に貫かれてはいるが、それゆえにこそ『空行月』や『妾』は「世に所謂の妾と卑しむる者²⁸⁰。」たるヒロインたちに対する救済として、一気呵成に彼女らを「望通に立派な妻²⁸¹。」へと転身させることで局を収めてしまう。つまり、その二作をはじめ同時代小説で妾を扱ったテクストは、「世に所謂の妾と卑しむる者」／「立派な妻」という二項対立観それ自体をいささかでも懐疑するような語りを差し挟むことなく、前者の后者への変身を成就させるばかりなのである。

そればかりか、それら四作品は、ヒロインたちに一樣に「厭う可き妾の境界を脱して」「立派な妻に成」ることを強く希求させるあまり、テクストそれ自体がこの二項対立的価値観を反復、強調し、あるいはそれを読者に喧伝、教化する結果に転じているとすら考えられるのではあるまいか。あるいはそれらテクストは、〈食べてゆく〉すなわち生きてゆくための選択肢がほとんど皆無であるという現実については黙して一切語らず、だがしかし孝の道のためとはいえ性の商品化という選択肢を採った女の悲劇をそれこそ脅迫的に物語っているという意味において、性の商品化に対する抑止力を強く発動させている言説だとも、深読みできようか。

こうした同時代小説の共通傾向を眺めたうえで『わかれ道』に眼を戻すと、改めてこのテクストが放つ異彩に眼を瞠らさずにはいない。同時代小説がかくまでに「厭う可き」すなわち厭悪しなければならぬと力説し、「脱出」の必要性を執拗に強調した「妾の境界」に、他の誰でもないみずからの意

志で明日足を踏み入れようとする女の数日間を物語ったのが、『わかれ道』なのだから。同時代小説のいずれもが「立派な妻」「時めき玉ふ奥様」になることだけを、すなわち「出世」だけを希望や幸福の具体的なかたちとして提示したなかにあって、同テキストは、その範型を追うことを手放してみせているのである。

『わかれ道』は、同時代小説ないし明治近代がそろって描きみせた女性をめぐる希望のかたち、希望の範型に訣別を告げたという意味において、きわめて特異なテキストである。

一〇．御伽話を手放したのちに

明治二〇年代末を含む近代日本について現在私たちに与えられている有名なイメージ、それは「坂の上の青い天」に「一朵の白い雲が輝いている」²⁸²「情景そのものの、限らない希望と可能性に満ちあふれた、若く鋭刺とした近代国家としてのイメージである。だが、そのようにどこまでも明るく晴れやかなはずの近代国家の内部に遍在していたのは、じつは見えてきたように、希望ではなく絶望であった。

本章冒頭でも引用した『わかれ道』執筆同年同月発刊『女學雑誌』社説は、「人生無常、天運定めなしと雖ども、人の履行すべき道に至ては、則ち昭々として極めて明白なることを。此故に、時非なりとも、望を失ふことなかれ。〔…〕逆境に処しては、隆んに元気を鼓舞し、起つて活動し、倒れて后ち止むべし。これ后人を起す唯一の活ける血なり。凡そ此等の福音は、去今二歳に涉れる帝国の時勢が、吾等個々に教訓する所のも也。²⁸³」としめくくっているが、絶望することをかたく戒めるこの訓告文それ自体が、同時代に蔓延する絶望的な気分、閉塞性を証しているだろう。

そうした絶望の時代にあつて、「出世」という唯一の希望のかたち、いわば国家が物語る「立身出世」という御伽話を手放したお京と吉三は、これから各々自身による希望の物語を獲得できるのか否か。絶望を生ききるなかで何を見出すのか。それは読者ひとりひとりの想像にゆだねられているのであろう。

¹ 以上、宇野俊一『日本の歴史 第二六巻 日清・日露』（小学館、一九七六年）一一八―一二二頁、参照。

² 社説「歳暮の回顧及警戒」『女學雑誌』第四一七号、一八九五〔明治二八〕年一月二五日、四二五頁。

³ 田口卯吉「世間細民の友なきか」『東京経済雑誌』第九三五号、一八九八〔明治三一〕年七月九日、『鼎軒田口卯吉全集 第四巻 経済 上』（鼎軒田口卯吉全集刊行会編輯、一九二八〔昭和三年〕四五二頁、所収）。

⁴ 同右。当時の消費税として、同記事は、酒税、煙草税、砂糖税、醤油税、菓子税などを挙げる（四五―一二頁）。

⁵ 同右。同記事には「消費税増加の事益々甚しきを加ふべければなり〔…〕消費税を増加して以て歳入の欠乏を補はんとするは細民の幸福を減削して特に富民を保護するものにあらずや」（四五―一頁）と述べられている。

⁶ 宇野、前掲書、一一二頁。

⁷ 横山、前掲書（『日本の下層社会』）によれば、物価上昇と賃金停滞をめぐる当時の状況は以下のようなであった。「明治二十年の頃は物価は一〇二、米価は僅かに九九なりしに、戦争当時に至りて物価は二三五に昂り、米価は一九六の高価に進み、明治三十年に入りて物価一六一、米価は二三六の暴騰を致せり。しかして物価特に米価騰貴のために最も影響を蒙りたるは労働社会となす。物価の

騰貴につれてその賃金は昂りたるや。米価は日に騰りつつあり、しかれども労働社会においては、当時関西地方の如き、労働底の声喧しきにもかかわらず資本家は賃金を上ぐることなく依然として低廉なる賃金を以て職工を使役す。」(三五八頁)

⁸ 小作料抑制をめぐる状況は以下の通り。「米価現時の騰貴を以てせしことゆえ、地主の利益極めて大にして従ひて小作人を押ゆるの力愈よ強くなりし事は争ふべからず。」(「物価騰貴の結果」『東京経済雑誌』第三四卷八五五号、一八九六〔明治二九〕年二月十九日、一〇六六頁)

⁹ 「政治家は貧民の惨状を無視すべからず」『東京経済雑誌』第二九卷七三一号、一八九六〔明治二七〕年六月二三日、九三二頁。

¹⁰ 「貧民の統計」『東京経済雑誌』第二九卷七二六号、一八九四〔明治二七〕年六月一九日、七〇六頁。

¹¹ 島田、前掲「序」、横山、前掲書『日本の下層社会』所収、五頁。

¹² 井上琢智『黎明期日本の経済思想』(日本評論社、二〇〇六年)二八九頁。

¹³ 同書「第一〇章」では、「知識の伝達手段としてに重要性を増していった」近代経済雑誌群の発達段階を、『東京経済雑誌』(一八七九〔明治二二〕年創刊)以前、『国家学会雑誌』(一八八七〔明治二〇〕年創刊)や総合雑誌『国民之友』(一八八七〔明治二〇〕年創刊)以前、『東洋経済新報』(一八九五〔明治二八〕年創刊)以前、さらに『国民経済雑誌』(一九〇六〔明治三九〕年創刊)以前、とその後の五期に区分できるとしている(二八九―二九〇頁)。一八九五〔明治二八〕年末執筆・翌年初出『わかれ道』は雑誌区分からみれば第三期に当たるとはわけるが、本稿で言及することもある明治二〇年代初期をふくめ、明治中・後期までの経済思想全体を俯瞰するために、「いわゆる一般経済雑誌の誕生」(二八九頁)を告げた『東京経済雑誌』を多く参照することとなった。

¹⁴ 島田、前掲「序」、横山、前掲書『日本の下層社会』所収、三頁。

そのほか『東京経済雑誌』にも同様の言説がみられる。「盗賊の増加は先づ妖兆の端を開きたるものならずや、是より以後癡狂、自殺、密売淫等の発すること豫言するを得べきなり。」(前掲「物価騰貴の結果」『東京経済雑誌』一〇六六頁)、「抑も貧民なる者は何時に於ても必ず国家の累を為さざることなきなり。」(前掲「政治家は貧民の惨状を無視すべからず」『東京経済雑誌』九三二頁)、「貧困は多く悪事の原因となるものなり、故に強竊盗罪人の増加は以て貧民の増加を徴す。」(前掲「貧民の統計」『東京経済雑誌』七〇五頁)

¹⁵ 宇野、前掲書、八〇頁。

¹⁶ 当時の『東京経済雑誌』には、貧困が社会不安を惹起していることに警鐘をならす記事が多く掲載されている。一例として、「盗賊の増加は先づ妖兆の端を開きたるものならずや、是より以後癡狂、自殺、密売淫等の発すること豫言するを得べきなり。」(前掲「物価騰貴の結果」『東京経済雑誌』一〇六六頁)

¹⁷ 帰休庵「鷗翮搔」『めさまし草 まきの一』一八九六〔明治二九〕年一月、一五頁。

¹⁸ 前掲「貧民の統計」『東京経済雑誌』所収、七〇五―七〇六頁。

¹⁹ 明治近代における孤児の置かれた状況について、大濱徹也「社会事業と宗教」『岩波講座 日本通史 第一七卷 近代二』(岩波書店、一九九四年)所収、三二四―三二五頁、参照。

²⁰ 松原岩五郎『最暗黒の東京』(岩波文庫、一九八八年)五九頁。

²¹ 同右。

²² 高田知波「代表作ガイド わかれ道」、岩橋邦枝、他『群像日本の作家 3 樋口一葉』(小学館、一九九二年)、所収、三〇一頁。

²³ 広津柳浪『妾』『柳浪叢書 五編』(博文館、一九一〇〔明治四三〕年)所収、一七二頁。テク

²⁴ スト『妾』の引用は、すべて同『柳浪叢書 五編』による。

²⁴ 同書、一六八頁。

²⁵ 後藤積「作家としての『わかれ道』」『改訂増補 商人としての樋口一葉』(千秋社、一九八七年)所収、二四八頁。

²⁶ 関礼子校註『わかれ道』、関、菅、校註、前掲書、所収、三三四頁。

²⁷ 関礼子「貧者の宵——『わかれ道』」、前掲書『語る女たちの時代 一葉と明治女性表現』、三六四頁。

²⁸ 例えば、菅聡子「一葉の（わかれ道）——御出世といふは女に限りて——」『国語と国文学』一九九三年二月号は、明治立身出世主義をめぐる男女の受容の違いという、社会制度的問題を指摘した論考である。

²⁹ 荻野喜弘「第五章 国家権力と労働世界」、石井寛治・原朗・武田晴人編『日本経済史 一 産業革命期』（東京大学出版会、二〇〇〇年）所収、一九五頁。

³⁰ 堀経夫『増訂版 明治経済思想史』（日本経済評論社、一九九一年）第二章 自由主義と保護主義—概説（九一—九二頁）、同章「第二節 西周と津田真道」（一一五—一九頁）、「第三節 福沢諭吉と神田孝平」（一一九—一四一頁）、「第六節 田口卯吉と乗竹孝太郎」（一五六—一六三頁）、参照。あわせて、テッサ・モーリス・鈴木『日本の経済思想』（岩波書店、一九九一年）第二章 西洋経済思想の導入—明治維新から第一次大戦まで（七二—一一五頁）、参照。

³¹ 同書（鈴木）、九一—九四頁。

³² 同書、九三頁。ちなみに「一八七〇年代前期の日本は、農林業が雇用の七〇パーセント以上を占める圧倒的な農業社会であった。」（九二頁）

³³ 同書、九三頁。

³⁴ 同右。

³⁵ 三宅明正『技術革新と女性労働』（国際連合大学、一九八五年）（日本貿易振興機構・ジエト

ロ・アジア経済研究所デジタルアーカイブス インターネット公開資料 http://d-arch.ide.go.jp/je_archive/society/book_unu_jpe9_d04.html 二〇一〇年四月、閲覧）、第三章「都市下層

の女子労働」一一三頁。

³⁶ 荻野、前掲論文、二九七—二九八頁。

³⁷ 同右。

³⁸ 同論文、二九七頁。

³⁹ 以上、横山源之助「対談 佐久間貞一君」、横山源之助 立花雄一編『横山源之助全集 第一

巻』（社会思想社、二〇〇一年）所収、一七二—一七三頁。

⁴⁰ 荻野、前掲論文、二九六頁。資本主義国家確立について重要な記述と思われる箇所を、以下に

引用する。

「日本における近代国家制度の確立は一九〇〇年前後のことであった。近代法体系は一八九八年の明治民法の施行、九九年の明治商法の施行によって全面的に成立し「…」、政治体制では、一八九八年の地租増徴案の通過と一九〇〇年の立憲政友会の結成によって「一九〇〇年体制」¹¹「官民調和体制」が成立した「…」。このような近代国家制度の確立は、資本主義国家の成立と揆を一にしていた。資本主義国家は、資本が自由に生産しえない本源的生産要素である土地と労働力に関する資本による自由な処理制度を土台とし、資本蓄積を円滑に進めうる経済制度を本体とする「制度体系」として成立した。このような資本主義国家論の視座から、これまでの経済・労働政策に関する議論を整理すると、対外的には、国際経済システムへの参入と自立的経済構造の実現をめざす金本位制の採用と貿易立国政策を推進し、対内的には、民法制定と工場法延期・治安警察法制定、地租増徴・地価修正の同時実現と耕地整理法制定という制度的枠組みによって資本主義に適合的な土地と労働力の処理を実現し、一九〇〇年ころに日本は資本主義国家としての確立を見た。同時に工場法の欠如は「制度体系」に不安定性を刻印したのである。」（同頁）

⁴¹ 関、前掲書（「貧者の宵——『わかれ道』」のタイトルによる）。

⁴² 成田龍一氏は、東京の文明化の過程において『最暗黒之東京』などのルポが果たした役割について、次のように指摘する。「描き出された都市空間の様相に対し、読者は、「野蛮」と「異界」の対極としての「文明」の側にたち、「野蛮」「異界」を否定的媒介とし、自己の価値を確認し、自己の世界の内実を形づくる。」（『帝都東京 二 文明の首都／首都の暗黒』『岩波講座 日本通史 第一六巻 近代一』、岩波書店、一九九四年、所収、二〇二頁）

⁴³ 前田愛「暗喩としてのスラム」『近代日本の文学空間——歴史・ことば・状況』（新曜社、一九八三年）二一〇頁。

⁴⁴ 山田博光「明治における貧民ルポルタージュの系譜」『日本文学』一九六三年一月号、二六九頁。

⁴⁵ 日頃からのふたりの「兄弟とばかり思ふ」ような親交ぶりを読者に知らせる、この冒頭文をふくむテクスト(上)が、「一日のうちで唯一、最大の気散じ」(関、前掲書「貧者の宵——『わかれ道』三八〇頁)である吉三の時間と、お京の「居職人」としての「仕事屋」の時間(同書、三八二頁)との対比をあざやかに示していることは、関礼子氏が正しく指摘している通りである。

⁴⁶ 横山、前掲書『日本の下層社会』、八四頁。

⁴⁷ 職人と問屋との関係について、同書「第二編 職人社会 第三 問屋との関係」(八六—八八頁)、とりわけ以下のくだりを参照。「維新前は営業に「株」の存したるが如く問屋も数人の間に限られ、いかに資産あるも問屋たるを得ざりしが、今日はこの事なく、資本の存するところ即ち問屋あり、これを昔日に比せば問屋の数増加したるのみならず、問屋と職人との関係も中に紹介者となりたる仲買人の鉄柵漸次減少し、ある場合においては陪臣たる職人が直接問屋と関係するに至れり。」(八七頁)

⁴⁸ 同書(横山)、八七頁。

⁴⁹ 荻野、前掲論文は、『わかれ道』初出当時を境目とする職人社会の変容について、次のように指摘する。「産業化の初期においては親方職工を中心とした横断的ネットワークをもつ同職集団は、経営に対しても労働市場に対しても独自性をもって機能的役割を果たしつつ、コミュニケーション的役割を担うことによって一定の公共性を体現しえていた。産業革命の展開に対して、同職集団は同職組織・労働組合の組織化という方向で対応しようとしたが挫折を余儀なくされ、「……」膨張する労働市場に対して市場主義的に対応するほかに、経営内で職場集団として自律性をめざすことになった。しかしながら経営側は制度と権限の両面から職場集団に対する介入を強化し、職場集団の階層化・集団化が進展し、同職集団の変容はさらに促進され、労働問題における公共性はとりあえず経営内に閉じ込められていった。」(二九七—二九八頁)

⁵⁰ 無署名「我邦の職人社會」『東京経済雑誌』第五百三十七號、一八九〇〔明治二三〕年九月六日、三〇七—八頁。

⁵¹ 横山、前掲書『日本の下層社会』、九二頁。

⁵² 維新时期以降の職人社会の変容について、中村政則『日本の歴史 第二九卷 労働者と農民』(小学館、一九七六年)が詳細である。「明治維新による幕藩体制の崩壊は、封建領主階級に寄生する職人的ギルドの存立基盤をゆるがすこととなった。ここにおいて封建制度下でのギルド的手工業者は、維新の変革において二様の転化を遂げる。第一の型は従来の独立手工業者がマニユファクチュア工場へ結集される形態をとり、第二の型は所謂職人が請負人の雇用労働者に転化せられる形態」である。「この時期、職人層の中心をなしていたのは、大工・石工・左官・屋根葺き・植木職・経師、裁縫・染物や、畳・指物・堤燈・足袋製造などの職人であった。「……」居職人は荷主・仲買人などから原料を仕入れ、これを加工して問屋に販売していたが、漸次、この中間の仲買人が撤廃されることによって、かれらは問屋の下に隷属する家内労働者となった。」「親方の家で起居をともにしなければならなかった徒弟制度もしいにゆるめられ、修業年限の比較的長い大工・左官・縫箔などの職人にかぎられ、下駄・製本・足袋職人は、親方の家に通勤するようになる。このようにみえてくると、職人からいわゆる近代的工場労働者になっていったのは、ごく少数の技能のある手工業者にかぎられていたことがわかる。大半の職人は、問屋制商業資本に隷属する家内労働者や親方請負人の事実上の賃金労働者へと零落していったのである。」(五一—五三頁)

⁵³ 前掲「政治家は貧民の惨状を無視すべからず」九三二頁。「寄書」欄(欄内に「説の可否は記者其の責に任せず」と但し書きがある)に「台水灌興治」と記名。

⁵⁴ 宇野、前掲書、七九頁。

⁵⁵ 前掲「物価騰貴の結果」一〇六五頁。

⁵⁶ 関、菅、校注、前掲書、注五、五三二頁。

⁵⁷ 横山、前掲書『日本の下層社会』、九八頁。

⁵⁸ 大門正克「第六章 農村社会と都市社会」、石井他編、前掲書、所収、三三三頁。

⁵⁹ 同論文(大門)、三三三頁。

⁶⁰ 関、菅、校注、前掲書、注五、五三二頁。

⁶¹ 同時に、「お京の仕事が独立自営か請負いかは明らかにされていないが、長時間労働の割には実

入りの少ない仕事であったことはたしかだ。」(関、前掲書「貧者の宵——『わかれ道』」、三八〇頁。)

⁶² 「燐寸職工事情」、農商務省商工局『職工事情』(一九〇三〔明治三六〕年、所収、九一一〇

頁。)

⁶³ 田口卯吉「慈善家は貧民の職を得るを妨害すべからず」『東京経済雑誌』第一〇九三号、一九〇

⁶⁴ 一〔明治三四〕年八月一〇日、前掲『鼎軒田口卯吉全集』所収、五五五頁。

春日豊氏は、産業革命期における労働力不足を低廉な女子労働によって解消しようとする需要

側と、「地主制の成立・確立に伴う貧困」に陥り労働力を供給せざるをえなくなった供給側とのマツ

チによる女子労働賃金の低さを「植民地」インド以下の「工場の出現」『岩波講座 日本通史 第

一七巻 近代 二』岩波書店、一九九四年、所収、二〇〇頁)と指摘している。

⁶⁵ 前掲「慈善家は貧民の職を得るを妨害すべからず」、前掲『鼎軒田口卯吉全集』、所収、五五五

頁。

⁶⁶ 同右。

⁶⁷ 田口卯吉「労働時間の制限と夜業廃止」『東京経済雑誌』一〇九七号、一九〇一〔明治三四〕年

九月七日、同書、所収、五五八頁。

⁶⁸ たとえば『東京経済雑誌』一三五号、一八八二〔明治一五〕年一〇月二八日にも、「賑恤は自由

競争の敵なり。」(二四二七頁)と主張されている。

⁶⁹ 中村(政則)、前掲書、一八〇頁。

⁷⁰ 「第一回農商工康応会議々事速記録 第七諮問案 職工ノ取締及保護ニ関スル件」、明治文化資

料叢書刊行会編『明治文化資料叢書 第一巻 産業編』(風間書房、一九六一年)所収、四四―四五

頁。

⁷¹ 関、前掲書(「貧者の宵——『わかれ道』」、三八二頁。

⁷² 同書、三八〇頁。

⁷³ 「まむし指」は小指の第二関節のよく曲がらないのを言う。仕立屋や裁縫師・縫子などにまま

見られた小指の硬直現象。」(関、菅、校注、前掲書、三三三頁)

⁷⁴ 藤井淑禎「わかれ道」『国文学解釈と鑑賞』一九八〇年一月号。

⁷⁵ 菅、前掲論文(「二葉の『わかれ道』——御出世といふは女に限りて——)。

⁷⁶ テクスト引用は、中島湘煙『一沈一浮』『文藝倶楽部 第三巻第二編 臨時増刊 第二閨秀小

説』(二八九七〔明治三〇〕年一月)による。なお、同作品は、中島湘煙(岸田俊子)の最後の小説

である(塩田良平編『明治文學全集 八一 明治女流文學集(一)』筑摩書房、一九六六年、巻末年

譜、四三五頁)。

⁷⁷ 同誌、一頁。

⁷⁸ 同誌、二頁。

⁷⁹ 同誌、三頁。

⁸⁰ 同右。

⁸¹ 前掲「貧民の統計」『東京経済雑誌』、七〇四頁。

⁸² 前掲「政治家は貧民の惨状を無視すべからず」『東京経済雑誌』、九七六頁。

⁸³ 田口卯吉、前掲「世間細民の友なきか」、前掲『鼎軒田口卯吉全集』、四五二頁。

⁸⁴ 前掲「政治家は貧民の惨状を無視すべからず」、同書、九七四頁。

⁸⁵ 同右。

⁸⁶ 同記事、九三四頁。

⁸⁷ 中島湘煙、前掲『一沈一浮』一二頁。

⁸⁸ 以下、易占家としての高島嘉右衛門については、持田鋼一郎『高島易断を創った男』(新潮新

書、二〇〇三年)第五章 大綱山荘の日々」第六章 国家の運命を占う」(一四九―一五一、一七

二頁)、参照。

⁸⁹ 同書、一六一頁。

⁹⁰ 同書、五頁。

⁹¹ 「朝鮮事件に対する高島嘉右衛門氏の易断」『國民新聞』第壹千參百參拾參號、一八九四〔明

治二七」年六月二七日、二面。内容は以下の通り。「易断を以て有名なる高島嘉右衛門氏は「……」齋戒沐浴の上今回の朝鮮事件に就き易を起せしに「……」日清両國軍隊間に於て一度は必ず〇〇を見るべし然れども事件は大事に至らざる内他邦より仲裁立入り遂に平和に局を結ぶべく尤も此事件に就き日本より進んで〇〇を開く事を為さず清國より〇を挑み日本は之に〇〇するの兆ありとの易断なりと云ふ」

⁹² 巷間いわれるように、伊藤博文の易占への依存が事実であったか等、高島嘉右衛門と明治政治裏面史について、持田鋼一郎「高島嘉右衛門と「高島易断」——明治の政局・横浜・占い」『有隣』第四六六号（有隣堂出版目録、二〇〇六年）所収、インターネット公開資料

http://www.yurindo.co.jp/static/yurin/back/yurin_466/yurin4.html 二〇一〇年四月、閲覧）、四頁、参照。

⁹³ 花圃女史、前掲『萩桔梗』、二二頁。

⁹⁴ 前掲「歳暮の回顧及警戒」『女學雜誌』第四一七号、一八九五（明治二八）年二月二五日、四二五頁。

⁹⁵ 同右。

⁹⁶ 宇野、前掲書、一〇四頁。

⁹⁷ 藤井（淑慎）、前掲論文、一五九頁。続けて同論文は「吉三の「死場」たる傘屋の将来が、開化がもたらした洋傘の台頭によっていずれば亡びゆく運命にあったのだとすれば、作者が吉三に課そうとした試練は思いのほか残酷なものであったということになる」と正しく指摘する（同頁）。

⁹⁸ 前田、前掲書『新潮日本文学アルバム 三 樋口一葉』、四六頁。

⁹⁹ 同書、四四頁。

¹⁰⁰ 『東京朝日新聞』一八九四（明治二七）年二月二日付、「顕真術」広告、同書、四四頁から引用。

¹⁰¹ 同書、四三頁。

¹⁰² 久佐賀をめぐる代表的考察として以下を参照。「奇蹟の期間」の生成は「……」久佐賀問題抜きには語れない」（木村真佐幸「第二部 資料篇 久佐賀義孝」前掲『樋口一葉事典』一七七一―八頁）、「一葉の『俠氣』 体現の最たるものはこの久佐賀義孝との対応」（同「一葉の中の『俠氣』」『国文学解釈と鑑賞―紅葉・露伴・一葉特集―』一九七八年五月、七五頁）、「久佐賀との交流」をめぐって「女の性の悲しみと、揚棄への夢の激しさ、一葉文学の驚異的な自己展開はこれによって可能となった」（藪楨子『透谷・藤村・一葉』明治書院、一九九一年、二一九頁）。

¹⁰³ 『日記ちりの中』一八九四（明治二七）年二月二三日、前掲『樋口一葉全集 第三卷（上）』

所収。

¹⁰⁴ 同右。

¹⁰⁵ 「明治六、七年頃から公債や一時賜金を資本に、利殖や土地の売買に熱を入れはじめた則義は、上野兵蔵をはじめ旧幕時代の知人に利息付の金を貸しつけた。」（前田、前掲書『樋口一葉の世界』一一〇頁）

¹⁰⁶ 前田、前掲書『新潮日本文学アルバム 樋口一葉』、六頁。

¹⁰⁷ 野口碩「第二部 項目篇 樋口則義」前掲『樋口一葉事典』によれば、「則義の貸付の資料は明治七年頃から見られるが、九年から十一年にかけて特に多くなり」（三〇五頁）とあり、本格的に貸付を始めたのは、一八七四（明治七）年頃らしい。

¹⁰⁸ 近世から明治初年期における都市部の土地所有形態、および市街地制度改革の概要について、名武なつ紀「近現代の日本における市街地政策と土地所有」、関東学院大学『経済系』第二二三集、二〇〇五年四月、所収（インターネット公開資料 <http://library.kanto-gakuin.ac.jp/e-lib/bodyview.do?bodyid=N110000523&elmid=Body&fname=Satake.html> 二〇一〇年四月、閲覧）、参照。

¹⁰⁹ 金禄公債証書発行条例（一八七六（明治九）年）による金禄公債をふくむ。ちなみに、下級士族だった則義が受け取った公債額はおおむね次のようであったと思われる。「金禄公債を支給された三一三五―七名のうち、禄高二〇石以下の下級家臣団が八三、七パーセントをしめているが、かれがうけとった公債額は全体の六二、三パーセントでしかなく、一人あたり平均では、わずか四一五

円にすぎない。これでは年間利子収入二九円五銭をもたらずのみで、これだけでは最低の生活を維持してゆくこともほとんど困難であった。」(中村「政則」、前掲書、四二頁)

¹¹⁰ 日本資本主義形成期における不動産売買について、旗手勲「日本資本主義の形成と不動産業」『国連大学 人間と社会の開発プログラム研究報告 技術の移転・変容・開発—日本の経験 プロジェクト 技術と都市社会研究部会』(一九八一年、国際連合大学) 所収、九—一四頁(インターネット公開資料 http://d-arch.ide.go.jp/je_archive/society/wp_unu_jpn51.html 二〇一〇年四月、閲覧)を参照した。偶然にも、近代日本における不動産業誕生を述べたくだりに、次の一文を発見した。

「一八七〇年(明治一三)ごろの東京には、相当数の空家や新築の一戸建て貸家が増加していたことを推測させる資料もある。この動きにつれて、とうぜん不動産の仲介業も発生したとみられる。『にこりえ』などの作者である樋口一葉の父が、その一人といえる。彼は甲州(のちに山梨県)の上層農家の出身で江戸時代の終りごろに知人を頼って江戸に上った。力行して同心株を買い、幕府直参の御家人となり、明治維新後には東京府庁に勤め、一八七七年(明治一〇)には警視庁の雇となつてゐる。そして一八八〇年(明治一三)には「勤めのかたはら闇金融、土地家屋の売買に力を入れて利潤」をえたという(文献二四、四五—四五頁「文献とは、同論文の文末脚注によれば「筑摩書房版『現代文学大系』第三巻「幸田露伴・樋口一葉集」の年譜、一九六五年」のこと)。彼は、当時の東京市内の民生治安の元締であつた警視庁に勤め、その職権などで入手した情報などをもたにして、不動産の売買を副業にしたものと推測できる。同時に闇金融(高利貸)も行つていたというから、不動産の取引や土地家屋の担保などと、高利貸が密接な関係にあつたことを反映しているものであろう。このように小金をためた中・下級の役人や商人などがしだいに不動産の売買や仲介にのりだしたものと考へうる。同時に産業の発展や土地取引の拡大につれて、大規模な不動産業も発生しはじめていたことがこの時期の特徴といえる。」(一四頁)

¹¹¹ 一八八七(明治二〇)年五月、警視庁官制が制定されて則義は非職となり、六月に退職届を提出している(野口、前掲文「樋口則義」『樋口一葉事典』三〇五頁)。

¹¹² 日本の産業革命は、一八八四(明治一七)年から一八八九(明治二二)年のいわゆる「企業勃興期」に始まり、一九〇七年(明治四〇)年ごろまで進展した(三宅、前掲書、一一六—七頁)。

「明治一九年 この年下半年より鉄道・紡績などの企業熱おこる(企業勃興)」(安藤、前掲書、三九六頁)

¹¹³ 「衣食足而知礼節」『東京経済雑誌』第二六七号、一八八五(明治一八)年五月三〇日、六八四頁。

¹¹⁴ 「社会の自療性」『東京経済雑誌』第三五七号、一八八七(明治二〇)年三月五日、二六八—二六九頁。

¹¹⁵ 「退官終身恩給及退職給助年金」『警視庁事務年表』(警視庁編、一八九一(明治二四)年)によれば、戦前、「最短恩給年限は一七年」(二五頁)。則義の場合、一八七七(明治一〇)年一〇月、警視局雇・警視病院製薬会計係。一八八七(明治二〇)年六月、警視庁を退職なので、在職、九年八月月となり、最短恩給年限の一七七年を満たしていない。仮に、東京府勤務時代(一八六九(明治二二)年二月、東京府記録方撰要下掛に任命、一八七六(明治九)年一二月、東京府中属を退官)を合算して計算できたとしても、六年一〇ヶ月が加算されるだけなので、合計一六年六ヶ月で、一七年間を半年満たすことができない。もし東京府をいったん退官せずいたら、また、警視庁勤務までに一年近いブランクが発生していなければ、恩給対象者であつたはずである(後藤・山田、前掲「第三部 資料篇 年譜」『樋口一葉事典』四九一—四九七頁)。

¹¹⁶ 田上貞一郎「第二部 項目篇 荷車請負業組合」、前掲『樋口一葉事典』二七四頁。

¹¹⁷ 以上、明治期における運輸業事情については、増田廣實『交通・運輸の発達と技術革新 歴史的考察』(国際連合大学、一九八六年)、日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所「デジタルアーカイブス」日本の経験」を伝える—技術の移転・変容・開発」所収、「第二章 移行期の交通・運輸事情——一八八八—一八九一(明治元—明治二四年)」一五頁、二〇頁(インターネット公開資料 http://d-arch.ide.go.jp/je_archive/society/book_unu_jpe6_d03_01.html 二〇一〇年四月、閲覧)。

¹¹⁸ この頃の経済的混乱の要因を、前掲「政治家は貧民の惨状を無視すべからず」は次の点に求めている。「貧民増加の原因たる一にして足らず。或は人口の増加。天災来襲等の自然的原因あり。或

- は工業発達。自由競争等の社会的原因あり。」(九七四頁)
- 119 高田知波「第二部 項目篇 樋口泉太郎」(二九九頁)、野口碩「同 樋口則義」(三〇四—三〇六頁)、後藤・山田、前掲「第三部 資料篇 年譜」(四九一—五一六頁)、以上、前掲『樋口一葉事典』。
- 120 立花雄一「再考横山源之助と米騒動」『大原社会問題研究所雑誌』No.四九九、二〇〇〇年六月、四一頁。
- 121 神山恒雄「第二章 財政政策と金融構造」、石井他編、前掲書、六九頁。
- 122 同書、七〇頁。
- 123 前田、前掲書(『樋口一葉の世界』)、一一〇頁。
- 124 「よもきふにつ記」一八九三(明治二六)年三月三〇日、前掲『樋口一葉全集 第三卷(上)』所収。
- 125 「ミつのうへ」一八九五(明治二八)年五月一四日、同書、所収。
- 126 湖東小史(旧彦根藩土石黒務、維新後、福井県令)『世帯論』(出版社未詳、一八八七(明治二〇)年七月以降頃刊)二三頁、田中ちた子、田中初夫編纂『家政学文献集成 続編 明治期第三冊』(渡辺書店、一九七〇年)所収、九頁。
- なお、同『世帯論』は続けて、僅々の僥倖者たちが「油断や遊惰」に陥りやすいことを戒め、「人間世帯ヲ為シ其経済ヲ立ルニ大切ナルモノハ勉強ト儉約ト正直トノ三ツヲ以て肝要トス」(二五頁、一〇頁所収)、つまり勤儉力行を説いて閉じられている。
- 127 農林省経済更生部『興業意見 経済更生計画資料 第十九號』一九三三(昭和八)年、「卷之二 緒言」二三頁。
- 128 横山源之助『明治富豪史』、『明治文学全集』96 明治記録文学集(筑摩書房、一九六七年)所収、三四頁。近代東京の土地、不動産事情に関しては、鈴木博之『日本の近代 一〇 都市へ』(中央公論新社、一九九九年)「第一部 開国と首都」一六八—一七九頁、参照。
- 129 同書(鈴木)、一六八—一七九頁。
- 130 同書、一七九頁。
- 131 後藤・山田、前掲「第三部 資料篇 年譜」『樋口一葉事典』四七六頁。
- 132 高田、前掲「第二部 項目篇 樋口泉太郎」、同書、二九九頁。
- 133 田中彰『日本の歴史 第24卷 明治維新』(小学館、一九七六年)三四二—三四三頁。
- 134 横山源之助から一葉宛てた一八九六(明治二九)年二月二九日付け書簡による。それには「改めて此事申上候人間の運命と世相の真実御瞑想余り気迅なる事御忍耐生活を処せられん事は小生の第二に貴方に望むものに御座候」(樋口悦編『二葉に与へた手紙』今日の問題社、一九四三年、百七十二、二二九頁)とある。
- 135 野口碩氏の考証によれば、「二十七年十一月にも、彼女は家相家の尾島碩聞に易断を依頼している。」(前掲『樋口一葉全集 第三卷(上)』、三七〇頁、補注)
- 136 「高嶋嘉右衛門井上円了が哲学上の談話などかたる事多かりし」『水の上』一八九四(明治二七)年二月二三日。同書、所収。
- 137 『京浜実業家名鑑』(一九〇七(明治四〇)年版)、前田、前掲書(『新潮日本文学アルバム 三 樋口一葉』)四五頁。
- 138 『塵の中』一八九三(明治二六)年七月二五日、前掲『樋口一葉全集 第三卷(上)』所収。
- 139 前田、前掲書(『新潮日本文学アルバム 三 樋口一葉』)、四六頁。
- 140 同右。
- 141 同右。
- 142 上田敏「一葉女史」『中央公論』第廿二年第六号(第二百十九號)、一九〇七(明治四〇)年六月一日、四八頁。
- 143 上田敏「天才肌の人」『国民新聞』第六千參號、一九〇八(明治四一)年一月二三日、一面。なお同引用に続けて「故人の性格は『別れ道』の主人公に現はれてゐる」と述べられている。
- 144 前掲、無署名「一葉」『青年文』第三卷一号、一八九六(明治二九)年二月、四—五頁。
- 145 前掲「政治家は貧民の惨状を無視すべからず」『東京経済雑誌』、九三二頁。

- 146 横山源之助「貧民の正月」、前掲『横山源之助全集 第一巻』一六一—一六二頁。
- 147 関、前掲書（「貧者の宵―『わかれ道』」）、三八二頁。
- 148 阪谷素「〇妾説ノ疑」「明六雜誌」第三十二號、一八七四（明治七）年三月、四—五頁。
- 149 森下公夫「明治期に於る立身出世主義の系譜―マスコミの果した役割―」「福地重孝先生還暦記念 近代日本形成過程の研究」（雄山閣出版、一九七八年）所収、一九一頁。
- 150 高田知波「第二部 項目篇 小学校制度」、前掲『樋口一葉事典』二一六—二一七頁。
- 151 菅、前掲論文（「一葉の『わかれ道』」）も『学制序文』を冒頭に引き、「吉三は最初から「出世」のどざされた存在として設定されていたと言うべきだろう。「…」吉三は、門閥にかかわらず、すべての者に学問による立身出世の可能性があるとすする明治立身出世主義から、あらかじめ排除された存在だったのである」（三四頁）と指摘する。
- 152 森下、前掲論文、二〇二頁。
- 153 同論文、二〇一—二〇五頁。
- 154 菅、前掲書（『女が国家を裏切るとき』）も、「すべての制度から拒絶される存在」として吉三を挙げ、とりわけ「男」性であることを規定する徴兵制度から疎外された存在であることを実証している（二四六—二四八頁）。
- 155 野邑理栄子『陸軍幼年学校体制の研究 エリート養成と軍事・教育・政治』（吉川弘文館、二〇〇六年）によれば、「陸軍の幹部である陸軍将校（現役兵科将校、いわゆる職業軍人）になるためには、一部の例外を除き、必ず陸軍士官学校に入らなければならない」（三頁）が、その入学への主たるコースは、次の二つであった。「陸軍幼年学校」を経るコース、「尋常中学校」卒のち陸軍士官学校受験合格を経るコース（五頁）。「陸軍幼年学校」は、「府藩県、華族、士族、庶人に拘らず」一定年齢のすべての男子に入学資格を与えて」（二〇八頁）いたが、受験資格には「年齢一五—一八歳で、高等小学校卒業者との同等の学力があること」（五頁）が必要であった。
- 156 「共同討議 樋口一葉の作品を読む・わかれ道」「国文学」一九八四年一〇月における藤井貞和氏の発言（一〇三頁）。
- 157 無署名『『わかれ道』』『青年文』第三巻一号、一八九六（明治二九）年二月、一一頁。
- 158 関、前掲書（「貧者の宵―『わかれ道』」）、三七二—三七三頁。
- 159 高田、前掲書（「笑う女と泣く少年―『わかれ道』の位相」）、九七頁。
- 160 同書、九八頁。
- 161 山崎眞紀子「すれ違う物語―『わかれ道』論」、新フェミニズム批評の会編、前掲書、所収、一八二—一八三頁。
- 162 戸松泉「交差した（時間）の意味―『わかれ道』の行方―」、樋口一葉研究会編『論集樋口一葉』（おうふう、一九九八年）九八頁。
- 163 同右。
- 164 同論文、一〇一頁。
- 165 同右。
- 166 高田、前掲書（「笑う女と泣く少年―『わかれ道』の位相」）、九六頁。
- 167 同書、九六—九八頁。
- 168 石樽わか子『刷毛彩色』、初出『文藝倶楽部臨時増刊 関秀小説』第一巻一二編、一八九五（明治一八）年二月、所収、一六四—一六五頁。以下、テキスト引用は同初出誌による。
- 169 同誌、一七四頁。
- 170 同誌、一七二頁。
- 171 同右。
- 172 同テキストでは、「わが妻わが夫の他にあらねば、もたるだけの愛は他にうつす処もなし（…）」上野の花見に行かうとて手携はり、隅田に月をといて車を共にす。（同誌、一六七頁）と語られている。
- 173 中島湘烟、前掲『一沈一浮』、二頁。
- 174 石樽わか子、前掲『刷毛彩色』、一六五頁。
- 175 「新日本の地盤 其二 新夫婦」「家庭雑誌」四号、一八九二（明治二五）年一二月二五日、

- 林葉子「第二十四章 日清戦争前後の『家庭雑誌』—英雄伝を物語る母／膨張する国家」、西田毅編『民友社とその時代』（ミネルヴァ書房、二〇〇三年）所収、三八一頁から引用。
- 176 広津柳浪『雨』、『今戸心中他二編』（岩波文庫復刻版、一九五二年）所収、一八五頁。
- 177 同書、二二六頁。
- 178 上野、前掲書（『近代家族の成立と終焉』）八四頁。
- 179 荻野、前掲論文、二六九—二七〇頁。
- 180 同書、二七〇頁。
- 181 大門、前掲論文、三二五頁。そのほか、明治期労働者の経済状況について、千本暁子「日本における性別役割分業の形成—家計調査をとおして」『制度としての〈女〉—性・産・家族の比較社会史』（平凡社、一九九〇年）所収、一八八—二〇一頁を参照。
- 182 広津、前掲書（『雨』）、一六九頁。
- 183 同書、二二五頁。
- 184 関、前掲書（『貧者の宵—『わかれ道』』）、三七二頁。
- 185 『広辞苑 第五版』（岩波書店、一九九八年）二二二—二四頁。
- 186 山崎、前掲論文は、『一寸法師』を『わかれ道』のインターテキストとして考えられる」とし、『わかれ道』と『一寸法師』の類似点として「出世」と「子捨て」のテーマを挙げている。さらに「御伽草子の一寸法師が家を出て都に上ったのが十二、三歳であり姫君に恋をし、鬼退治をしたのが十六歳だということを考え合わせると、吉三の年齢の設定に何らかの象徴性を見出すことが可能になってくるであろう。」（一七八—一八二頁）と指摘する。
- 187 菅、前掲論文、四〇頁。田中優子『樋口一葉「いやだ!」と云ふ』（集英社新書、二〇〇四年）一三二頁。
- 188 同右（田中）。
- 189 戸松、前掲論文、九九頁。ここで氏は「吉三の男性性の顕示」を「成長願望」としている。
- 190 関、菅、校注、前掲書によれば、「十六」という年齢は、「職人としては年季明けが近い年齢（横山源之助『日本之下層社会』教文館、明治三二年）。（三一六頁）という。
- 191 本文において引用した通り、戸松、前掲論文は「吉三の前に現れた「愛想を見せ」るお京は、母であり姉であり、或いは妻にもなりうる、「家族」幻想を抱かせるに十分な、曖昧で多義的な存在であった」（九八頁）と指摘する。
- 192 ジャン＝フランソワ・リオタール 小林康夫訳『ポスト・モダンの条件』「序」八頁。
- 193 前掲「共同討議 樋口一葉の作品を読む・わかれ道」における小森陽一氏の発言（一〇六頁）。
- 194 高田、前掲書（『笑う女と泣く少年—『わかれ道』の位相』）八七頁。
- 195 同書、八八頁。
- 196 同右。
- 197 「結婚する当事者ではなく親や親戚などが半ば強制的に相手を決める結婚」（佐伯順子『色と愛の比較文化史』一九九八年、岩波書店、二五頁）としての「脅迫結婚」が描かれた諸テキストについては、同書「四「恋愛」への憧れ—森鷗外」を参照。
- 198 高田、前掲書（『笑う女と泣く少年—『わかれ道』の位相』）八七—八八頁。
- 199 同書、八七—八八頁。
- 200 田中優子氏も、前掲書（『樋口一葉「いやだ!」と云ふ』）のなかで、「一葉は、社会のどこにも、居場所のない人間だった。」（一九三頁）と指摘する。
- 201 横山源之助「地方の下層社会」（其二）都市の細民と地方の細民『毎日新聞』一八九六（明治二九）年一〇月二七日付。前掲『横山源之助全集 第一巻』二八〇頁。なお同記事は、大門、前掲論文、三二六—三二七頁にも引用されている。
- 202 同記事、同書（『横山源之助全集 第一巻』）、二八〇頁。
- 203 同右。
- 204 同右。
- 205 横山、前掲記事（『貧民の正月』）、同書（『横山源之助全集 第一巻』）、一六一—一六二頁。

- 206 大門、前掲論文、三二二—三二三頁。
 207 同論文、三二三頁。
 208 同論文(大門)、三二五頁。
 209 同論文、三二二—三二三頁。千本、前掲論文、一九六—一九七頁、参照。
 210 大門、前掲論文、三二三頁)
 211 同右。
 212 千本、前掲論文、一九一頁。
 213 大門、前掲論文、三二三頁。
 214 横山、前掲記事(『貧民の正月』)、前掲『横山源之助全集』、所収、一六〇頁。
 215 大門、前掲論文、三二七頁。
 216 深雪女史『うきよのあらし』(目次には『憂世の嵐』と記載)、『文藝倶楽部 第二巻第四編』
 一九九六(明治二九)年、一一七頁。
 217 荻野、前掲論文、二五八頁。
 218 同右。
 219 同論文、二六〇、二六四—二六七頁。
 220 同論文、二六七頁。
 221 ジョン・ロールズ 川本隆史、福岡聡、神島裕子訳『正義論 改訂版』(紀伊國屋書店、二〇一〇年)二二頁。
 222 安藤、前掲書、九七頁。
 223 同書、一九八一—一九九頁。
 224 荻野、前掲論文、二五九頁。
 225 日本資本主義確立と本源的蓄積によって都市ブルジョワ家庭が創出されたという見方については、上野千鶴子『家父長制と資本制』(岩波書店、一九九〇年)においても、「日本の家制度がその実、資本制の成立とともに誕生した近代的な制度であり、「近代が公領域と私領域の両方をいっきに析出したという見方が公認されてきている」(一三頁)と述べられている。
 226 この段落における引用箇所はすべて、同書、四二—四三頁。
 227 以下、妾をめぐる明治期の法典分析、およびその法典の整備過程における言説分析については、金津日出美「明治初年の「妾」議論の再検討―「近代的一夫一婦制」論をめぐる―」『日本家族史論集 五 家族の諸相』(吉川弘文館、二〇〇二年)所収、高柳真三『明治前期家族法の新装』(有斐閣、一九八七年)、参照。
 228 金津氏は、同論文のなかで、従来は「家産の確保・継承の必要性からの嗣子確保の制度」(二四四頁)と解釈されてきたこの妾の二親等規定について別の解釈を提示している。氏は明治前期の民法典や戸籍関係法典では近世期と同様、「妾」の記載をせずに単に妾腹の子を庶子と記述するだけにどめている点に着目、新律綱領における妾親族の規定を「近世的武家的「妾」と明らかに断絶した規定」(二四五頁)であるとし、それは「民間の通婚形態への介入」(二六三頁)を意図していたと指摘する。
 229 金井景子「第二部 項目篇 妾」、前掲『樋口一葉事典』三三八頁。
 230 広津柳浪、前掲『妾』では、妾の須磨が下女を「朋輩」(二八一頁)と語っている。
 231 金井、前掲「第二部 項目篇 妾」、前掲『樋口一葉事典』三三八頁。
 232 花圃(と記名)『空行月』、『国民之友 第三〇九号附録 藻鹽草』一八九六(明治二九)年、五六—六五頁。以下、テキスト引用は同誌による。
 233 広津柳浪、前掲『妾』、一四二頁。
 234 同右。
 235 同書、一六七頁。
 236 セシル・ドーファン 志賀亮一訳「独身の女性たち」、ジョルジュ・デュビイ、ミシェル・ペロー監修 杉村和子、志賀亮一監訳『女の歴史』M 十九世紀2』(藤原書店、一九九六年)所収、六八五—六九〇頁。
 237 同書、七〇一頁。

- 238 広津柳浪、前掲『妾』、一六九頁。
 239 同書、一六八頁。
 240 同書、一七二—一七三頁。
 241 同書、一八七頁。
 242 森鷗外『雁』（初出『昴』一九二一〔明治四四〕—一九二二〔明治四五〕年）。テキスト引用は、『鷗外全集 第八卷』（岩波書店、一九七二年）による。
 243 同書、五二三頁。
 244 広津柳浪、前掲『妾』、一七〇頁。
 245 森鷗外、前掲『雁』、五七八頁。
 246 花圃、前掲『空行月』、六一頁。
 247 同右。
 248 同右。
 249 広津柳浪、前掲『妾』、一四三頁。
 250 同書、一九七頁。
 251 同書、一八七頁。
 252 森鷗外、前掲『雁』、五五七頁。
 253 同書、五二四頁。
 254 同書、五〇二頁。
 255 同書、五二五頁。
 256 同書、五二四頁。
 257 同書、五二五頁。
 258 お京の妾奉公話をめぐる噂に「何だお小間使ひと言ふ年でなし」とあるように、「茶の給仕」や伝言の取次ぎなど——以上は『妾』^{おもひの}に記述されている「侍女」^{しむかひ}の仕事である——などの軽い雑用を行なう「小間使ひ」や「奥様の御側」などは、幼若年の女性に限られていたようである。たとえば一九〇四〔明治三七〕年生まれ佐多稲子が上野池之端の料亭清凌亭の「奥」の「主人の暮らしむきの方の小間使ひ」として「奉公」に出たときは、一二歳であったという（『年譜の行間』中央公論社、一九八三年、四二頁、巻末年譜、二四二頁）。「同テキストは『佐多稲子全集』に所収されていないため同版を使用」²⁵⁹
- 259 お京も吉三も地の文も、妾奉公を「上等の運」（お京）とは語っても「出世」とは表現していない。むしろお京の転身を知った吉三が「何んな出世に成るのか知らぬが」と言い放つ一箇所は存在するが、これは吉三の怒気をこめた皮肉として読むべきであろう。
- 260 佐多、前掲書、四四—四五頁。
 261 同書、七八—七九頁。
 262 林芙美子『放浪記 第一部』（初出『女人芸術』一九二八〔昭和三〕年）、『林芙美子全集 第一巻』（文泉堂出版、一九七七年）二八七頁。
 263 『十三夜』には、「身がらの相違もある」奉任官・原田に嫁いだ娘お関に、母が次のように語る場面がある。「奥様気を取すて今夜は昔しのお関になって、外見を構わず豆なり栗なり氣に入つたを食べてみせておくれ、いつでも父様と噂すること、出世は出世に相違なく」（樋口一葉全集 第二巻）所収）。
- 264 長谷川時雨『近代美人伝』「序」、初出『解放』一九二二〔大正一〇〕年一〇月号、『長谷川時雨全集 第三巻』復刻版（不二出版、一九九三年）八頁。前後の文脈は以下の通り。「歴々たる人々の正夫人が藝妓上がりであつて、遠き昔はいふまでもなく、昨日まで幕府の役人では小旗本といへど、さうした身柄のものは正夫人とは許されなかつたのに、一躍して、雲井に近きあたりまで出入することの出来る立身出世——玉の輿の風潮にさそはれて、家憲厳しかつた家までが、下々では一種の見得のやうにさうした家業柄の者を、いきなり家庭の主婦として得々としてゐた——これは中堅家庭の道徳の乱れた源となつた。」（八—九頁）
- 265 同右（八頁）。
- 266 中島湘烟、前掲『一沈一浮』、二頁。

- 267 ドーフアン、前掲論文、六八九頁。
- 268 同論文、六八五頁。
- 269 森鷗外、前掲『雁』、五二四頁。
- 270 井上章一『美人論』（リブレポート、一九九〇年）六八頁。
- 271 同書、六七頁。
- 272 佐伯、前掲書、一六〇頁。
- 273 同右。
- 274 花圃、前掲『空行月』、六五頁。
- 275 広津柳浪、前掲『妾』、一九六頁。
- 276 同右。
- 277 花圃、前掲『空行月』、六五頁。
- 278 広津柳浪、前掲『妾』、一九六頁。
- 279 井上、前掲書、八一―九〇頁、参照。
- 280 広津柳浪、前掲『妾』、一七〇頁。
- 281 同書、一九八頁。
- 282 司馬遼太郎『坂の上の雲（八）』（文春文庫、一九九九年）「あとがき（二）」三二二頁。
- 283 前掲「歳暮の回顧及警戒」、四二五―四二六頁。